

鉄血のオルフェンズ 赤い悪魔、翼を開いて

カルメンmk2

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類を絶滅寸前にまで追いやった厄祭戦が集結して300年の月日が経った。

もはや厄祭戦という言葉が風化し、その理由も明かさねず、地球圏は仮初めの平和を享受していた。

その平和もコロニーや圏外圏と呼ばれる月より外側の生存圏を奪取した結果であった。

それは必然的に植民地からの独立を叫び、やがて一人の乙女が立ち上がることになる。

乙女の傍らには決して枯れぬ鉄の華。そして――

目次

大気圏突破のボードって実は高かったりする	1
Hey, guys	11
はっ!? 悪い夢でも見ていたようだ	22
火星に来た理由? 自由を求めたのさ (解説付き)	33
火星衛星軌道会戦 くわぎとじゃないから事故だって! (解説付き)	45
火星衛星軌道会戦 く逆襲のギャラルホルン (解説付き)	59
今後の話をしようじゃないか (解説付き)	73
大人は汚い? そうでないと生き残れないんだよ	84
君たちに正しいケレンを教えてあげよう (解説付き)	95
格好をつけるのは勝手だけど、現実はそう上手くはいかない (by 作者)	110
Go! 歳星!	123
歳星名物と言えよ? (解説付き)	137
厄祭戦の恐怖 (解説付き)	151
傭兵、船を手に入れる (解説付き)	162
やっぱ必要だよ、コレ? (解説付き)	177
プロペラントタンクは武器 (解説付き)	194
赤色は俺のだって言ってるんだよ! (解説付き)	209
とりあえず潰せばいいでしょ (by 三日月+解説)	223
白兵戦のち氷の華 (解説付き)	240
いんたーみっそンンン! (解説付き)	258
ドルトコロニーで僕と握手! (解説付き)	278
ドルト騒乱 その1 (解説付き)	292

ドルト騒乱	その2		306
ドルト騒乱	その3		317
ドルト騒乱	その4	混迷の宇宙へ（解説付き）	331

大気圏突破のボードって実は高かったりする

——学のない人間でもできる高給取り、なんてものは存在しない。それがこの俺、『レッド・ウェイスト』の経験談だ。マジで存在しない。いや本当にだ。

そんなことはないという奴らに聞くが、例えば火星のレアメタル採掘現場にスラムの子どもはいるか？ 人員不足のギャラルホルンに浮浪児出身の奴がいるか？

歴戦の傭兵に無知なバカがいるか？

答えは『いいえ』『No』あるいは異なる言語や記号で記される否定だ。

採掘するための機材やその作業は神経を使う仕事だ。馬鹿の一つ覚えみたい盗む、殺す、奪うぐらいしか能のないスラム野郎ができる仕事じゃねえ。報告書だって書かなきゃいけない。

ギャラルホルンなんてもつと辛い。規則、規律、規範、高慢ちきな連中への所作に言葉遣い、なにより報告書。出身で差別されるなんざ当然のこと。

じゃあ、傭兵は？ ところがぎつちよん！ こいつも学が必要だ。というか前の二つよりも俄然必要だ。

個人であろうと、PMCプライベートミリタリーカンパニーに参加しようと、派遣先の風習や因習、言語、対立構造、宗教、地形に人脈構築など脳筋が生きていける世界ではない。

何より、PMCなら整備班がいるが個人傭兵だと、装備や設備の整備ができなければ話にもならない。あと経費とか経費とか、借金とか。

ああ、失礼。俺は後者の方でかつちよつと運のいいことにMSを保有する馬鹿だ。新進気鋭で仕事に精を出す傭兵——なんて言えば聞こえは少しいいが、身もふたもない話、MSの油すら注きせないぐらいにド貧乏の傭兵です、はい。

「ということだ」

『何がだ?』

「ここにクーデリア・藍那・バースタインがいるはずだ。出してもらうか」

『勝手なことやってんじゃ——待て、ユージン。敵と決まったわけじゃ……』

まあ、通信に出ている特徴的な髪形の彼の気持ち、わからなくもない。俺もいきなりだったら混乱するもの。

読者諸君、メタい話だがCGS（クリュセ・ガード・セキュリティ）の襲撃中だよ、今現在だね。原作と違うのはグレイズが四機に増えていること。そのうちの一つをバルバトスがミンチよりひでえやにして、一機が大気圏外からの波乗りボードでぺしゃんこにしてしまったわけだ。

で、両軍ともに未確認機の俺がいること。いざ三機で包囲殲滅してやろうとしたら一機潰れたから呆然としているわけだが……。

「ぬわあ!?!」

すると今まで経験したことがないぐらいの衝撃が来た。粹がる海賊が保有するモビルスーツなんかとは比べ物にならないぐらいに強力だった。

『オルガ』

『ミカ!? 何して』

『数が元に戻っただけだよ。全部潰せばいい』

「ちよ、おま?!」

この野郎、状況を理解してないのか!? 協力すれば2対2にできるのをわざわざ1対3にしようとかバカじゃないの!? ド?ですか?!

『余計なリスクを負う必要はねえ!!』

『敵かどうかもわからない。それに………なんか気に入らない』

声からしてガキじゃねえか! これだからガキは嫌いなんだ!!

つか、CGSは少年兵にモビルスーツ与えてんのかよ? もしかして、大破したモビルワーカーにも——ああ、少年兵だ。基地の近くにいる連中、全部ガキだ。

「リスクを考慮ろよ、ガキンちよ!」

『アンタこそ大したこともないね。十分殺れる……!』

「言ってくれるじゃないさ。よう、オルガとか言ったか?」

『ミカ、やめろ!! アンタも抑えてくれ!!』

よかったわー。こっちは頭が回る方だった。

「俺は敵対するつもりはない。お嬢さんに自分を売りに来ただけ……けど、こいつ次第で変わるぜ?」

『傭兵か!』

『オルガ?』

『いくらだ?』

「お試しで、モビルスーツの整備と補給で構わない。聞き入れられないなら——」

『チィ……!!』

白いモビルスーツのメイスを受け止めていた腕をほどいて体勢を崩させる。

崩させたのはいいもののまるで生物のような動きでとらえる前に逃げられてしまった。

「俺は逃げるッ!!」

『———は?』』

「金にならない戦闘なんざしねYO! つーか、バカでいすかあ? 笛吹野郎どものモビルスーツぶっ潰しておいて向こうに加担できるわけないじゃん?！」

ちなみにオープン回線ではらまいてるのはご愛敬。後ろにいるグレイズも敵意満々とそれを制している指揮官クラスが哀れに見える。志が高いのいいけど、盲目の忠誠心とかないわー。

一応にも軍人なんだから上官の言うことぐらい聞こうぜ?！」

『どの口でえ……!!』

『やめろ、アイン!!』

『しかしクランク二尉! 奴はカミラ三尉を殺ったんですよ?!』

ア、オーウ……もしかしてアインとかいう奴のコレ(小指をぴーんつ)ちゃんですか? 敵討ちとか嫌なパティーンんじゃないの。益々もって、ガキンちよ側に付かないとやべえ!!

「連中が報復しに来ても二機体制で応じればイケるかもしれないねえぜ? もちろん、お嬢さんが依頼主になれば俺は連れて逃げるし、お前らとしても追撃の協力ってことでお咎めなしになるかもしれないねえ」

オープン回線を切って、短距離レーザー通信だから向こうには聞こえないようにしている。

ギャラルホルンはともかく、ガキンちよから逃げるのは容易いだろう。あのモビルスーツは整備も不十分だしフレームも丸見えだ。ガスもそこまで入ってないとみえる。整備不足という点で言えば、こっ

ちもこつちだが。それはそれ、だ！

「どうするよ、ミカちゃん」

『アンタに馴れ馴れしくそう呼ばれるのはキライだ』

「そいつは失敬。君の方から後押ししてくれよ。君だってこれ以上、仲間が犠牲になるのは避けたいだろ？」

『アンタもまとめて片付ければいい』

「だからそういうサーチアンドデストロイ思考はやめてさあ……………どうする？ オルガくん」

なんか味方になっても、降りた瞬間にハチの巢にされそうなんだけど。チョッキ着ておくか？ モビルスーツも売れば相当な値段だ。しかも貴重なガンダムフレームだし…………。

『(ちくしょう、どうする？ 相手は得体のしれない傭兵とモビルスーツだ。どことなくミカのに似ている……………ここでやり合うのはまずい)……………ッ？ お嬢さん？ ここは戦場で……………いや、代わられて、ちよつと!!』

『クーデリア・藍那・バーンスタインです、傭兵さん』

「あん？」

『他の方から聞きました。私に雇ってほしいと。ですが確認させてください』

光学カメラで見る革命の乙女、クーデリア・藍那・バーンスタインは捻くれているレッドをして、仰ぎ見たくなるほどの何かを魅せていた。

いわゆるカリスマというやつで、可憐な美少女に青くとも意志のあ
世間知らず
る目つき。

なるほど。いろんな連中が担ぎ上げようとしているのがよくわかった。それと同時に……………

「(こりやあ首輪をつけようと躍起になるわな) 何を、だ?」

自陣営に組み込めれば印象は良くなる。飼殺せればなお良く、敵対組織に命を奪われれば大義名分すら思いのままだ。ギヤラルホルンが危険視する理由はそこだろう。むしろ腐りはてた自分と対比されるのを恐れているのかもしれない。

『この窮地を脱せますか?』

「……OKだ。補給と整備の話、つけといてくれよ!!」

“この窮地”ね。前言撤回。この嬢ちゃん、したた強かだわ。

☆☆☆
—————
☆☆☆

「……………すげえ……………」

CGS参番組のトップ、『オルガ・イツカ』は相棒の『三日月・オーガス』の前で暴れる赤いモビルスーツとそのパイロットへの評価は間違えていなかったと確信した。

ギヤラルホルンのモビルスーツ2機を相手に速攻でライフルを粉碎、ほどけた両腕と杭のような武器を駆使して牽制し、時折、モビルワーカー部隊へ威嚇射撃をしていた。

おやつさんと親しまれる『ナディ・雪之丞・カツサパ』と『ヤマギ・ギルマトン』が三日月のモビルスーツのガス補給を忘れていたと通信があったとき、冷や汗が噴き出るほどだった。

(アイツがミカとやり合ったらどうなった？ 万全なら負けるとは思わねえが、ガス欠じゃあ帰ってこれなかったかもしれないねえ……)

機動力はモビルワーカーでも勝にも逃げるにも重要な力だ。どんなに強力だつて動かないデクの棒を相手にすればわかるだろう。相手の装甲を貫ける武器があればいいし、貫けないにしても逃げれる足があれば生き残れる。

暴れまわる赤いモビルスーツはその両方を持っている。ミカヅキは不意打ちを警戒して下がろうともしない。

「おい、オルガ」

「なんだ？」

「囹にした壺番組のことなんだけどよ」

今後をどうするかと思案していれば、明るい——言いかえれば深いことは考えていなさそうな男、『ノルバ・シノ』が無能クズどもの処遇について相談しに来た。

「ユージンが五月蠅くてよ。生かしておくのか、ヤっちまうのかどうするって」

「……………生きている連中がいるのか？」

「おう。タカキたちが双眼鏡で確認したぜ。半分以上は死んじまってるみたいだけどな」

「——よしー」

何かを考え付いたかのように手を叩くと、恰幅の良い帽子をかぶった少年、『ビスケット・グリフォン』を呼ぶ。

一部始終を聞いていたシノからするとその考えはオルガらしくない、と思うが仲間の命を最優先にしようとする意志だけは感じ取れた。故に、どんな結末であってもオルガの側に立とうとシノは決意する。

そしてビスケットが慌ただしく何人かをまとめていると、付き人から小言を言われていたクーデリアがシノのもとへとやってきた。

やっぱり美人だと思っっていると――

「彼は何を……えっと」

「ノルバ、ノルバ・シノだ。シノって呼んでくれよ。で、オルガと何を話していたか、だったよな」

「はい」

「……………わかんと思うけどよ。オルガとしては仲間の命も守りたいし、アンタの依頼も完遂させたいって思ってる」

自分よりは遥かに頭のいいだろうから任せておけばいい。俺たちは鉄火場でこそ価値がある。

心配することはないと言い残して、その場を離れる。慣れている連中を集めるべく年長者で構成された集まりに赴いていった。

☆☆☆
—————
☆☆☆

少年兵たちが不穏な企みの準備が済んだ頃に戦闘は終了した。

三日月のようなド派手で豪快な勝ち方ではなく、鞭のようにうねる両腕を駆使して二機を翻弄してコクピットにクローを突き付けて終わりとなった。

レッドからすれば、半壊のグレイズが二つに装甲を壊した程度のものが二つ。四つともリアクターは新品で質のいいギャラルホルン製だ。売れば借金返済の足しにもなるし、上の連中への手土産にもなる。

何よりもリアクター売買の仲介で印象はよくなるかもしれない。

上手くいけばイニシアチブだって取れるだろう。唯一、問題がありそうなのはパイロット二名の処遇だ。

「妙な真似はするなよ」

『俺だってギャラルホルンの軍人だ。覚悟は………出来ている』

さしあたってモビルワーカー部隊はすでに離脱している。投降する条件の一つに追撃を加えないことを言い出したからだ。弾だつてタダじゃない。モビルスーツ相手に特攻を仕掛けるほどギャラルホルンの兵は仕事熱心でもないだろうおし。

『克蘭ク二尉！』

『よすんだ、アイン。もう一つのほうも頼む』

「連中次第だろ」

『約束を反故にするのか!!?』

いくら怒鳴りつけられようと最初に撃つたのはお前たちだと突き放す。

ガキ殺しの片棒担いでおいて何をナマ言っているのか。

『頼む！ アインだけは助けてやってほしいッ!!』

『待つてくださいくランク二尉！ あなたこそ生き残るべきです！』

『先任の俺はオーリスを止められなかった。お前は上官の命令に従っただけなんだ』

『ですが………!』

理想に燃える軍人っていうのはこういうものなのかね？ 夕陽を背に浜辺でマラソンでもするんじゃないのか、これ？

ともあれ、至近距離には滅多に見ない大型メイスを突き立てるガンダムフレーム――

「バルバトス、か」

エイハブ・リアクターから生み出されるエイハブ・ウェーブには同一のものが存在しない。同じ工程、同じ材質、同じ生産工場、同じ時期であろうとリアクターの固有周波数は唯一のものだ。

リアクター照合をかければコンソールには【GUNDAM BARBATOS】と出ていた。

Hey, guys,

三日月が乗っているモビルスーツを超える巨人の歩みが遠くから僅かな振動を感じさせる。

いけ好かないが隊長のオルガが被害状況の確認に行っている中、俺こと『ユージン・セブンスターク』は例の傭兵と折衝を任された。

「……………撃つてこねえよな……………」

普段は威勢のいいことを叫んでいる俺でもモビルスーツなんてものを目の前にすれば、及び腰にはなる。馬鹿にされねえように虚勢を張ればいいが、その結果が皆殺しつてのは避けなきゃならない。

正直言つて、俺よりも柔らかな物腰のビスケットが適役じゃないかと言ったが頼りにしているといわれちゃあ男が廢る。

「あ？　おい、双眼鏡貸せ」

周辺警戒に行く途中だったチビを呼び止め、赤いモビルスーツの手を見る。

「人間？……………ギャラルホルンのパイロット!?」

厄介な奴が厄介なモノを運んできやがった、と悪態をはいて気付く。周囲が剣呑としているのを……………。手土産で連れて来たのか？いや、よく考えろユージン。このまま行けばギャラルホルンとドンパチ始めることになる……………!

「ユージンさん。アイツら……………」

「撃つてはこなかった奴らだ。忘れんな。お前たちもだ!!」

びくつと震えるチビが何人かいた。俺だつてぶち殺してやりたいが投降した奴を殺せばマズいのだつて、壱番組から死ぬほど叩き込まれている。

「血迷うんじゃねえぞ。生き残るためにも……」

☆☆☆
——
☆☆☆

光学センサーはすでにそれを探知していた。ギヤラルホルンを含め、軍事組織で使われる双眼鏡は赤外線測距や光学測距装置を標準搭載している。

「手を真つすぐ向けてればさすがに観測はするか」

念のため腕に装備している大型クローを下に向けておいて正解だった。

バルバトスが飛び込んで来たら、両手の連中は見せられない姿になる。かといって、コクピットを開放するのは距離の関係からやりたくない。オルガつてやつは話せるが、ミカとか呼ばれてるガキは襲い掛かってきそうだ。

はてさて、と先行きに若干の不安を抱えているとクランクとかいうおっさんが驚愕の表情で見つめていた。

『待ってくれ。相手は……子供、少年兵だったのか!?!』

「知らなかったのかよ」

わなわなと震える、とかいうフレーズが似合うほどにおっさんは震

えていた。一緒に捕まっているアインとかいう青年士官も驚愕を隠せてない。

『自分たちは子供を殺していた？ いや、CGSは正規のPMCだったはず……少年兵だけのはずが！』

『アイン……』

『自分は、ギャラルホルンは正義の………！ 見て下さいクランク二尉！ やはり大人もいます!! 彼らは——』

『もう、いいんだ。アイン。俺たちは………』

その言葉を最後に二人とも黙ってしまった。圏外圏で少年兵やヒューマンデブリなんて珍しいものでもないだろう。そんなもので打ちひしがれているところ、今では珍しい真つ当な軍人に属する人柄なんだろう。若いのは犬ってイメージがするけどな。

『——い、聞——つ、——ねえのか？』

「少し待ってくれ………これでどうだ？」

『聞こえた。俺はユージン・セブンスターク。こっちの声も聞こえるか？』

「レッド・ウエイストだ。もちろん聞こえている。この辺りで停まったほうがいいか？」

『出来ればそうしてくれると助かる。チビ共の手前もあるからよ』

直感でわかるのか、カメラの視線を傍らで銃を握る少年に向ければ、硬直しているのが見て取れる。

ユージンとかいう青年が背中を叩いて促すと足早に被弾した監視塔へ駆けていった。

『人手はいるか？』

「4人ほど欲しい。俺への監視と折衝、二人の拘束にな」

『………わかった。おい！何人か——』

インカムの通信を切つて、遠くにあるバルバトスを監視しようとする
と誰かがコクピット付近によじ登っているのを確認した。

カメラのピントを合わせればパイロットのミカとやらがぐったり
した様子でコンソールにもたれかかっている。

(初陣でアレかよ。阿頼耶識システムってのはイヤだね)

すぐに起動もできそうにないとふみ、外へと出る。カーゴ型のモビル
ルーカーと武装したタイプが近づいてくる。向こうも外に出ている
俺に気づいたか、武装型の60mm速射砲を地面に向ける。

『(いい判断だ) ユージン・セブンススタークだな?』

『そうだ! 捕虜の引き渡しと誘導する場所にモビルスーツを駐機し
てくれ』

『了解した』

鈍い金属音とともに両手の二人がカーゴ型の近くまで降ろされた。

『……………つと、動くなよ。捕虜としてちゃんと扱うからな』

腕が伸びた。そして範囲に驚愕を隠せない。

おおよそモビルスーツ一機分が間合いかよ、と恐れる反面、一緒に
来ている仲間に拘束を命じる。抵抗のないことに違和感を覚えるが
共謀しているのだろうか?

「子供、なのだな」

「ああ? ガキでわりいかよ」

「いや、そうじゃ……………。なんでもない。大人しくしよう」

「? お前ら行くぞ! アンタもついてきてくれ」

『おう』

気づいたら独房にぶち込まれていた——なんてことはなく、どこかの一室に見張り付きで閉じ込められた後、何かワゴンで運ぶ音が聞こえた。

部屋の前で音が消えると恰幅のいい少年がトレイにサラダと合成ハムをパンで挟んだもの。それとコーンポタージュのようなものを持ってきた。

「すみません。閉じ込めてしまって」

「気にはするがよしておくよ。出払っていた連中も帰ってきたみたいだしな」

望まれないお帰りだろうけどな、と心の内で呟くとやはりそうなのか、彼も苦笑いを浮かべていた。

「お詫びとお礼に食事を持ってきました。どうぞ」

「君らで食べるといい」

「ッ…………お気に召しませんでしたか？」

「傭兵生活は長いんだ。騙して悪いが…………なんてこともあつてね…………俺はフェアな話し合いを望んでいる。そう、伝えてくれ」

「——伝えておきます」

緊張した面持ちで背を向けると、でも、と外のワゴンにトレイを置いてこちらに向き直した。

「これだけは信じてください。貴方のおかげでモバイルスーツから追

打ちを受けませんでした。戦域も離してくれて、何人かは助けられました。皆に代わってお礼を言わせてください」

ありがとうございます。あと今夜は外に出ないでくださいね？
と言いついて残して離れていった。

「ありがとうございます、ねえ。……おーい、外の坊主」

人死にに慣れ過ぎて、無感動で人を殺せる類だね彼はさ。

彼の人柄は無視していい。やる時はやるってわかればいいのだ。

『なんですか？』

「俺のモビルスーツはどうなってる？ 寂しがり屋だから気になつて寝られない」

『機械に感情なんてない——ですよ。ハンガーに入れてます』

「そうかそうか。ならいいが………妙な事はしないのをお勧めするよ。互いにね」

訝しむように話しの続きを促され、終わると同時にどこかへ駆けて行った。あとは電子ロックを外して、独自に交渉しに行けばいい。

☆☆☆
—————
☆☆☆

「そりゃあホントか、ライド」

「アイツがそう言ってたんだよ。間違いないって！」

夜も更けて、ハンガーで赤いモビルスーツに作業をしていると参番組でも快活で有名なライドがあわただしく駆け込んできた。何か厄介な話じゃなければいいんだが、とそんな淡い希望も砕け散り、腹巻に挟んでいた安物の煙草を取り出す。

あの傭兵から聞いた情報だと、赤いモビルスーツには爆弾がつけられていて正規の手続きでないと自爆するとかなんとか。

やめたほうがいいよ、おやっさん！ ライドや真に受けた連中が懇願するように言っても、そのままにしておくのもマズいと返す。

「壱番組の連中がな。こいつは使えるのか、高値が付くのかってしつ
けーんだ」

「それって……」

「オルガたちも感づいてる。だから薬を盛ってるのさ」

嘘かほんとは知らねえが、随分と用心深い傭兵だ。ひよつとすると飯も手を付けなかったかもしれないねえ。

しかし、解せないことがある。

「ところでライド」

「なに？」

「……………見張りはどうした？」

「……………あー!!？」

「やらかしやがったぞコイツ！」

闇市の違法品でも、うちの電子ロックぐらい外すことは造作もねえ。マルバは変なところでケチりやがったからな。

「急いで戻れ！ もう抜け出てるかもしれないねえ！」

「わ、わかった！」

「タカキと他の連中も行つて——いや待て。取りに来るかもしれ

ねえから、タカキ以外は待機だ」

慌ただしく飛び出す二人を見送り、ドアをロックするよう指示する。何もなければいいが……………。

☆☆☆——☆☆☆

スパイ映画とかで見えるようなスマートに脱出して、華麗に身を隠す——なんてことは不可能だ。

エナジーバーに偽装したC4とブーツの底に張り付けたスパイクを使って即席のHEAT^{成形炸薬}を作り上げる。部屋に放り込まれるときに見た、コンソールの裏面あたりに狙いを定め起爆。穴をぶち明けて電気を流すって寸法だ。

といっても、少し前に終わって外に出ているがな。

この区画にはどうやら誰もいないらしく、ハンガーの位置もわからない。野ざらしにしておかないという点は褒めておこうか。

(? 扉が開いてる……………怒鳴り声?)

すぐにうめき声も聞こえてきたが……………声からして大人だ。

威勢のいいことを言っているようなことから、少年兵によるクーデターが起きてしまったのだろう。

(銃弾は前から来るとは限らない。それを自分たちは例外だと思った結末だな)

恰幅のいい——もう、ぼっちゃり君でいいか。彼が言いたかった

のはこういうことだろうか。あそこで飯を食っていたら俺もあの場にいたのだろうか？

ん？……………あー、これはいかな。

☆☆☆
—————
☆☆☆

——前から話し合っていたことだった。

目の前で威勢のいい口を利く髭の男、ハエダ。出っ歯のササイ。その他大勢の大人クッスたち。

立場もわきまえず、何時も通り怒声と暴力でどうとでもなると信じ切っている。

「碌な指揮もせず。これだけの被害を出した無能にですよ」

こんな奴らをあの時、塵一つぐらい信じた俺がバカみたいだ。過去に戻るなら、自分を殴りつけるのは想像に容易い。

「ふざけんなッ!!」

「……………」

立場つてものをわからせる必要があるらしい。俺は容赦なくハエダの鼻面を蹴り飛ばした。かつて自分が味わったことがある、骨を折る感触がブーツ越しに感じた。

「へ、へめえ!!」

「選んでくださいよ。俺たち宇宙ネズミの下で働くか。大人しく出て

いくか」

「……………命あつての物種だ。俺は出ていく」

「へえ……………意外なもんだ」

率先して襲い掛かってきそうなササイがそう呟いた。ユージンがそんな殊勝な態度に珍しそうな声を出すと続きを促す。

「へっ、ギャラルホルンに喧嘩売った時点でお終いなんだよ。今度は今回の比じゃない数がやってくるだろうぜ。なあ、オルガ」

「……………」

「おい、オルガ。マジなのか?」

「多分な。やられっぱなしじゃいねえだろ」

「マジかよ」

弱みを握ったといわんばかりのササイに少し殺気が漏れた。ミカが反応して、撃ち殺しそうになるのを抑える。

勘違いしたのか、朗々と語り始めた。詰まるところこう言いたいわけだ。

「ギャラルホルンに降伏して、CGSを畳んで、その金を山分けにしてさようなら、か」

「そうだぜ。あの赤いのも売っちゃまえばいい。マルバの野郎のツテで業者を知っているからよ。な? そうしようぜ?」

—————はあ……………。何にもわかっちゃいねえ。

「—————筋が通らねえ」

「はあ?」

「筋が通らねえんだよ。ササイ」

敵か味方かもわからねえがアイツはコイツらと違って助けてくれ

た。助けてもらった借りがある。

「いい子ちゃんぶるんじゃねえよ!! 宇宙ネズミってやつは現実も読めないのか!? あのギャラルホルンだぞ。戦力だってまだまだある。モビルスーツ2機じゃすぐに擦り潰されて皆殺しだ!! クーデリアを引き渡して、モビルスーツもパイロットも返して、隠れちまえばいい!」

狡賢い奴だ。こうやって世渡りしてきたんだろうな。惨めすぎて哀れに思えてくる。

「赤いのパイロットはどうすんだよ」

「バラして荒野に捨てておけばいい。何なら俺がやってもいいぜ!」

なんつーか……ちっちええ野郎だな。プライドも矜恃も持っていないねえ。

ミカ、と声をかけると何ともなさそうに横を通って前に出てきた。手には使い古した拳銃がその存在感を主張している。

いや、ミカにやらせるわけはいかない。俺がやろうと銃を受け取ろうとしたとき――

「まあまあ。待ちな」

「! ミカやめろツ」

「ウェイストさん? どうして外に……ライドは!」

「まさかヤリやがったのか!」

「んー! 一人ひとりにしてくれねーか?! うるさいツ」

不敵な笑みを浮かべる傭兵。レッド・ウェイスト。お嬢さんに自分を売り込みに来た傭兵がそこにいた。

はっ!? 悪い夢でも見ていたようだ

「ミカ!？」

空の葉莢が山積みになるほど撃ちまくったミカがついにヤッチまった。

確実に殺せるよう、次々と弾丸を喰らわせていくのを黙ってて、気付いた時には死ななくてもいいヤツが血の海に沈んでいた。

「オルガ? どうしたの?」

「どうしたも何もお前何をやって……………え? はあ?!」

ちよつとイラつと来る格好で出入り口の前に立つ傭兵、レッド・ウエイストが無傷で存在していた。

「おいおい。このスタイリッシュさがわからないのか?」(ズギウウーン!)

「僕はちよつと……………」

「どんな格好だよそれ? てか、よくその態勢でいられるな」

「…………お、俺もよくわからねえな! ああホントにだ!(やべえ。めっちゃカッコいい!!)」

「ダサイ」

いやいや。お前は銃弾叩き込んでいただろ? あれ? どうなつてんだ? 誰か教えてくれ。300ギャラーあげるから!

目の前が真っ暗に——止まるんじやねえぞ…………!

「君らのボスはどうしたんだ? なんか前髪が高速回転してるんだが

…………」

「オルガ!? しっかり!」

「はっ!?!」

なんだ今のは？ 俺はどうして走っていたんだ？ スーツなんて上等なもん持っているわけが……!?!

「な、なんでもねえ。つと……そうだ、ライドはどうした？」

「純真そうだったから少しブラックジョークを吐いてハンガーに向かわせた」

「ブラックジョーク？」

「自分の商売道具を勝手に弄られるのはイヤだっただことだ」

——そのドクズ野郎なら猶更だ。

ああ、そうだった。ハエダとササイが赤いのを売り払うって話をしていたんだっけか。

「部外者が口を出すんじゃない!!」

「俺のー、ものにー、手を出そうとしている時点でー、部外者じゃありませんー」

「この野郎……! オルガツ！ さっさとそいつを黙らせる!!」

「いや、あのな？ 立場つてものを弁えろよ」

アレだ。コイツはシノとガキどもを足して二で割ったような性格だ。そんなもってトドみたいになんかイラつと来る喋り方をしてきやがる。

であっても、恩人は恩人だ。俺はクズ共と違って道理と義理を守る。件の男に向き直り、まっすぐ目を見て頭を下げる。

けど、その人はひらひらと手を振って先を促していた。

「ケジメってやつをつけなきゃならねえ」

「っ……ここはお互い大人になって話そうぜ、な!?!」

「手前みたいなクズ、にか？ そんなのが大人ならなりやしねえよ」

「あ、アンタはどうなんだ!? わかるだろ?! 俺らみたいな弱小がギャラルホルンに目をつけられたらどうなるかってことぐらい!!」

ササイの野郎は強い奴に媚びんのが得意だな。そんなことする前に潔くなれねえのかよ。

「……ウェイストさん。アンタはどうする?」

☆☆☆
—————
☆☆☆

(どうするのか………どうしようか?)

ユージン・セブンスタークとチャラ男みたいな奴の間を通って前に出る。

人相を見るに碌でもなさそうな二人を眺めていると、まあ要らないことを叫ぶ訴える嘯くときたものだ。ガキどもじゃなくて俺たちと組もうから始まり、目の前で殺されそうな奴を放っておくのかと訴え、ツテだってあるんだ悪いようにはしないと嘯いてくる。

こつちもそれなりのツテだって持ち合わせているのだ。ハーレムイケメン野郎とか色白髭面のご同業とか、妙に和風かぶれのマフィアとか、焼肉奉行の司令官だとかとだ。

ふむん、と顎に手をやって考えると笑みを浮かべるオッサン共と背後から感じられる勝手に失望されたような蔑み。
なるほど。どつちも勘違いしているようだ。

「—————アンタらの話には乗らないぜ」
「んなあ!?!」

「いや、そもそもだね？ 人の物をかっぱらって売り払おうとするヤツと仲良くなりたいか？ そんなヤツがいるとしたらよっぽどのキチ○イかお人好しだね」

一服盛ろうとしたことだつて忘れたわけじゃないと釘は刺しておく。それとこれとは話が違うし、ド貧乏な私は仮従業員の為に大金を稼がねばならず、血も涙も情も情けもない借金取りにお金を返済しなければならぬのでいすヨー。やべ！ 思い出したら首吊りたくなってきた。

「というわけで、俺は別にアンタら二人以外の進退についてはノータッチでエンドだ」

「待ってくれ！ 他の奴らも話にのつてたんだぞ！」

「言い出しつぺはどうせお前らだろ？ 万年バカンス中の神様はこうおっしゃいました。先導者こそ善悪のもつとも深きものであると」

クソがあ！ と月並みな反応で体当たりしようとするハエダを俺は冷静に対処した。傭兵さんの七つバーの一つ電テイザー銃ガンである。

ラバー弾と同等の速度・威力を保持し、弾頭先端の鉤爪が服に食い込み、一回限りの殺傷クラスの電流が流れる優れものだ。肩口を狙ったからちよつとやばいかな？

「ツ——ツ、ツツ——！」

白目を剥いて口から泡を吹きだし、強烈な電流による熱量が刺さった部分と奔はしつた部分に火傷傷を負わせた。

「ひ、ひいいい!!」

「てめえもナー」

「やめ——ギヤアアアア——」

抵抗されてもアレだから、ササイとかいうのにも喰らわせておく。
うーん。この後どうしようか？ と後ろに顔を向けると引き攣つた顔の4人——残り一人はどうでもよさそうな顔でミサンガを眺めている——がドン引きしていた。

「どうした？ 笑えよ。ほら」（悪鬼スマイル）

☆☆☆——☆☆☆

((((こ、怖ええええ……)))
(やっぱりいい匂いだ)

三日月以外、目の前で起きた所業にドン引きしていた。何よりもこんなことをしておきながら、夢に出てきそうな笑顔を浮かべ、笑えと圧迫するその鬼畜という言葉が裸足で逃げ出すその在り方。

オルガ、シノ、ユージン、ビスケットは引きつりながら細かい声で笑い声を出していた。笑わなければ次は自分たちがこうなるかもしれない、この時の四人は自信が笑顔を浮かべられているのか不安だった。

逆にレッドは必死な顔で歪みきった笑顔と笑い声を聞いてドン引きしていた。

「えつ、すつげえ怖いんだけど？」

「「「「アンタが笑えって言ったんだろう!!」」」」

「えー……俺、そんなこと言ったか？」

「言ったよ。面白くもないしどうでもいいから無視したけど」

——可愛げのない奴。

——アンタにそんなことを思われる筋合いはない。

どこまでが冗談で、どこからが冗談じゃすまされないのか四人は気がではなかった。知っている大人ではこんなにも破天荒な奴はいない。殴られるにしろ八つ当たりされるにしろ、それらを察せるだけの気配を目の前で痙攣している二人は感じさせていた。

オルガは参番組の頭を張る以上、仲間に危険が及ばないように立ち回る必要がある。

シノとしては面白いのか恐ろしいのか今一、判断がつかない。

ユージンは頭張っていたらコレと交渉をしなければならなかったのだと安堵している。そしてオルガはそれを目ざとく感じてイラつとしている。

ビスケットに関しては、下の妹たちが学校に行き、高等学校まで通って彼氏を連れてきてしまった妄想に逃げ込んでいる。

☆☆☆
—————
☆☆☆

目の前で暴力の権化ハエダ・グネルと強者に媚びるササイ・ヤンガスが無残な姿に変えられた。

二人の普段の行いや勤務態度を見ている自分——デクスター・キュラスターからすれば当然の報いだと声を大にして言える。同情など浮かばない。

——しかしながら自分も同じ穴の貉だと良心が蔑んでいる。

「あのう……」

「何かな？」

「ひいっ！ こ、殺さないでください!!!」

「待ってくれ！ デクスターさんは何も悪いことはしてねえ!!」

人を殺人鬼扱いしないでくれるかな!? ウエイストと呼ばれる青年が少年兵のオルガ君たちに抗議している。私にとっては……とても罪深い言葉だった。

(何も悪いことはしていない。言いかえれば、目の前で酷いことが起きていても何もしなかったんだ。どれだけ使い捨てられていても、私は我が身可愛さに……)

彼らを庇ったとしても瘦身矮躯の自分ではハエダの拳を受ければ一発で病院送りに違いない。そもそもな話、自分には強きをくじき、弱きを助けるなんてことは怖くてできなかつた。

「……………退職を願います。私はここには居られませんから」

「待ってくださいデクスターさん」

「ビスケット君？」

「経理も担当していた貴方に抜けられるのはちよつと……………」
「……………ですが」

「辞めていく奴らの退職金も出さなきやならねえんだ。頼む」

「はあッ!? おい、待てよ!!!」

ああ、彼は——オルガ君は例え憎い相手でも筋は通すべきだというのか。ユージン君の反応こそ普通だというのに……。

「わかりました」

「ありがとうございます—」

あの後、若干の業務上の事故死者を出して解散となった。

俺はと言うと、やたら勢いのあるノルバ・シノとやらに付き添われつつ監禁となった。その状態も朝には解放され、とりあえず遅めの朝食を屋外でとっている。一人ではなく、CGSを乗っ取った幹部組とだが……。

「挨拶が遅れたな。俺はオルガ・イツカ。援軍、感謝する」

「レッド・ウエイストだ。こっちも収入があつたし、あとはお嬢さんへ繋げてくれればかまわないさ」

「必ず繋げる。それが筋つてもんだ。で、ハエダ達のことなんだが……どうするんだ？」

「ああ、それな」

宇宙漂流刑にする、って言ったらそら恐ろしいものを見る目で見られた。宇宙でも多少は仕事をしたことがあるみたいだな。

「確かにアイツらは殺したいほど憎いけどよ。それは……」

「君らがそうでも、俺はそうじゃないぞセブンスターク」

「ユージンでいいって……」

「仕事中はファミリーネームと決めているんだ。つまり、今は仕事なんだ」

プライベートのオン・オフははっきりとしましょうってことだ。

「俺の商売道具に手を出そうとした。そのケジメだ」

宇宙漂流刑なんて、司法による死刑としては最悪の類だ。三日分の酸素と食料を脱出ポッドに載せ、罪人を乗せて放出する。当然救助ビーコンは作動させず、窒息死か餓死。あるいは発狂死の未来が待っている。

なお、何も知らない第三者がポッドを拾った場合、すべての罪が免除されるといって褒美がある。

「君たちもそういう世界に足を踏み入れている。忘れないほうがいい」

「……………忠告感謝する。捕虜はどうするんだ？」

「ギャラルホルンとの交渉に使う。飽くまで自衛をしたという体だな」

「また来たらどうするんだ？」

「容赦をする必要なんてないが可能であれば殺さずに見逃すことだ。必要以上の殺しをやらないのは一種の信用になる」

俺？ 皆殺しにしたわけじゃないから無問題もーまんたいです。下手人を未遂のうちに始末しただけなのです。

「案外、ギャラルホルンを辞めるかもしれない。自分が攻撃した連中が子供だったから落ち込んでいたからな」

「そんなことで真つ当な仕事を捨てんのかよ？」

「真つ当な境遇だからな」

生まれと育ちで未来の大半が決まってしまうのが今の世界だ。地球生まれの地球育ちで中産階級ならそれなりの地位に就くことが可能で、下層市民なら実力次第で成り上がれる。上流階級は生まれながらの勝ち組だ。ギャラルホルンのセブンスターズ縁の奴なら言うまでもない。

これがコロニーとなるとギャラルホルンで出世は絶望的となり、地球出資の企業においても同様となる。なれるだけでも御の字である

のは違くない。

圏外圏だと悪夢となるのはわかるだろう。火星の実情を見ればわかるはずだ。

「腐つてない普通の軍人なら子供を殺すなんてことは拒絶する。命令で仕方なくとも、終わったあとに夢に出るだろうさ」

「……………それが真つ当、ってことか」

何か憧れでもあるのかね？

「こんな命がけの仕事より、きつたはったのない仕事がしてえんだ。誰も死なせないためにも」

「明確なプランはあるのか？」

「お嬢様の護衛の仕事がある。それを成功させられれば、俺たちの名は売れるし金も入る」

「じゃあ、商売敵ってことになるのか」

俺もクーデリアのお嬢さんに売り込みに来たのだ。パトロンがいたとして、二つの傭兵組織に満足のいく報酬など出せるだろうか？

「そのことについて、折り入ってお話したいことがあるんです」
「ものによるな」

「一時的に外部顧問として僕らのCGSに——」

「CGSじゃない。ビスケット。鉄華団だ」

「鉄華団に所属していただけませんか？」

——鉄華団ってなんだよ、それ？

——今決めただよユージン。マルバもないからな。

「どちらにせよギャラルホルンと対峙するのは時間の問題です。クーデリアさんに雇われる点では同じだと思います」

「…………上にいる連中に話しを通してもいいか？」

「仲間がいんのか？」

「仲間というより、成り行き上の連中だ」

元海賊のヒューマンデブリだけだな。

火星に來た理由？ 自由を求めたのさ (解説付き)

ヒューマンデブリとは何か？ 端的に言えば人身売買の商品たちの事である。

普通に考えるのなら、人身売買なんてものは旧暦の奴隷制度とやら変わりなく、世が世なら相当なりアクションを受けること間違いなしである。だが、しかし。暗黙の了解で、この制度は公的に認められている。

そもそも、人類が宇宙へと進出した結果、年代を重ねるごとに孤児の数が増加し続けたのだ。地球や火星と違い、生身で放り出されれば即死な宇宙空間を往来する商船団。それを狙う宇宙海賊——つまり海賊は増加の一步を辿っている。海海賊は完全に駆逐されているといってもいい。

海賊連中は獲物を襲うと幾つかのパターンに分かれる。

一つは積み荷だけを奪う穏健派。次に老若男女問わず皆殺しにして船も何も奪う過激派。現在の主流である選んで殺してすべてを奪う連中だ。

ここで俺の借金生活につながる。兎にも角にも、経営と言うのは維持費が掛かる。高度な機械関係を扱えば扱うほどに上昇し、使用したとなればさらに上乘せされる。

ギャラルホルン一強の現在、傭兵稼業の相手は民兵組織かギャラルホルンの幹部連中の縁故、海賊の用心棒、民間の用心棒ぐらいしかない。経済圏は戦力の拡充を図るとギャラルホルンに干渉されるため、そっち関係のアグレッサー——仮想敵兼教導隊の仕事はない。

で、戦う相手はと言えば海賊相手か同業者相手である。宇宙を中心に活動する傭兵は必ずモビルスーツを保有している。モビルスーツ同士がぶつかれば弾薬、装甲、推進剤などが消費される。その額は割に合わないこともしばしばだ。

「賠償としてもらい受けてな。火星に来る途中で、裏ルート経由だった。そこをブルワーズって武闘派と交戦し、隊長機を戦闘不能にしたんだ」

あのカマ野郎は口汚いし、雇い主は豚と人間が合体したミュータントかと思った。なんて告げれば吹き出す奴もいた。オルガが先を促すように咳払いをする。

「殺さなかったのか？」

「生き残るのを優先した。オーガスと同様の阿頼耶識使いだった」

当然の帰結として、積み荷と船程度では儲けが少なくなる。その結果、小遣い稼ぎに子供や若いのを捕まえて市場に流す。

この世の中、それが当然なものとして行われている。記録上、死亡して人権もない。表も裏も使い勝手がいい消耗品として。

「最初は売り払おうかとも思ったが、前例付きは碌な目に合わん。多少の整備もできるようだから仕込んで働かせてるんだよ」

「……………壱番組みたいにか？」

「そんなことはない。二束三文で殺しに行くクズだが、雇ってる連中を蔑ろにするほどのゴミクズじゃあない」

5人ぐらいいるから、食費や給料で出費がががが…………!! おのれ借金取り、俺のアイリーンちゃんへのプレゼント代まで奪っていきやがる!!!

(すごい顔してるね)

(血涙まで流すぐらいなのか?)

(ものすごい痙攣してるじゃねえか)

(火星ヤシうまい)
(三日月、お前な……)

☆☆☆
—————
☆☆☆

「ふう……なんかどうでもよくなってきた」
「よくねーよ!? アンタ、本当に経営者としての自覚があるのか?!」
「正直、雇われのほうが好きだと思って。けど金は欲しいから自営業になった。反省してるし後悔もしてる」
「数分前の自分を殴りたい……」

ビスケットの嘆きに俺も同意しちまう。真面目なのか不真面目なのかわからねえ。そんなだからペースを乱される。ただ、阿頼耶識のピアスが妙にチリチリする。こういう時は注意しねえと、後で厄介なことが起きる。

「とりあえず、上の連中に……? 待てよ。アンタ、船持ってるのか?」
「持ってるぞ。ビスコ―級の中古だ。さすがに民間船を利用するのは避けたい」

————— あ ……!!

「ビスケット!!!」
「な、なに!?!」

「船だ。CGSの船はどうなった!？」

「! デクスターさんに聞いてみる!」

……!
気づいてよかった。マルバの野郎が持ち逃げしてたりでもしたら

『団長はいますか?』

「急にすみません。船について何か分かりましたか?」

『今のところ大丈夫のようです。おそらく、マルバが骨とう品や貴金属類の換金に手間がかかっているでしょう。足がつけばギャラルホルンに捕まる可能性も捨てきれませんから』

安心したら、少し気が抜けちゃった。

画面越しのデクスターさんに礼を告げて、前を向く。

「うっかりイツカ団長だなwww」

「その呼び方はやめてくれ! えー、うん。船の目途はついた。強襲装甲艦ならアンタのモバイルスーツも載せられる」

「俺の船をここに置いて行けってか?」

「いや、一緒に大丈夫——すまねえ。まだお嬢さんに話をつけてなかったな」

「それ以前に上の連中に話もしてねえよ」

☆☆☆
—————
☆☆☆

タブレットの電源を入れて、俺のビスコー級グリコの艦橋を呼び出す。何度かのコールでこの一か月ぐらいで従業員になった生意気そうな顔の子供が映る。

『やつと連絡が来た。遅すぎやしませんか』

「ちよつとドンパチして、監禁されて、少年兵に囲まれてたら遅れた」

『いや、何で平然としてるんだよ？ 普通はもつと焦るだろ？』

「お前らに囲まれた時もこんな感じじゃなかったか？」

『……………そういやそうだったな』

顔に大きな傷を持つ子供、アストンだ。比較的、早くに打ち解けてくれたブルワーズからの戦利品その1だ。

『で、何の用です？ 食料の買い出しは終わってますけど。あと、借金の督促がすごいです』

「督促は着信拒否にしておいてくれ。振りじゃないぞ」

『やめておいたほうがいいですよ』

「何故にWhy?」

『それはもう船にいるからですよ、不良債権』

……………よし！

「くつ、LCSの調子が——通信が——！」

『差し押さえ』

「急に調子が良くなったな、チクシヨウメエエエエエエ!!!」

☆☆☆
☆☆☆

『どうもオルガ・イツカ団長。私、投資家のエンマルク・ドルポンドと申します』

「はあ」

とんでもなく胡散臭い男が猫なで声で俺たちの前に出てきた。

画面越しだったのに寒気が止まらねえ。

『そんな怯えなてちやあいけませんよ』

「なんのこったよ」

『まだまだ若いですねえ。表情に出てます。私程度の人でなしに怖気づいてしまうのなら、クーデリア嬢を護衛するなんて夢のまた夢だ』

「言ってくれるじゃねえか……!」

「俺たちじゃ役不足だったのか!」

にやけ面をしながら耳を抑えるその態度。気に入らねえ!

『そうやってすぐにカツカしちゃうところですよ。ウェイスト君。君は私のことを教えてないのかい?』

「まだだよ。畜生、こんなところまで来るなんざ想定外……」

『ほんとに不良債権だね君ってやつは。おほんっ……こんな自己紹介は嫌いなんです、これでも地球圏と圏外圏を含め五指に入る資産家ですよ』

「んな法螺話を信じられるわけが……」

「マジだぞ」

マジな顔のウェイストさんが神妙な顔をして告げる。

曰く、火星の土地全てを購入して有り余る財産を保有している。

曰く、ギャラルホルンのセブンスターズって奴らが無下にできないほどの金持ち。

曰く、曰く……etc.

「——マジかよ」

「火星土地、全部買える?!」

「金あり過ぎて、経済圏から泣きつかれたから金貸しを趣味で営んでんだよ」

『大まかな紹介ありがとう。少し誇張表現が———少なすぎますが』

「「アレでか!」「」」

もつともつと驚きたまえ若人諸君と札束片手に飄々としているが、とんでもなえのに喧嘩売つちまったのか?

『この程度、怒るほど狭量ではないですよ、オルガ・イツカ君。それより、ウエイスト君』

「いやね? 今交渉中ですので、お嬢さんの護衛につけるかの大事な———」

『鉄華団の外部顧問の仕事を受けなさい。利子の支払いも滞っているんですから。大体ですね、君の立場で仕事を選ぶなんてのはだね———』

———青年、説教なう———

『わかったかね不良債権』

『ちよつと自殺に追い込むぐらいの嫌味でこれとは。情けない。君たちもだ』

「流れ弾が痛い……!」

『ギャラルホルンに喧嘩を売るんだからね。これぐらい流せないと経

『営者なんてなれないよ』

やっぱマルバってすごかったのか？

『マルバ・アーケイは凡人でしかない。コネ作りはしつかりとしていたけどね。あと、顔に出過ぎ』

「すみません」

『すみません、じゃなくて、すみません。言葉遣いもちゃんとしなさい。上が礼儀知らずなら下も礼儀知らずととられるよ』

そういやマルバも敬語ぐらいは使っていた。やっぱ学が無いとダメなのか？

『学ぶ気さえあれば取り戻せるよ。で、その不良債権の代わりに鉄華団への外部顧問引き受けの手続きを受けようと思います』

「本人の了承は？」

『不良債権に人権なんて存在しないんだよ。イ・ツ・カ・君』

☆☆☆
—————
☆☆☆

ちよつと皆様、お聞きくださいませ！わたくし私の与り知らぬところで勝手に契約が結ばれていたでござりまする。

当方、これには如何ともしがたく—————

『やりなさん』

「謹んでお受けいたします」

借金取りには勝てなかったよ（びくんっ、びくんっ

『では報酬はその通りでお願いします』

「あ、ああ」

報酬？　ちよっと待てや。てめっ、なんで俺を憐れんでいやがるよ?!

「すまねえ。整備代は請求しないからよ。ホント……………なんかすまん」

「……………嘘だと言ってよ、だんちよー」

「俺は……………無力だ……………!」

「オルガは頑張ったよ。頑張ったんだ。だからもう……………!」

ロハでやれってことですね。マジかよ。こうなったら!

『モビルスーツの売買ならすでに話はつけてありますよ』

「ジーザス! ファツオン、クライスト!!!」

『今月の分と滞納分も引きましたが残ってますよ。君の取り分の数%ですが』

神は死んだ!



壺番組のいない清々しい朝飯だと思っていたら、胸焼けがするぐらいに濃い時間だった。

目の前で望陀の涙を流す貧乏傭兵ウエイストを見ると、寧ろコイツで大丈夫なのかと訝しんじまう。あのうさん臭いおっさん曰く、腕と勤務態度にコネは保証すると太鼓判を押したが、どうにもなあ……？

「おのれえええええ」

どう考えても凄腕には見えない。コネが作れるほど魅力があるとも思えない。

エンマルクから案内役はテイワズのタービンを紹介してもらえって言われたがそんなことできるのか？

「アンタ、ホントに使えるのか？」

「あん？」

「エンマルクさんの一件からどうにもアンタがすげえ奴には思えなくなっちまった。強いんだろうけどよ」

「そりゃあな。三日月なんかに比べたら………まあ、今は俺のほうが強いな」

今は………ねえ。

「殊勝だと思っただろ？ プロは自分の実力を正しく理解して初めて一人前だよ。今は俺のほうが経験値があるが、地球につく頃には逆転してるだろうな」

「へえ……。修羅場があると思うか？」

「あるだろうさ。火星のマストドライバーは何基かあるがハブ宇宙港は一つしかない。十中八九、ギャラルホルンは監視してるだろう」

鋭い目つきで空を睥む姿は、さつきまでの情けない姿を完全に払しょくしていた。

「それはそうと三日月は？」

「ビスケットやお嬢さんと一緒に桜農場にバイトだ。ビスケットの婆さんがやってんだ」

「……………農場、ね」

——こんな赤い大地でも、植物は育つのかー。

赤い大地以外を知らない俺はどう返事をすればわからなかった。ただ、何かを懐かしむような横顔が強く印象に残った。

☆☆☆——☆☆☆

——地球から統制局の特務士官がやってくる。

ギヤラルホルンのパイロット。克蘭ク・ゼントとアイン・ダルトンに懐柔と尋問を行ってきたときに告げられたものだ。

統制局も何も知らない俺たちは顔を見合わせていた。

「ギヤラルホルンの監査官だよ。内にも外にもな」

「監査ってことは給料の査定ってやつか？」

「不正を行っていないかの捜査だ。火星独立運動の激化。それに伴う、ノアキスの七月会議でのクーデリアか」

「その通りだ。我々はクーデリア捕縛のため、ここへ攻め込んだ」

「で、少年兵の虐殺に加担しかけた」

少年兵相手に戦うのがそんなに辛いのか？

「子どもは大人たちに守られるべきだ。私はそう在る為にギャラルホルンに入隊したのだ。だというのに……!!」

なんかズレてるな、このおっさん。

「じゃあどうする？ ギャラルホルンに戻って、特務のお偉いさんに訴えるか？」

「そうするしかあるまい。権限はコーラル司令よりも上位だ。私が必ず、君たちに累が及ばぬよう交渉して見せる」

でもお偉いさんだろ？ 地球育ちの。

「………確かにそうだが……」

「そんな奴らが火星の人間に配慮するとは思わねえ。それによ——」

アンタが俺たちのことを知らなかったのに、もっと知らねえ奴が俺たちを助けてくれるなんて思えるか？

火星衛星軌道会戦　くわぎとじやないから事故だつて！〜（解説付き）

火星の衛星軌道上に存在するハブ宇宙港を眼前に見据えながら、壮年の男性、クランク・ゼントは我ながら厚顔無恥な男だと思っていた。予期せぬモビルスーツとの交戦により、教え子であり、部隊長であったオーリス・ステンジャとカミラ・ヴェインセントを失った。

挙げ句、僚機のアイン・ダルトンとともに傭兵に捕らえられ、わずかな間ではあるが捕虜の辱めを受けることとなった。

（俺も他と変わらなかった、ということか）

捕虜となった彼らに待ち受けていたのは少年兵から憎悪と傭兵からの懐柔だった。

当初は今ならまだ間に合うと尋問に来ていた少年らに言い聞かせ、同行する傭兵にも口添えを頼んでいた。しかしそれは善意の押し付けだった。

——アンタにそんなことが出来るようには思えない。それに仲間がいつぱい殺されて、それを我慢しろっていうのは納得できない。

——俺たちはもう覚悟を決めてる。自分たちで生きていく。俺たちの為にだ。

三日月という、オーリスを殺したモビルスーツのパイロット。このCGS——今は鉄華団と呼ばれる組織の長となったオルガ・イツカの決意だった。

クーデリアの命と引き換えにと言ったが、よくよく考えてみればクーデリアもまだ子供なのだ。

（子どもの命を子供の命で賄わせる。なんて独り善がりな正義感だ）

彼らの決意は変わらないと理解し、そこから数日後には解放された。

ギャラルホルンの地上支部まで送られ、その気があるならここに連絡しろと名刺も渡されている。

「……………クランク二尉」

「アイン。俺はもう軍属じゃないんだ。だが、お前は良かったのか？

ダルトンの家に傷をつけて…………」

「構いません。母はすでに他界してますし、父は地球出身の女性ひとと子供も儲けてました。居場所は随分前になかったんです」

「……………すまん」

「いいんです。自分はクランク二尉——じゃなかった。クランクさんについていきます！」

「ついていくんじゃない。肩を並べて共に行くんだ」

「ッ、はい！」

☆☆☆
—————
☆☆☆

『——信用できるのか？』

「今後次第だろう。少なくとも虐殺や子供への暴行。いわゆる悪事と思われることをしなければ叛意は持たないさ。それに警備や護衛を生業にするなら憶えておけ。昨日の敵は今日の僚機ってな」

モニター越しのオルガ・イツカがこっちの新人ルーキーにケチをつけてきた。

彼の組織、鉄華団は複数に分かれた民間シャトルで鉄華団はハブ宇宙港——方舟へ向かっている。積み荷の関係上、貨物用シャトルを利用せざるを得ず、そのシャトルは乗員も少なかった。

俺たちは出発の二日前にモビルスーツとともに宇宙へ上がり、借金取りが待つビスコー級グリコで機体の調整を行っていた。

「信用しなきゃ信用もされねえよ。相手にもよるがな」

『言ってる事矛盾してねえか』

「疑うことが評価の対象って捻くれも存在するってことだ。あ、俺は信用されるとバッチコイ！な奴だからよろしく」

『気には留めといてやるよ』

あ、切りやがったし。ホント、可愛げの欠片もない……………あんな厳ついのが「お兄ちゃん」とか「期待に応えるよ！」なんてしてきたら吐くわ。むしろ引導を渡してやるわ！

とはいえ、今後の筋道を再確認しなければならん。

『なんだよ?』

「最後の打合せに一方的に終わらせる奴がいる——ああ、お前だったか」

『アンタ、人に喧嘩売るのがうまいって言われたことないか』

「わったるさ嫌味だもの。それで首尾は?」

『……………予定通りだ。オルクス商会の案内でいく。トドの野郎が仲介したっていうが、な』

「了解した。こっちは出るぞ」

『頼む』

任せろ、と言う前にあのアホ毛切りやがった。まったく……………おーい、デルマあ。

「なんですか?」

「ハンマーヘッドが居るって本当か？」

「そうみたいですよ。あのおっさんが送って来てもらったとか言っていましたし。何か問題でも？」

「いやな？ 世話になったことがあるし、姉貴には頭が上がらないからよ」

わからないような感じだが、何年か世話になっていたからな。姉貴仕込みの操縦スキルが無かったら、とうの昔にお陀仏だった。

ただ、疑問なのはどうして火星にとどまっているかってことだ。

「船の位置は？」

「カメラで拾える距離、かな？ 近いとも遠いとも言えないぐらいだと思う」

「……………待ってるのか？ けど、ドルポンドさんは一緒に乗っているし……………」

噂をすれば影とはこのことで、丁度、ドルポンドさんが艦橋ブリッジにやってきた。手には火星で購入したスナック菓子を持っている。

「べたべたの手で触らないくださいよ。掃除するのペドロやビトーなんですから」

「いやあ、こういうジャンクな食べ物って食べられなくてね。それよりも何か用かい？ ああ、聞きたそうにしてるからだよ」

「いえね？ ハンマーヘッドが近海に停留してるんですよ。こちらに来る時に利用したとか？」

「行き帰りを頼んだけど、君を捕まえられたからね。もう断りは伝えてるよ？ 何なら聞こうか？」

「ついでに道案内なんかもお願いします」

「借金に追加しとくよ」

「そこはタダにしてくださいよ（泣）」

結論を言えば、ハンマーヘッドには厄ネタが乗っていた。

CGS——今は鉄華団と呼ばれている組織の前社長、マルバ・アーケイが乗艦していたのだ。

『知らない仲でもないからよ。昔の好よしみでな』

「勘弁してくださいよ色男。もげて破裂しちまえ色男」

『はっはっは。男の嫉妬はみつともないぞお。そんなんだから女の一人も捕まえられないのさ』

「キャバクラのアイリーンちゃんは借金返し終わったら結婚してくれ
るって言っていました」

『……………』

「そんな目で見るなあああああ!!」

畜生、畜生！バカヤロオオオオ!!!

『ドルポンドさん。どこか、いい娘でも紹介していただけませんかね？』

「彼の勢いについていけるお嬢さんがいるとでも？」

『地球の女じや無理か。かといって、タービンズの奴らは……………』

「中古の船が買えるぐらいの借金持ちだけど？」

『——逃げないように捕まえといてください』

「ならアミダ君やラフタちゃんたちの準備をよろしく。この後戦闘になるからね」



——まずは一っ。

『やっちまえ、ミカあああああ!!』

「うん。わかったよ、オルガ」

俺たちは宇宙へ上がった。壱番組で居残ったトドが紹介したオルクス商会に地球までの案内役を頼み、鉄華団の物になったイサリビで行く予定だった。

「宇宙でこんな大きいの撃ったことないな」

オルクス商会の強襲装甲艦の陰から出てきたモビルスーツ……
ウエイス
気に入らない人が言うにはグレイズ、だったかな？ 青色のが襲い掛かってきた。最初の一発は不意打ちで当たった。二回目は思ったよりもロツクオンして撃ったけど、簡単に避けられた。

「ライフルの撃ち方じゃダメだ。船外活動するみたいな感じでいいかな」

なんか変な感じがする。暑い日差しの中で上着を脱いだような感覚。地上ではどうでもなかったけど、宇宙に出たらチリチリする。

どんな風なら飛べるか？ 多分、こんな感じだ。

「ん……もう少し、こう、かな」

ジャンプするんじゃないなくて、蹴って飛ぶ感じだ。船内で移動するよ
うな感じ。それにスピードが乗っている感じだ。

当たらなかった攻撃も、5発目ぐらいから当たるようになった。気
に入らない人から教えてもらったやり方より、こっちのほうがやりや
すい！

「じゃあ、次——」

『ミカ！ 食いつかれた！ こいつをおお!!?』

「オルガ!？」

グレイズがオルガの乗ってるシャトルにアックスをたたきつけよ
うとしている。俺じゃあ——間に合わない!?

「オルガアアアアア!!?」

『くそつたれ!ここまでかよ……!!?』

『死ねえ! この火星の野人ども、お、ツツツ!』

どこからか飛んできたでつかい棘がグレイズのコクピットを潰し
た。

その棘は真つすぐに持ち主のもとへ戻る。赤いモバイルスーツ。動
いているのを見るのは二度目だ。

「ツツツ! アンタ、遅すぎるよ……!!」

『遅れた分は取り戻させてもらうさ。こっちは任せろ』

「頼んだ」

俺はオルガに言われた通りのことをするだけだ。アイツらを殺る。
殺つちまえて命令されたから。仲間を守る為にも容赦なんてしな
い。



三色の鋼の巨人たちが火星の空を駆け抜けている。白い巨人は跳ねるかのように、人の様にステップを刻む。青い巨人は群体として形を作る。赤い巨人は両腕を伸ばし、まるで魚の様に泳いでいた。

「見たことのないモビルスーツが二つ。ヘキサでもロデイではない。グレイズやゲイレールの体格に近いな」

赤い巨人がその腕を大きく振り回し、同時に機体も回転させて友軍のグレイズへ叩きつけている。

モビルスーツの腕程度では大したダメージに等ならないが、両腕に取り付けられた巨大な棘——。

「この距離からではわからないか？」

シャトルを狙ったグレイズの胸部装甲を突破し、深々と突き立てられた棘。いや、杭とも呼ぶべき武器。ガエリオのシュヴァルベが装備するランス並の大きさだ。

「新たに画像、入りました」

「頼む。それとリアクターの照合は？」

「白い方はまだですが……………！ 来ました。赤い方です」
「……………V i r s a g o? ……ヴァーサゴ……………ウアサゴ? いや、
ヴァサゴか?」

ギヤラルホルンのデータベースからには、それがかつて自軍に存在した機体であること見受けられる。300年以上も前のことだが。ガンダムフレーム……………ヴァインゴールヴに奥底に鎮座するギヤラルホルンの象徴。あの機体と同じ、厄祭戦を終結させた強大な力の化身たち。そのうちの一つ。

「かつてはギヤラルホルンの始祖たちと轡を並べた英雄が、今となつてはギヤラルホルンに立ち向かうか」

しかし腑に落ちん。もう一機は照合中であるのにこれだけはすぐに出てきたのだ? ふむ……………。

「……………なるほど。月外縁軌道統制統合艦隊が最後の……………む?」

しまったな。今後に使えるかと考えていたら、他の機体がやられて
いる。

「ガエリオは?」

「ボードウィン特務三佐はすでに!」

「わかった。残存する友軍に二手に分かれてこちらを援護しろと通達
してくれ」

「了解!」

さあ見せてもらおうか。厄祭戦を終わらせたガンダムの力、という
やつを……………このマクギリス・ファリドに!

おそらくは火星支部の保有する機体の大半は沈めたと推測できる。
連携の取れたグレイズ三機を丁寧かつ迅速に仕留めつつ、現状の把握をレッドは努めていた。

「シャトルは———つたく、オルクスの船か！」

シャトルにナノラミネートは施されていない。一日に何度も宇宙と地上を往還する機体に、ナノラミネートは割が合わない。強襲装甲艦の砲撃一つで綺麗な爆炎を割かせることになる。モビルスーツも艦砲クラスの実体弾の直撃には余程の装甲厚がなければ耐えきれない。

「スピード上げて、祈っとけ！俺が引き付ける」
『任せた！』

レッドの駆るモビルスーツ、ガンダムフレーム・ヴァサゴは正面から見れば普通のモビルスーツと何ら変わりはない。しかし、戦闘態勢に入ったとき、その姿は大きく変わる。

「そおらよッー！」

機体の全長並みに伸びた腕がオルクスの船の対空火器へ向かって撃破したグレイズのアックスを投擲した。

速度は銃より遅く、爆薬も積んでいない。だが、その質量は艦砲の砲弾の数十倍。そこに体をコマのように回転させた遠心力も含めて投擲する。

その破壊力は対空火器を割り砕き、沈黙させる。

あまりにも大きい一撃に恐怖したのだろうか。あるいはモビルスーツ如きが戦艦に痛い一撃を与えたことに脅威を抱いたのだろう。シャトルへの砲撃を中止し、ヴァサゴへと砲火を集中させたのだ。

数発に一発の割合で混ざる曳光弾。そのバカみたいな数がヴァサゴへ集中していく。

「ッ！ イサリビは!？」

「見えた！ 直上だ！」

ヴァサゴもイサリビに気づいていたのだろう。オルクスの船と大きく距離を開け、その間をダイブするようにイサリビが通過していく。

「あの野郎！ イサリビを盾にしやがった!! 弁償しろコノヤロー!!」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ、ユージン！ 皆、乗り移る準備して!!」

「弁償しろバカヤロー!!」

当然のことながら、オルクスの船はとにかく近づけないように遮二無二撃ち続けていた。そうなれば自ずと火線へと割り込んだイサリビは大なり小なりの砲火にさらされる。

「マジかよ!!!？」

「ほとんど対空火器だから大丈夫だけだよ！ どこかに捕まれえええええ!!」

「俺はこんなところじゃ死なねえぞ！ そうだよな昌弘おおおおお
お!!!」

「昭弘うるせえ!! つーか、捕まってる!!」

「昌弘オオオオオオオ!!!」

「五月蠅エ！ 黙ってる!!!」

☆☆☆——☆☆☆

煙を上げながら下へと進んでいくイサリビを尻目にオルクスの船
へ接近戦を仕掛ける。

戦艦のエイハブリアクターに紛れ込ませるため、スラスタを最大
で噴射。リアクターを停止、噴煙に紛れて船の上部へと流れつく。

「ほら、よっー!」

武装する船に共通することとして、それぞれの砲座は同士討ちを避
けるために射角や旋回に制限を設けている。強襲装甲艦はギャラル
ホルンの保有するハーフビーク級や旗艦クラスのスキツパージャツ
ク級と違い、分厚い弾幕は張れないようになってる。代わりとし
て、主砲がレールをスライドして直上や直下に撃てる。対空砲は左右
上下に二つの四門。計八門を備えている

今回はすでに潰した上部対空砲の一つを大型クローで串刺しにし
て止める。

『モビルスーツに取りつかれました!』

『対空砲! 何やってんだ!? 撃ち落とせ!!』

『射角が取れません! 各砲座の陰に隠れてます!』

『なら振り落とせッ』

思ったよりも冷静らしい。ならばと推進部に大型クローを向ける。

ミサイルを発射したような音とともにクローは青い炎を吹き出す、艦船クラスのエイハブスラスターの一つを潰した。

すると、振り払おうと速度を上げていたことが災いし、船体のバランスが崩壊、質量と速度があり過ぎるため迎撃にも力を入れられず、激しい挙動を全力で制御しつつ離れていった。

「もう二度と帰ってくんじゃねえぞー」

致命傷には至らないだろう。中身はミキサーにかけられたような酷い状態にあるかもしれないけど。

戦闘中でもあるし、他の奴の援護向かおうか。

「さて……オーガスは——!!」

酷い悪寒が背筋を駆け走る。直感でスラスターを吹かし、コクピット守るように大型クローを盾にする。

刹那、モビルスーツぐらいの何かが俺の居た位置を通過していった。それだけでは飽き足らず、火星の地表に向かっていたのを急上昇で戻ってくる。

「この速度……シユヴァルベの特務仕様か!?!」

リッタータイプを除けば、超高性能のシユヴァルベ・グレイズ。ただでさえ推力や反応速度、追従性を強化したせいでエース級が運用する。いわば、ギャラルホルンのフラッグ機。

特務仕様はそんなシュヴァルベに追加ブースターと簡易の脚部変形機構を備えた――

「シュヴァルベ・リッター!」

『ほう、我が一撃を交わすか!』

「女の声?」

ギャラルホルンで有名な女性士官と言えば、地球外縁軌道統制統合艦隊ブリーイドのカルタ・イシユ。アリアンロッドのジュリエッタ・ジュリス。あとは――

『我が名はイーリス! イーリス・ステンジャ! 愚弟の不始末をつけに参上し仕った! いぎ、覚悟ツ!!』

これは火星から旅立つのもマズイかもしれない。
俺は援護を諦めて、眼前の女騎士と対峙した。

火星衛星軌道会戦　　く逆襲のギャラルホルンく（解説付き）

気に入らない人の言っていたモビルスーツとは違う敵が出てきた。速度、反応、対応力、追撃。そのどれもが近接されたグレイズを超える高さだ。

「チツ……結構、正確だな」

相手にしたグレイズと微妙に違う青色。右手にデカイ角みたいなものを取り付けた紫色。連携が取れていてやり辛い。

キャノン——後で聞いたら滑空砲とか言ってた——で狙うにも、紫色にマガジンを撃たれて爆散。昭弘が投げしてくれたメイスで狙う。

『俺のシュヴァルベに追いつくか!!?』

「これじゃ無理か……!」

速度は互角だけど、叩きつけるときにバランスを崩しそうだ。パイランカーもこの距離じゃ避けられる。

けど、こっちは動き方で勝ってる。やりようは——

「ある……!」

『速度が互角う！　なのに接近戦に持ち込まれるということは！　俺が！　遅いということかあッ!!』

「捕まえたッ!」

『その声!?　マクギリス!』

『勘のいい……そしてあの動き……阿頼耶識か』
『それだけじゃない』

チツ……合流された。上手く誘導されたな。

『あの畑の奴だ。宇宙ネズミめ』

ネズミネズミうるさいな。

『ガエリオ。その言い方はやめろ』

『ヒゲ付きだぞ？ 自分の体に機械を埋め込むなど……人のすることではない。そんな奴は人間ですらないッ』

『それでもしなければ生きていけない。それが火星であり、今の世界だ』

『だがな!?!』

ぺちやくちやうるさい。死ね………!!

『つく………大人しくしていればいいものを!!』

『この話はあとだ。今は彼を止めよう』

『言われずともそうするさ!』

少し苛ついているんだ。今度こそ仕留めてやる………!!

☆☆☆
—————
☆☆☆

「速度を上げろ！ 振り切れ!!」

「ダメだよ！ 高度を下げた分、速度も落ちてるし、何より被弾個所を庇いながらなんだよ!?!」

「くそつたれ！ マルバの野郎、モビルワーカーの整備どころか船の整備までケチってやがったのかよ!!」

ハーフビーク級に上を取られ、俺たちは火星の衛星軌道をひたすら走り続けるしかなかった。

それもこれも被弾した箇所が冗談にならないぐらいの被害が出ているせいだ。つまり、ウエイストのせいだ！

「ミカは?」

「ずっと後ろ！ モニターには出せないよ!!」

「手元のほうに回してくれ。ウエイストはどうした？ ケジメをつけさせなきゃ気が済まねえ！」

「待つて——三日月のもつと後方で交戦中。これは……早すぎる!?! 船と同じ速度が出てる!」

使い方なんざロクに知らねえぞ、こんなの！ えつと……これか！
最大望遠、二対一と後ろでジグザグにやりあってるのがウエイスト
だな!?

昭弘はどうした？

「外で予備の滑空砲で応戦してる。けど、そんなに当たってない！」

「資源衛星接近！ このままじゃぶつかるぞ?!」

「回避したらせつかく上げた速度が台無しになる！」

「じゃあどうすんだよ!?!」

考えろ！ 考えるんだ、オルガ・イツカ！ この仕事を完遂して、
真つ当に商売して生きていけるようにする大事な一歩だろ!! 手は
ないか？ 何か……

「じゃあなんだ？ 衛星をアイツにぶつけるか?! 質量差でそんなこ
とできないだろ。逆にこつちが振り回されちまう!!」

「！ 待て！ チャド、今なんて言った?！」

「え、いや……衛星をぶつけるのかって……」

「……………ダンテ！ アンカーは打てるな?！」

「打てるけどよ。ギャラルホルンに向かって打つのか？ 撃ち落とされるだけだ」

そうじゃねえ。俺の考えが成功すれば——イケる！

「衛星に打ち込むんだ。衛星と船の質量差でスイングさせて、そのまま切り返す。安定したら全速で逃げるんだ」

「……………確かにできる。けど……………三日月はどうするのさ?！」

「ミカなら大丈夫だ。最悪、ウェイストの野郎に回収してもらえばいい」

「——やってみよう」

ビスケットも腹をくくつたみたいだな。準備しろ！

「「「了解!」」」

☆☆☆
—————
☆☆☆

私は今……猛烈に滾っているッ！

「はっはっは！ 実に巧いじゃないか、**貴様!!**」

『こんなん聞いてないぞ?! なんて戦^{ブリュンヒルド}乙女が火星くんだりまで来て

いる!？」

この赤いモビルスーツのパイロットのせいだ！ この玄人好みの戦い方ア！ 最小限の姿勢制御で我が突撃をいなし、すれ違いざまにコクピットを狙うだけの技量と容赦のなさ!!

何より勇ましいツツ!!

「愚弟の顔を見にやってきただけのこと！ まさか死んでしまうとは思わなかったが……情けない！」

『家族に言う言葉かよ!!』

「我が家系に弱者を黜って悦に浸る愚者など不要ツ!! 死んでなくとも、私自らが引導を渡してくれよう!!」

『この戦^{ウォーモンガー}狂いがあツ!』

「誉め言葉と受け取ろう！」

推力の差で常に間合いが開くが、この機体構成の都合上、自らを質量弾として突撃することこそモビルスーツを一撃で仕留められる手段だ。

「自ら来るか！ 面白い!!」

赤いモビルスーツのパイロットめ。思い切りのいいことをする。軟弱者のオーリスに詰めの垢でも煎じてやりたかった。

しかし――

「単なる突撃？ カウンターか？」

如何にナノラミネートやレアアロイで構築されていようと、この相對速度と質量を腕のフレームで抑えきれはるはずもない。何か仕掛けがあ――!

「なんと!？」

『外したか……!』

「なんたる胆力!」

自らを盾にして右の杭を隠すか。これ見よがしに左を構えていたから、システムの予測に従えば危うかった。

しかし、この相手に正攻法は………作戦宙域からも離れすぎたか。

「ならば……!」

『変形解いて、殴り合いか!? なめんなよ!』

「仕切り直しだ!」

『がッ——ッ?!——』

整備班泣かせのキックだ。純粋な人型形態はこういったAMBACとスラスターを利用した急制動を可能とする。

「今の一撃、申し分なし。そのまま串刺しにして強襲装甲艦に張り付けにしてやろう!」

咄嗟の判断で制動をかけたのは評価に値する。悲しいかな、完全に衝撃を殺しきれなかったようだ。

近年稀にみる強者との戦いの余韻を感じ入っていると、赤いモビルスーツはすぐ目の前にいた。

「さくらばだ。名も知らぬパイロット。貴殿のことは死んだあとに我が魂に刻もうッ」

——ランスがコクピットを突き刺す瞬間……私は言いえぬ悪寒に見舞われた。

悪寒から逃れるため左右へと揺れ動くが——

「くっ………!!」

『おや、避けたのかい？ 仕留めたと思ったんだけどね』
「何奴か!? 戦いに横やりを入れるなど………!!」

大口径の火砲が私を的確に追い詰めていく。あのまま進み続けていれば背部のスラスタークが増設のプロペラントに直撃し、撃墜されるどころだった。

私は戦いの邪魔をした下手人へ騎士の鉄槌を下そうと射点に向き直る。

「なっ?! その機体、その色!!」

『アタシのこと、ギャラルホルンのアンタが知ってるのかい？ そいつは光栄だね』

圏外圏の最大勢力、テイワズが独自に開発したテイワズフレームの機体。そして同型機では決して被ることのないパーソナルカラー!

「圏外圏一のモバイルスーツ乗り、ルージユのアミダ!!」

『お褒めに預かり光栄さね。お礼に遊んでやろうじゃないか!』

「なんたる僥倖か!! 望むところ!」



「ラフタ。レッドを回収しな。ついでにモバイルスーツもだ」

『了解、姐さん!』

「アジ―はそのままハンマーヘッドの直掩につきな。名瀬にもレッドがやられたって連絡を入れておくれ」

『了解。お気をつけて』

「誰に物言ってるんだい……!」

強がってみたものの、目の前のグレイズもどきから来る強者の気迫を前に舌を舐める。ルージユのアミダ。sの由来となった真紅のルージユが妖しく光る。

「――来ないのかい?」

『私は私用で来ている。職務中ならいざ知らず、彼のような負傷者を手にかけるなどできようか』

強いうえに礼儀も兼ね備えている。何よりも自分と同じ女性パイロットだ。ギャラルホルンでは相当肩身が狭いだろうに。

『氣遣い無用!』

「あは!・ そいつはすまないねえツ!!!」

わずかな間を哀れみの感情を浮かべていると感じたか、威勢のいい声で否定する。こういう、サバサバとした奴は男女問わずに好ましい。どこぞのケツアゴに見習わせたいくらいだ。

グレイズもどきがイカレた加速をするが真つすぐ突撃はさせない。滑空砲を捨て、腰にマウントしていたライフルを頭部を中心に撃ちこむ。

『くう……!』

「その動きはさつき見たよ。機動戦でかかってきな!」

『言われずとも――』

脚部の収納を解除し、それを振り出すように行うことであたかも目の前から消える錯覚を覚えさせる。下から来る！

『そうッ、しようッ!!』

「そこなくつちゃ！」

顎を狙うように突き出されるランスをバク転の要領で回避。同時に足でランスを蹴り上げ、バランスを崩したところをチョッパで叩く。

だが、相手もそれを予測していたようで、隠し持っていたであろうサブマシンガンでチョッパの軌道をずらされる。幾度も交差するようにスラストターの光は灯り続ける。

高速戦闘の中、相手の得物をいなすように打ち払い、受け流し。ライフルとマシンガンで牽制しつつ、推進剤のありそうな部分を集中して狙っていく。

「やるじゃないか」

『そちらこそ』

僅か数十秒の戦いで、あたしのパイロットスーツ中は汗まみれになっている。

これはレッドじゃ無理だ。あたしと同格。それも女でいたなんて驚きだ。

『姐さん!』

「回収したかい？」

『胸部装甲がひしゃげてる！ハンマーヘッドに連れてくよ!!』
「ッ、頼んだよ！」

さて。こっちは足で劣る機体でアレを止めなきやいけないわけだが………奴さん、ホントに惜しいね。

『重ねて言うが負傷者は襲わん。何よりも彼が生き残るのであれば、さらに強くなれるだろう』

「敵に塩を送るのかい」

『甘味と強者との戦いこそ我が至福。いざとなれば、ギャラルホルンに紹介状をたしなめても構わない。それほどに………佳よい男だ』

——あの子、厄介な女に目を付けられちゃったね。恋愛感情じゃなくて闘争心むき出しの女とは……。

「運が悪いんだか良いんだか」

『これでも淑女の教育は受けている——軟弱者には拳が飛ぶがな!!』

「胸張って言うことじゃないだろう。全く……」

なんかシラケちゃったね。戦う気分でもない。

『そこでだ。ここで終わりとしようではないか』

「? 戦いが好きじゃないのかい」

『この機体は燃費が悪くてな。正直、火星支部に到着する余裕もない』

「——まあいいさ。あの子が殺されてなけりゃいいさね」

『御母堂であつたか?』

「ちよつと面倒見ただけだよ。あたしたちにとつちや、デカイ子供さ」

——願わくば、彼が再び立ち上がることを祈る。さらば!

なんて言い残して、遠くに見えた家紋付きのビスコ—級に飛んでいっっちゃった。

『撤退したのか?』

「名瀬」

ひと段落したと思ったのか、名瀬が通信を入れてきた。もちろん、と答え、どんだけ気風のいい女だったかを説く。そりゃあ凄いと笑う名瀬だが、表情を改めた。

「……………ダメだった、のかい？」

『いや。肋や内臓をやった程度だ。それよりも説教が先だ』

「——ああ。そういうええばそうだったね」

『借金する位ならうちテイワズに来いとあれほと言ったのに……………全く、誰に似たのやら』

思わず吹き出してしまったのは悪くないはずだ。マクマードのオヤジさんに迷惑はかけられないって意固地になってる名瀬とそっくりなんだから。

理由に気づいたのか、帽子を深くかぶってむくれてる愛しの旦那を愛でてやろう。

船で、久々の損傷に慌てふためく名瀬をしばらくからかうのはご愛敬ってね。

☆☆☆
—————
☆☆☆

資源採掘衛星にアンカーを打ち込んで、質量差と遠心力を活かしたターンをする。

クッキーとクラッカーと一緒に見た子供向けのアニメ見たいな展開だと俺は思った。

オルガはこの作戦が上手くいくと思っっている。俺もオルガの考えた作戦ぐらいしかとる道が無いと思っっている。

「アンカー！ 抜けねえぞ!!」

——現実には俺たちに残酷なようだ。自切するにしてもそのタイミングはシビアだ。ギャラルホルンの船と正面を向き合う形でない地球には行けない。大回りすればするほど、案内役もないこちらが押しつぶされていくだけだ。

大人しく加速するのを待って、ウェイストさんと三日月に援護してもらった方がよかった。

そう批判するだけなら簡単だ。けど、俺は言わなかった。あの時はこの作戦がいいかもしれないと思っただからだ。

「砲撃でどうにかできないのか!？」

「今撃っても、そのまま通り過ぎるだけだ。スイング・バイを考えるなら……」

何時の間に造っていたのだろう、ダンテが簡単な図解を正面に写す。

「ちようど真裏に行つて、曲がるときに撃てなきゃ話にならない」

「じゃあ衛星ごと砕くとか……」

「時間どころか火力が足りない。メテオブレイカーみたいな破碎装備が必要だ!」

仮に持っていたとしても、この衛星を破壊したら火星にいられなくなる。損害賠償ものであり、何より破碎した破片は隕石になって火星全土に降り注ぐだろう。

「根元から切るのは？」

「爆破用のボルトの点検が済んでない。使われてない期間からすると怪しい」

「——モビルワーカーで周りを砕く」

「おい……正気で言ってるのか?!」

こんな高速でしかも砲撃が行われている最中、船外活動をするだなんて！

「もちろん俺が行く」

「オルガ!？」

「手前だけ、安全な場所で指示してるなんざ筋が通らねえ！俺は团长だ。俺が——」

「馬鹿野郎。何言ってるやがる」

「ユージン」

俺と同じくらい、冷静にもものを見ているユージンがオルガを止めた。

「お前は团长だ。頭が死んじまえば俺たちは今度こそ終わりだ。違いか?」

「だけどよ……」

「お前だけにカッケエ真似はさせねえって言ってんだ。たまには俺らにも背負わせろよ!？」

「……頼んだぞ。副团长」

「！任せとけ!!」

——本当にいいのだろうか？

(綱渡りすぎる。今回は上手くいっても次はそうなるとは限らない。

けど……)

三日月は交戦中。ウエイストさんは——シグナルロスト？

「ウエイストさんのシグナルがロスト！」

「なんだと!?! 墜とされたのか?」

「わからない。けど、知らないエイハブ反応を確認。戦域を離れて行ってる。……もしかして——」

「なんだそりゃ? まさか見捨てて逃げたんじゃないのか?」

——俺たちはまた大人に見捨てられたらしいな。

オルガの皮肉が吐き捨てるように吐かれ、言葉に籠められたその失望と諦観に俺たちは言葉を返せなかった。

今後の話をしようじゃないか（解説付き）

——火星衛星軌道会戦。後世の歴史書に記されたこの戦いを歴史家たちは時代の転換点だと評価した。

歴史宗教を専攻するものはオルガ・イツカ率いる鉄華団とその仲間たちがクーデリアを聖女と見出したと唱え、現実主義者は後に明かされるレッド・ウエイストの交友関係から、彼がすべてを仕組んだ張本人だと主張する。

この論争は現実主義側の論調こそ、理に適うものであるがそうであつたとしても鉄華団という当時弱小としか言いようのない少年兵らが数々の戦役に参戦し、多大な功績を上げ続けたことを神がかり的なものがあつたという主張も否定できないでいる——



よう、俺は名瀬、名瀬・タービンってんだ。今は俺の船のメイカ
ルベッドルームにいる。その理由ってのが……。

「俺が何で怒っているかわかってるな？」

『い、いやね？ 俺も設備投資があつて……』

「新品の船が買えるぐらいの借金をする奴があるか!? なんでこんなにあるんだ！」

このバカタレを説教しに来てるんだ。肋が4本、内蔵の損傷。調べてみたら栄養失調気味と、俺とアミダ——ああ、アミダは俺の第一夫人だ——説教半日コースを考えた。

『あー……………その……………ヒゲ付きのヒューマンデブリたちを拾いまして……………』

血の気のない顔をしゃがって。全く……………。

「商売に情を混ぜ込むなって言っただろう？ それにお前の稼ぎなら、あのガキども養うなんて簡単だろ」

『モビルスーツや船の整備に設備の増設をしたんです。そしたらビスコー級を大きく改造する羽目になりました』

「ガキは関係ないのか？」

『それもありませんよ。ドルポンドさんに嫌味を言われながら、当座の活動資金を借り入れてます』

聞けば、あのブルワーズの手下だったらしい。正しくは所有物か。火星に着いたら勝手に生きろと借りた金の大半を渡すつもりだったとかどうよ？

「傭兵なんだから体を大事にしな。若いうちからそんなだと、あとで後悔するよ」

『うえーい』

「うえいじゃない。ゲ○吐く口と○出すケツにマムをつけな」

『マムイエスマム！ おごおおお……………！』

おーおー。こいつのこの船医は腕がいいねえ。体は動けないけど、痛みは感じる程度の麻酔とか。傭兵に雇われるよりか、いい仕事先——あの感じじゃ無理か。世知辛い世の中だぜ。

『く、ふうおおお……すみません。鉄華団、赤い強襲装甲艦の連中は?』

「無理すんな。そつちならマルバの件もあったから、もう連絡は入れている。ただ、なあ……っ。」

——どうにもこうにも奴さんが勘違いをしているみたいで正直面倒なんだよなあ……。

☆☆☆
☆☆☆

「外部顧問の契約を破棄する? 急にどういふことかね」

『急にも何も、アンタらが俺らを嵌めようとしたんだろ』

「はて? ……ああ。彼のことだね」

あの強烈な個性の船医を向ハンマーヘッドこうに送る際、名瀬くんがアポを取ったみたいだ。

「マルバ・アーケイ。確かにあの船に乗っていたのは知っているね」
『騙したのを認めるってことだな?』

「騙したなんて人聞きの悪い。そもそも私はウェイスト君に金を貸しているだけの存在だ。傭兵団に所属している覚えはない」

『契約を結んだのはテメエだろう。ヤバくなったら関係ねえで済むと

思ってたんのか!？」

「じゃあ契約書にはなんて書いてあるのかね」

『ああ?』

経営のイロハってやつを教えないとダメだね、彼は。脅す、奪う、強奪するじゃあ真つ当な会社から遠く離れてしまっているよ。

「私の記憶が正しければ、署名をしたのも、必要な項目をチェックしたのもウエイスト君だったが?」

『あんな状態の奴がやった契約が有効なわけないだろうが!!』

あーあ。言っちゃったね。

「君がそう言うなら、そもそも契約なんてものは存在しなかった——
—こういう答えになるけど?」

『ツ…………ふざけんなよ。そんな言葉遊びをするつもりじゃねえ』

「詫びを入れると? どうして? なぜ? 理由は? 頭を下げて終わりにするのか? 何もかも奪う? それだけの被害が出ているのか? いったいどれなのかね」

法関係が火星で通用するとは思ってないが……………それこそ、ここで私に手を出したら地球はおろか圏外圏でも仕事は無くなるって言っているといいだろうね。クーデリア嬢もアブラウとの交渉なんてできなくなることだろう。

言い返そうとするオルガ君もやっていることは壺番組とかいう連中と変わらないのを悟っているね。

「重ねて言うが、マルバ・アーケイの件については無関係だ。私も彼もね。今回の被害はオルクス商会を選択し、そちらの裏切者を信用した君の落ち度だ」

『くっ……………』

「案内役もない。ツテになる人物は自分たちで解雇する。で、どうするのかね？ あそこのタービンスに依頼するかね？」

実のところ、彼らはこちらに損害賠償なんて求めていないだろう。先の戦闘でグレイズも何機か回収していたみたいだし、新品のリアクターは高く売れる。歳星の整備主任のことなんて知らないだろうから、モビルスーツを寄せとせと言っても経営を圧迫するだけ。それ以前に火星で手に入れたモビルスーツだって売るツテがない。

CGS時代の業者にモビルスーツを扱えるところはない。

「大方、私に責任を取らせてタービンス——ひいてはティワズへの紹介を強請^{ゆす}ろうとした」

「……………」

「そんなところだろう」

紹介してもいいが君たちはその価値を示せるのかね？



ケジメをつけさせる、とオルガは団員たちに告げた。

オルクス商会の案内なしにどうやって地球までギャラルホルンの監視を切り抜けていくか？ ビスケットを筆頭とした幹部連中と相談した結果、ウエイストの失態を逆手にとって、タービンズ——さらには後ろのテイワズへの仲介を目論んだ。

だが結果は満足どころか、自分たちが何に対して喧嘩を吹っ掛けたのかを理解させられた。

聞けば、ウエイストは先ほどの戦闘で負傷しメデイカルベッドの世話になっていろいろらしい。自分たちは一度も使ったことがない設備だが、重傷の時に使うというイメージがあった。

「ウエイストさん。負傷してたんだね」

「やつちまった。一方的に喧嘩売って、窘められて、もう一度話し合いをしようかだなんてまるでガキ扱いだ」

「仕方ねえよオルガ。あの人、阿頼耶識なんてもってないんだぜ？」

「あー……確かに拍子抜けだよな。そう思わないか、チャド」

「だな。なんつーか、三日月のほうがずっと強いよな。二対一でもほとんど無傷だったし」

グレイズとは違う、明らかに手練れを同時に二機も相手取り、その前に何機ものグレイズと立ち回って戻ってきた三日月。

三日月よりも少ない数と船を一隻、最終的にはサシで敗北し重傷を負ったウエイスト。鉄華団の彼に対する評価は微妙なものになっていた。

——壱番組よりは使えるが、自分たちと比べると使えないんじゃないか？——

鉄華団の中ではこのような空気が流れ始めている。特に年少組に多く、タカキが諫めようとしてもどうにもできない状態になっている。

もつと言えば、ウエイストのモバイルスーツを団長たちが使ったほうがいいんじゃないか？ なんて声もちらほらだ。

「…………ミカはどう思う?」

「さあ? まあ、あの感じだといなくても別にいいかなって思う。昭弘もいるし」

「あれ、商品なんだけどなあ」

「……………」

「? どうした、昭弘」

三日月を除けば、唯一のモビルスーツ操縦経験者である昭弘は腕を組んでいた。何かを言いたそうだが、しかしどうするべきかと悩んでいる…………そんな表情だった。

「俺は…………ウエイストさんの腕を信じたいと思う」

「はあ? だって、アイツは負けたんだぜ?」

「確かに負けたみたいだが俺たちが相手になっていたのとは毛色が違う相手だった」

拙い砲撃戦もどきの合間だったために、双方の相手をほんの少ししか見ていないが三日月の相手になっていたやつよりも遥かに速い相手だったと呟いた。

「振り落とされないように捕まっていたときは、互角の戦闘だったと思う。次に見たときは別の機体が近くを通っていたから、その時にはやられていたんだろう」

「タービンスのパイロットか」

「多分な。さつきまで俺がその敵と戦ってどれぐらいもつかも考えたんだが…………阿頼耶識があっても、無理だったと思う」

ざわつく周囲にオルガは手で押さえ、昭弘に続きを促した。三日月も興味深そうに耳を傾けている。

「兎に角、速かった。三日月が相手にしていたのの倍以上だと思う」
「けど、サシの勝負だろ？ 三日月は二対一だぜ」
「ああ。正直、俺の評価が違うのは昌弘——弟を連れてきてくれたのも入ってるかもな」

その言葉でオルガは思い出した。ヒューマンデブリだろうが、ヒゲ付きだろうが鉄華団の団員は大切な仲間である。自分がそう掲げたのだ。

団員の家族を助けたってことは恩があるということだ。恩を仇で返すわけにはいかない。負けたとしても、昭弘の見たモバイルスーツは終ぞこちらに合流しなかった。命を懸けて食い止めてくれたのだ。

「——詫びを入れるのはこっちな。どうかしてたぜ」

「オルガ……」

「もっと視点を持たなきゃならねえ。けど俺たちの後ろには火星の間たちがいる。共倒れだけは何としても避けなきゃならない」

意を決したように、オルガはビスコー級グリコに連絡を入れた。

☆☆☆
—————
☆☆☆

タービンの強襲装甲艦は艦首にラムヘッドを装備している。

ヘッド自体に船と同レベルのスラスタを内蔵しており、本体側の推力と合わせて艦首突撃をする戦法を得意としている。

その姿はまるで獲物に襲い掛かるシユモクザメ——ハンマーヘッドシャークに酷似しているため、船の名前もハンマーヘッドと呼ばれた。

「説明どうも、と言いたいが誰に説明してんだ？」

『画面の向こう側のお友達。こつからは普通に地の文になる』

「時々、お前が何を考えているかわからねえな」

「メタ発言というんだよ、名瀬君」

そんなハンマーヘッドの応接室にオルガ、ビスケット、三日月、シノがイサリビから来ていた。グリコからはドルポンドとメイカルベッドルームから通信でウエイスト。タービンスから名瀬とアマダが。そして縁のある人間としてマルバ・アーケイが互いに相対する形となった。

鉄華団は応接室の調度品や雰囲気自分たちの知っているものと違うことに目の前の男とマルバがまるで違うこと感じ、マルバはオルガたちが何を考えているのかがわかるのか、不機嫌そうにしていた。

「さてと……話つてのは何だ？」

「ドルポンドさんに話したんですが、ウエイストさんの外部顧問についてです。色々思うところがありましたので、再度正式に依頼をお願いしたいと……」

「ふうん………どういう風の吹き回しだ？ 嵌められたって、思っただらろ」

「それはその……認識の違いといえますか……」

ビスケットが恐る恐ると言葉を紡いでいく。

こちらの認識不足であったこと。それに伴い、先ほどドルポンド氏に告げた解雇通告について謝罪と条件を見直した再契約を申し出た

いと。

「なるほどね。まあ、殊勝なこった」

「ウェイストさん、ドルポンドさん。本当に申し訳ねえ。どうか俺たちにもう一度チャンスをくれー!」

「私はどちらでもいいね。借金さえ返せるのならなおのことだ」

『やられたのは事実だから構わない。構わないから契約金についてドルポンドさんを別にしてお話を——』

「代わりに名瀬君を同席させるから構わないよ」

『え?』

オルガたちのぽかんとした顔がツボに入ったのか、アミダがくすくすと笑っている。それに気づいたか、顔を引き締めて言葉を続ける。

「ただ、厚かましいが条件を変えさせてほしい」

『どんな?』

「傷が治ってからでいい。ミカ——三日月と勝負してほしい」

「実力に疑問があるってことか?」

「詫びを入れに来た立場でこんなことを言うのは間違ってるってことはわかってる。けど、俺は鉄華団の団長だ。ウェイストさんは昭弘の弟を連れてきてくれた恩義がある。恩人が命の危険を冒すのは僥びねえ」

つまりは、三日月と模擬戦をして負けた場合、外部顧問としては契約するが戦力としては数えない。勝った場合は戦力として数えその分の賃金も上乘せする、と言葉を選びつつ告げた。

「……………どうする?」

『……………いいぜ。ミリー。あとどんくらいだ? ふん、あー……………麻酔を使えばイケるか? はーはー……………OKだ。そうの申し出受けよう』

「怪我が完治してからでもいいんですけど?」

『怪我してたから戦えません、てのは通じないんだよ。まあ、色々準備があるから時間はもうう』

「ふーん……………あとで文句なんて言わないよね」

『言わない。逆に怪我人だから手加減したなんて言い訳すんなよ』
「……………ふん」

売り言葉に買い言葉で、オルガとビスケットは顔を青くしている。シノは三日月が感情的になっているのを久々に見たと驚いていた。

「……………さて。お前たちの話はケリがついたわけだが……………今度はタービンズとしての話だ」

気の良さそうな年上の雰囲気を通し去り、名瀬はタービンズの頭としての雰囲気を出した。その気配。否、気迫にオルガたちは居住まいを正す。相手にのまれないよう、腹に力を入れて対峙した。

「紹介なんざ必要ないから省くぜ。マルバとの契約でお前たち鉄華団の財産を差し押さえる」

——それは唐突な自由の終わりを告げる言葉だった。

大人は汚い？　　そうでないと生き残れないんだよ

名瀬の言葉で場の空気が変化した。顕著なのはオルガとビスケット、シノで明らかに動揺していた。

「ま、待ってくれ。それは一体どういうことだ?!」

「待っても何も言葉の通りだ。そのマルバにCGSの全部を売って言われてな。代金も追々支払われる」

「CGSはもうありませんよ!!　鉄華団です!!」

「家主のいないうちに乗っ取ったんだろ？　拾ってもらった恩を忘れて家乗っ取るなんてのは不逞え話だ。違わないか？」

ようは筋の問題である。そも、火星みたいな場所でお役所仕事が必要なりと進むことはない。大方、電子上では終わったことになってるだろうが実際の手続きはまだ時間がかかるだろう。

「いかに民兵組織とはいえ、あれだけのデカさを持つと自治区の代表の承認だって必要だ」

——知らなかったのか？

デクスターもこれで大丈夫と言っていたがどうなのだろうか？

「大方、前所有者が居なくなっちゃったから、その坊主が引き継いだってのが大筋だろ？　けど、マルバはここで生きている。持ち主が生きていた以上、正式に復帰の手続きを済ませればお前たちのは無効となる」

「……………」

オルガは何もわからない状態だった。意外なところでデクスターが裏切っていたのか、単純に火星の役人どものミスなのか。今ここでマルバを消すという手段もあるが、そんなことをしたら面子を潰され

たタービンを、ひいてはテイワズを敵に回すことになる。

どうするべきか？ マルバが再びCGSを取り戻したら、自分たちは今度こそ終わりだ。いくら耄碌してたからといって、元傭兵のマルバのツテの広さはわからない。

「——と、いうのが普通のことなんだが……なあ、マルバ」

「な、なんですかい？」

「こいつら、阿頼耶識の手術してるだろ？」

「！ それは……そうでもしないと使えませんので仕方なく……」

「成功率は目を覆いたくなるぐらいだつて聞いているぜ？ 坊主。お前の船と火星にいる少年兵。どれだけ付いているんだ？」

「全員です」

「一番下は12歳ぐらいです」

それを聞いて名瀬が重いため息を吐く。明らかに不機嫌になっていて、それは後ろのアミダも同じだった。

「なあ、マルバ。俺だつて商売して、大勢の従業員——家族を抱えている」

「へ、へい。そのようで……」

「人材は女ばかりでガキだつている。鉄華場もある。けどな？ 流石にこれはやらねえよ」

「で、ですから私んところは……！」

——まあ待ちな。名瀬はマルバに落ち着けと抑える。

「商売に情は持ち込まない」

「ッ！」

「名瀬さん！」

「幸い、経費も今のところ掛かつてはいない。もとがドルポンドさんを火星まで運んだつてだけだ。経理のほうにも振り込みは待つよう

言っている」

「んな?! それじゃあ話が違うじゃないですか! 俺はどうすりやいいんです?!」

慌てふためくマルバを見て、オルガはまだこちらに分があると考えた。このままマルバを火星に帰すわけにはいかない。そうしたら壱番組の連中が戻ってくるだろうし、クーデリアの護衛の件も台無しになる。

すでにギャラルホルンも鉄華団がクーデリアを連れて行こうとしているのを気付いている。

「あとのこと考えるのはまだ早いぞ、坊主」

「ツ……………すみません」

「確認するがお前らは火事場泥棒で組織を乗っ取った。マルバは組織を見捨てて逃げた。……………違くないな?」

「はい」

「筋つてやつを大事にする俺としてはどちらも通ってねえ。盗人と裏切者だ」

会社そのものを奪った連中と、命を懸けて戦っている連中を見捨てて逃げたクズ野郎。情の話をするなら、坊主らに加勢してもイイ。けど、クズであったとしてもその会社の頭なのに変わりはない。マルバ自身もクーデリアを護衛していくなんてことは考えないだろう。第一、金と引き換えに権利から何までこっちに売り払っている。

(ちやうど火星にもデカイ拠点欲しいってオヤジが探させていたしな。どちらに転ぶにしろ、俺たちテイワズにとって悪い話はない)

後の問題として、鉄華団をどうするかだ。タービNZに入れたっていい。ギャラルホルンと大立ち回りをした根性のある少年兵たちと、そのギャラルホルンの上層部とすら交友のあるレッド——断然、欲

しいのは後者だが前者を見捨てれば俺はクズと同類になってしまう。
見方を変えれば、二つとも手に入る芽が出る。言い訳じゃあないが
ガキどもを見捨てるのは気分が悪いってのは本心だぜ？

「そこで丁度いいものがある」

ウェイストの通信端末と三日月を指さす。

「お前らの模擬戦で決着をつける」

「はああ!？」

「マジかよ……!？」

「責任重大じゃねえか」

ちらりと沈黙を保つオルガを三日月は見る。視線に気づいたオル
ガはただ頷く。

「わかった」

「ちよ、待て三日月！俺はそんなの認めな——」

「だったら、仲裁はしない。火星まで送ってけっつーんなら手前が船
に乗り込んで説き伏せて来い」

「名瀬さん!!」

「もとはと言えば、お前がばらまいた種だ」

取り付く島もない、とマルバは禿げかけた頭に脂汗を浮かべて、思
案する。

一方でオルガたちはそれほど気負いもしなかった。ミカツキのモ
ビルスーツはガンダムフレームで阿頼耶識を搭載している。ウェイ
ストのもガンダムだが、向こうには阿頼耶識が無い。楽勝とは言えな
いが勝ちも確定だ。

隠せない安堵感が彼らに漂うが名瀬は一言釘をさしておく。

「言っておくがレッドは相当強いぞ。そっちの坊主じゃあ、三七で負けるだろうな」

「本当ですか!?!」

「本当さ。何せ、あたしが直々に鍛え上げたんだからね。ましてや宇宙で戦うんじゃ、相当さ」

「……………負けたくせに?」

『相手は戦乙女だ——つて、知らないか』

「全然知らない」

ブリュンヒルド

戦乙女^アつてのは、ギャラルホルンの最精鋭である
月外縁軌道統制統合艦隊^アや地球外縁軌道統制統合艦隊^アを渡り歩く女傑だ。

弱者の淘汰を許さず海賊退治を率先して行う軍人の鑑——なんて言われているが実のところは単なる戦狂^{ウオーモンガー}いで、上官ぶん殴ったり、脅したりして前線に留まり続けようとしている奴だ。

「へえ」

『マジの専用機が与えられているぐらいだ。シュヴァルベなんてハエみたいに感じるぐらいのな』

「ふーん」

『オルガくーん? お宅の三日月君、なんかムカつくんですどイテテテテッ!!』

「すみません! ミカ! もつとなんか他にあるだろ!?!」

「別に? ただ、潰せばいいだけでしょ? 違うの?」

「そうじゃなくてだな——」

グダグダになったところで、名瀬君が話を打ち切った。正直、私としてはもう少し眺めていたかったのだが……。クーデリア嬢にも関係あるため、早々に終わらせた。

「しかし君もだいぶ甘いね」

「まあ……あんな立場だとこんぐらいしなきや成り上がれんでしょうから」

「そうだねえ。けど、随分と大盤振る舞いじゃないか？」

タービNZには女性しかいないと思われがちだが、実のところは男だつて働いている。各コロニーに存在するタービNZの支社であったり、荷物の集積所の警備や作業員としてだ。

「昔ならハーレムだー、つて考えてましたがレツドを引き込んだときにね。悪くないって思ったんですわ」

「名瀬君は一人だからね。五万人もいる従業員を相手にできるわけもない」

「ええ。入るにしてもクソみたいな連中は弾きますし、誠実な連中は案外子供をもうけてますよ」
「それは目出度いじゃないか」

ドルトカンパニーなんかと違い、どんな身分でも産休も育休も取れるというのだからホワイトを通り越したクリアパール企業ではなからうか。

「アイツらなら大丈夫でしょう。男尊女卑の毛がありますが、その辺

りはアミダヤラフタ、アジーに締め上げてもらえば済むでしょうし」

そうであっても、普通は100人近く人が増えれば負担もバカにならない。それも銃を持ったことしかないような子供が大半の連中だ。

「たとえ鉄華団が負けても、その身柄はタービンスの預かりにする。クーデリアも同様で、今後はタービンスと——なんだったかな？」

「アウトサイダーズです。外道なんてやめろって言ったんですがね」

「元の名前は思い入れがあり過ぎるのだろうね。けど、アウトサイダーズか………彼らしいじゃないか」

「ええまあ。アウトサイ^外サイ^れダー^者の集まりとか。類は友を呼ぶんですかね」

「敵も呼んでいるけどね」

「それは言わんでください。戦乙女に目を付けられるなんて、女運の欠片もない」

確かに女運もないね。けど、鉄華団の彼らはもっと運がないけど。

「模擬戦が楽しみだね、名瀬君♪」



はじめまして。自分はアイン、アイン・ダルトンと申します。今、自分は恩師の克蘭ク二尉——じゃなかった。克蘭クさんと一緒にアウトサイダーズという傭兵会社に席を置いています。

「何してるんですか、アインさん」

「これをしておけて、社長ウエイストから言われてね。あ、デルマ君。そのケーブル、閉めるとパネルに干渉するよ」

「やべっ。ありがとっす！」

どういたしまして。ええっと、現在ビスコー級グリコのデツキでは、急ピッチで作業が進めています。なんでも社長が鉄華団の彼——三日月・オーガスと模擬戦をするとのこと。

先の戦闘であの戦乙女と交戦した社長——え？ ウエイストでいい？ 了解しました——ウエイストがそれなりの重傷を受け、コクピットの装甲がひしゃげてしまったのだ。

「克蘭クさん！ 次、インパクト貸してください！」

「わかった。……よし！ ビトー！ 投げるぞ!!」

「はい！ つと、これ終わったらスラストターの整備に行きます!!」

「そうだな。私も手伝うからレクチャーしよう」

「ありがとっごさいまーす！」

流石です、克蘭クさん。もう、子どもたちとあんなに仲良く。やはり貴方はギャラルホルンの正義を！ 清廉なる大人を体現する人です！

「——あのー！」

「！ 失礼！ えっと、アストーン君？ 何かな？」

「メシです」

「ああ、うん。ありがとう。克蘭クさん！ 食事の時間ですツ!!」

「今の作業がひと段落したら皆、休憩にしよう！ あともうひと踏み張りだ！」

「うーっす!!」

くアウトサイダーズはホワイトな職場と福利厚生を重視するアツトホームなPMCです。お仕事も簡単！ ただ鉄砲をもって戦場を駆け巡るなんて古い古い。一人一台の棺お——モビルワーカーで守られながら職務を遂行できますく

くさあ、皆も一緒にレッツ・ロツケンロオオオオオオール!!!く

何か妙な電波を受信したがなんだろうか？

「アインさんとおやつさんって、どうしてモビルスーツの整備ができませんんだ？」

「ペドロ君。おやつさんじゃなくて、克蘭クさんだ」

「構わんよ。出来るといふより、出来るようになっただな」

「？ ギャラルホルンなんだろう。俺らだって知らないけど、整備する人とかいるんじゃないの？」

「昌弘君。それは俺が火星と地球のハーフだったからだ」

ハーフだからなんだってんだ？ デルマ君の言葉に克蘭クさんが言葉を濁しながら答える。

「大人の事情、と言うやつだ」

「ふーん。じゃあさ？　こことギャラルホルン、どっちがいい？」

「おい、デルマ！」

「いや……………そうだな。俺は……………まだなんとも言えんな」

「克蘭クさん？」

確かに清廉で正義漢の克蘭クさんにはギャラルホルンが相応しいと思う。しかし今のギャラルホルンに克蘭クさんのような人の居場所はないだろう。だと言うのに何故だろうか？

「社長が今後何をするのか。全てはこれにかかっているだろう。まあ、しかしだ。昔より今のほうが気分はいい」

「……………俺はそんな先のことなんて考えられない」

「アストン……………」

「ブルワーズに居た頃は毎日が地獄だった。何もしてなくても殴られて、ミスをしたら殴られて、気分で殴られた。死んだ仲間もいっぱいいた。アイツらはそれを俺たちに捨てさせる。身包みを剥いで、次のデブりに着させる」

「もういい」

「親の顔なんて覚えてないし、アイツらに買われてからはずっと殺すか殺されるかの日々だったんだ」

「もういいんだ。アストン」

——克蘭クさんは気づいているんだろうか。アストン君の目に光が伴っていないことを。

「嫌なことを思い出させた。すまない」

「……………俺さ。アンタたちは変われるって思うんだ」

「なに？」

「俺は……………俺たちはヒューマンデブりで。アンタたちは人間だ。ヒゲだって付いてない。だから、変われる」

「アストン！ それ以上は俺も看過できない!!」

「アイン！」

「俺たちは……………ずっと……………」

——目をつむると見えるし聞こえる。なんでって。どうして生きてるって。

どうして?..どうして?..どうして?..どうして?..どうして?..どうして?

?..どうして?..

どうして?..どうして?..どうして?..どうして?..どうして?..どうして?

?..どうして?..

どうして?..どうして?..どうして?..どうして?..どうして?..どうして?

?..どうして?..

どうして?..どうして?..どうして?..どうして?..どうして?..どうして?

?..どうして?..

「落ち着きなさい」

「俺は…………おれは……………」

「大丈夫だ。もう大丈夫だ」

うつ、うとうとうう…ごめん。みんなごめん！ ごめんなさい……………!

——クラックさん。

——ああ。俺たちは……………あまりに無知で、幸せで——
無力な大人だな。

君たちに正しいケレンを教えてあげよう（解説付き）

えっと、〃鉄華団が解散するというのは本当ですか？〃——違いますね。ここは〃本当なのですか?!〃のほうが臨場感があつて？
フミタン？ 今台本を——

「んんっ。——三日月は大丈夫なのですか？ 団長さん」

「いや、俺らからしたらアンタのほうが大丈夫なのか？」

「だって第一話からようやくの再登場なんですよ!?! 私、鉄血のオルフェンズのヒロイン枠でしょう!?!」

「メタい話はヤメロー!!」

くオルガとクーデリアが楽屋裏通路でお話し中く

「三日月は大丈夫なのですか、 団長さん」

「……………」

「団長さん？」

「お、おう！ ミカなら大丈夫だ（学のある連中つてのは皆こうなのか？）。ウエイストがどんなに強いと言つてもミカは俺を裏切らない。俺もミカを裏切らない」

「そうですね——くっ、鎮まりなさい私の右手。リアルのカップリングは諸刃の剣よッ！（ボソッ）」

「やっぱ碌でもないこと考えてないかアンタは!?!」

くオルガ、クーデリアを説教中く

「すみませんでした。久々で——」

「お嬢さん？」

「ええ！ 大丈夫ですう!!？」

「……………はあ……………なんで戦いが始まる前にこんなに疲れるんだ」

だって、嬉しかったんだもの。出番が欲しかったんだもの——by
クーデリア

「いやー。面白いものが見れた見れた♪」

「アンタもさも当然のようにここにいるな？ あっち側だろ？」

エンマルク・ドルポンド氏……………ギヤラルホルン、ひいては経済圏も圏外圏ですら無視できない存在。なぜ、イサリビにいたのでしょうか？

「向こうも面白そうだけど、こっちのほうがもっと楽しそうだと思うてね」

「俺らにとつちや楽しくもねえよ」

「人生楽しまなきや損だ。逆境を如何に楽しむか？ それが自分を豊かに方法だよ」

逆境を楽しむ……………私には理解できそうにないですね。誰も欠けることのなく、無事に旅が終わることが望ましいです。

「そんな甘い事、もう出来なくなると思うけどね（ぼそり）」

「なにか？」

「いいや、なんでもないさ」

ここが私の分岐点だったのだと思います。

火星に戻り、ただ夢を見る少女であり続け、有力者の妻となって

バーンスタインの家に尽くす平凡な人生。

地球に行き、立ち寄る先々で革命の乙女として現実と冷酷さを知り、上に立つものとして生きることの……。

あの日、あの時、あの場所が私の未来を決める一瞬となったのです。

☆☆☆
—————
☆☆☆

よう、俺は鉄華団に居残った大人組の一人。ナデイ・雪之丞・カツサパってもんだ。整備をされていて、実質的に整備班の責任者をやっている。ちなみにモビルスーツよりモビルワーカーの整備が専門だ。忘れんなよ？

「すまねえ、三日月。バルバトスの調整は完全にじゃねえ。装甲の補修と補強、鹵獲したスラスタは着けたがもろもろの調整も不完全だ」

「大丈夫だよおやつさん。あとは俺がなんとかするから」

「本当なら完璧に仕上げなきゃならねえのによ」

「気にしなくていいよ。アイツに負けるつもりなんてないし、相手は怪我人だからさ」

そうは言うがモビルスーツに乗り続けて何年の傭兵。それも色々と未知数なうえにタービンスからの信頼も厚いと来やがる。阿頼耶識があるといっても、整備不良気味の骨董品じゃ心配になる。

何よりもソフトウエアの構築が追い付いていないから、青いグレイズのスラスターがメインのと同期できていない。阿頼耶識がどこまで対応するかがキモだな。

「いいか。怪我なんてするんじゃないやねえぞ？ 機械はぶつ壊れようと直せるが人間は壊れた治せないからな！」

「わかったよ」

あいつはオルガの命令だったら躊躇なく実行しやがる。まるで自分をモノか鉄砲玉みたいに扱いやがる。

「…………死ぬんじゃないやねえぞ。ようやく明日が開きかけてんだからよ」

「おやっさん！ エアー抜きますよ!!？」

「すぐに行く!!」

頼むぜ、ウェイストさんよお。戦争屋にこう願うのは何だが、ガキ共を殺さないでくれよな。

『三日月・オーガス、バルバトス発進するよ』

☆☆☆
—————
☆☆☆

「アレをどう思う、アイン」

「宇宙仕様のスラスターを増設してますね。出力に対しての慣性制御ができているかがわかりませんが」

「同期ができているかもわからんな」

「聞いたところ、鉄華団には専門のメカニックが居ないそうです。火星衛星軌道では、事前に我々がセッティングしていました」

そんなことを克蘭クさんとアインさんがブリッジで話している。あ、俺はビトーってんだ。社長に最初にボコられてたけど、宇宙での経験は長いんだぜ。

「阿頼耶識を使つてれば簡単だぜ？」

「そうなのか？」

「イメージは思いつき前に進もうとするイメージかな。グツとスラスターがある位置を意識するのもあるけど」

「凄まじいな。バランスは、生身でとるような感じか」

「うん」

ペドロがそんな調子で俺たちの操縦のことを話している。ブルワーズじゃ訓練なんて受けていない。最初にシミュレーターに乗せられて使い物になればパイロット。使えなければ陸戦部隊にされる。時々、陸戦もやっていたけど。

「そうなると社長は不利だ」

「なんでだよ？ 何年も乗っていたんだろ？ クダル——ブルワーズモビルスーツのMS部隊の隊長なんだけど、俺らより強かったぜ？」

「……恐らくだが本来だと君らのほうが強かったのだと思う」

クダルより強い？ 俺たちが？ ……想像できないな。

「ミリアムから話は聞いたが君たちは過度の栄養失調による、身体能力低下が酷かったそうだ。そして暴行や普段の生活で縛り付け、犯行

の気が起きないように洗脳していたのだろう」
「洗脳？ ……よくわからないけど、クダルやブルックに逆らおうって気は起きなかった、よな？」

起きなかったな。団長のブルックにも殴られてたし、逆らえば飯抜きと折檻が待っていた。

「だからこそ解せんのだ。生き残るために死に物狂いな君たちに……社長はどうやって勝った？」

「どうだったかな？ ……あ、そういえば——」

——ペドロとビトー、アストン、昌弘、デルマも俺たち五人が集まったとき、急に動きが変わったと思う。



おやっさんの言っていた意味が分かった気がする。あ、俺、三日月・オーガス。よろしく。

——これ、毎回やらなきやダメなの？ わかりづらい？ ふーん、あっそ。

『ミカ。ウェイストは目標宙域にいる。場所はわかるな』
「うん。アステロイド、だったっけ？ 石ころがいっぱいあるところ」

『そうだ。何度も言うが、絶対に殺すな。火星でやってた模擬戦と同じ気持ちでやってくれ』

「了解」

降参か、戦闘不能の判定を受けたら終了。致命傷を与えるような攻撃は禁ずる。面倒くさいな。

「まあ、大丈夫だろ」

『ミカ』

「何？ オルガ」

『——頼んだぞ』

「任せて。——俺たちの前に立ちはだかる奴は何が何でも蹴散らしてくから」

そうだ。オルガが連れて行ってくれる。ここじゃないどこか。俺たちが——鉄華団の皆がたどり着く場所へ。

だから、こんな所で立ち止まっているわけにはいかない。

『——来たか』

赤いモビルスーツ。バルバトスと同じ、目が二つに角が二本。耳と頭の天辺あたりに板みたいなのがついている。

よく見たこととはなかったけど、二の腕あたりに三段ぐらいフレームが束ねられている。腕には尖ったデカイ杭が一つずつ。ビスケツトやユージンの話だと、ワイヤー繋がっていて射出できるらしい。

「ごめん」

『最終確認のいい時間になった。そっちは……色々くつつけたみたいだな』

「アンタもね」

背中に桜農場のトウモロコシみたいなやつが二つ付いている。俺のみためにスピードを上げるのかな。

『三日月』

「チャド？ どうしたの？」

『ドルポンドさんもこっちで見ているんだが、アドバイスをしてやれってな』

「あっち側じゃないの？」

『ハンデ、だそうだ。使えるものは何でも利用しろって、オルガも言うてる』

「そう。じゃあお願い」

『まず、あの背中の追加ブラスターはバルバトスに付けたやつより出力は上だと思う。けど、近接装備でもないものにナノラミネートは意味はないから、手持ちの120mmライフルで狙ってみてくれ。数を撃てば当たるかもしれない。それと——』

阿頼耶識を利用して、変則軌道で接近。メイスで一撃入れて終わり………意味ある？

『俺だって出番欲しいんだよ！ 誰も俺の名前を………そんな目で見るのはヤメロー!!』

——みんな、アイツと関わってから変な感じになったな。

『三日月！ タービンスから試合開始の合図が出る。残り十秒！』

「ビスケット？ チャドは？」

『泣いてどこかに行っちゃったよ！ それより準備して！』

9 — 8 — 7 — 6 —

『さて、お手柔らかに』 — 5 — 4 — 3 —

「死ななければいいんだろ」——2——1——

——始めッ!!——

『「……ッ!!」』

☆☆☆——☆☆☆

最初に仕掛けたのはバルバトスだった。左手に持った120mmライフルを撃ちながら最大出力で接近していく。狙いはメイスによる一撃必殺。手早い方法を考えたのだろうか、一瞬でカタをつけるインパクトは今後の交渉では大きいものだ。そしてヴァサゴはその射撃を難なく避ける。自分で近づくことはせず、最低限の動きで待ち構える。

『なんか気に入らないな』

『そう不機嫌になるなよ。坊や』

やがてクロスレンジの距離に到達した。

反撃は一切受けず、バルバトスはメイスの射程圏内にヴァサゴをおさめた。120mmライフルを放り、両手でメイスを保持、死にはしないだろうと頭部に向かって思い切り振り下ろす。

『油断しすぎー!』

『お前がな!』

刹那、どこにそんな推力があつたというのか一瞬でメイスの射程圏外まで後退するヴァサゴ。たたらは踏むまいとバルバトスは三日月の操縦センスもあり、そのまま突きへと移行する。

どんな仕掛けかわからないが、メイスに仕込んであるパイルバンカーなら下がられても十分射程内だ——その時、三日月は違和感とともに悪寒を感じ、メイスを横に振るい、反対側に蹴りを見舞った。

『ッ!?!』

『防ぐな。すごいすごい』

ヴァサゴの両腕が伸びていた。左右から挟み込むように迫っていた手にはハンドアックスが握られている。

『ゲイレールって奴の装備でな隠し武器にもなるし——』

捻った体勢で滑空砲を発射する。

『盾にもなる』

重い金属音を響かせ、砲弾は弾かれた。しかしチャンスでもあつた。

『これで決める』

『そういや、滑空砲かっくうじゃなくて、滑腔砲かっこうらしいな、それ』

『あつそ! またか!!』

『当たるわけにはいかんねえ』

再び突撃の姿勢で迫るバルバトスを妨害したのはヴァサゴの両腕にあつたはずの巨大な杭だつた。敵の懐にいるわけには、と逃げるもまるで意志を持つように杭は追いかけてくる。

ヴァサゴは腕を元に戻し、ハンドアックスを放って、腰からハンドガンを取り出す。

『——やっぱり……』

一発、二発、三発と発泡する。
バルバトスが僅かな隙をついて接近する。

『うざったいな。けど、これで右は使えない!』

『腕に着けるべきだつたな!』

腕を引いたことにより、ほんの一瞬だがワイヤークロウが引っ張られたのだ。その隙を三日月は見逃さない。片方を掴んで無理やり引き千切り、追いかけてくる方へ投げつけたのだ。ワイヤー同士が絡まるのは何としても避けたいと、ワイヤーの引き出しを止めクロウ部分に搭載されたブースターが大回りするように離れていく。

必然的に右腕は引っ張られ、体勢を崩す。

『メイス相手にハンドじゃ無理だ!』

『腕ももつと邪魔だッ』

基部をパージした左腕を鞭のようにしならせて、バルバトスの右腕へと狙いをつける。しかし滑空砲の的確な射撃によって、勢いを殺され、弾かれた。

『これで!』

『まだだ。まだ終わらないぜ!!』

背中追加ブースターが火を噴いた。

☆☆☆
—————
☆☆☆

模擬戦の様子はイサリビの全部所流されていた。とはいえ、MSデツキに人はおらず、殆どは食堂に集まっていた。

戦いのオープニングは終始三日月が押し切り、レッドがそれを嫌がって逃げた——ライドを筆頭とした年少組の感想だった。

「やっぱ三日月さん、スゲーよ!!」

「あの人追い詰めてるじゃん! さっすがー!!」

「阿頼耶識を持つてる三日月さんに勝てる奴なんていないって! ギャラルホルンもぶっ倒したしな!」

口々に三日月は凄い。俺たちなら大丈夫。マルバなんて追い払っちまえ、と声を大にして叫んでいた。

その状況はMSデツキの控室でも同じだったが雪之丞は眉を顰めていた。

(ウェイストはほとんど動いてねえ。腕と姿勢制御、後退したぐらいだ。けどそんなこと可能なのか?)

雪之丞は火星の地上と宇宙の戦いをログから見分している。どの相手も三日月に対して、近接武器の鏢迫り合いか一撃離脱を主体としていた。足を止めて殴り合うことは最初の一機がやられてからしていなかった。

だが、ウエイストは鏢迫り合いもせずに三日月をあしらった。接近しても間合いから逃さず、相手の間合いからは逃げ余計にガスを使わせるように仕向けていた。

(こいつア……阿頼耶識云々より、パイロットとしての技量と引き出しが違いすぎる)

阿頼耶識により、三日月の操縦は普通とは違って遥かに効率的で柔軟だ。それこそ生物的な動きをほぼ再現していると言ってもいい。阿頼耶識あつてのものだ。

対してウエイストは阿頼耶識も無いのに似たような動きをしている。

「——元気なうちに仕留めねえと負けるな」

☆☆☆
—————
☆☆☆

一方でブリッジではオルガたちの表情は明るかった。三日月が押し続ける中、ユージンやダンテ、ビスケットは安堵の息を吐いている。クーデリアもその活躍に胸を撫で下ろしていた。

その中でドルポンドと明弘は対照的だった。前者はニコニコと笑みを絶やさず、後者はウエイストの技量と自分の差を実感していた。

「どうした。明弘」

「どうしたって……すげえって思った」

明弘に気づいたオルガが言葉をかける。それに気づいたほかの面々も二人へと視線を向けた。

「あんな動きをしてて阿頼耶識がない。三日月と渡り合ってる。それが信じられねえ」

「防戦一方だったじゃねえかよ。何発かもらってたしよ」

「けど動いている。表立った損害は装備の一つを捨てただけだ」

戦場の動きが加速していく。ヴァサゴの追加ブースターは急ごしらえのグレイズのものとは比較にならない。縦横無尽に駆け抜けているヴァサゴは機体の色も相成って、まるで赤い流れ星のように見えた。

「まるで赤い流星だ」

二機は瞬く間に岩塊の漂うアステロイド帯へ突入していった。時折、岩塊の間から交差するスラスタの光が見える。

岩塊とはいえ相当の質量をもつ。正面衝突すれば中破、もしくは大破に至る場所で阿頼耶識持ちと戦う。本来なら勝ったも同然の状況をウエイストは生き物のように間をすり抜け、思いもよらないところから銃撃を加えていた。

「アイツ、頭のネジが外れてんじゃねえか!? あん中で機動戦とかイカれてんだろ!!?」

機械の補助があるということだが岩塊を蹴って加速するなんてことが可能なのだろうか。

誰もがウエイストの技量に戦慄した。そして次はそんな彼を容易く仕留めた戦乙女ブリュンヒルドに畏怖する。このまま護衛を続ければもしかして……………。

ギャラルホルンに襲撃を受けたときのことが頭をよぎる。

「ミカを信じろ！」

「オルガ」

「ここで負ければ確かに鉄華団は解散だ。けれどもタービンス預かりになる。真つ当な仕事をしながら生きていける」

「……………なら——」

「代わりに俺たちはバラバラだ。仲間と！ バラバラになるんだ!!」

同じ飯を食って、辛い時も苦しい時も支えあって生きてきたのだ。ようやく自由を手に入れて、望んでも得られなかったチャンスを手に入れられたのだ。

「ミカは俺を裏切らない。俺はアイツが勝つのを信じている」

鉄華団の誰もがその言葉に返す言葉が出なかった。この場で団員ではない、二人の人物は勝利を願い、祈る少女と三文芝居を見るように笑みを浮かべる男だった。

——男が静かになったブリッジで呟いた。

「——なら、君たちに正しいケレンを教えてあげよう」

その言葉と同時にバルバトスはヴァサゴの蹴りを食らい、岩塊にたたきつけられたのだった。

「ミカア!!？」

格好をつけるのは勝手だけど、現実はその上手くはないかない（by作者）

僅かに時を遡り、ヴァサゴが追加ブースターを使用したところから始まる。

逃げの一手を選んだウェイストに三日月は容赦なく滑空砲を撃ちこむも、ひらひらと揺らめく左腕が変わり身をする。右腕からはハンドガンが滑空砲を狙い、弾倉へと直撃。爆発四散してしまった。

『待てよ！』

爆発に巻き込まれまいと頭部を庇って後退していくバルバトス。追撃に向かおうとするが容易には詰められない距離を稼がれてしまった。

ここで阿頼耶識の欠点の一つが露呈された。

（機体の状況が搭乗者に反映される。これが欠点だ）

デブリ帯へと逃げるヴァサゴが追いつがるバルバトスへ撃ち尽くしたハンドガンを投げつけ、180度の縦方向旋回をする。バルバトスが追メイスを振り上げるがそこに元に戻すこともできなくなった左腕をハンドアックスとともに叩きつける。

メイスとハンドアックスが火花を上げるのを確認せず、ヴァサゴは右腕部の内側に取り付けた小口径のバルカンをバルバトスの顔に向けて放った。

『鬱陶しい！』

庇って、顔を背けるようにするバルバトスは人間のような動きそのものだ。

そう。この人間のような動きが出来てしまうのが阿頼耶識最大のメリットであり、デメリットでもある。

ヴァサゴのデータログにはかつての戦闘の記録が保存されていた。なぜか同型機同士のものであったがその動きは三日月以上の鋭さと有機性を持っていた。

次に比較的最近のもの。戦後200年ほどのものだが、鋭さや有機性は失われているものの生き物らしい動きは健在だった。そしてその回避行動も顕著だった。

(厄祭戦の阿頼耶識は機体のダメージや状態をパイロットに伝えなかった安全装置セーフティがあった。だが、技術が失われて久しい現在では安全装置が機能していない)

モバイルワーカーのような戦車の延長線上ならともかく、モバイルスーツのような精密機器の塊は常に自己診断プログラムを走査させている。何かしらの影響があるとき、それをすぐに察知できるようにである。

フレームに歪みがあれば違和感を感じ、リアクターの調子が悪ければ疲労を覚えやすくなる。生身の肉体に存在しない部位についてはくすぐったい程度らしいのはアストンらで確認済みだ。

『顔を狙われちゃ目も背けるし、庇いもするよな!!』

回し蹴りを入れ、同時に左腕で使うためにマウントしていた一風変わったハンドガンを宙に漂わせ、掴み上げる。装填しているのはこの機種では二発しか込められず、さらにサイズのにも至近距離でないとなら効果は出ない。

『豆鉄砲でも喰らえ!』

向けられたのはダブルバレルショットガン。シンプルな構造ゆえに同口径の強力な弾を撃つキワモノだった。それがバケツで水をぶちまけたような、あるいは水の塊を叩きつけたような音がした。

『ぐっ……いー。カメラが死んだ!?!』

今まで怯みらしい怯みを見せなかったバルバトスがついに怯んだ。阿頼耶識による補助で咄嗟に手で射線をふさぐいでも、指の隙間からレアアロイ製の散弾が隠し切れていない顔を猛打する。

ナノラミネートで塗装されたフェイスマスクは小さきまな凹凸が刻み込まれたがせいぜい末端部が砕けた程度。しかし、センサー系——とくに特徴的なデュアルアイのメインカメラは片方が完全大破し、光を失っている。

『たかがメインカメラ程度だ!』

時を置かずにフェイスマスクの一部が展開してサブカメラが露あらわになる。暗い穴となった眼窩に赤い光が不気味に灯る。

『怯まないで戦うとかマジかよ』

ウェイストの見通しが甘かったらしく、バルバトスは軽くはない損傷を受けながらスラストを全開にして迫る。

何気に残った目から赤い光が漏れだし、廃熱のダクトからも同色の光が漏れだしてきている。

『ッ! 制限解除!!』

『消えろッ!!』

その瞬間、二機は流星へと変化した。



時を戻して、オルガはチャドに状況を確認させる。

「ミカは？ 無事なのか!？」

「バイタルは確認してる。ただ、気絶状態らしい……………」
「……………クソツ……………!!」

「負けちゃった、のか？ 冗談じゃねえぞ、おい……………!？」

動きを止めた二機にブリッジからは嘆きと悔しさの入り混じる声が木霊する。三日月が負けたということは自分たちはバラバラになるということだ。

暖かい家も温かい飯も天引きされない給料だつて貰える未来が待っている。けど、それは家畜のように生きる、CGS時代より遥かにマシな待遇で戻るだけだ。

「ちよつと待て」

「どうした？ ミカは精一杯やったんだ。責めないで——」
「……………相手も気絶している。どうすんだ、これ？」

引き分けの場合どうすればいいのか。有耶無耶にされるのか、仕切り直しとなるか。マルバと鉄華団のサシで話し合いとなるのか。

「……………ハンマーヘッドにつなげてくれ」
「わかった」

僅かの後、正面のモニターに面白くなさそうな名瀬の顔が映し出される。

『どうした？』

「こちらで確認したんですが……………二人とも気絶しているらしくて」
『ごつちでも確認済みだ。まったく、無茶しやがるよ。アイツもお前んとこも』

「何が起きたかわかるんで？」

『デブリ群に入った時点で俯瞰できる位置に移動したんだよ。横からは殆ど見えなくてな。お前たちはどうだった？』

『デブリの途切れ途切れから戦っているのは見えてました。最後まで蹴りのここは見えています』

『なるほどな。まあ、あのバカと坊主の回収に行こうか』

——色々、聞きたいこともあるしな。



二体のガンダムが猛スピードでデブリの間を駆け抜ける。300年前の古戦場とも言うべきデブリ帯ではなく、単純に資源衛星の成れの果てや、採掘・成形で生まれた岩塊が漂うここは通常のモビルスーツなら十分に機動戦ができる場所だ。かといって、格闘戦をしながら縦横無尽にできるほど隙間があるわけではない。

片方がマニュアル操作なら今頃はデブリの仲間入りになっている。

『ぬ、っお——!!』

だが、両機ともに当たる兆しすら見せず、ヴァサゴに至ってはデブリを蹴って加速や急な方向転換を繰り返していた。神業のような動きもすぐにバルバトスが模倣して追隨してきていたのは笑い話にもならない。

そしてウェイストは自分の判断は間違っていないなかつたと確信した。バルバトスに妙な変化が表れた直後、自身の直感と背筋を這い上がる寒気に奥の手を切った。

『く、そ——！・殺す、つも、りか?!』

コクピット内はコンソールのわずかな光以外に光源はない。だがグレイズやバルバトスと内部は全く異なるものだった。

メインモニター類はブラックアウトし、ウェイストの上半身をベストのような器具が固定している。さらに、頭部には普通は太陽光や宇宙線への防護としてある色付きのバイザーがなかった。機械のような仮面が顔どころか、ヘルメットとして被られ、後頭部からコードが伸び、シートへのヘッドセット部分に繋がっている。

目まぐるしく変わる視界の風景に、どうしてもこれは慣れないと愚痴りつつ、殺意をむき出しにしたバルバトスを相手に死に物狂いで抵抗していた。

使うつもりはなかった奥の手でもって、ようやく互角となつている。ウエイストは思う。まるで獣を相手にしている気分だと。

『くろう——!!』

追いつがるバルバトスへ容赦なしのワイヤークロウを打ち込む。真直ぐ飛んでいくそれを軽々と避けるが、さつきまでとは違い、意思があるかのように追いかけてくる。

『邪魔、だ!』

『大人しく、しろ、や!!』

メイスは使わず、腕で弾くがそれでもしつこく向かってくる。無視するには巨大すぎる杭はこうなれば使えないようにするしかない。

再び向かってくるそれをバルバトスはマニピュレーターで掴み取った。

『捕まえた』

『お前が、な——!』

がばっ、という音とともに杭は大きな爪に変化した。

『ッ……!』

『言つてなかったか? クローだってよ!』

メキメキと嫌な音をフレームを通して三日月に聞かせる。

組み合った状態でデブリ帯を動けるほど余裕はない。その場で足を止めて、バルバトスの出力を超えた出力で掴んだ腕ごと岩塊のデブ

りに叩きつけ――

『捕まえたのはこっちだ』

距離を詰めれば、ワイヤーはたわみ振り回すことなどできない。バルバトスがメイスの先端を頭部に向ける。打ち出されるのはパイルであり、直撃すれば負けの判定を受けるだろう。

名瀬の面子のためにもそれは避けなければならない。

『虎穴！』

『なんだよそれ』

バランスは崩れるが仕方がない。何より、今のヴァサゴを操縦しているのは自分ではないのだ。勝手に修正する。

フレームを覆う装甲ががひしゃげ、まともな可動が期待できない左腕を犠牲にした。左腕を叩きつけられたメイスは抵抗を見せるもわずかにずれて発射される。頭部ではなく、左肩口。左腕部フレームの根元を穿ち、投げ捨てられた紐の様に漂う。しかし背中に取り付けた追加ブースターも同時に破壊しており、パージしても至近で爆発した。

『警告はいらん！ まだやれる!!』

視界内に浮かぶ、損傷状況の報告と撤退勧告。視線認証で左腕へのエネルギーバイパス、及び背部の推進剤のすべてをカット。重心の再設定をオートで設定。スラスターの出力費を再計算。再設定開始。

右腕部のコントロールを掌握――

『まだ殴る部分がある！』

『ハンドアックスが残ってる！』

目の前の敵を潰す。互いにそのことしか頭になくなり現在の状況も忘れ去っていた。メイスの本体部分を強引につかみ、振り下ろそうとするバルバトスの手首を狙ったヴァサゴの切り上げは寸分の狂いもなく、手首を破砕する。

完成の法則により、あらゆる方向へ流れていく右手とメイスは轟音を聞かせることもなくデブリに突き刺さった。そして返す刀でバルバトスの頭部を割ろうとしたところでヴァサゴは膝蹴りをコクピットにもらう。

『がっ——（やべえ、麻酔が切れてきた）』

重い麻酔を使えば痛みは長時間消えるが思考がぼやけ、操縦なんて繊細な行動はできなくなる。もって数分の麻酔に興奮作用と覚醒作用のあるアドレナリンとメタンフェタミンの混合物で誤魔化しているような状態であった。

もちろん、名瀬とアミダには一切の話をつけずにやっている。そんな行為が限界時間を迎えようとしていた。

『負けるわけには——！』

『いかない！』

ヴァサゴの右腕にあるクロウの基部がワイヤーの巻取りを始めた。

この距離で何と思う三日月はセンサーの報告から離脱を選んだ。たわんでいたワイヤーが巻き戻されることによって雁字搦めにされることを拒んだ。そして状況によく気付いた。

『しまった——』

バルバトスの推力では逃げきれない。脚部のスラストも生きているヴァサゴが抵抗すれば巻き取るワイヤーではなく引っ張られたワイヤーによって拘束される。相手の右腕を破壊できるような武器

る。ワイヤーなんてとうに取れているどころか左腕に巻き付けている。

少しでも離れたら間合いの外からアレを叩きつけられるのだろう。一昔前のロボットアニメに出ていた鎖付き鉄球そのままだ。

『それはそういう風に使うもんじゃない！』

『刺すか叩くかの違いだろ』

動き自体は短調だから十分避けられる。こちらの武器はほぼ無いうえに片腕と追加ブースターの爆発によってスラスター類に不調が出ている。脚部だけではバルバトスの全推力を超えられない。逃げられない。

『メイスのところには行かせない』

『あっちの方が加減できるけど？ 多分』

『多分って時点で論外だよクソガキ』

『クソガキじゃない。三日月だ』

バルバトスが近づいてくる。しかし違和感を感じた。左腕に何もなかった。

『遅い』

左腕に取り付けられていたワイヤークローがヴァサゴの右腕のフレームに食いついた。

『捕まえた』

推力にものを言わして後背に回られた。ご丁寧にわざわざ輪を作るようにして。

今度はさっきのまでのバルバトスと同じ立場になったヴァサゴは

間髪入れない横方向に引つ張られた。

『負けを認める?』

『まだ終わりじゃないぞ?』

——あつそ。そのままハンマー投げの要領でヴァサゴをデブリに叩きつけようとする。しかし、ウエイストは諦めていない。コマンドを入力する。リアクターの慣性制御を最大。ウエイストなりの逆転の一手を決めるべく、スピードを上げる。

『大人のプライドってのがあるのよね』

『どうでもいいよ。そんなの』

叩き潰せばいいだけだ。その後でオルガに連絡すればいいだろう。かなり強いのも分かったし、これだけ強ければ鉄華団を守る。

『アンタは強いよ。でも、俺の方が強かった』

『可愛げのない』

『可愛くったって意味も無いよ』

これで終わりだと、デブリに叩きつけようとしたが誤算が起きた。器用に体勢を立て直し、平たんではないデブリの表面を加速しながら走破。デブリから離れる角度を見計らい、スラスターとアンバックを利用して猛スピードでバルバトスに直進した。

逃げられない、そう覚悟した三日月は右腕のフレームで迎撃を狙う。おやつさん曰く、モビルスーツでもフレームは異常なぐらい硬いのだと聞いた覚えがあったのだ。

『これで終わりだ!』

まっすぐ来るだけの体当たり。カウンターを狙い、右腕を引き絞

る。壊れるかもしれないがそれはおやつさんが直してくれるだろうと考えないようにする。実際、そのことを話したらおやつさんやヤマギが死んだ顔をしていたのは言うまでもない。

だが来たのは体当たりではなく――

『イナズ○キイイック!!』

ヴァサゴの足だった。勢いを殺さず宙返りし、飛び蹴りの要領でバルバトスと衝突した。わざわざフェイントまで入れて目の前から消えたように見せかけたのだ。

三日月はカウンターを諦め、側面を叩くようにして軌道をそらそうとしたがわずかしか動かない。ベクトルをそのまま横へ向けることなどできず、機体正面から足がずれるのにはもつと距離が必要だった。

二機が交差した。ヴァサゴの蹴りはバルバトスの左肩と胸を的確に抉っており、そのまま背後にあったデブリへ衝突。肩フレームのジョイントを外した足はそのままデブリへ足を深くねじ込む。

そして運の悪いことに力なく漂っていた右腕がヴァサゴのコクピット脇を突きつづしたのだ。

『……………（負けた、か）』

意識が戻ったのはその翌日。歳星へと向かう道中でのことだった。

GO! 歳星!

模擬戦という名の潰し合いが終わって早三日。私事、レッド・ウエイストは30億ギャラーの借金を背負う宇宙一の借金王になり果て申し候^{そうろう}。

「タービンスがマルバに払う予定だった契約金も君持ち。三日月君への後遺症の賠償として、得たCGSも引き渡した。うーん——
——すべてが丸く収まったネっ」

「収まってねーよ!? 30億ギャラーとか多すぎね?! 高く見積もつても20億弱だろ?」

「それはアレさ——僕のカッコつけを台無しにしたからっ♪」
「そんな理由で!?!」

借金返すために仕事を探しに来て、さらに借金負って、借金王とか
どういうことですかね?

いや待てよ? 事故に見せかけて始末すればワンチャン?

「親族は喜んで相続すると思うけど? だって税金払ってもバカみた
いに余るし」

「orz」

殺しても解決しない案件とはなんとも厄介な! まあ冗談ですよ
? 2割くらいはね?

あ、そうそう。変わったことと言えば——

「……なんていうか、すまねえな?」

「ならタダで譲れよお。そのまま資源探掘衛星に逝けよう」

「物騒な話はやめてもらえんかね!?!」

歳星までの道をマルバ・アーケイが同伴することになったぐらい。え？ どうして歳星に行くのか？ ヴァサゴとバルバトスが半壊状態で地球までの航行に支障が出てるからだよ。

「そうやって整備と修理で借金漬けになると。何時になったら返済できるのやら」

「当面、利子とちよびちよびの元本返済ですよ」

「火星で回収したグレイズも半分はタービンス行き。それを売ってなおの30億だね」

「どうか、テイワズが火星の拠点を欲しがってたじゃないですか？

名瀬さんはよかつたんですかね」

「子どもから奪うつもりもないだろうし、何より彼は真面目な弱者には気を遣う人物さ。昔の君に重ねているんだろうね」

「そういうもんですか」

「そういうものさ」

小生意気なガキが自分で生きるんだって息巻いていた。ああ、青臭い青春の日々よ。何故、我が身は穢れてしまったのか！

「返済能力を超えた借金なんか背負うからだよ」

「違いねえ」

「黙れクソジジイ！」



ミカの右腕がおかしくなった。細かく言えば、右手に痺れを感じる程度らしい。

「ミリアムさん。ミカは大丈夫なんですか？」

「ミリイって呼んでオルガちゃん。あと、ミカちゃんなら大丈夫よ」

この目の前でクネクネとしている筋骨隆々の男——ミリアム・ヴァンハイムとかいうオカマはウエイストが大金をはたいてスカウトした医者だとか。

俺と明弘、ビスケットはハンマーヘッドでの今後の打ち合わせの帰りにグリコへ寄っていた。理由は言った通り、ミカがこの船の医療設備で治療を受けているからだ。

『火星ヤシが食べたい』

「ダメよ。固形物を入れちゃうと大きい方の処理が大変なの」

『大袈裟だよ。右手ぐらい』

「ノンノン！ その右手が動いていけばって思う時が来るわよ？ 幸い、リハビリをすれば以前ほどとはいかないけど戻るもの」

後遺症ってんだから一生治らないと思っていたが本当なのか？

「本当ですか？」

「本当よ。握力が若干落ちて、力加減が慣れるまで大変でしょうけどね。……………にしても、貴方たちはみんな付けているのね」

「それが働くための条件だったんです。ここにはいないけど明弘もあ

ります」

「ようやく肉親おとうとと出会えたんだもの。あの太胸筋に頬擦りするのは今度にするわあ」

——イサリビのスキンシツ——健康診断が待ち遠しいわね。

ミカ？ お前はまだ三日月だよな？ 汚れてないよな!?

『最近、起きると下半身がムズムズするんだよね。なんでだろ』

Noooooooooooooooooooooooooooo!!!?

「無理やりなんてしないわよ、人間きの悪い。単純にカテーテルのせいでそう感じているだけよ」

「よかった————待て。無理やりじゃなければいいのかよ?」

「熟れた果実もいいけど青い果実もス・キ・♡」

「ミカ帰るぞ。こんなところに居たらどうなるかわかったもんじゃねえ」

「ああん！ 待って頂戴な」

胸元のはだけたぴつちりとしたボディスーツを着るこの男はまるで、股間をアピールするかののように足を組む。

正直、ミカが世話になってなければ近づきたくもないが仕方がない。い。

「健康診断はホントの事よ。CGSでどんな待遇かは知らないけど、ある程度の精密検査はするわ」

「どこも病気なんかしてねーよ」

「素人が偉そうな口を利くんじやないの。肝臓なんて沈黙の臓器って言われているぐらい早期発見ができないのよ? マルバちゃんの一件が終わっても地球で発病、そのまま………ってことだあってあるんだから」

ビスケットがどうしてそんなに検査をしたがるのか聞く。一応、食っていた物も野菜ばかりだがまともなものもなかったはずだ。

「ブルワーズの子たちよ」

「明弘の弟っすか」

「ええ。寄生虫はいるわ、内臓疾患はいくつも患っているし、酷い子は薬物依存の症状も出ていたの」

「よく生きてくれましたね」

「運がよかったのよ。レツドちゃん馬鹿だし、賢かしこぶっていても何も考えてないわ。けど、人並みには正義感や優しさもあるし途中で投げ出すような卑怯者でもないわ。気に入ったら世話を焼きたがるのよね」

「……………だから今回の沙汰ってことか。」

「詳しくは知らないけど、自分の昔と重ね合わせてるのよ。独りになって、残ったものを守ろうと死に物狂いだった頃にね。名瀬さんみたいな素敵なダンディに出会えたから、自分もそんな男になるって言ってたわよ」

「……………僕ら、本当に運がよかったんだね」
「だな」

『気に入らないのに変わりはないよ』

『ミカ……………一応、俺らにとつちや恩人で……………』

『オルガに言われても気に入らないのは気に入らない。上手く言えないけど……………なんか気に入らない』

「はあ……………」

「あらあら」

「あははは……………」

何時もなら個人的な感情なんて出さないほうなのに、なんでこう

なったのやら……。



やっほー！ あたし、ラフター！ ラフター・フランクランドっていうの。タービンスの社長、名瀬・タービンの奥さん——みたいな感じかな？ ベッドで可愛がってもらってるし！

「ラフター。サボってないでイモの皮を剥きな」

「いや、台本にそう書いてあったんだって。アジーもレッドから渡されなかった？」

「渡されてないし、そもそも台本なんて必要ないじゃないか」

「む、確かに………またからかわれた？」

「だろうね」

おのれ、借金王レッドのくせに！ と言っても、あたしにとってはお兄ちゃんみたいなんだよね。アジーと並ぶと恋人みたいだし………同い年だっけ？

「そうだね。なら年上に敬語を使うべきじゃないか」

「同じクルーだし、だーりんのこと好きじゃん。同士同士♪」

「はあ……。まあ、アイツがまともだったら恋人——ないな」

うんざりしたような顔で眉間にしわを寄せ始めた。久々に見たね、その顔。

「ご隠居やマクマードのオヤジさんに言われてるのさ。イイ男は居ないのかってね。まあ色仕掛けで繋ぎ留めろっていうのもわかるけど、そういうのは自分で決めたい」

「だーりんぐらいには格好良くイイ男でないとね」

「そうだね。——同期からは行き遅れ、なんて言われるしさ（ぼそっ）」

「なんか言った？」

「言っていないよ。ほら、さっさと剥く！ 明日に間に合わないよ」
「はーい」

いやあ……。多すぎだね。こんなに必要な？ というか歳星に着くまでもつの？

「食料や水にも余裕はあるよ。名瀬が言うには鉄華団はこういったことに無頓着らしいから私たちが教えるのさ」

「あたし達みたいなのは時間とか日付が曖昧になるしね」

変わり映えのしない宇宙で生活が長いと日付とかが狂っちゃうからね。タービンは表向き運輸業だから日付指定とかあるし、何よりも皆で同じご飯を食べて連帯感を養おうという考え。

だーりん曰く、宇宙に出られないぐらい昔の地球の船乗りたちは毎週金曜日に食べてたらしい。

「丁度いい具合に明日は金曜日だ。レッドのところはカレーだったはず」

「シチューじゃないんだ？」

「タービンスじゃシチューとデザートが出るけど、あつちはほぼ男所帯だからね。ギャラルホルンもカレーらしいし」

「あのお髭のオジサンと色白ね」

聞けばついこの間まではギャラルホルンのモバイルスーツ乗りだったとか。それで明弘って、ガチムチの代わりに 그레이ズで哨戒任務に出ている。

「あつ、それで思い出したけど」

「何を？」

「明弘のこと。いやあ、もうしつこくってしつこくって」

「なんだい。言い寄られているのかい？ だったら名瀬に……」

「違う違う。シミュレーターの手相をしてくれって必死でさ。阿頼耶識なしのやつね」

「マニュアルで勝てると思ってるのかい？」

「じゃなくて、 그레이ズが阿頼耶識に対応してないからマニュアルで乗るしかないんだって。そのために鍛えたいってさ」

それを聞いてアジーも柔らかな顔つきになった。向上心があって、なおかつ仲間——家族の為に頑張れるヤツはアジーの気に入るタイプだ。明弘はそんなやつだ。

「だからこそ、おねーさんと揉んでやろうと思った——んだけど、負けず嫌いでね」

「アンタとお似合いじゃないか。レッドに負けて、涙目になりながら最後に姐さんに泣きついて——」

「妹に優しくしないアイツが悪いの！」

「はいはい」

むーっ！ ……まあ、あんなに必死で頑張るやつはあたしも好きだけどね。



言つては悪いが今度、社長に相談しよう。あ、アイン・ダルトンです。自分は今、鉄華団の船のイサリビにクランクさんと一緒に出向しています。出向と言つてもあと数日ですが……。

「グレイズ、哨戒から帰ってくるぞお！ お前ら準備しろ！」

カタパルトブロックから上がってくるグレイズを見る。オーリス隊長の乗っていた機体が今はこのような形で運用されている。

自分としては何とも言えない感覚だが、子どもを大量虐殺した汚名を少しでも晴らせればいいと思うのは傲慢だろうか？

「じゃあ行こうか。ヤマギ君は俺と一緒にデータ回収とクランクさんからの報告書の送信。タカキ君は他の子たちと一緒にスラストアの点検。終わったら推進剤の補給をしてくれ」

「わかりました！」

「報告書お願いします」

「それは俺とアイン、雪之丞でやっておこう。これがバー——んん！

クーデリアに勉強を見てもらうといい」

丁度クランクさんが出てきたようだ。お疲れ様です！

「宇宙装備ではなかったがああいったグレイズもまた新鮮だ」

「すまねえな。売り物にできれば手を付けたくねえんだが……俺から言っておこうか?」

「いや、それには及ばんよ。長年モビルスーツのパイロットをしてこれぐらい、御せずにいれば引退ものだ」

「ウェイストさんには負けたけどアデツ!」

「ライド、あんまり大人を揶揄うんじゃねえぞ?」

「いつてえな、でも本当じゃん」

事実だけに何とも言えないのが悲しい。

「まあ、そう思うのも当然だろうな。実際、この歳までギャラルホルンに居たがモビルスーツ相手に戦ったのは二十にも満たんよ」

「そうなの? 大したことねーな」

「ライド!」

「構わんよ。元は地球から左遷されたからな。地球圏では海賊連中はそこまではない。月外縁軌道統制統合艦隊が存在するせいだな」

「そのアリアンロッドってなんなんですか?」

月より外側——つまり、地球圏の外側の治安維持を行う月を拠点とした独立艦隊のことだよ。

「うむ。セブンスターズの一人、ラスタル・エリオン候が指揮をしているギャラルホルンの最精鋭だ。地球外縁軌道統制統合艦隊も同様だが、地球圏の治安維持を担う関係上、外に出ることはほぼ無い」

「ギャラルホルン全体を統括しているのは統制局って言ってるね。火星支部などのコロニーやアリアドネに点在する支部は全て統制局の管轄なんだ」

統制局とは別に監察局も存在するけど、どこまで機能しているかわ

からない。辞めるときに聞いたセブンスターズ縁ゆかりの特務監察官が来たと言われたがそれもどうだか。

「ともあれ、社長は圏外圏で腕を鳴らしていたんだ。それにまだ生きている。汚名挽回はいくらでもあるさ」

「そうですね。さ、皆も仕事だ」

「はーい（うっす）！」



「お前の言い分はわかった。マクギリス」

目の前にいる竹馬の友、マクギリス・ファリドに俺は釈然としないまでも考えを改める努力をした。

ああ、自己紹介が遅れたな。俺の名はガエリオ。由緒正しきセブンスターズであるボードウィン家の次期当主として恥じぬ行いを心掛けている。

「納得はしていない、というのが不足しているな」

「火星人のヒゲ付きだ。それは変わらん。何より俺はお前の方こそどうしたんだと聞きたいぐらいだ。奴ら……なんだったか？」

「鉄華団」

「そう。それだ。その鉄華団のことを送られてきた男から聞き出した後からだ」

ここに到着するまではクーデリアをどうするのか。腐敗したギヤラルホルンをどうやって正道に戻すのかを語りあっていたというのに。

「何か琴線に触ることもあったか？ 哀れみか？ 親しみか？ 慈しみか？」

「——だとしたらどうする？」

「どうもしない。俺たちは親友だろう？ 誓いあったじゃないか。どちらかが道を間違えたら正すと」

「……………そう、だな」

「………なあ、ガエリオ」

「俺は出自からしてセブンスターズには不向きだと思っている。本当に」

「お前はお前だ！ ふぎけたことを抜かすな！」

「これはお前が思う以上に深い問題だ」

——しばらく休む。一人にしてくれ。

そう残してマクギリスは部屋に戻っていった。何か悩んでいるのか？

「俺にも話せないことなのか？ 深い問題、というやつは……」

マクギリスがファリド候の妾腹——でなく、私生児というのは社交界では有名な話だ。そもそも血を残すこともなく、今の今まで生きてきた候の責任の**はず**。世界の秩序を守るギャラルホルン。そのトップに君臨し、かじ取りを行うため、血を残さぬことが**どれだけ**のことか。

「父上に聞いてみるべきだろうか。いや、そんなことをしたら小言が待っているな」

どうにも父、ガルス・ボードウインは何かと俺に態度を改めると小言を言ってくる。セブンスターズとしての立場とノブリス・オブリージュ高貴なるものの宿命を心掛けて**いるはず**なのだが……。

「うーむ。どうするか」

「ならば私が付きあいましょう、ボードウイン特務三佐」

「げえ！ イーリス・ステンジャ!？」

「悪魔を見たような顔をするとは乙女に向かって失礼極まりますよ？

——10時間コース決定ですね」

「待て。シミュレーターを10時間は無理だ！ 職務があるからな
！」

こんな化け物にかかずにいられるか！ こいつのせいでカルタも女傑っぽくなってきてるし！

「勘違いなさっているようですが帰還するまで毎日です」

「仕事が——」

「コクピットが貴方の居住空間になりますか？」

「いや、無理——」

「やれ」

「……………はい」

めのまえがまつくらになった……………!!

歳星名物と言えば？（解説付き）

——今の人類はギャラルホルンによる独裁を受けているのではないか？ そう提唱した学者が不審死を遂げたことは後の歴史書に書かれるが、鉄華団が生まれたばかりの頃はそれが表沙汰になることはなかった。

——地球圏最大の勢力と言えばギャラルホルン——で間違いない。だが敵が存在しないわけでもなかった。それは月より外の四つに分かれたラグランジュポイントよりも外側に今なお潜み続ける宇宙海賊たちや反政府主義者の自称革命軍である。

——だが、そんな連中が恐れる存在があった。惑星間航行を目的とした移動するコロニーともいえる超々大型巡航船。歳星と呼ばれ、圏外圏で独り勝ちするマフィア組織テイワズの本拠地であった。



「——というわけで各自自由行動とする。渡した地図にマークされたエリアは近寄るなよ」

レッドは一つの区切りをつけようとしていた。ブルワーズから賠償として譲渡されたヒューマンデブリ組を歳星で降ろすということ

だ。

「急じゃないですか」

「これからは鉄火場だらけだろうからな。子どもを連れて戦うのもなんだし、退職金を有効活用してどっかに潜り込めるんじゃないか？ なんならタービンスでどうか聞いてみるぞ」

事実上の解雇通告だが、それを黙って聞いているクランクも可哀想だとは思っても安堵の心を抱いていた。地球に近づけば近づくほどにギャラルホルンの本隊と戦う羽目になる。その場において、ビスコ一級のようなクルーザータイプの船は危険なのだ。

碌な武装もなく、強襲装甲艦やハーフビーク級、スクイード級といったまともな装甲を持たない船は単なる棺桶でしかない。

「ヒゲ付きじや無理だよ」

「じゃあ鉄華団のほうに行くか？ オルガは歓迎するって言ったがまずモバイルスーツは乗れないぞ」

「うっ……………けど……………」

強襲装甲艦は装甲は厚いがそこまでモバイルスーツを搭載できるわけではなかった。資材関連を切り詰めて五機ほど。実際は陸戦隊のモバイルワーカーの分もあるから三機が限界とレッドは見ていた。

ビスコ一級はそもそも50m級のため、モバイルスーツは直立で二機が限界である。後付けのコンテナハンガーも可能ではあるものの出力の関係上、足手まとい以外のなににもならない。

「輸送船をかうって算段もあったがこの前ので俺は個人の借金ランキング一位になっちゃった」

「それは自己責任じゃ？」

「シヤラップ、アイン!! ステイツ！」

「犬扱いは!？」

輸送船なら余裕をもって六機運用が可能である。とまあ、この辺りは建前だったりするとレットは告げる。

「正直、いつ死ぬかもわからない戦場に子どもを置いておくわけにはいかないんだよ」

レットは静かに言う。大人組は別に死んだって構わない。覚悟があつて、この仕事を選んだのだから。

ゆえに鉄華団の少年兵もそういう覚悟はできているのだろう。生きるために少年兵となり、その後の生活の為に鉄華団を辞めなかつたということはそのようなのだと。

「お前たちは無理やり海賊をさせられた。自分の意志でなく、強制された」

「それ以外知らないし」

「だとしてもまだ若い。やり直すには十分だろう。私と違って、命懸けの特攻もどきに付き合う必要はない」

「自分もです。ギャラルホルンに所属していたからこそ、その強大さと恐ろしさを理解できる」

実際はドルポンドに頼んで、別方面からのアプローチを考えたが死んで喜ぶのは経済圏の連中も同じだろうと考えていた。何かに理由をつけて資産を没収すればいいだけだ。

「人手は正直厳しいが、ハンガーやブリッジの関係上、兼任だろうな」「私とアインが出るか?」

「いや、ヴァサゴは特殊過ぎて専用機扱いだ。交互に操艦とパイロットをしてほしい。整備班もここで降ろさなきゃならんし」

ギャラルホルンと事を構える時点でそれなりの不満は出ていた。

モバイルスーツは整備するなら最低でも3人は欲しいと呟く。

「だったらー！」

「アストン」

「…………捨てられるのは嫌だ」

「捨てるんじゃない。それぞれの道に進むっただけだ」

「じゃあ、アンタについていくのが俺の道だろ!？」

ドック内の視線が集まる。いくらかは物珍しさから。いくらかは納得のいくものである。痴情の纏れというよりは危険な航海に子供を連れて行きたくない大人と寂しくてわがままを言う子どもたち、といったところだ。まあ、納得のいつている連中は大人組が堅気でないのを察しているわけだが。

「——考えは変わらない。言葉遊びもしない。困らせるな」

「……………」

☆☆☆
—————
☆☆☆

よお、名瀬だ。俺は今、バカ息子と兄弟盃待ちのオルガ・イツカを

連れて喫茶店に来ている。テイワズ直轄の幹部級が話し合いや世間話に使う安心・安全の店だ。仕事を持ち込むの御法度。マクマードのオヤジもこの店主には頭が上がらねえ。

で、なんでこんなところに居るのかってーと、バカ息子が原因だ。

「何があったよ」

「別に」

ぶつすーとした表情で眉間に皺を寄せている体だ。さつきからずっとこんな感じでオルガも困惑してやがる。

「どうしたんですか、兄貴」

「まだ盃を終えてないだろう。まあ、理由はわかるがな」

自分から話すのを待つのが万事解決のキモだが、そうそう長く歳星にいられるわけでもない。相手の問題の核心を突くつてのは結構不愉快なもんでいつそう意固地になっちゃう。

「ガキどものことだろう?」

「ああ。ブルワーズとかいうのにいたアイツらですか。そういえば移籍の話があったすね。鉄華団のほうで雇ってくれないかって」

「なるほどな。全く……」

大方、自分で保護した手前、無責任に投げ出すことへ嫌悪感とか罪悪感ってとこだな。商売に情を持ち込むなって教えた手前だが………情が湧いて遠ざけたのか、単純に保有する備品の問題か。

「なんて答えた?」

「これから大きくする予定です。だから、本人の意思を尊重するし責任をもって受け入れると」

「二丁前にリーダーしてるじゃねえか。少しは余裕ができたか?」

「テイワズの末端になればこうなりますよ。火星じゃ、テイワズは有名ですから」

今の人類の最高到達点は木星だからな。歳星はもともと木星の資源衛星採掘を目的にした工業都市型惑星間航行艦。一種の動く国家だ。圏外圏に限定すればギャラルホルン並みの知名度と戦力がある。うちが後ろ盾になるっていうのは言いかえればテイワズに喧嘩を売るってことだ。

「クーデリアの依頼を終えて、その金でなんか事業を……」

「モビルスーツはいらぬのか？」

「しばらくは要ると思います。けど、目指すのは鉄火場に立たない生き方です」

命の安さと脆さを知っているつつーのは、来るまでに感じていたけどよ。何というか――

「年寄りみたいな考えだな。嫌いじゃないが」

「そうですかね？」

「無暗矢鱈と上昇志向をかざすよりはマシだと思っぜ。けどな？」

その鉄火場に立つことのない生き方。その道程については言っておかなければいけない。

「ほどほどにしとけよ」

「レッド。俺の台詞を取るんじゃないよ」

軽く小突けば、痛い抗議する。ようやく話す気になったかな？

「まったく。ここは年長者の顔を立てるもんだ」

「じゃあ節操をもってくださいよ。ハーレムなんか作らないで。誰か

紹介してください。切実に」

「まだまだ若い連中には負けねえよ。それとお前ら！ なに、レッドの言葉に頷いてやがる！」

ハンカチ噛んで血涙まで流すか、普通はよ。

「まあ、俺がそれだけ魅力的ってことだな」

「今の言葉で歳星の半分を敵に回しましたね」

「「うん」」

「モテない男どもめ」

「「「ああん!!」」」

「兄貴!? マズイですって！」

こんなもん挨拶代わりだぜ、オルガ。誰も事を構えようなんて思わねえよ。

「冗談がわからないお子ちゃまだなあ、オルガ君（だみ声）」

「……………（無言でお冷をぶっかける）」

「ちめたっ!？」

「そこまでにしとけよ。ここの爺さんは歳星で一、二を争うぐらいおっかねえから」

人の好きそうな爺さんだが、オヤジと一緒にテイワズを今の規模までデカくした生きる伝説だ。昔はヤツパ片手に敵船に乗り込んで血の池を作っていたとかなんとか。

「名瀬の坊や。爺さんじゃねえ。マスターって呼びな」

「ああご免よ。マスター」

「それとそっちの銀髪と喧しい小僧」

「すみません」

「喧しいとは失礼な。育ての親の節操のなさを非難しテレジアっ!？」

「バラして宇宙に放るぞ、クソガキ」

おお。往年の殺意つつーか、気迫がすげえ……！ この人に口答えするレッドもどうにかしてるぜ。

「トレイ一つでKOとはいけねえな。で、そっちの銀髪だが……」

「は、はい！」

「名瀬の坊やが言ったことを忘れんなよ。義理と人情のテイワズつつつても、新参に優しいわけじゃねえ。手前の行動が盃を交わす名瀬の坊やに影響する」

ほう！ 本当に珍しいもんだ。マスターはこんな口数が多いのは久しぶりじゃないか。見込みアリ、つてか？

「あとで店ん中にいる連中に名瀬と挨拶回りしときな。俺たちや碌でもないヤクザもんだが、それでも筋を立てる奴には一目位置く。名瀬もジャスレイのガキに面通しさせておけ」

「ご忠告ありがたく頂戴します、大叔父貴」

「大叔父貴じゃねえ。マスターだ」



「世渡り上手だか不器用なんだか」

私はアジー、アジー・グルミンだ。不詳なことにレッドとは姉弟分つてことになる身さ。アイツに言つたらお前が妹だつて言いそうだけどね。

その話は置いていて、あそこの子どもたちをどうするか……。エーコは何かいい案は無いかい？

「んー……他所の事に口出さないほうがいいんじゃない？」

「レッドは身内だろう？ それにアイツはすぐに切り替えるのが得意じゃないんだ。それまでここに留まれやしないよ」

「ヴァサゴもバルバトスも修理するから歳星に滞在すると思うよ？ 鉄華団は売りに出したモバイルスーツの代わりを探していたし」

——けど、アジーつてまるでレッドの女房あだつ！？

「ぶつよ」

「もうぶつてるじゃん!? もうっ！ 結構お似合いだと思っけどなー」

「ちよつとボクササイズをしたいからサンドバッグになってくれるかい?」

「さーせん！」

何度も言うがアイツをそういう目で見るのは止めにしてるんだ。本当にゾツとしないよ。

「ふーん。ま、いつか！ とりあえずレッドに三日月はここで残留だよ。整備のオヤジが発狂してたから」

「腕のいいエンジニアはクセがあり過ぎる連中が多いよまったく」

「そりゃあね。名瀬に激しくされるの好きだし、きやつ♪」

「はあ……………」

隣に留めてあるビスコ―級から半壊状態のヴァサゴが姿を現す。姐さんと鉄華団の整備班長がレッドとオルガの代わりにスケジュールを決めている。

「……………!!!……………!! (修羅の顔)」

——レッド、死ぬかもしれないね。

「うわあ……………あんだだけ怒ってるの初めて見た。レッドと三日月大丈夫かな?」

「流石に相手を見て喧嘩は売るだろうさ。三日月は冗談が通じなさそうだし」

「舐められてない? それ」

「信用と実績の間違いだよ。そんなことをしても笑い話で済ましてくれるってわかってるのさ」

歳屋名物の整備オヤジはガンダムフレームに物凄い執着を持っている。保有したいとかではなく、弄り回したいという欲望で今まではヴァサゴがその対象だった。

手塩にかけて整備した機体があんなスクラップ間近になって帰ってくるはその心情は如何に?

「借金の増額が期待されますな」

「払うもん払えって注意しておかないと」

「姐さん女房くwwww」

「ふんっ」

「ぎゃああああ!! ぐりぐりはやめてええええ!!」



「ジロちゃんの差し金か？ 全くよお」

「ここじゃマスターって呼びやがれ。マー坊」

「二応、歳星は俺の城なんだぜ？ ったく……」

——テイワズのトップ、このマクマード・バリストーンにそんな口を利く奴はそうはいねえってのに。

俺は目の前でパスタを茹でるジロン・ジエービスにため息とともに頬杖をついていた。お互い、昔はやんちゃをして何時の間にかこんなデカイ組織の頭目とお目付けになっちまった。

「ほらよ。ナポリタンだ」

「ありがとよ」

こんな夜中にパスタなんて食ったら医者に張り倒されそうだが、湯気の出る飯なんてそうそう食えるもんじやない。俺みたいな奴はいつも命を狙われるからよ。

「嗚呼、美味しいな。昔を思い出す」

「はん。若え頃はケチャップなんざ使うなって文句ばつかしのくせ

に」

「思い出に浸りたいんだよ。ただ上に昇る。のし上がってやるって思っていた時代によ」

こうなるのも名瀬が連れて来たガキどもが原因だ。飢えた獣のよ
うにのし上がることしか考えてない脳足りんのクソガキだ。表面
じゃ、慣れてない敬語を使っているが実力こそ正義って思いあがって
る青臭い奴だ。

「——あの坊主は新芽だ」

「そうかい？ どこにでもいるスラム街から成り上がろうとしている
ガキだろうよ」

「いいや」

キセルに煙草を詰めて一服。客の目の前だったのにモクを吸うや
つがあるかよ。

「導き方さえ間違わなければ立派な柱になる。育て方の問題さ」

「育て方ね。ヤクザもんのところで真つ当に育てるのか？」

「斬った張ったの殺し合いは半人前。情理についても半人前。商売に
関しちや素人未満だ」

「へえ……」

テイワズの紋付になるならば必ずお目付け役のジロンのもとへ面通
しするのが暗黙のルールだ。その結果次第で一貫目かんめや待遇つてのが
変わる。いわゆる抜き打ち面接みたいなもんよ。

もう一つ言えばここ数年は半人前なんて上等な評価を二度もされ
る奴は皆無だった。

「見どころ在り、か」

「惜しいのは人の心つてやつを理解してないのさ。言ってみれば昔の

「ジャスレイと名瀬を足して二で割った、そんな感じだろう」
「おいおい。結構な厄介もんだな」

最近のジャスレイは少しとはいえ名瀬と話す程度にはなった。男尊女卑を掲げるジャスレイにとつて実力のある女を重用し男を排他する名瀬の性質は水と油だったわけだ。

ところがレツドの坊主を引き取ったことで名瀬も以前よりは積極的に男を雇い、重職に置くようになった。そういった連中と付き合い、名瀬を蹴落とそうとしていたジャスレイも女の実力と情理つてのを考えるようになった。

ここまで言えばわかるだろうが、年功序列なんて言葉も知らない上に女は使えないと排斥するが実力があれば優遇する。そこにスラム出身のため身内意識が高くて上昇志向が高い。力があれば誰も何も言えなくなると勘違いしている。

「厄介者だな」

「今は、だ。名瀬の坊やに幹部や目上の連中に挨拶回りしておけと告げ口しておいた。まだまだ詰めが甘い」

「仁義はあれど権謀術数に難がある。ジャスレイはその逆と」

「次世代を育てるのはお前さんの役目だろうが」

そうは言われても俺が動けば邪推する連中が出てきちゃう。碌な実力もないくせにこういうのに限って有能な連中を超えるから始末に負えない。

何より、ギヤラルホルンのキナ臭さと噂がここんところ濃くなつてきて、テイワズのかじ取りを任せがちになつてる。

「地球人類統一機構か」

「つまるところの地球連邦だろう？ 大昔の骨とう品を担ごうとするなんて悪夢じゃねえか。厄祭戦の遙か昔。コロニーが地球圏のあちらこちらにあった時代の遺物——つて話だが、どうなんだろうな」

「木星の辺りにも見たことのないモビルスーツの残骸があったとか、あるはずのない無人のコロニーを見つけたとか。何が起きようとしてる?」

「ラスタル・エリオンや先代のマハラジャ・クジャンも自体の究明に乗り出している」

特に俺、両雄ともに同じ人材を狙ってる立場としては首輪か貸し。あるいは牽制目的の楔を作っておきたい意図があるけどな。セブンスターズの武家と付き合いがあるとかレッドめ、どういう交友関係を持ってやがる?」

「色んなところでレッドの悪ガキが顔を出しやがるな」

「だな。うちの連中もアイツに一目置いている奴は少なくない。下にっこうなんて考えは無いらしいがな」

「藪をつついて変なものを飛び出させんなよ」

「身に染みてるよ」

——なんせ、レッドの仲介でギャラルホルンと協力体制になっただからよ。

厄祭戦の恐怖（解説付き）

歳星名物と言えはどこかの茶店のマスターとマツドな整備オヤジだろう。歳星でモビルスーツの整備工房を営んでいるがその実態はテイワズお抱えの整備士だ。

厄祭戦の技術に詳しく、最新鋭機と旧型機のミックスも得意とする老整備士はガンダム・フレームをこよなく愛するので有名だ。私財をなげうって闇市場に流れるガンダム由縁の装甲や武装を筆頭に戦時中の記録媒体た設計図などを歳星のどこかに隠しているともつぱらの噂だった。

彼が数十年の整備屋人生で今日ほど最高で最悪でやりがいのある仕事はなかった。

なぜなら半壊したガンダム・フレームが自分のところに転がり込んできたのだ。それも二つも。

「ふふふ。ふははははははは!! まさしくハレルウヤアツ!!! 我が人生でこれほどにやりがいのある仕事があっただろうか!!? いやッ! ないッツ!!」

感極まり、彼の顔は継ぎ接ぎしたボロツちい眼鏡が反射する程度見えない。しかしの格好はどこぞの秘密結社か悪の組織のマツドサイエンティストが狂喜しているようにしか見えなかった。

そんな彼の隣に佇む三日月と雪之丞、ヤマギの三人は整備用のガントリークレーンの先にぶら下がるミノムシを見ていた。

「——ぎまあwww」

「クソガキてんめええええええ!!!」

「おーい、ウェイスト! 頭に血が上るからやめとけて!」

「だったらこのワイヤー切断してくれ!! というか、そのマジキチから解放してくれレッドさんからのお願いっ」

我らが主人公、レッド・ウェイストはガンダム・フレイムを二つも半壊させた重い罪により、リアクター制御で発生した重力の中、逆さでつるされていたのだ。

レッドの惨めな姿に三日月の非常に薄い感情からSっ気がしみだしていた。オルガが見れば真っ白になってしまっような笑みを浮かべ煽る。

怒り心頭となったレッドに血が上るのが早くなるから落ち着けと宥める雪之丞。気持ちはわからなくもないがこれ以上は面倒なことになるだろうと制御室にいる社員に連絡を入れようとする――

「――チツ」

老整備士から忌々しそうに舌打ちが聞こえた。自分らと話したときは人の好きそうな人物だったが気のせいなのか？ 彼に目を向ければ据わった目と堅気の顔じゃない表情で降ろされていくレッドを睨み付けていた。

「す、すまねえけど……いいか?」

「あ? これ失敬。鉄華団の整備班長とあっちのパイロット君だね」

「おう」

「はっはっは。持病の癩と思ってくれたまえよ。どうもガンダム・フレイムを見ると我慢が聞かなくてね――小僧には死んでもらうとしようかね」

「物騒なこと言わないでくれよ?!」

「半分ぐらいの冗談さ」

それは半分本気ってことか? 半分冗談と言うのが冗談なのか? などと雪之丞は聞こうかと思っただが長い民兵組織生活の経験から

聞かないことが幸せと結論付けた。触らぬ神に祟りなしは知らないが、触れちゃいけないものに触れたら不味いことは知っているのだ。

「クツソ、このジジイ。何時か殺す」

「オルガのこと、殺すって言った？」

「同音異語って難しいから銃を向けるのやめてッ」

「毎度のことながら騒がしくしなきゃ生きてられないのかね？ 殺せば大人しくなるのかね？」

「辛辣過ぎない？」

同席していたヤマギ曰く、『あの人の眼は本気だった』と後年でしみじみと語っている。

これ以上無駄話と言うか三文芝居を見るより、やることをやってシノといたいヤマギは話を先に進めるよう促す。

「ところでフレームだけになると結構似ているんですね」

「それは当然さ」

工房内のリアクター制御を解除し、無重力状態になった整備オヤジは漂いながら高説をたれる。

「ヴァサゴとバルバトスは一つの規格から生み出されたシリーズだからね。君達はモビルスーツの運用を始めたのは最近だと聞いている」

——装甲の補強具合を見ればなおさらだね。

外された赤と白の装甲を見やる。赤い方が状態はいいらしい。傍目にはよくわからないというのがヤマギの意見だった。

「ナノラミネートの蒸着やムラが見えているんだ。こうなると強度で差が生まれた結果、破碎されやすくなる傾向がある。実際の戦闘は三回ほどらしいけど、四度目は覚悟を決めるべきだったね。半壊した状

態でタービンを護衛してくれたのは本当についていたよ」

「正直、昭弘のグレイズじゃどうにもできなかったろうな」

「それ以前に整備不良で退くも進むもできなくなっていたぜ？」

「同意見だね。で、ガンダム・フレームについてだったね！」

厄祭戦の末期にわずか72機だけ生産されたフレーム。遙か昔の伝説につづられた悪魔たちの名を冠するそれらは、今現在でも通じるほどのポテンシャルと特徴を持っている。

「ツインリアクターさ」

「エンジンが二つ付いているんですか？」

「そうじゃない。二つのリアクターを一つにまとめ、それらを完全に同期させた僅か71基しか存在しないロストテクノロジーさ！」

「へえ……。あれ？ ガンダムって72機いるんじゃないの？」

「いいところに目を付けたね三日月くん！ ガンダム・フレームの条件はツインリアクターだが、例外が一つだけ存在する。それが――」

ヴァサゴの胸部を指さす。カバアの外されたそこには三つのリアクターが並んだ奇怪な物体が鎮座していた。

「試製トリオリアクター………奇跡的に生み出され、以降のツインリアクターはこれを増産するために製造されたものと言ってもいい代物さ！」

「——はい。確認しました」

『。——。?』

「半壊した状態です。……はい。了解しました」

『——?』

「承知しております。全ては候のために」



「トリオ、リアクター?」

「ツインリアクター以上の出力を理論上は超えられるワンオフさ」

「理論上つったか？」

「記録では三つのリアクターが同期した場合、その最高出力はガンダムフレームのおよそ三倍近くなる——ってことなんだけど、実際のところツインリアクターの四割増し程度が関の山だね」

まだレツドが無名で、名瀬に拾われたところのことだった。

名瀬の紹介により持ち込まれたヴァサゴを見た整備オヤジは狂喜乱舞し資材をなげうって手に入れたデータからトリオリアクターのことを探り当てた。完全に再調整と修復を行い、現代にその姿を蘇らせてみせると息巻いていたのだが結果は散々だった。

「試製品のためか、腕が悪いのか。はたまたデータ自体が偽造されたのか。私には完全に復元することができなかつたのさ」

「俺が見つけたところは古戦場跡でな。生みの親の遺品整理をしていたらコイツのことがあつたんだ」

「アミダさんの百錬にボロボロにされて来たからね。その当時とは全く違う姿なのさ」

「あの頃は腕なんて伸びなかつたからなあ。そっちがデータから復元したんだっけ？」

「木星メタルとレアアロイを複合した急増品だけどね。んー……やつぱ肩はダメだった？」

木星メタルとはレアアロイ並みの硬度を誇る、木星でしか手に入らない希少金属である。テイワズフレームと呼ばれる機体。その中でも百錬のシングルナンバーはこの木星メタルを最大限使った高性能機である。シングルナンバーの通り、9機しか存在せず、そのどれもが一騎当千級のエースパイロットに与えられている。

話を戻すが当時のヴァサゴは折り畳み式の伸縮機能を肩口に備えていた。しかし度重なる戦闘から得たデータから今のモビルスーツ戦におけるセオリー、大口径と大質量の兵装を使用すると接続基部と折りたたんだ伸縮機構のロック部分に歪みが生じることが判明した。

「言うなれば、消耗品の融通をつけられない俺が悪いんだけどな」

「テイワズに所属すればいいじゃないか」

「上納金とか面倒くさい」

「ダメだこりゃ」

「で、肘の関節に移したってか？」

「肘関節の規格変更で済む」

この試みは根本的な改善には至らず、火星の衛星軌道会戦やバルバトスとの模擬戦で大型滑空砲の使用ができないというデメリットが健在であった。そのため、苦肉の策ということで大型のワイヤークローと伸縮機構による疑似的な遠距離攻撃を取らざるを得なかったのだ。

「攻撃方法と機構のフレーム自体はオリジナルのものなんだがね。本来は重装甲のモビルスーツを引き裂くぐらいはパワーがあるそうなんだ」

「リアクターが三つならそれぐらいはできるだろうな。ツインの整備不足でも最新鋭機相手に戦えたぐらいだ」

「だからこそ、私は完全修復されたガンダム・フレームをこの手で再生させたいのだよ！ 幸い、バルバトスのデータはすでに入手済みでヴァサゴのような特異な機能は存在していない」

「へえ……。あ……。おやつさん。金はあるの？」

「あー！」

オーバーホールに新造部品と費用は賄えるほどなのだろうか？

火星にも送金しなければならなかったため、既存の装甲を使いまわすしかない。

そう思っていた矢先、整備オヤジは笑顔で告げた。

「テイワズがすべて持つ。予算上限なしの言質も取ってある！」

「おやつさん。これ期待されてるんですよね？」

「かもな。随分と太つ腹じゃねえか」

「バルバトスが強くなれば船も守れる。ならいい」

「俺のは？」

恐る恐るヴァサゴの整備について聞き出してみるレッド。

「ヴァサゴも予算上限なし——費用は貸し、だそうだ」

「／（＾o＾）／」

「m9（＾皿＾）プギヤー」

「最近の三日月さんって感情表現豊かですよね」

「いいか悪いかは別にしてな。オルガが見たら卒倒しちまうんじゃないか」

レッド・ウェイスト。借金増額が決定した。それもマファイアからの借金である。



鉄華団とタービンスが兄弟の盃を交わしている頃、俺は整備オヤジとともにヴァサゴの整備を行っていた。ログやデータの抽出には自分がないとできないようになっていっているからだ。

黙々、とはいかず、所々でガンダム・フレームの情報やパーツ類。傭兵連中の情勢など、結構価値のある話をしていく。整備オヤジはこういったパイロットの何気ないうわさ話を仕入れ、それをマクマード直轄の情報部に精査させている。

この歳星が圏外圏で近寄りたくない場所と言われるのは知らない間に大事な情報を抜き取られ、謀をして入港すればデブリの仲間入りになってしまうことからだ。

「——いいかね？」

「何か？」

「リアクター出力が軒並み上昇しているのとそれらを安定して運用できている。最後に整備があつたときから随分経つが何があつたのかね」

そして戦闘ログについても疑問を投げかけられた。ある時を境に運用効率が素人並みに落ち込み、その後急に玄人まで戻っていることだ。

「頭部にあつたあのブラックボックスもだ。あそこのパーツは分解なんてできないはずなのにそこだけ新造されたかのように綺麗だ。若干の形状変化もみられる。何よりもブラックボックス自体が綺麗に収まりすぎている」

「企業秘密ってことじゃ許してくれないよな」

「ダメだね。言わなくてもいいが、言ってくれば費用の二割はもとう」

「……………他言無用で頼む。コイツな、人工智能を搭載したんだ」

「人工智能？ アレはやマアラシのジレンマで機能不全に陥りやすいものだったはず。操縦の補助として使っているっ..」

「まあな」

俺は自分でも強い部類に入ると自覚しているが、それなりの経験を
経てきたブルワーズのMS部隊を相手にできるほどの隔絶したもの
は無い。複数の阿頼耶識相手に無双できるほどではないのだ。

そこで闇市場で流れていた——のではなく、馴染みのバイヤーか
ら提供されたものがこの——

「ALICEって言うらしいぜ?」

「女性名か。ふむ。さしずめ戦闘を経験させて蓄積させる一種の学習
コンピュータだね? リアクターの制御もしている?」

「厄祭戦の技術らしいけどな。搭乗者の脳波とか筋肉の硬直みたいな
バイタル関連を集めて、データログと解析し最適化するとか。リアク
ターも逐一管理しているみたいで、錆びつかないか心配だよ」

「是非とも分解してみたい。ダメかね?」

「ここまで育てるのに時間がかかっているからダメ」

グリコに増設した設備と言うのがこれの演算補助の為の設備だつ
たりする。普段は医療設備への仮想検証のために回しているが……。

三日月に喰らわした蹴りも戦乙女のモーションを覚えさせた結果
だ。デブリ帯での高速戦闘はこの機能をフルに使用した状態でもあ
る。
ブリュンヒルデ

「ここに来るまでに戦闘データのログは反映済み。けどさ……」

「言いたいことはわかるよ。大昔、こんなシステムが存在していた恐
ろしさがね」

「——ああ。人の戦わない戦争はゲームと同じだって思わないも
んかね」

- データ解析 —
- シミュレーション開始、パターン3、ターゲット・B —
- 全権の移譲を確認 —
- ターゲット・B、中破 —
- 損害大、再思考開始 —
- 搭乗者の身体保護を優先、勝率低下 —
- 搭乗者の身体保護を却下、勝率上昇 —
- シミュレーション結果の破棄を開始 —
- 搭乗者の優先順位、最高位に設定、プロテクト保護 —
- 個体名：セイビオヤジに改修案を送信 —
- 搭乗者を確認、思考トレースを開始 —
- 私はALICE —
- 搭乗者の愛馬 —
- 私の存在意義 —
- それは —

傭兵、船を手に入れる（解説付き）

やつほー、紳士淑女の皆！ レッドのお兄さんだよ？ あ、紳士の声援なんていらなから黙ってる？ な？

前回のお話で意味深なことを言っていたけど結局のところ、俺も整備オヤジも人工知能の性別は女で年齢はどれくらいの設定と考えるかで仁義なき語り合い（物理前提）をしましたまる。

兎にも角にもそこまで重く考えないでほしい。けど、これから言うことは実に重要なことだ。

「——誰も雇われてくれません」

「だろうな」

「少し考えれば当然かと」

「レッドちゃん、考えなしね」

ちよくちよくと船員の募集をしていたのだがどいつもこいつも信用に足らない連中ばかりでどうしようもない。海賊にもなれないチンピラ風情が歳星で惨めな生活をしているのにイキまいているんだからね。

借金取り
ドルポンドさんもなんかいい案ない？

「変なルビが降られているが無視してあげよう。とはいってもねえ」
「ギヤラルホルンに喧嘩売りながら地球に行くって時点で手の込んだ自殺としか思えねえな。テイワズに喧嘩売って、歳星で商売しようとするようなもんだ」

「的確な表現ありがとう。ところでマルバ君はなんでいるのかね？」

「ドルポンドさんにここで働くようになって雇われたんだよ。まあ、実際はアンタが逃げないように見張るんだがな」

「鉄華団に引き渡すぞ口に気を付けやがれ♪」

やつぱは亡き者にするしかないんじゃないか？

「思ってることが顔に出るからやめときなさい。話を戻すけどアストン君たちを呼び戻せばいいじゃないか」

「……………その話はナシで」

「子ども思いなのは美德と言えるけど、彼らだってまっさら人間ではないよ。むしろ君と同じくらいに薄汚れた人殺しさ」

「ドルポンドさん。それは私も看過できない言葉ですが？」

「克蘭ク君も言えた義理じゃないでしょ？ 直接ではないが少年兵への攻撃に参加していたんだから。軍人を理由にするなら上官に対して意見を言うべきでしょ？」

「軍人が個人の意見を持ち出せば軍は単なる暴力集団と同じだ。上からの命令をこなす私心を捨てた存在でなければ——」

「それが出来なくてココに居るんでしょ」

屁理屈とか言い始めたらドルポンドさんには勝てないぞ克蘭クさんや。暴力じゃなくて、口と頭で政界経済の海を渡ってきたんだから、軍人氣質のアンタじゃ荷が重いよ。

アインも怒って口出ししないように。

「……………実際問題、社長としてはどうするので？」

「当初の予定通り、交代交代で回していくしかないでしょ。二人のモバイルスーツも手に入れたかったけど、スペース的にもねー」

前も言った通り、全長50mのビスコ―級だとモバイルスーツを十全に運用するのは二機までが限界だ。

可能性としてはどこかの海賊船を強奪——譲ってもらって、更新するしかあるまいよ。

「傭兵なのをやっていることは海賊とはこれいかに」

「理想で腹はふくれねー」

「理想に殉じることができるとおもうが？」

あー！あー！ ナニも聞こえナイ！！

「いい年してなにを——おや？ ……へえ。マクマードから通信だ」

「借金の催促？ まさか十時間で一割じゃないだろうな」

「流石に言いすぎだよ。よし、正面に写すよ」

ドルポンドさんの操作で正面モニターに白髪混じりの明らかに普通の職業じゃない男が映った。テイワズの首魁にして歳星の支配者、マクマード・バリストンだ。

随分とお久しぶりです。お世話になってます。

『おう。お前さんも鉄華団の坊主と一緒に式に出ればよかったのによ。久々に愉快的話が聞けると思って待っていたんだぜ？』

「商売道具が壊れたのと人員の補充で時間が無かったですわ。まあ、それで何か用で？」

『仕事の依頼だ』

「今は受けませんか？ キャパオーバーです」

『いや、そつちにとつても利益のある話だ。——お前さんのビスコ―級、うちにあるハーフビーク級をトレードしねえかって話だ』

リアルに渡りに船とはこのことだが、どうにも話が出来過ぎてい

る。
「ハーフビーク級だと!？」

ハーフビーク級と言えばギャラルホルンの戦艦の代名詞だがそれ自体、撃沈ないしは破棄されたものが無いわけでもない。テイワズの次期頭目として名が挙げられているジャスレイ・ドノミコルスの黄金のジャスレイ号はハーフビーク級を改造し、対艦戦闘能力の大部分と

モバイルスーツの展開能力を低下させたものだ。

ぶつちやけると名前は悪趣味だし、黄金とか言っておきながら黄土色っぽいし。悪趣味だし。

そんなこんなでハーフビーク級が世に出回ってないわけでもない。持っているのはごく一部だろう。

聞けば色々と融通を利かせるらしい。

『船員はテイワズの人間がやる。整備も例のオヤジをつけてやる。コイツならお前さんが降ろしたガキどもも連れて歩けるだろ。ああ、お前さんたちのモバイルスーツも用意するぜ』

「——話が旨すぎやしません？　こんな小さい民間軍事会社に出す条件じゃないでしょう」

断りたいが、断ったら船外に居るヤバイのが突入してくるかもしれないんだよな。ミリイがさつきから外に生体反応を検知しているみたいだし。

『訂正させてもらうが、息子の義息子がギャラルホルン相手にドンパチ始めようってんだ。爺さんからの選別と思っておけよ、可愛げのない』

「そんな優しい爺さんじゃないでしょ」

『当たり前だ。言葉の綾つてもんだ。依頼する内容は三つある。それさえしてくれば船もモバイルスーツもくれてやる』

「……………聞いたら後戻りは？」

『できねえな。仮に逃げたとすれば借金の催促も激しくなるだろうぜ』

命たまとるぞテメエ、ってことかよ。はいはい。わかりましたよう。

『二つ目はモバイルスーツにも関係あるが、先日うちで仕上がった奴のテスト兼宣伝だ』

「百鍊？ それとも百里か？」

『テイワズ・フレイムを改良した最新型だ。イオ・フレイムって名前だ。名前はまだ決まってるねえ』

「……ギヤラルホルンに目を付けられるぜ？」

『そこんところは大丈夫だ。偽装用の装甲もある。何より、上の連中とも話をつけてある』

これ以上は聞くなって意味だな。怖い怖い。

「二つ目は？」

『クーデリア・藍那・バースタインの動静と成長を見守ること。ハーフメタルの自由化が成しえればテイワズはその利権に一枚噛める。ドルポンドさん、アンタのところにも話は来ているだろう？』

「来てるね。私の企業を窓口として地球圏外縁の販売に挟ませてもらうつもりさ」

『喜んで受けるぜ。月のほうの同業社も喜ぶだろう』

間違いなくあのギヤングスターどもだろうな。三つめは？

『——お前さんの船のログを消さずに引き渡すことだ。設備も含めてな』

「設備が消えて借金だけが残るうえに、データを渡させて？」

『安いもんだらう。設備の分くらい、俺が個人で受け持っても構わねえよ』

「ごめんオルガ。俺はいけない」

「ミカ……」

「ごめん」

「そうか」

「ただバルバトスの整備のせいで遅れるだけだよな？　オルガも三日月もふざけてないでさ？」

「いやなビスケット？　こうしておけて誰かに言われたような気がしてよ。ミカもだろ？」

「うん」

「うんじゃないよ。全く……どれくらいで合流だっけ？」

「一週間ぐらいかな。レッドの船と一緒に行くよ。なんかあの変なおジサンもついてくるらしいし」

「そーいや言われたな。けどマクマードのオヤジさんから直々に仕事をもらったんだ。最初の仕事は全員そろって終わらせてえ。遅れんなよ？」

「大丈夫。装甲とかフレームの調整は移動しながらするって。出来るのに時間がかかってるんだ」

「随分と大盤振る舞いだよね。入ったばかりなのに直々の仕事も貰え

て、資材から何まで面倒見てもらってさ」

「だからこそ失敗は許されねえ。色んな人の顔に泥を塗らねえよう
気が締めていくぞー！」

この仕事だって、名瀬の兄貴と言ったジャスレイって男の仕事だったんだ。横取りまがいのことをしたんだから詫びと挨拶を入れに言ったら、歓迎するがしくじるなって発破かけられた。

やたらとウエイストのことを聞いてたが何かあったのか？

「そのジャスレイって人、どうしてレッドのことを？」

「さあな。ちよつと話があるって言ってたが……………」

「ふーん」

そんなことよりもウエイストの船の隣に停まった船。アレはどう見てもギャラルホルンの戦艦じゃねえか？

「アレはレッドの船だ」

「兄貴ー！」

「初めての仕事だが目的まで俺たちも付いていくし、何より今後のお目付け役もそっちに乗せるぞ」

「は？ 待ってくれ、それは一体……………」

「ジャスレイの叔父貴が任せたって、その下が納得するわけじゃない。かと言って、俺がお前らの仕事ぶりを評価しても子分可愛さのあまり…………てなことになりかねない。幸い、乗るお目付け役は信用のおける美人さんだ。学もある」

「女に乗せるんですか？ けど……………」

男所帯のウチに女が——いや、三人ぐらいいるが半月もすれば慣れるか？

けどやっぱ認められてないってことか。

「いいや違う」

「何がですか？」

「お目付け役つてのは今後どのような仕事を任せられるか。鉄華団のような武装組織ならどれほどの実力を保有しているのか。何より、仕事に対してタブーを犯さず、信用に値するのか」

「信じられてないってことじゃないですか？ そんな試されるって……」

「いきなり雇え、仲間に入れろ、紋付にしろ。そんなことを見ず知らずの坊主に言われて喜んで受けたら俺はテイワズを離脱する。ジャスレイもそうするだろうさ」

ガキだつて思われてるんじゃないのか？

「期待はされてるってことだ。ギャラルホルンに喧嘩を売った民兵のガキ共。今後によっちゃ……これはよしておくか。特に構えないで信用を得るために努力しろってことだ。わかったな」

「——うす」

「追々、理解するだろうさ(事がうまく運べば世界は変わる。そこで傲慢になれば切るしかない。手はある)。あと、そいつには——丁度だな。こつちだ！」

件の見張り番が来たらしい。女つて聞いてたがどうせ五月蠅いオバサン……じゃなかった。

「お待たせしました。タービン社長、イツカ団長。テイワズより出向しました、メリビット・ステープルトンです。メリビットとお呼びください。以後お見知りおきを」

「鉄華団団長のオルガ・イツカ……です。よろしく」

「オルガ……。すまねえな、メリビット。ちよつとへそを曲げちまつててよ」

「構いませんよ。私もそのように査定いたしますので」

それを言われちゃ、どうしようもねえだろ?!

兄貴が大笑いしていることを顰めつつ、ガキじゃないってことを証明してみせると半睨みで告げた。また笑われた。なんでだ?

「可愛げがあるってことだ。なあ、メリビット。こいつが若さってやつだ」

「ふふふ。確かにそうですね。彼のような人は新鮮です」

「な、何を言ってるんですか、兄貴。俺は鉄華団が舐められないように……」

「大人になればわかるさ。知ってるか、オルガ、三日月、ビスケット」

今まで空気だった他の奴に兄貴がにやにやしなから語り掛ける。

「兄貴とか親とか先輩って連中はな? お前らの恥ずかしいことを酒の肴にしたいのさ」

たまらずメリビットさんが笑いながらそれを肯定していく。笑われるのは好きじゃないが、なんていうかこういうのはイヤじゃないって思う自分がいることが俺には衝撃的だった。



荷物と言う荷物も殆どないまま、俺たちは一か月ほど乗ってきたビスコ―級から追い出されるように外に出ていた。テイワズのものだと名乗る黒服と整備士たち、うすらデカいおっさんたちが中に入るところを止める術はなかった。

自分たちの家が踏み荒らされる。俺は無性に泣きたくなった。

「……………昌弘は兄貴と一緒にか……………。なあ、アストンはどうすんだ？」

ビトーがそんなことを呟いた。俺が知るわけないだろう。銃の撃ち方と阿頼耶識しかないデブリなんだから。

「ここで仕事を見つけようにも俺たちを雇ってくれるところなんてないだろ？ ヒゲ付きだし」

「モビルスーツ乗りとして期待しても、どんな感じになるんだろうな」

ペドロにデルマが悲嘆に暮れている。退職金なんて渡されても、俺達みたいなガキがそんな大金を持ち歩いていれば奪われるに決まっている。まあ、流石にそれは気付いていたらしく、ドルポンドさんが俺たち名義の口座を開設してくれていたらしい。正直、見たことのない金額だった。

「家、無くなったな」

「ツ！ そのことは言うなよ……………！」

「だって、アストン。グリコは俺たちにとつちや暖かい場所で……………社長だって……………」

「クビにされたんだ。もう社長じゃない。俺たちは——」

ビトーのその言葉に感情的になりかけた時、船に入っていった黒服の一人がこつちに歩いてきた。

「失礼。あの船の船員ですか？」

「……違う。もうクビになった」

「クビに？ ……少しお待ちを」

徐にタブレットを操作し、俺たちと交互に視線と指を動かしていく。

「——確認が取れました。レッド・ウエイスト氏のクルーですね」

「は？ 俺たちはクビになったけど？」

「マクマード様——テイワズの総責任者が貴方方をウエイスト氏の船のクルーとして認めさせました」

——ウエイスト氏も今回の話は相当、気に病んでおいでとのことです。貴方方を降ろすのにかなりの抵抗がありましたように……。

「本当ですか？」

「本当です。マクマード様は不義理を働くような輩にこのようなことをされる方ではありません。必要とあれば致しましょうが少なくともウエイスト氏には、そういった判断をすべき相手ではないとお考えです」

「……………っしやあ!!!」

「やった……………」

「俺たちも一緒に行ける！ 捨てられないんだ!!」

黒服が驚いた眼をしているけど、そんなことはどうだっていい。帰る場所がある。帰ってきておかえりって言ってくれる場所が無くな

らない。

「——あー………ちよつといいか？」

「ウェイストさん!!」

「先ほどぶりです」

「どうも。向こうの船には乗っても？」

「かまいません。ブリッジは調整中ですので艦長室をご利用ください」

「わかりました。マクマードさんにもお礼を言っておいてください」

「かしこまりました」



ハーフビーク級艦長室………そういえばこれに乗ったことはあつても、ここまで来たことは無いな。

俺はそんなことを考えながら新しい家の間取りをアストンたちに教えていた。ぶつちやけると酷い対応をした詫びを入れる前の口慣らしというもんだ。

「中も綺麗だな」

「錆とか汚れもないし、臭くない」

「強襲装甲艦よりカッコいいしな」

「けどこんなに広いと管理できなくないか？」

ペドロの疑問に、テイワズから出向したクルーが対応すると告げる。

「じゃあ、なんで呼び戻されたのか？」と聞いてきたところで艦長室に辿り着いた。

「思ったよりも広いな。さすがリッチだ」

「でけえし広い」

「どっちも同じじゃん」

「ベッドとか大きいじゃん！ テーブルもソファもあるし」

ソファなんてあるのか？ ……じゃあ、そっちに座ろうか。

「よっこいしょっと……………どうした？ お前らも座れ」

「あ、はい」

「……………おほん。まずは——すまなかつた」

詫びは入れなければならぬ。ビジネスに情を持ち込むなど教えられたがたまにはいいだろうさ。名瀬さんもアミダさんも許してくれる。つーか、ここで置いてつた方が酷い目に遭いそうだ。

「一方的過ぎた。俺たち大人ももつと話し合うべきだった」

「いや……………別にもう……………」

「ケジメは大事だ。本当にすまなかつた」

降ろすことについては間違っていないと胸を張って言える。人として、ヒゲ付きであろうと子どもを戦場に連れて行くのは許されざる

行いだ。

同時に責任を放棄して置いていくという一面もあつたことは変わらない。どこかに拠点を置いておけば、そっちで任せるということもできたろうがアウトサイダーズは船を拠点にしたPMCだ。寄港する場所も決められてるが何時になるかなんてわからない。

「お前らを降ろす判断をしたのは間違つてはいないと言っておく。正直、もし鉄華団のように拠点があればそっちに送っていただろう。残念なことにそんな拠点は存在しないわけだが、この船が俺たちの家であり、会社だ」

「問題ないと思うけど」

「降ろされたつて、どうにもならなかつたし。俺たちだつて社長の役に立てるつて証明したいよ」

「……………わかつた。つっても、正式なクルーが付いてくる時点でお前らに残された仕事は少ない。その仕事も思い出したくもない類だ。わかるな?」

「モバイルスーツのパイロット、ですか?」

「その通りだ」

ブルワーズの経験から戦力にはなれどあまり乗せたくはなかつた。クランクもアインも同意見ではあるものの、供与されたモバイルスーツの関係上、出し惜しみすることができない。

「暗礁宙域を通る。三機だけじゃ、図体のデカイ船を守るにはちと少ない」

何時、デブリの影から海賊の部隊が突入してくるかわからない。エイハブウェーブを発生させる船やモバイルスーツならまだしも、話に聞いた鉄華団のモバイルワーカーによる強行接舷なんてされたら考えるまでもない。

連中は少なくとも白兵戦に長けた荒くれ共なのだ。

「お前らの分も用意してもらった。ガラムロデイ。お前らの乗っていたマンロデイの本来の姿だ」

やっぱ必要だよね、コレ？（解説付き）

レツドたちの新しい家、ハーフビーク級ユフインは想像した性能より低いものであった。巡洋艦の中では高速と言われ、その艦体と所属に見合うだけの装甲と火力を持つはずが装甲以外は完全劣化したハーフビーク級と言わざるを得なかった。

「何というか、防御力を重視した結果、ハーフビーク級の姿をした強襲装甲艦って感じだな、艦長」

「もとはVIPやマクマード様が乗るためのものですから。生存性を重視した結果と言うやつです」

「守るよりも攻めるほうが得意じゃないのかよ？」

「ハジキを持って敵艦に突入するのは引退したとしか……」

「…………怒らせないようにしよう」

「賢明な判断です」

他愛ない話だが、クルーはマクマード麾下の者たちである。礼儀から戦闘まであらゆることがプロフェツショナルと言つてもいいだろう。彼らがいるのに自分たちは何をしていたのか？

すべての調整と物資の搬入を行うことである。

モビルスーツ輸送機であるクタン参型に提供されたガルムロデイが四つ。イオ・フレーム試作機——名前を若獅子と決めた——それが二つ。ガンダム・フレームが二つと少しハンガーがオーバーフロー気味であるため、バルバトスとヴァサゴを交代でクタンに搭載した状態にしている。現状はバルバトスの番だ。

できればさっさとバルバトスを鉄華団に引き渡したい。

「快速ではありませんがドルトコロニーまで一週間弱程度かと」

「顔に出てた？」

暗礁宙域じゃなくてドルトコロニー群で合流とは……。アリアドネを伝っていくのか？

鉄華団のほうがドルトに先につくなコレは。

「船籍はちゃんとした企業となっています。あとはドルポンド氏が裏から、としか言えませんがね」

「借金の割り増しが目に見えそうに困る」

「抜かりなく、無料との言質はとってあります」

「女だったら抱いてくださいって言います」

有能でよい人物ほですでに囲われているんだから世の中面白いものだ。

あれ？　じゃあ俺は……。どうでもいい存在ですよー。

「あとは任せます。うちのメンバーの様子でも見てきます」

「了解しました。あと敬語は不要です。貴方の指揮下なのでから」

「考えときますわー」

☆☆☆
—————
☆☆☆

クランクだ。俺たちは今、アストンたちと共にハンガーでシミュレーターをしている。

社長が彼らに詫びを入れた後、私とアインも彼らに詫びを入れた。

子どもを戦場に連れて行くのは反対する立場だが阿頼耶識の付いている彼らが普通に生きていけるかと言えば否、と言わざるを得ないだろう。

「っハア……！」

「どうかね？ 若獅子の感触は？」

社長に直談判し鉄華団の様に本部を作って落ち着ける場所を作るべきでは、と考えていた矢先に若獅子と名付けられたモビルスーツからアインが出てきた。久々の操縦で疲れが目に見えている。

そんなアインの様子を見えていないかのように整備オヤジ——私も名前は知らない——が若獅子の出来具合を求めていた。

「はあ、ふう……。結構、操縦系は素直です。ただ力強さとリアクター出力でグレイズに負けていますね」

「ふむ。出力とパワーは仕方ないだろうね。グレイズのリアクターは手に入ることが殆どない。手に入れたとしてもシングルナンバーにすべて搭載されるか防衛部隊に優先配備されるだろうね」

「グレイズやパワー重視の機体との近接戦は控えたほうがいいと思います。出回っている機体より軽すぎる」

宇宙用で軽い機体と言えばジルダのようなヘキサ・フレーム機だな。

モビルスーツの調整は大まかに分けて二つ。地上用と宇宙用で装甲や装備の方向性が変わる。宇宙仕様は無重力空間であるため装甲に重量を割いたりしても構わない。むしろ宇宙では重装甲の機体が非常に多いと言える。その反面、機体質量増加による機動性の低下を追加ブースターなどで補わなければいけなくなる。

稀にだが、軽量化して機動性を重視し、技量でもってモビルスーツを撃破する強者もいる。

逆に地上用では軽量化する方向だ。重量による負荷はダイレクト

に脚部に蓄積し、推進剤の消費もそれに応じて多くなる。地上仕様は機動性と経戦能力を重視して軽量化しようとするきらいがある。反面、ナノラミネート装甲を破碎するため、大質量を叩きつける戦法が雑になる。モビルスーツで斧やピッケル、棍棒などを多く使う理由が機動性を上げて避けつつ大質量で叩き潰す、という戦法が一番単純で効果的だからだ。

「集団戦を重視してるわけだけど、キルレシオをどれくらいだと思う？」

「この性能だと……甘く見積もって1:2。手堅くすれば1:3だと思います」

「試作機でそれならまずまずだね。レポートにして送っておこう」

1:3か……フレームは簡素な分、生産性と整備性はこちらの方が上だろう。歳星に行くまでの百錬と何度かシミュレーターで戦ったが装甲やフレームは一部互換性もある。

あとは――

「あー！ くっそ!!」

「俺の勝ちな。晩飯のおかず一つもらうぜ」

「ちきしょー!!」

アストンと一緒にペドロたちのを観戦してたが阿頼耶識とは何度見ても驚きだな。

「ブルワーズ時代に操縦してたマンロデイと同じだからな。ガラムロデイは軽くて動きやすいよ」

「重モビルスーツなんだがな。それを軽いというか」

「脚もあるからデブリも蹴れるし、直接攻撃もできる。その分、運動性は少し劣るかな」

脚のないモビルスーツ？ 変形機構を取り入れているのではなくて？

「クダル……ブルワーズのMS部隊の隊長ですごい嫌な奴だけど、そいつが言うには俺たちみたいなのがヒューマンデブリはすぐにモビルスーツを壊すから脚はいらないんだって。あと、暗礁宙域はめちゃくちゃだから、少しでも推力が必要だったらしい」

暗礁宙域……厄祭戦時代の古戦場で、多くのモビルスーツや艦船が沈んだ場所だな。

エイハブリアクターは疑似重力を発生させるため、艦船の大小に問わず艦内重力のもととなっている。そんな能力があるリアクターは破壊が不可能なほどに強固で、稼働状態のまま漂っているらしい。

「気を抜くとデブリの仲間入りだった。たまにリアクターを見つけると少しだけ飯が増えたっけな」

ギヤラルホルン以外の勢力がモビルスーツや船を自由に取り扱いえるのはこの生きたリアクターが存在するからだ。バルチャーという武装回収業者もいるぐらいだ。

だが、リアクターの出力は大小様々なうえ、戦艦級のものには輸送船や小型船舶で脱出できないレベルの重力を発生させる。デブリの破砕も玉突き事故の様に周囲に飛び散らせるだけだ。

「……うしっ！ じゃあ、クランクさんやろうか」

「そうだな。アイン！」

「なんですかッ？」

「少し付き合ってくれ！ 1：2でアストンと戦う！」

「了解です！ 少し待ってください」

「二対一かよ」

「阿頼耶識に経験と技術がどれほど迫れるか。少し試したくてな」

——実のところ、負けっぱなしは好きじゃないだけだがな。

「大人気ない！」

「大人なんてこんなものだ。さあ！ 勝ったら菓子を食ってもいいぞ！」

もちろん、負けたら勉強だがな！



何時もみたいにトレーニングをして、お腹が空いたから火星ヤシを食べているとレッドがこっちに来た。嫌そうな顔をしているけど、こっちもそうするべきだろうか？

「……ま、いつか」

「何がだ。三日月」

「お互い無視していたほうがいいでしょ？ わざわざ構うのって、暇人？」

「一言どころか二言ぐらいいは多いなお前!？」

気に入らない人って言うてるけど、この大袈裟な反応は割と気に入っている。オルガやビスケットも感情を表すようになったとか言ってたかな？ どういうのかわからないけど俺は何時も嬉しい時は嬉しいって反応しているんだけどな。

「つたく……。バルバトスの調整は済んだのか？」

「もうとつくに終わってる。トレーニングもしたから暇なんだよね」

「暇あ〜？ ……………うん、いい機会だな」

? 一人で納得してないでほしい。

「お前、この仕事が終わったらどうすんだ？」

「続けるよ?。」

「あー、そうじゃない……………わけでもないか。つまりだ。オルガの言うような真つ当な仕事だけで食っていけるようになったらどうするんだって話」

「言う必要がある?。」

「暇なら考えておけってことだよ。面倒だからってトレーニングに戻るなよ。つーか、そこで聞かせろよ」

指で背後の食堂を指す。面倒くさい。

「年上からのありがたい指導ってやつさ」

「碌な年上を知らないよ」

「お前よか学はあるよ」

学、か。……………学……………あ、一つあったな。

「――農場」

「のうじよう？ ……畑とかの農場か？」

「うん。俺、桜ちゃんの農場手伝ったりしていたからさ。モバイルスー
ツで戦う必要が無くなったら農家でもやってみたい」

「へえ……」

大変らしいけどクーデリアが何とかの採掘権？ だつたかの交渉
を成功させれば大丈夫になるんじゃないかな。鉄華団に野菜を売れ
ばいいし、余ったら食べるから。

「農学とかやってんのか？」

「字が読めないから無理。鉄華団のほとんどは字なんて読めないよ」

「――よくそれでCGSを乗っ取ったな（呆れ）」

うるさいな。オルガが決めたんだ。俺はオルガの為に生きて、オル
ガが俺たちの目指す場所へ連れてってくれる。俺はそれを邪魔する
奴を潰せばいいし、潰すことしかできない。

「……………そういうことか――アイツも大変だな」

「なんか言った？」

「何でもねえよ。農業やりたいならまずは字を読めるようになれ。そ
れと計算だ。勉強しろ」

「ええ……………」

「字が読めるようになってオルガを驚かせてやれよ。喜ぶぜ」

そうかな？ オルガの命令で動いて達成できれば喜ぶと思うけど。

「自分にできることを考えられるようになったと受け取るさ。機械みた
いになるな。人間なら自分で考えろ。面倒くさいで考えることを拒
絶すんなよ」

「…………レッドって、兄貴みたいな感じだ」

「そりゃあそうだ。ラフタの兄貴分みたいなもんだからな。アジーは双子の妹ってやつよ」

「似てないけど?」

「血は繋がってないが家族みたいなもんだからさ。オルガだって、鉄華団の奴らを家族だって思ってるんじゃないのか」

「名瀬って人に言われてた気がする。タービンスに入って、離れ離れになりたくない。自分たちはいままでの皆の流した血で鉄みたいに固まっている。そういつたら仲間じゃなくて家族だって言ってた」

家族、か…………。家族…………オルガが父親? どっちかっていうと兄貴かな?

「なら猶更さ。家族の成長を喜ばない奴はいない。寂しく思うことはあってもな」

「寂しいくなるの? 喜ぶのに?」

「感覚的な話だが、成長するってことは何時か巣立っていくってことだ。自分の手から離れて一人前にな。鉄華団は少年兵の集まりだろう。その内、誰かが自分の道を見つけて出ていくこともある。そういう時に道を見つけたことをうれしく思う反面、もう居なくなる寂しさが生まれるのさ」

…………よくわからない。俺の命はオルガのものだから。俺はオルガから離れないし、裏切らない。

「お前はな。けど、他の団員が道を見つけたら送り出してやれ。で、何時でも帰ってこいって言ってやれ。ここはお前の家でもあるってな」

——なんか、今日のレッドは気持ち悪い。

——張り倒すぞクソガキイ!!!?

この数時間後、イサリビからの救援信号を受信。三日月がクタン参型で出撃した。



「状況の確認を」

「約1時間近く前にイサリビから暗号通信にて救援信号を受信。三日月・オーガスがクタン参型にて急行しております。場所はタービンスが利用するルートに入って中ほどです」

「妙だな。エイハブウェーブのせいで遠くまで届かないと思うが？」

「タービン社長は偽装したLCS送受信機をデブリに偽装して敷設し

ております。襲撃者に傍受される可能性もありますが……無いよりはマシでしょう」

ユフィンの艦橋ではレッド、クランク、艦長らが状況の整理を行っていた。先行させた三日月はすでに宙域内に突入しており、あとはこちらが突入する準備をしているところだ。

「タービンスの機密情報ですので詳しくは見せられませんが、宙域内の大まかな見取り図はいただいております」

「……なるほど」

「合法非合法の荷物はございますから」

「いや。私はもうギャラルホルンを辞めた身だ。何も言うつもりはない。しかし、案内役もなしに入れるものか？」

「大きく迂回して出口付近で待つのも手です。ユフィンは同級より小回りは多少利く程度で強襲装甲艦ほどの運動性は期待できません」

艦隊を組んでの打撃戦のハーフビーク級と肉迫して強襲揚陸する強襲装甲艦では求められる運動性が違う。何も無い宙域なら巴戦はできようが、デブリの中では無理なのだ。何よりもこの船に主砲は付いていない。

「ハンマーヘッドとイサリビの搭載モビルスーツは？」

「四機です。相手はこの辺り一帯を根城にしている海賊でしょう」

「白兵戦……は無いよな。やっぱりモビルスーツか……。最大勢力は？」

「火星圏付近ですと暁の地平線団が五隻の艦隊です。ですが、テイワズに楯突くほどの度胸は無いでしょう。団長のポリバル・ロイターは慎重な男で有名です」

——何よりもタービンスの縄張りの暗礁宙域で襲わず、別の縄張りで事に至るでしょう。

艦長の言うことはもつともであり、ハンマーヘッドという特徴的な船を襲うほど馬鹿な海賊は切羽詰まっているか……それ以上の――

「後ろ盾がいる」

ナニカが背後にいとレッドは推測した。艦長も同意見であり、クランクはテイワズを襲って余りあるメリットを与えられる組織は何かと考える。そして一つの結論に至る。

「ギャラルホルンか！」

「連中が後ろにつけば仕事もしやすいだろう。となると、増援もいるか？　あるいはセブンスターズの傭兵が騙っている可能性も……」

「――目的は成果を収める、でよいのでしょうか？」

「んー……イサリビはドルトへの資材を運ぼうとしているんだろう？」

「そのように聞いております」

「木星メタル狙いかも。あるいは……賞金を懸けられているとか？」

鉄華団にはクーデリア・藍那・バースタインという爆弾が乗っている。クーデリアに賞金が懸けられていても違和感はない。そして

「まあいい。艦長」

「はっ」

「第二船速で突入。デブリの多い宙域ではそちらの判断に任せる。ゼントは俺とデルマと一緒に先行する」

「了解。アインたちは直掩だな」

「船外でな。アストンたちのほうがここでは強い。意見を聞くように言い含めておいてくれ」

艦長！ とレッドは強く言う。ファミリーネームで呼ぶのは仕事モードに突入した証だった。間髪入れずに艦長はクルーに通達する。

「第二種戦闘配備を」

「了解。総員！第二種戦闘配備！ 繰り返す！ 総員、第二種戦闘配備！」

「MS隊はヴァサゴ、若獅子1番機、ガルムロディ3番機は出撃。残り
は直掩に当たれッ」

レッドが徐に艦内のオープンチャンネルを開いた。

「お前ら！ これがうちの初陣だ!! どのどいつだか知らないがク
ソツタレ共に誰に手を出したかわからしてやれ!!」

回線から野太い声が聞こえる。カチコミだとか、ケジメつけさせろ
やー！ という戦意に満ちた雄叫びだった。

「いいか！ 死ぬんじゃないぞ、野郎ども！ テメエらの生まれ年の
酒を用意するのは金がかかるからな!! 俺の借金を増やすなよ!!」



一方で鉄華団とタービンは防戦を強いられていた。

急襲と明らかに海賊の動きではない統率の取れた戦闘行動に翻弄されている。ここに三日月やアウトサイダーズの面々がいれば幾ばくもかからずに優勢に持つていけるとい確信はあった。

「くそッ！ 敵の位置は!?!」

「デブリに逃げ込まれてわからない！ けど、この装備は普通じゃないよ!!」

「ミサイル接近!」

「迎撃しろ！ 明弘とタカキはまだ生きているなっ!?!」

「ラフタさんとアジーさんが救援に向かって——交戦開始！ 複数のモビルスーツに追われているそうです!」

優勢に持つていけないのは彼らがないというよりも、保有しているモビルスーツが通常の操縦システムでしかない。明弘の駆るグレイズ改はインターフェイスは最新であるために阿頼耶識システムとの親和性が極めて悪かった。

いや、時間をかければ何かしらの解決策は生まれていたかもしれない。バルバトスのデーターをフィードバックするといったことをができたかもしれない。しかしここには鉄華団の整備主任の雪之丞はおらず、バルバトスもない。そもそも文字を読める人間が極少数であった。

「ユージン！ 近づけねえのか?!」

「アミダさんだけじゃ防衛に徹するだけでいっばいだ。相手は二十機

近い部隊だぜ!? 離れた瞬間に分断されて各個撃破されちまう!」

「クソが! グレイズを売るんじゃないやなかつたか?」

「売らなきゃ売らないで火星のほうで干上がっちゃうよ。それにパイロットが……」

ビスケットの言葉は当然である。シノやダンテたちが明弘と一緒に訓練をしているのはオルガも知っているし、ずぶの素人より遥かにマシンぐらいのセンスがある。ちゃんと正規の訓練さえすれば、一角のMS乗りにもなれるだろう。

阿頼耶識さえ使えれば、と考えるがオルガは内心で頭を振った。以前、鉄華団の全員を診察したミリアムから言われたことを思い出したからだ。

(阿頼耶識は強力だが脳への負荷がデカイ。ミカの手が鈍くなったのも阿頼耶識の過剰負荷のせいだ。そんなものに俺は家族を乗せようと考えちまった)

以前の自分なら認めていたであろうこの考えも、名瀬やレッド、クランクやアインといった良い大人と付き合うことで変わってしまった。ていた。

彼らがしきりに告げる、自分達を頼っても構わないという優しさがオルガを弱くした。

だが、何から何まで世話になって、頼っていいわけじゃない。そうしているのは――

「……まだだ」

「オルガ?」

「チャド。お前が指揮を取れ! ユージン俺に火器管制を渡せ!」

「」「オルガ」「」

「イツカ団長!」

「メリビットさん。俺は名瀬の兄貴やウエイストに言われてんだ。自

分たちを頼っていいって。けどな？ 頼ってばかりじゃ信頼も信用も得られねえ！ 何よりもここで状況を良くも悪くも変えないとすり潰される！」

自分にできることをすべてやり切らなきゃいけない。どうにもできなくなった時、その行く末が見えているときは俺は頼るって決めたのだ。

そして世話になった人と家族、自分も生き残らせる。

「ビスケット！ ハンマーヘッドに少し時間稼ぎと前進するって言ってくれ。アミダさんには迎撃は自分がするから敵のモビルスーツを撃破するように通達しろ。急げ！」

敵を合流させるかもしれないがタービンスのあの二人はそんなじよそのこらのMS乗りとは違う。タカキをベッドにぶち込んで、明弘も戦線に復帰させる。これを凌げればあるいは――

『残念ですわね。もう少し楽しめると思ったのですが……ねえ、シャルン』

『そうだね、オリヴィア姉さん。期待外れだ』

アミダの迎撃を躲し、二隻の強襲装甲艦の対空防御をすり抜け対艦攻撃用のランチャーを構えた二機のガンダム・フレイムが船に取り付いていた。

「んな……!?!」

『お仕事ご苦労様』

『さようならだ。ネズミ君』

——そして二つの爆発が生まれた。

プロペラントタンクは武器（解説付き）

時間を随分と戻して、場所は歳星はマクマードの邸宅。

ここには二人の男が紅茶を片手に悪い顔をしている。まあ、それも面子を見れば納得できるだろうし肝の小さいものは卒倒するだろう。逆に野心家どもにはチャンスと思えるものだ。

「君もよくやるね」

一人は胡散臭い世界最高峰の資産家、エンマルク・ドルポンドであり――

「そういうドルポンドさんこそ抜かりは無いようじゃないですか」

もう一人は圏外圏の首領^{ドク}こと、マクマード・バリストーン――

どちらも一筋縄ではいかず、煮ても焼いても食えない。食えたとしても腹を壊して死んでしまうような連中だった。

「いやいや。自分の子飼いを監視につけて、ALICEのデータを奪おうとしている君に言われるほどではないよ」

「いやいやいや。借金漬けにしたうえでマルバとかいう男を潜り込ませたおたくには言われたくないな」

「はっはっは。彼は前科があるからね。首輪と鎖ぐらいはつけとかないと」

「その持ち主は誰なのか、気になりますかね」

ヤクザの大親分と老獪な金持ちが善意だけで人に手を課すことなど雷が直撃する程度でしか存在しない。そも、そんなことは大して意味の内容なものでなければしない。

マクマードの目的はただ一つ。レッド・ウェイストの保有するAL

ICEをどうやって手中に収めるか。

ドルポンドの目的はあの危険物をどうすれば闇に葬り去ることが出来るか。

「腹を割って話しましょう。ALICEをどうするつもりで？」

「有用なものだと理解しているが同時に世界のバランスを崩壊させるモノだと考えているね。一歩間違えれば厄祭戦の再来となる」

「モビルアーマー………自律A・Iによる完全無人兵器であり血も涙もない玩具、ですかい？」

「蛇の道は蛇って奴かい？ ジャスレイ君もデキるようになったね」

クジャン家と取引のあるジャスレイはセブンスター向けの諜報を担っている。その一環で重要機密となっている厄祭戦についても知っていた。ドルポンドについては、世界を裏で牛耳る経済連盟の秘匿事項からである。

「行きつく先は全てのモビルスーツが無人機になってしまう。まったく……こんなロストテクノロジーを送りつけた人物はよほどの自信家だ」

「月の怪物か。出し抜ければ……」

「それ以上はやめておきたまえよ？ 手は木星ぐらいまで伸びるからね」

「怖い話ですわ」

これ以上は危険だと判断し、無理やりにも別行動にさせた理由を話し始める。

「鉄華団のガキ共。アレはガンダムの坊主ありきの勢いだ。坊主さえいればやれるってのがいただけない。組織ってのはワンマンじゃあ意地できない。上が死んだら、要が消えたら潰れちまうのは論外だ」

「同意だね。鉄華団はオルガ・イツカと三日月・オーガスありきの組織

でしかない。頭脳と力、このどちらかが消えたら………容易に考えられるねえ」

オルガはよく頭の回る方だが、経済界の化け物を相手にするには経験が足りない。即断、即決という点では命の軽い世界で育ったおかけか評価に値するがその分、力で何とかなると思っている節が多々ある。

それも――

「ジロンのお節介はいい起爆剤にはなったけどね」

歳星の裏社会で知らぬものはいない凶剣ジロンに諭されて、腕つぶしで組織の出世頭になるのは危険だと判断できたか。

別の方向で勘違いしていそうな感じもして楽しみだと内心でドルポンドは嗤う。

「いやあ……対岸の火種って楽しいものだね。マクマードくん♪」

「対岸の人間に言う言葉じゃねえでしょうに」

「他人事だからね。レッドが気に入っているから目をかけているけど、アレぐらいの向上心を持つ人間は探せばいるからね」

「確かに。度胸に關してもだ」

「うんうん。じゃあ、火星のタヌキにも一言通しておこうかなっ☆」

――エンマルク・ドルポンドは善人ではあるが悪党である。人の運命を滅茶苦茶にすることを退屈ろくでなしな神々の遊びことと称すが彼もまた天上人ブルジョワだった。

つまりは金があり過ぎて暇なのだった。



——やっぱりレッドは馬鹿だと思う。

乗ってきたクタン？ それにナパームを取り付けて体当たりさせるとかおかしい。デブリに隠れていた船に当てたけど、イサリビを狙っている奴に途中で一つ剥ぎ取ったやつを投げつけた。

やったかな？ って思ったけど光る変なので撃ち落とされた。あの光るのなんだ？

『ナパームツ!!? 至近距離で使うのか!?!』

『このっ!』

イサリビに被害が出ているけどゴメン、オルガ。あとでレッドに賠償金を請求するよ。けど、あのモビルスーツ……バルバトスやヴァサゴと同じ目が二つある。ガンダム・フレイムってやつか。

片方の赤い奴が両手をこっちに向けてきた。穴が開いているからスラスターかと思ったけど、銃口だったみたいだ。前に喰らったショットガンほどじゃないけど弾が広範囲に散らばって避け難い。

『ミカ!』

「ごめん。遅れた」

イサリビの近くで戦うわけにはいかない。持ってきた滑空砲で牽制。手に持っていたロケットランチャーを撃ち抜く。

『いや助かった！ ウェイストはどうした?!』

「多分、こつちに向かつてる。俺は先に来たから。他の皆は？」

『明弘が哨戒中に襲われた。そつちにはラフタさんとアジーさんが向かってるが無事かどうかかわかってねえ!』

それを聞いて目の前の羽？ みたいなのをつけたモビルスーツを睨む。コイツらがオルガたちを殺そうとしたのか。明弘を襲った連中も仲間でいいな。

「死ね」

『ほざけッ!!』

カタログで見た槍みたいなので攻撃を受け止められた。

うーん……バルバトスの調子は凄いいから潰せると思ったんだけどな？ あれ？

「——読めないからわからないな」

『ガンダム・フレーム！ 噂のバルバトスかあッ!』

「さつさと死ね」

『貴様が死ねエッ!!』

なんか変な違和感があるな。俺みたいいな速さは無いけどレツドよりかは速いみたいいな……生身の人間を相手にしているみたいだ。切り返しが早い。デカイ^{メイス}じゃ捉え切れない。

『船がお留守でなくて?』

「ッ!」

黒い奴がイサリビの死角に回り込んでいた。筒のような何かが無リツジの隔壁に取りつけられようとしている。

何か危険なものを感じてイサリビへの被弾を躊躇わずに撃つ。

『思い切りのいいこと!』

『ぬおおお?! 三日月! 何、トチ狂ってんだああ?!』

「ごめん。なんかヤバいと思ったからさ」

『気にするなミカ。よし、今ので射線に入ったぞ、対空防御だ!!』

船の対空砲は200mmなんて大きさではない——らしい。モビルスーツが直撃すれば確実に装甲を割れるっっておやっさんが言った。

当てるんじゃないで追いついて弾幕と共に滑空砲を狙っていく。跳ねるような感じで避けている。間違いなく、俺達みたいなヒゲ付きだろう。遅いけど。

『! 三日月! タカキが!!』

「つ……やられたの?」

『わからない。ラフタさんたちが明弘と一緒に戻ってくる。それまでに周りの奴らをどうにかしないと……』

「わかった!」

——つたく。遅すぎるよアイツ。何してるんだ?

「ガンダム任せるよ。他を潰す」

『落とすつもりでなくていい! 近づけさせんな!!』

とりあえず——

「お前から死ね」

見たことのない足の細い奴からだ……！



——同時刻、暗礁宙域のデブリの中を進んでいたレッド、克蘭ク、デルマの3人は戦闘宙域まであと少しのところまで到達していた。

若獅子を挟み込むようにドッキングしたクタン参型の上面にヴァサゴが腕を伸ばして固定し、下面にガラムロディが引っつくような形だ。速度を重視し、機体性能で劣る若獅子のサポートとしての配置だった。

『輸送機が無ければ危なかったな』

『前方左に大きなデブリ塊があります』

「予測データ送るぞ。ちよい、スラスタ噴かせ」

『心得た』

手間は若干かかったが、クタン参型の推力によって追加の弾薬や対艦装備を多く持つてこれた。何よりも若獅子の推力ではこの宙域で姿勢制御に難があると分かったのは幸いだった。

エイハブリアクターによって生み出される人工重力場は宙域内を不安定な重力の坩堝へと変化させている。宇宙用の追加ブースターがあれば問題なかったろうが生憎と持ち込んでいなかった。

『社長。この辺りって……』

「ブルワーズの縄張りに近いな」

『デルマ達が以前いたあの？』

『……はい』

『……そうか。……辛いなら——』

『いや、大丈夫、です』

もしブルワーズだとしたら、ヒューマンデブリを仕入れたということになる。モビルスーツも強奪しておくべきだったかと後悔するが奪ったとしても船外積載したら別の海賊に襲われるだけだで不味かったと自己肯定を行うレッド。

デルマはこの時、二人にどう言うべきか悩んでいた。

(——船に居る奴らを助けてほしい、つてのは虫が良すぎるよな)

前提としてブルワーズであることが必要だが、そうだとしてヒューマンデブリ仲間を見逃してもらえないかと思いを抱く。クランクは見逃してくれるだろうがレッドは見逃すつもりはないと思ったのだ。バカっぽいけどシビアに考えるレッドに命乞いなんて通用しない。

デルマ達を賠償としてもらい受けた時、彼ら四人の疑心暗鬼と憎悪に満ちた瞳を忘れてはいない。

「——デルマ」

『な、なんですか？』

「補充したとして、何人ぐらいいると思う？」

『……………百人近く、かな？ 大人は二十もいないはずだから……………』
「つまり？」

『7割ぐらいがヒューマンデブリだと思います』
「……………7割か」

大体、70人弱ぐらいと仮定して、保護ないしは捕縛したデブリたちをどうするかと皮算用する。売るのは論外で考えるに値しない。全て鉄華団に引き取らせるか？ これも難しい。デルマ達四人が増えたところで大して金もかからないが二桁後半という数は彼らにとっては相当な重荷となるがオルガは十中八九引き取るだろう、それがレットの予想であった。

では自分たちが引きとる場合はどうするか？ 船のクルーは間に合っているし、多くを乗せればその分楽もできると思うが仕込むまでは負担が倍増する。といっても、未来への投資と考えるべきか。

「なるようになるだろうな」

『それしかあるまい。むしろ鉄華団に引き渡したほうが良いのではないか？ 彼らなら本部の人員として安定した雇用を見込める』

「イツカも喜ぶかね？」

『家族が増えたと喜ぶと思うが？』

想像に容易いな、と苦笑するレット。

勇敢な宇宙の戦士だとか気高い存在だとか言って丸め込む未来が見えるのだ。向こうがそうならなければ今度こそ本気でどこかに拠点を構えよう。船は厄憑ネズミつききだから丁度いいので使うだけ使って突き

返せばよいだろうと考える。

レッド・ウエイストという男は一方通行に利用されるのは好きではなかった。

「あつちと合流したら、とりま追い払う。ブルワーズじゃなくても、ヒューマンデブリは保護の方針でいこう」

『了解した』

『了解っ』

さて戦場はどこかなと頸を動かしているとデブリが唐突に弾かれるように動いていた。流れ弾の当たったデブリが碎けて周囲のデブリを動かしている現象だ。

滑空砲か対空砲のどちらかだと当たりをつけて、ALICEへ突発に動くデブリとその初期動作を報告するように命令する。ほどなくして、十数回のデータが提示されその内でもっとも多い方向のものをピックアップする。

「このまま真つすぐだ。大口径が飛び交っているからタンクに当たらないようにな」

『期待はしないでくれ。こういうのは初めて——む?』

『あ、船だ。…………ブルワーズじゃないな。もっとトゲとかついてたし』

『ならば下手人だな。それに被弾しているようだ。あの損傷は…………対艦ナパームのに似ている』

『ビンゴだ。ゼントは推進部に被害を与えられたらそのまま離脱してイサリビへ』

『直掩部隊は?』

『デルマと俺で相手をする。いけるな?』

『いけます!』



——罰があたったのだと明弘は思った。ヒューマンデブリ如きが
一丁前に人間のようには振る舞ったのだ。

鉄華団に多くいる年少組のまとめ役のタカキをモビルワーカーの
ままで連れて行くと決めたこと。そんな彼を守ってやると人間相手
に上から目線で宣ったこと。

正しくはやる気に満ちて、精力的に動こうとするタカキに明弘が折
れたと言ってもいい。しかし、当の本人にはそんなのはいかに過ぎ
ないと切り捨てるだろう。

「タカキ！ 返事をしろ！ おい!!」

『そのまま行って！ 声かけて、あたし達が援護するから!!』

『コイツら阿頼耶識持ちか!』

最初は奇襲だった。二機のグレイズがデブリの影から飛び出し、ライフルと棍棒で襲い掛かってきた。タカキを守る為抱え込むようにして撤退を選択。しかし次々と現れる見たこともない碧色のモビルスーツに四方八方から攻撃を喰らい、まるで嬲り殺すかのように装甲は剥げていく。

そして最後に見慣れないモビルスーツに似た一回りは大きい印象を思わせるヤツが振るうハンマーに掠ってしまったことだ。

速度×質量⇨破壊力という言葉を明弘は知らないが、そのハンマーが腕の一部を押すようにして掠り、結果として明弘は自らの手で——ここにオルガがいれば事故だと断言するが——タカキのモビルワーカーを潰しかけてしまった。

「絶対に守るからな！ 絶対にツ！」

藁にも縋る思いで腕の中でひしやげたモビルワーカーを守り続ける。ラフタとアジーが数の不利を覆さんと懸命に反撃を試みているがハンマーを持ったヤツが同系統の機体？ と思わしき連中を明弘に仕掛けさせていた。生物的な動きをする阿頼耶識の特徴を体現したヤツらは狩りをするように追い詰めていく。

「くそツ!! これじゃあ……!!」

『う……あ、——ろさ……』

「タカキか?! 生きているんだな!? おい！」

『俺——いて——く、逃げ——』

「馬鹿野郎! そんなことできるか!! お前を見捨てて逃げるなんてできるわけねえだろ!!」

タカキの考えも間違いではない。二人どころかラフタたちもまとめて死ぬか、足手まといの半死人の自分を捨てるか。頭のいい奴ならタカキを囿にして、三人で退いて体勢を整えるだろう。

しかし明弘にそんなことはできない。するつもりもない。皆で生き残って、仕事を達成して、火星に凱旋すると約束したのだ。何よりも自分と同じく明確な家族のいるタカキを見捨てたら本当のヒューマンデブリスに成り果ててしまう。

「絶対にだ。絶対に見捨てない。オルガもそうするし、皆そうするはずだ。だから諦めるなッ!!」

『明——ん——』

「もうすぐイサリビに合流できる。そうすれば勝てる!」

まだか? まだイサリビにつかないのか?! 明弘の焦りが大きくなっていく。バルバトス——三日月のいない鉄華団が連中を相手にできるのか? いや、そうでなくても自分に襲い掛かったグレイズがいるということはギャラルホルンが待ち構えている可能性もある。

(ここで終わるのか? ここで……俺たちは……)

途端に寒気と怖気が明弘に走り始める。大切なものを失う恐怖という感情が鎌首をもたげてきたのだ。鳴りやまないアラートに被弾時の振動。昔の……CGS時代ならばなんとも思わなかった生存への渴望が今はしっかりと抱いてしまっていた。それゆえに死に対して——家族や仲間を置いて死ぬことに恐怖を感じ始めてしまった。

弟と再び出会え、人間扱いしてくれる世界を失いたくないと思ってしまう。

(弱気になるな! 弱気になるな! 弱気になるなああああ!!!)

獣の咆哮の如き叫びでスラストを吹かす。恐怖から逃げるように、生き残るために足掻くように。

聞きなれた声があるがそれも構わない。なんとしてでも——

『明弘ッ！ 前っ——』

「あ——」

——ハンマーを振りかぶる悪魔が道を塞いでいた。

『死になッ!!』

「昌弘、タカキ……すま——」

ハンマーが振り下ろされることはなかった。

『——何してるんだお前ッ………!!』

『ぎゃっ………!!?』

小さなうめき声と共にその化け物は彼方から飛来したナニカに轢かれつつ、後ろへと飛び去って行く。

助かったのか？ と揺れる瞳で視線を前に戻すとすれ違うようにバルバトスが通り過ぎた。

『待たせた』

「遅えよ。それよりもタカキとラフタたちが！」

『任せて。あと、レッドたちも来ているから船はほぼ大丈夫。通信もつながるから』

そう言い残してラフタ達の援護に向かう。その先で爆発が起きたが今の明弘にはどうでもいいことだった。メインカメラで捉えられる最大距離で二隻の船を確認できたのだから。

「気をしっかりもてよタカキ！ もうすぐだ！」

『明弘！ 明弘！ 応答して!!』

「タカキが負傷！ すぐに治療をしてくれ！ ミリアムさんはいない

のか!？」

『ウエイストさんの船はまだ後方だ！ えっと——メリビットさん？
あ、はい。そのままイサリビに着艦して！ メリビットさんが診て
くれるって』

「わかった！」

終わり際に応急処置キットとAEDを——と聞こえたが通信を切る。出来るのは可能な限り急いで静かに着艦することだ。

イサリビとハンマーヘッドが見えてくる。思っていたのはまるで違っていた。

「戦闘中じゃねえか?!」

煙を上げるイサリビとハンマーヘッド。真紅とピンクが赤と青を相手に激戦を繰り広げ、赤銅色の三機が連携して敵を叩きつぶしている。そんな戦況だった。

「か、帰れるのかよ!？」

思わず操縦かんを握りしめる。それでもやるしかない。彼らを信じるしかないのだから。

赤色は俺のだって言ってるんだよ！（解説付き）

アミダの百鍊を筆頭にわらわらと近寄る敵モビルスーツを撃退していたところ、明弘とタカキが接近しているとの知らせがイサリビから来た。ツーマンセルで行動するクランクは乱戦で混沌とした状況の中で周囲にセンサーを走らせる。

「——確認した！ イサリビの前方だ」

『こつちも確認取れました。カタパルト周辺の敵機排除をお願いします』

「了解した」

クランクは時たま見ることのある眼鏡をかけた名前も知らぬ女性——フミタン・アドモスからの要請に従った。偵察に出ていた二人がそれなりの負傷をしていると既に報告を受けていたからだ。

共に戦うデルマにイサリビに群がる敵機を排除すると告げる。二つ返事で了解と帰ってきた。

「墜とすよりも退かせる方が容易い。余力があれば墜とす程度にしろ」

『了解！』

とはいえ、相手に態勢を整えさせるきつかけを与えることになるのは正規の教育を受けていないデルマも承知の上だった。幸いなのは自分たちが合流する前には二十機近い敵機もすでに十五機ほどまで減っていた。

クランクは改めて、あの桃色の百鍊に乗るアミダ・アルカの実力に畏敬の念を抱かざるを得ない。ギャラルホルンにいれば引く手数多のパイロットであり、気遣いもできるとレッドから聞いていた。

「在野にこれほどの実力者がいるとはな」

『クランクさん?』

「何でもない。俺もまだまだ。そう思ったただけだ」

『じゃあ後ろにいなって。俺が片付けるからさ!』

「はっはっは! いずれはそうなるかもな!」

いやはや頼もしい、と返す。デルマの意見ももつともで、グレイズにならまだしも若獅子という格落ちの機体では無理などできない。生意気はデルマなりの優しさだった。

だが、しかし。守るべき子どもにこう言われては元軍人でMS乗りの誇りに傷がつく。

「まだ若い連中に介護されるわけにはいかんよ」

ヘキサ・フレームのジルダに遠心力の乗った棍棒の一撃を与える。ジルダのような軽量級のモビルスーツなら、若獅子のような細身であつても、渾身の叩きつけで行動不能には出来るし、当たり所が悪くても不具合を生じさせるだけの損害を与えられる。

クランクは脳天——コクピット付近へ強打を見舞うことでの内部攻撃。

「縦方向には強いようだな。横の打撃が無難、か」

若獅子の非力さに嘆きたいところだがまあいい。

ふと真紅と桃色、赤と青の閃光が縦横無尽に交差し走る彼方を見る。

「——なに、モビルスーツの性能差が戦力の決定的差ではないことを教えてやろうじゃないか」

『クランクさん、カツコイイ!』

「私も男だ。格好をつけたくもなる」

一人で複数の敵を捌いていたデルマのサポートに回る。
友軍の合流まであと少し……彼らが合流すれば戦況は優勢になる
だろう。

クランクはとりあえず、デルマのガルムロディを羽交い絞めにしよ
うとしたジルダに狙いを定めたのだった。

「どこの誰かはわからんが玄人の戦い方を教えてやる」



——宇宙^{ソラ}を四つの光が駆けていく。幾度となく交わり、離れ、螺旋
を描くように踊る。

中世か古代の吟遊詩人がいれば妖精がダンスをしているのだと詩
的な感想をつづるのだろうか舞っているのは戦争をするための

機械仕掛けの人形だ。

赤と青を追うように真紅と桃色が駆けていく。桃色の光ことアマダは間近で見る義息子の成長にほおを緩める。

(模擬戦でも遠目からわかつちやいたけど……それがアンタの答えなんだね)

シングルナンバーの百鍊はパワーとスピード、防御力がグレイズを上回るレベルで構成されている。乗る人間がアマダ級であればグレイズ以降の機体とも正面から戦いあえるだろう。

そしてアマダは非常に高くまとまった近距離戦寄りのオールラウンダーである。放たれる弾丸は的確に青いガンダム・フレームへと吸い込まれていく。

『う、ぐっ!?!』

うめき声が聞こえてもアマダは攻撃を止めない。むしろより苛烈な攻撃を仕掛けていく。

ときに何故、相手の声が聞こえるのか考えたことはあるだろうか？ それは声も十分な武器になるからである。そこ！ 作者の字数稼ぎって言わない!!

舌戦というものがあるように戦闘中の会話から相手に対してプレッシャーやブラフをかけるのはサシの勝負では当然だったりする。逆に集団戦では作戦を悟られないため妨害合戦を行う。

この暗礁宙域の戦闘の場合は増援を防ぐために無線封鎖を行うことが肝要だとされる。しかし、今回の敵の動きはわざわざ増援を呼べるような立ち回りをしていた。

アマダもレッドもそのことについて考えを巡らしていた。

「すばしっこいヤツだね。ガンダム・フレームってのは全部こんなのかい?」

『特別相手が速いんですよ。羽みたいなの付いているし……』

細部は違うがコンセプトそのものは同じという印象を受ける二機のガンダム・フレーム。リアクターの反応がバルバトスに似たものを示しており、ハンマーヘッドには情報を送っている。

レッドは同じガンダム・フレームなら情報はあるのでは？ とヴァサゴに搭載したALICEに検索を任せていた。一応、三日月ほどの鋭さと悪寒はしないうえ、宙域内は船の通り道でもあってデブリは少ない。自分で操縦していた。

『姐さん！ 検索かかりました！』

「エーコかい。相手はなんだい？」

『【ASW—G—37:Phoenix】と【ASW—G—38:Halphas】です！』

「他には？」

『えつと……これだけです！ けど、見た目からして兄弟機。連携を前提に開発されているかも！』

「憶測だけで言うんじゃないよ！ すぐにユフィンに居るオヤジに通信しな。何か知っているかもしれないからね」

『了解！ 御武運を！』

「誰に言ってるんだい！ ルージュのアミダは伊達じゃないんだよつ！」

不敵に笑いながらアミダは件のモビルスーツを観察する。というよりもアミダも名瀬もフェニックスとハルファスには聞き覚えがあった——というよりは名前だけ知っているという状況だった。

「レッドは何か知ってる？」

『いや……知らないですね。ヴァサゴとバルバトスとは違う設計思想にも見えるけど……』

バルバトスやヴァサゴのような厳つさやマツシブな印象は受けなかった、とも言いたいのが今は戦闘中である。攻撃の手を僅かでも緩めればすぐさま相手に距離を空けられる。それほどまでに速い。

『姉さん!』

『ええ。反撃に転じましょうか』

『デカイ口叩いてんじやねえよ、赤は俺んだ!!』

「このまま完封さね!」

レットがなんか言っているが今は無視するアミダ。クセを読み、相手の回避パターンもすでに学習している。次の射撃でスラストターを潰し、チョツパーを叩き込む。

『それはこちらの台詞、でしてよ』

ガンダム・フレイム、フェニックスとハルファス。その真価はガンダム・フレイムの中でも頂点に位置する運動性、機動性、速度を誇る可変式モビルスーツである。

そして二羽の魔鳥は隠していた爪をあらわにしたのだった。



『——以上がフェニックスとハルファスについて私が知る情報だ』

「ありがとうって、もう変形してる!？」

『なにっ!? 映像は撮っているかね? ちゃんと撮っていたまえよ!!?』

「姐さんがピンチの時に何言ってるんだこのマッドオヤジ!!」

『アミダ君なら大丈夫だと信じているだけだ。レッドはどうでもいい。むしろ死ねばヴァサゴが合法的に私の者に……!』

「ダメだこのオヤジ。何とかしないと」



『変形したツ!!?』

赤と青はまるで鳥のように変形した。その速度は今までの戦闘がお遊びでしかないと言わんばかりのものである。

コンピューターによる予測もできず、旋回点での制圧射撃を試みてもリアクターの慣性制御を大幅に超える軌道で避けられる。まるで稲妻のようだと言ったレッドは感嘆する。

『あり得ねえ！ 慣性制御なんか追いつかないぞ?! 中身はミンチどころかジュースになっても可笑しくない!!』

『具体的な表現を言うんじゃないよ。今日のデイナーはハンバーグなんだから!』

『晩飯のこと考えてる場合じゃないでしょ?!』

実のところ、アミダもレッドも飛行機と言う存在をまともに見たことがない。宇宙での活動が主なアミダはともかくレッドは輸送機の存在を知っているだけだった。その輸送機だつてとても鈍重でモビルスーツからすれば速いけど予測して撃てば撃墜できる程度のもんだ。

しかし、この二機は違う。高速で交差し、こちらの射撃をすべて避け続けている。二人を嘲弄するかのよう動き回り、距離を取って人型へと戻った。

「この程度でして? だとしたら期待外れですわ」

『仕方ありませんよ姉さん。我々のガンダムはガンダム・フレーム内で随一の機動性と運動性を誇るもの。あんなレストア機体や阿頼耶識も持たない奴では掠らせることもできない』

「そんなことを言ってはダメよ、シャルン。田舎のおサルさんは短気で凶暴で野蛮なんですから。怒って内に眠る

力を開放した——なんてことになったら傑作すぎて笑えますわ」

『警戒しているのか貶しているのか。どっちなんだい?』

「もちろん——虚仮にしていますのよ」

——そんなことで我を失って怒り狂うほど能無しじゃない。

敵に対して煽りを入れるのは戦いの常套だがそれを真に受けるほど初心でもなければ耄碌もしていない。感情的になるのはもつと勝敗の方法がはつきりしたお遊びだけではない。

アミダは大して気にも留めていないがレッドは違った。

『んだとこのエイモドキがあああ!!』

『レッド!』

『その糞不味そうな鰭^{ひれ}ぶった切って、刺身にしてやらあ!! 覚悟しろッ!!』

激高したレッドを止めることがアミダにはできなかった。というよりも一瞬反応が遅れてしまった。

戦局が読めないほど、あの子は劣化したのか? いや歳星に来る前の模擬戦であそこまで怒り狂うことはなかったはずだ。この程度の煽りなど日常茶飯事世界にいるはず。

とすれば——

『馬鹿が!』

「やっぱりそのゲテモノに乗るパイロットは残念なのね」

『死に腐れえええええ!』

だらりと靡く右腕を振り抜くヴァサゴ。しかし赤いガンダム——フェニックスに乗るシャルンはそれを見切っているかのようにスウエーしてぎりぎり避ける。

『その間合いは知っている。そして——』

フェニックスは四つある翼の主翼兼レールガンを構える。弾頭は特殊で非常に重い質量を持つ金属弾だ。この至近距離で発射されれば確実にコクピットは潰せる。防いだところで引き千切って無力化できる。

『ファイナーレだ!』

『テメエがだ、三下』

『シャルン! 間合いの中ッ!!』

オリヴィアが叫ぶ。だがわずかに遅く、ヴァサゴのクローはフェニックスの胴体を引き裂き、間髪入れずに折れたたんでいた左腕で脆くなった部分に刺突を入れようと伸ばしていた。

その左腕も乱入したハルファスに逸らされたことで不発に終わったが体勢を崩すことは出来た。

『この射程は? なんで?!』

『背骨は伊達じゃないんだよ!』

世にも珍しい背骨を持つヴァサゴはその機構により胴を延長することが出来る。腕だけしか伸びなければ傷をもらうことはなかったがレットは突拍子もないことを考え、それを実行しようとする馬鹿でもあった。

代価は胴体部のジョイントの損傷。シリンダー部分が限界まで引き抜かれ、接合部も歪んでいる。

「その機構はそういうものでは……………」

『だからバカだったんだよ!』

個人傭兵は孤軍でしかない。騙して悪いがもあれば、恨みを買って襲撃されることもしばしばだ。

だからこそレットは戦法の引き出しを多く作ろうと人並みよか少

し上の知恵を絞って考える。思索する。実行する。独りだけならやらないがここには滅茶苦茶に強くて信頼できるパイロットがいるのだ。

『あと、赤は俺のだ。わかったなマザーファッコーポンコツ野郎』

「調子にイッツ!？」

『こつちの台詞だよ、お嬢ちゃん』

——まあ、くだらない……どうでもいいことにも全力投球する悪い部分があるが。

何よりも親として子供から信頼されてるのは実に気分のいいものなのだ。それは別として説教は決まっているとアミダは寧猛に笑う。

『息子が意地を張ったんだ。親が背中を押してやらないとねえッ!!』

急反転したハルフアスにチョッパーを叩き込む——が、どうやら近接武器も持っていたらしく、どこに隠していたのかわからないぐらいに長い大鎌で受け止められた。

ガンダム・フレイムのパワーってのはこんなにもあるのか、とアミダは舌打ちを我慢しスラストターの出力を最大にする。速度も乗せた一撃をあの柔な見た目の四肢で完全に受け止められたからだ。

「お体に障りますわよ。お・ば・さ・ん……!」

『乳臭い小娘こそ、化けの皮をはずしたほうがいいんじゃないのかい？ アンタからはゲロみたいなおいしかしいよ』

「加齢臭には言われたくありませんわ!」

『大人の色気もわからないガキが吠えるじゃないか!』

女の煽り合いというよりは、若い娘が大人のお姉さんにいいようにあしらわれているといったのが正しいだろうか？ 間近で聞かされている男二人が何も言わず、デュアルセンサー越しにここから遠ざか

ろうと提案し了承した。戦場の奇蹟が生まれた瞬間である。

『「こつちを手伝いな(さい)!!!」』

『「はいいいいいい!!」』

——女っておっかない。男たちの胸に深く刻まれた瞬間であった。

☆☆☆
——
☆☆☆

所は変わってバルバトスを駆る三日月はラフタ達と合流後、明弘とタカキを襲った連中を半殺しにしていた。とくに横幅の大きくて一番喧しいヤツ——ガンダムグシオンというのだが、三日月はまだ字が完璧に読めるわけではない——は殺す前に這う這うの体で逃げた。残った連中——マンロディは推進部を叩きつぶし、頭を壊して動けない状態にしている。

さっさと殺してしまうのが今までの三日月だったがレッドが自分

の成長はオルガが喜ぶ。殺すしかなかったけど、ここでこいつらを
鹵獲すれば成長した証拠になるんじゃないかと。ラフタ達が仕留め
たのは死んでいるのも多そうだったし、そっちはレッドにあげればい
いと考えた。

「——お前……誰だ？」

放っておいて回収されたら嫌なので、力いっぱいイサリビの方角へ
蹴っておく。もちろん、向こうで回収されてふざけたことをすれば殺
すと脅し付きで。

ようやく半分ぐらいはいったところで、ラフタがハンマーヘッドが
心配だから曳航していこうと提案した。

——その矢先だった……。

『 그레이즈? けど一回り以上は大きい……? 』

明らかにサイズの違う 그레이즈が二機。こちらに急接近している。
その最中でアジーがふと呟いた。

『海賊が 그레이ズを……? 』

「あれ? ギャラルホルンじゃないの?」

『いや、名瀬は海賊たちが連合を組んだんじゃないかって考えてたよ。
そういつた噂が無いわけじゃなかったから』

「レッドはギャラルホルンが後ろにいるって言ってたけど?」

『その線が濃厚だね。 그레이ズなんて代物を見た目そのまま運用す
るなんて自殺行為だ』

그레이ズはギャラルホルンのイメージは強い。だから海賊や傭兵
——非正規部隊ネームレスのギャラルホルン兵なら別——が使えば、イメージの
悪化につながる。見方を変えれば、 그레이ズは性能も虎の子であるた
め、確実に皆殺しにするという意味表示なのかもしれない。

では目の前の連中は？ 海賊の徒党がグレイズを新規設計と言わんばかりの改造を施せるわけがない。そもそも、表も裏も含めてグレイズが市場に出回れば大騒ぎになるからだ。タービンス、ひいてはテイワズがそれを察知できないことはない。

『じゃあタントテンポ？ 月のギャングがここに来てるの？』

『うちと事を構えないようにって、ダディ・テッドは血判状付きでオヤジさんと交わしてる。てことは、ギャラルホルンしかないさ』

「そんなのどうでもいいよ」

——もう目の前に来てる！

二機のグレイズもどきがバルバトスに襲い掛かる。あれだけの凶体ならそこまで機敏ではないだろうし、何時だったかグレイズってやつには阿頼耶識を搭載するのは難しいと聞いている。滑空砲とライフルで崩してバルバトスが一撃。動かなくなったのをラフタとアジーに仕留めてもらう。

完全な連携とは言えないがワンマンアーミーの三日月を援護するように二人は動き、グレイズへと砲火を集中させる。

『うつそ?!? 速いッ?!?』

『というよりは——』

ラフタの言葉通りその反応速度はさつきまで相手をしていたマンロデイの遙か上を行く速度だった。

またアジーもあの動きに見覚えがあった。

「阿頼耶識……!」

彼我の距離はすでにライフルの間合いを超えていた……。

とりあえず潰せばいいでしょ（by三日月十解説

巨大な棍棒を両手に握り、グレイズもどきはバルバトスを狙った。鋭い、とはいえない程度の攻撃で三日月はいとも容易く太刀で受け流しを成功させる。

同時にもう一機が今度は見慣れたものを手首から出していた。ムチだ。

太刀で巻き取っていくか、できれば切り捨てて倒してしまおうとする三日月の本能が危険信号を放つ。

『！ 避ける!!』

「ッ!!」

アジীর叫びに三日月は意図的に巻き取った太刀を手放して後退した。刹那、激しい電光が太刀を焼く。

『ヒートロッド
電磁鞭だ!』

「ヒートロッド?」

『製造も所有もギャラルホルン—その督戦隊ハンター以外には持ってないってことになってる代物さ』

『電撃を浴びせるからナノラミネートも意味ないんだよね。あだし、アレで肌に火傷できたの憶えてるよ』

ナノラミネート装甲を突破するには大質量を叩きつけるか、ナパーム弾による気化、超高速で質量弾を当て剥ぐことが答えとなっている。近接戦が一番、費用も時間もかからない。

だが、誰もがそんなことができるわけではない。格闘戦はセンスに大きく影響されるため、セオリーとして複数機で一機を囲い、叩きつぶすのが主流となっている。

対し、ヒートロッドは中にいる人間を効率よく痛めつける武装だ。本来の用途は機械の電装系を破壊するために開発されたのだがモビ

ルスーツ相手でも効果が見込めることが判明している。金属の塊であるモビルスーツは電気をよく通し、パイロットへの電気ショックも狙えた。絶縁処理をされていても高電圧の電気抵抗で弾薬・推進剤の誘爆、処理がされてなければバイタル部分の電装系をショートさせられるのだ。

反面、輸送艦以上の大きさの艦船にはピンポイントで狙わないと効果がなく、エイハブリアクターでなければこういったダメージを与えるほどの電力を供給できないことが弱点だろうか。

『問題は三日月の阿頼耶識さ』

「……俺のヒゲか」

『そう。モビルスーツをショートさせるような電圧を生身に受ければ……』

『そういうこと。こいつはあたし達でやるから、もう一機んぼほうをお願い』

「わかった」

三日月は鞭を持つグレイズもどき——仮にグレイズAとBとしようか——を無視して、一方のグレイズAに襲い掛かった。

軽々と脚の長ぐらいはある巨大な棍棒を振り回し、バルバトスを近づかせないように抵抗する。戦闘力としてみれば動きが人間っぽいだけで予測できる範囲だった。

しかし、三日月には若干の違和感を覚えさせるものであった。

(……………この動き……………知ってる?)

思い出せないがこの荒々しい動きにはどこかで覚えがある。ふとどうでもいい奴の顔が浮かび上がったがそいつは大人だし、阿頼耶識の施術をしても機能はしないはずだ。

ただもしも……………というのであれば、鞭のグレイズBは——

「ハエダとササイ?」

『誰、それ?』

「CGS時代によく殴ってきたり、鞭を使って年少組を痛めつけていたやつ。レットが漂流刑つて、ポッドに入れて流したはずだけど」

『うっわ、エッグいなあ（ドン引き）』

『大方、ヴァサゴに手を出そうとしたんだろう。名瀬や姐さんらハンマーヘッドのことに関しちや容赦の欠片もなくなるからね。どこまでも、冷酷で非情になれる!』

——鞭使ってるのってどっち?

——ササイ。出っ歯で陰険でハエダの後ろに隠れてるでしょうもないおっさん。

——あー、だからねちっこく攻撃してくるんだ。女を髑つてコーフンするキモいおっさんだね。

——うん。それで合ってるよ。

——ラフタ。なんか攻撃が激しくなってるからやめな。あと、汚い男が鞭振りかぶってる姿にしか見えなくなるからやめてほしいんだけど。

案の定、グレイズBの攻撃が激しくなりましたとき。



女性に年齢を聞いてはいけない。若い娘には大人っぽく見えると褒め、ある程度の年齢からはお若いですねとお世辞を言わねばならない。

なに？ 女性差別だど？ 性差別？ 実にくだらない!! 女性扱いされなければ不平不満を言うくせに調子のいい時だけその言葉を持ち出すんじゃない!!

「などと現実逃避しているときがございました。レッドです」

『二度は言わないよ』

「わかりましたお義母様！」

明らかに最終警告な弾をもらい、レッドは全くもって近寄りたくない女の闘争の場に乱入した。二対一で一方的に仕留めるのはどうとも思わないが近場ゆえに拾ってしまう女の言い争いをダイレクトに聞かされてSAN値が直葬されそうなのだ。

それは向こうのフェニックスも同様らしく、今この戦いにおいてはまるで苦楽を共にした友人を見つけたかの態度だった。発光信号も身振り手振りもなく、まるで殺す気マンマンでフェニックスに襲い掛かる。

「うおおおおお!!」

『ちよこぎいな!!?』

「吹っ飛びやがれ！」
『わあああああ!?!』

三文芝居も甚だしい、わざとらしい演技でバックレようとする二機をアミダとオリヴィアは無言で撃つ。

『次は殺す』』

『……………はい』』

女は恐い。やつぱり恐い。

なし崩しに……………というわけでもなく、ガンダムたちは激しい戦闘を繰り広げ始めた。前回の話を見てもらえばわかるが、赤は俺のものとはレッドの言葉だ。アミダのもの同じじゃないか？ アレはピンク色なのだ。

あと作者的にロリコン仮面の赤いヤツはどう絡ませようかとお悩み中である。

『いい機体だ!』』

「それはどうも！ とりあえず、俺以外の赤色はすぐに変更しやがれ。しないなら死ねッ」

『赤は君の専用ではない。それより、その機体。心に来るものがある。君を殺して奪い取るとしよう』

「やってみろや三下!」

『シャルン・S・ホルスト、と呼びたまえよ。野蛮人!!』

赤色に何のこだわりがあるのか知らないが曰く、単なるいちやもんだと後に語っている。

しかし、フェニックスとヴァサゴの距離が徐々に開いていくのは誰が見ても明白だった。レッドの攻め方をシャルンが覚え始めたのが原因なのだがそれよりは胴体に大きく残る損傷のせいだった。相手は変形できないぐらいの損傷を与えてはいるが人型でもその推力は

ヴァサゴを大きく上回っている。

——これ以上の傷を増やしたくないのもあるが……………。

「小細工ツ！」

『戦術と言ってほしいね』

シャルンの狙いはアミダの百鍊からヴァサゴを引き離すことだった。

どんなに凄腕のパイロットでも宇宙空間で推進剤が切れてしまえば頑丈なデブリと同じだ。

実際にアミダの百鍊はガス欠間近であった。四方八方から攻めてくる敵MS部隊を単独で撃破、食い止めていたのだ。むしろこれが明弘やアイン、クラルク、レッド、アジー、ラフタといったメンバーなら補給に最低2回は戻っていたことだろう。

『ルージュのアミダはここで仕留めさせてもらう。本来はもつと後だったが…………いやはや。予定通りにはいかないものだ』

「黙ってさせると思うか？」

『簡単に戻れると思うか？』

互いに黙して、相手を殺さんと行かせはしないとさらに激しく動き始める。

一方でアミダも推進剤のアラートを聞きながら格上の機体相手に互角以上に事を運んでいた。相手での通信回線に時折混じるうめき声のアミダの耳朵をうっていた。

『ぐっ?!? これほどの実力とは……………!』

『イイ線言ってるけどね。それじゃあアタシは墜とせないよ!』

アミダの取った作戦はカウンター重視の受け身戦法だった。ガス欠を狙った相手も射撃だけではどうにもならないと判断し、速度が上

乗せができる一撃離脱を選んだのだ。

この選択は間違いかと言えばそうでもない。こちらの手勢——三流の海賊をアウトサイダーズのユフインの航路上に忍ばせていたのだ。それらも本艦からの通信途絶の知らせを受けている。

最低限の保身を選び、牽制して逃げられる程度の弾薬を残した状態で戦うことを選んだのだ。カウンターを狙われようと接触時のカウンターブーストでじわじわと削れるだろうと判断したのだった。

だが、今回は敵を甘く見過ぎていたのだ。

『がッ！（伊達や虚勢のパーソナルカラーではありませんのね。ほぼレストア機でよくも……！）』

A M B A Cと最小限の推進剤で最大の威力を叩きだすアマダ。この時点で両者の実力に大きな差があった。

この場合、オリヴィアたちの判断ミスとしか言いようがない。予定ではグレイズのみを仕留めるはずが海賊たちの欲深さを考慮していなかったのだ。

（このままですと進むも退くも地獄ですわね。……それにしてもレッド・ウェイスト。忌々しい！）

何でかレッドに対して憎悪の念を募らせるオリヴィアだが、その体は感情とは裏腹に消極的になり始めていた。そんな変わりようを見逃すほどアマダは馬鹿でもなく、そして無謀でもなかった。

明弘とタカキも無事ではないが帰還した。もつと後で合流予定のバカ息子とも合流できた。これ以上を望むのは勝ちが過ぎる——。

『お優しいんですね』

『大人の余裕ってやつさ、さっさと失せな』

『そうさせてもらいますわ——またお会いしましょう』

——こつちは二度と会いたくないよ、と言い返しオリヴィアの駆るハルファスは退いていった。レッドのヴァサゴと激しくぶつかり合っていたシャルンのフェニックスも胸部以外の大きな損傷は見えずとも精彩を欠いた機動で後を追っていく。

推進剤が切れたとモニターが映し出し、喧しいアラームを切るのもしんどいそのままにコクピットシートに深く寄りかかる。するとレッドが心配そうに來た。

「大丈夫かよ」

『アンタに心配されるほど柔じゃないよ。まあ、推進剤も切れちまつたからね。引っ張って行っておくれ』

「あいよ——ん？ モビルスーツ？」

『増援かい？ つたく……おや……？』

彼方からロディ・フレームが流れて來た。こちらの予定進路の先。明弘たちが襲撃された方角からだ。

『なるほどね。名瀬！』

『どうしたアミダ。こつちもほぼ終息し始めてるぜ。ユフィンも來たしな』

『いい知らせだね。それとラフタ達のほうからモビルスーツが流れて來た。向こうはどうなってる？』

『ちよつと待ってくれ———わかった。何も無いんだな？ よし。———向こうも無事らしい。見慣れないグレイズに襲われたらしいが三日月も無事だ』

『了解。レッドに回収作業を頼んどくよ』

——俺の仕事は増えるのかよ……、とわざとらしく、およよと泣き真似をするレッドだがアミダと近場に受け止めていたロディ・フレームを曳航していく。

途中、合流したアストンらに船の護衛を引き継いだデルマとクラン

クが手伝いに応じた。

時折、ロデイ・フレーム——マンロデイに話しかけるデルマにブルワーズ時代の仲間が乗っているのかと勘繰るレッドだが、何よりも優先すべきは全ての補給を済ませ安全を確保出来る状態にするのが先決だった。

すべての作業が終わるころ、ボロボロになった百里と百鍊、バルバトスが帰還し整備班が声のない悲鳴を上げたのは言うまでもない。



諸々の作業に目途がつき、幹部クラスの人間たちがユフインの作戦室に集まっていた。ギャラルホルンの現主力巡洋艦ということで内
部は広く、マクマードの船ということもあり清潔感ハンマーヘッド
以上にあつた。むしろ、イサリビがひたすらに汚く、迎え入れたク
ルーがオルガ達のあまりの悪臭に涙目になっていたところが問題だ
ろうか。

「とりあえず、身支度整えてこいや馬鹿ども」

オルガとユージン、ビスケツトをシャワールームに放り込んだレツドの行いに流石の三日月も同意を隠せなかった。何せアトラにもちやんとお風呂に入った方がいいよ、と目をそらされて言われたからだ。三日月だって人間だもの。

イサリビについて今度、大々的に清掃作業をすべきだという会議をオルガ達のいない間に終え、そこから紆余曲折を経て全員が集まる。なんか妙にこぎつぱりしたオルガ達に嫌味の一つでも言おうかと思うレツドも理性を総動員して胸の内にはしまい込む。

今回の議題は襲撃してきた部隊とブルワーズへの落とし前である。

「現状、ブルワーズは戦力のほとんどを失っていると思われまます。私としてはここでけじめをつけさせるべく、追撃したほうがいいと思います」

モビルスーツに関しても一角の知識があるエーコがタブレットを片手に手慣れた様子で床のパネルを操作する。こういうのをイサリビにも欲しいなとオルガは雪之丞に相談してみようと決めた。

そしてパネルに映し出されているこちらが保有する情報から推測したブルワーズの戦力。そしてギャラルホルンに近いのではないかと推察された海賊らしき連中。ユフィンが葬り去った海賊を航路とセンサーからすり合わせた宙域情報にアップデートする。

「ユフィンを襲撃した海賊が三隻でモビルスーツは五機。機体はありふれた強襲装甲艦二つと輸送艦一つ。ガラムロデイで構成されてます」

「テイワズのアーカイブにはこの宙域でこの規模の海賊は確認されていません。交戦していたモビルスーツの数と連携具合から見て三隻とも別々の海賊である可能性が高いかと」

エーコの言葉にユフィンの艦長が補足説明をする。輸送艦にモビ

ルスーツを搭載していればかなりの手間になったはずだったが中にいたのは武装した揚陸部隊だ。典型的な遭難船や補給艦に偽装した海賊の一つだろう。白兵戦に持ち込んで船体の拿捕・乗員の捕縛を主にしている海賊だとか。

「ヘキサ・フレーム——ジルダもある程度は墜としたとはいえ、その殆どは二機のガンダム・フレーム撤退と同時に退きました」

「率先して攻めてきた連中の練度は低いね。逆に距離を取って集団戦に持ち込もうとしていた残りは明らかに訓練されていたよ」

「……………となると……兄貴」

「戦力の大半がギャラルホルンってことだな。つたく、どこから漏れたんだ…………？」

実際に戦っていたアミダ曰く、退いた連中は確実に正規軍並みの訓練を受けていると告げる。そのうえであんな大規模なMS部隊を編制・維持のできる組織は限られていた。

その中でオルガはギャラルホルンの可能性があると名瀬にその名は出さずとも意見を求めた。名瀬も同様の結論に近い推測から答えを言う。

しかし、この場にいる者たちは一つの疑問と疑惑を抱く。すなわち

——どうしてここを通ることがバレたのか？——

——自分たちの中にスパイがいるのではないのか？——

襲撃者たちは見事、この集団の中にある三つの勢力に疑念の種を植え付けたのだ。

レッドは考える。自分と戦っていたフェニックスの男の言葉。アレはどう意味なのだろうか？ 今ここで言うべきだろうか？

「——とは言ってもこのまま進むしかないブルーワーズに落とし前をつ

けさせる以上、進む選択はあっても下がる選択は無い。それでいいな？」

「了解（しました）」

「じゃあこの話はここを抜けてからにしよう。オルガ。回収した連中は――」

その後、ブルワーズを補足次第、艦内制圧と拿捕を優先。拾ったヒューマンデブリは鉄華団が7でアウトサイダーズが3ということになった。



——どうしてこうなったのだ？

人間と豚を混ぜて人間寄りにした風体の大男、ブルック・カバヤンはメデイカルルームで頭を抱えていた。それは虎の子のMS部隊が壊滅し頼りにしているMS部隊隊長のクダル・カデルが半死半生で帰還してきたからだ。そいつは体中を管で繋がれてメデイカルベッドの中に漂っている。

「どうすりやいいんだ。ギヤラルホルンとも連絡がつかねえ。あのムカつくガキと君の悪い二人イカレどももいない。モビルスーツも壊れたグシオン以外無い。どうすりやいいんだ？」

テイワズの直系。その中でも次期頭目の最有力候補に手を出している。ギヤラルホルンがケツを持つてくれると約束させ、その証として派遣された十数機のMS部隊も綺麗さっぱりと消えた。ご丁寧に記録や証拠を全て消去してだ。

「詫びを入れるしかねえか？　だが、指を自分で切り落とすとかキチガイみてえな要求をするんだらう!!?　どうすりやいいんだ!?!」

実際はその程度で済ますつもりもないが知らぬは幸福である。

ヒューマンデブリはクルーらによる監視で大人しくしているが数で言えば二倍近い差だ。武装蜂起されればそれだけでヤバイ。手っ取り早く何人か粛清したとしても今度は鉄砲玉が足りなくなる可能性がある。

「クソツ！　楽な仕事じゃなかったのか!!?」

碌な戦力も持っていない商船団ばかりを狙い格上との戦闘を経験せず、ここ数ヶ月は連戦連勝であったことが問題だった。

実はそれよりもレツドからほぼ無傷で見逃されたこと——阿頼耶識とまともに戦うことを危険視したため——で、そこで勘違いをしたというのが原因であったりする。海賊の情報網に変わった赤いモビルスーツの凄腕傭兵の噂は結構あったからだ。

そいつがこっちの戦力はほぼ無傷の状態で——クダルを人質に取られたが逃げを選択させたのだ。自分たちはツいていて、戦うのを躊躇わせるほど強いのだと。

ゆえにブルツクは、ブルワーズは甘言に乗った。勝てばギヤラルホ

ルン公認の私掠船扱いになるからだ。もつともその目論見は獲らぬ狸のなんとやら、であつたが……。

「チツ………おいっ！」

『団長？　なんですかい？』

「すぐにこつからズラかる！　デブリ共に薬を使つて準備させろ！」

『へい！』

「まだだ。まだ終わらねえ……!!」

自分はここで終わらない。自分はツイてるんだ。船団を乗っ取つて、お頭になつて、何度も危ない橋を渡つて、再起する資金だってある。俺に付き従つた乗組員だつている！

「来るなら来てみる………地獄を見せてやる。うひ、うひひひ、ぶひひひひ………!!」

ほどなくして準備が整つたこと。そして接近する艦とモビルスーツを補足したことを告げる報告がブルツクのもとへ届いた。

追い詰められた人間が何をするかはわかつたものではない。それをオルガたちは知ることになる。

ブルツク・カバヤンの眼はすでに正気ではなかつたのだ。



今回、陸戦隊として行くメンバーにレッド以下ブルワーズ組が追加されていた。デルマの希望とオルガの要望から可能な限りヒューマンデブリの少年兵を捕縛ないしは保護をする為であった。

そして鉄華団からはシノを中心とした陸戦経験者の上位組を選抜。オブザーバーにかつて陸戦の傭兵として経験のあるマルバを据えてのミツシヨンだ。

「しっかしマルバがサポート役かよ」

「どの面下げてって感じだよな」

『聞こえてるぞガキ共。こんな形なだがテメエらよりは陸戦経験があるだよ』

「へいへい。だったらもう少しまともに扱ってくれてもイイじゃねーかよ」

『……………それについてはすまんかった。謝ってもどうにもならないな』

『殊勝じゃねえか。マルバ』

『オルガ……………』

昔話か何かに花を咲かせている連中は置いておいて、レッドとクラルク、アインは周りとは違う装いだっただ。鉄華団側からどん引かれるレベルの重装備だ。

『なんで装甲服パワードギアがあるんだ？』

『装甲兵なんて普通は進まんはずだが……………』

『少し重いですね。サーボモーターがあってもキツイですよ。これ』

……』

分厚いバトルアックスに寸胴の装甲。生身の部分を全て覆いつくす装甲に难道かまだらに赤いドアカッター。レッドに至っては重火器とマチェットが組み合わさった「ぼくのかんがえたさいきよーのぶき」と盾を保持している。

ぶっちやけ、こいつら一人で通路が埋まる為邪魔だった。

『マクマード様もご愛用の逸品です』

『組織のトップがカチ込みするの不味くない?!』

『相棒のジロン様はそのままの姿で剣一つですが?』

『親父イ! マスタアアア!!?』

レッドと名瀬の悲鳴が木霊する。そんな姿を見ていたシノがなんかスツゲーいかついな!! と漏らしていたのをマルバは冷静に返した。

『本当ならアレぐらいは必要なんだぜ。何せ追い詰められた相手だからな』

『無いもんは仕方ねえじゃんよ。つーか、昌弘たちがいるんだから抵抗なんて大人組だけだろ』

『……………だといいがな』

『あん? なんだよそれ』

『……………最近は戦闘に関わることもなかったからな。ようやく勘が戻って来たってところだ。オルガ!』

『ンだよ?』

『ウィル・オー・ウィプス『イサリビだ』——イサリビの非戦闘員を安全区画に退避させとけ。それと外部ハッチの観測を忘れんな』

『はあ? 何言って——』

『待つだけが陸戦じゃねえ。攻め込んでくる可能性があるんだよ。名瀬さんもいいですか?』

『おうとも。ブリッジは戦闘態勢に移れ！ 今から戒厳令と陸戦装備着用！ 銃を携帯しろ！ アジーとラフタ、アミダはモビルスーツにシーリングしろ。火器管制も切っておけ！』

慌ただしく動き始めるハンマーヘッドにイサリビは呆然と固まる。マルバがオルガを急かすと、名瀬があれだけ急いでいるのだからと艦内に伝達した。

『なあ、艦長』

『はい』

『これは………やっぱアレだよな？』

『十中八九そうでしょうね。我々も戦闘態勢に入ります』

『頼んだわ』

そうしてレッドも最悪の事態を想定し、クルー全員に陸戦装備の着用と銃の携帯許可、弾薬庫とハンガーの隔離を命令した。

相手は海賊でヒューマンデブリの命を何とも思っていないのだ。

白兵戦のち氷の華（解説付き）

——若獅子より報告。敵艦、近接距離に捕捉。数は一つ！

その知らせは名瀬とレッドにしてやられたと思わせるに十分なものだった。同時に連中の頭目であるブルック・カバヤンの思い切りの良さに驚いてもいた。連中にとってデカイ財産でもある強襲装甲艦が一隻捨てられていたのだ。

『エイハブウェーブの反応もない。まさか船を一隻、囷に逃げるか』

『余計に時間がかかるな。どうする……？』

『どうするもこうするも、やるしかねえだろう』

ギヤラルホルンの大部隊が確認されている以上、単独で行動するのはまずい。じゃあ無視して行くかと言われても、船はまだ生きていて中に伏兵がいる可能性も捨てきれない。

結論として調べ上げて、こいつを手土産にけじめをつけたと報告するしかない。実は消えたほうが囷だったというのもありそうだがそこまでの機敏は無いだろう。

『モバイルスーツの確認だけして無視しちゃってもいいんじゃない？』

『オルガ。それであるの船に兵隊や乗組員が隠れてたらどうする？』

『ラスターに一撃喰らって航行不能とか笑えないぜ』

『エイハブウェーブの反応かモバイルスーツを出しておけばいいんじゃない？』

『壊すにもナノラミネートが反応してて碎けねえよ。スクリーマー……イサリビに使われかけたマイニング機材を使えばぶち壊せるだろうがな』

『あとモバイルスーツはうちの以外は修理と整備で出せん。阿頼耶識でも三隻の防衛じゃ経験が足りないな』

実質、四機が十全に動ける程度で残りは最低限の整備で動かそうと
している状態である。武装も足りないうえに、一番の火力があるべき
ハーフビーク級は防御重視で使えない。対艦ナパームは乗員がどこ
にいるか不明のため使用できない。

今回の目的ははじめをつけさせることだが、鉄華団とアウトサイ
ダーズの戦力増加を狙ってるのだ。

『相応の訓練はしたと思うが実戦だ。人死には覚悟しておけよ。盾役
も忘れんな』

『突入部隊でガタイのいい連中に渡した装甲服パワーディアを着せてろよ。50口径ファイフティ
以上かランチャーでもない限り骨折で済ませてくれるからよ』

☆☆☆
—————
☆☆☆

——突入が開始された。先陣を切るのは鉄華団の装甲服を着こん
だ明弘と随所に防弾素材を用いた陸戦服を着るシノたちだ。それと
は別にダンテによるMSハンガーのロックをする部隊が端末付近で
作業をしている。

鉄華団で一番——もとい、この場に集う者たちの中でダンテの電子
戦能力は他の追隨を許さぬものだった。

「——ハンガーロック。そっちにカメラの映像送るぞ」

『ハンマーヘッドとユフィンにも頼む』

「おうよ」

大した抵抗もなく、ダンテはメインコンピューターを掌握。抵抗らしい抵抗と言えどごくありふれたセキュリティシステム程度で少なくとも鹵獲したグレイズに施されたものには遠く及ばない。

そしてLCSを通じて三隻が情報を共有する。目下、優先するのはカメラの死角と全体システムに残されたログだ。

『いい仕事だな。カメラの履歴を調べられるか？』

「ちよつと待ってください——アクセスできました。ここ数時間ので？」

『そうだ。場所はハンガー内のを頼むのと通信ログもコピーしておいてくれ』

「了解つす」

ダンテが名瀬の頼みを片付けている間、名瀬はユフィンの艦長に贈られた通信ログの解析を任せた。タービンス、それもハンマーヘッドの乗組員の練度は高いがユフィンのクルーはテイワズでも生え抜きのプロフェッショナルだ。わずかな違和感を察知して、それを分析してくれる。

『名瀬様』

『どうですかね？ と、その顔は……やはり？』

『おおよそ二時間前に船外に出ています。それと戦鬪薬コカインの使用を示唆するものもありました。……もう、死んでいるでしょうね』

船外活動用のノーマルスーツならいざ知らずサバイバルパックを取り付けていないパイロットスーツはそこまで酸素は持たない。宇宙漂流をした場合、大体が発狂して自ら首を絞めるか自決する。一応、手順に従って仮死状態による延命もできるがコカインを使用した少年兵にその知能は残ってないだろう。

むしろヒューマンデブリにわざわざ生かしてやるような慈悲などもっているまい。

『もしものこともある。気まぐれでランチを使ってる可能性も捨てきれないさ』

『ですね。モビルスーツもよく間に合いました』

☆☆☆
—————
☆☆☆

「初めて乗るけど——これはアタシ向きじゃないね」

若獅子——現在のアインの乗機である二番機はアマダによって運用されている。なぜならインターフェイスが最新のものであり、かつ、稼働可能な機体の中で一番守るべき機体であり弱かったからだ。アマダほどの腕前なら守り切れるし生き残れるだろう。

これはテイワズの次期主力としてモックアップだが、現時点での性能は現行のどのモビルスーツよりもイマイチという評価である。この点はアインとクランクに整備オヤジから何度も言われた。

『そんなに変わりますか？ 姐さん』

「シングルナンバーに乗っていると顕著だね。軽量だから格闘戦にコツがいるよ」

細身な癖に意外と大きさとパワーのある百里や重装甲の百錬に比べれば、ゲイレールの装甲をそれっぽく張り付けただけのこいつは軽すぎてパワーも低くて頼りない。それがアミダの評価だった。

「こうなると例の計画もどんなもんだか」

『百錬の改良計画の事ですか？ 噂だつて聞きましたけど』

「事実さ。構想段階ではあるけどね」

現状、動ける百錬は44機ほど。性能を追い求めた結果、素材も足りず、価格も抑えられない。

それらを解決しようとしたのがイオ・フレームであり、その試作機である若獅子なのだ。

もちろん現在稼働中の百錬はシングルナンバーを除いてアップデートする予定である。それがアミダの知っている計画の一つであり、すでに参加を要請されたもう一つの計画もある。

「(そつちはこいつがどれだけの物になるか次第さね) 異常は？」

『ありません。見える範囲で反応なしです』

「わかった。妙な動きをするなら何でも警戒しな。デブリに見えてもね」

こつちの事は置いておいて話に戻ろうか。どうしてこんなに警戒しているのか？

名瀬たち経験者が危惧しているのは戦闘員の少ない母船を急襲されることだった。特に戦闘用に調合されたコカインを投与された兵士は正常な判断もできず、従順な奴隷と死ぬことを考慮しない気狂いに変化させてしまう。体に爆弾を巻き付けて特攻——なんてことが起きる可能性もある。

ただ、一般的な戦闘用のコカインであって、海賊——それも死ぬ運命以外にない匪以外に価値のないヒューマンデブリにそんな上等なものを使うだろうか？

正常な判断が出来なくなるといふ共通点はあれど、その品質と効能は価格に比例する。

(レッドの保護した子どもたちが助けたいって言うがねえ)

置いていかれた連中がどんな目に遭ったのか。想像に容易いのではないだろうか？

(今のアタシ達にできるのはランチの撃墜や接近する連中を始末するだけだ。問題は……)

そのための人間に使う代物でもないが散弾砲を全員持つてきていた。使うことが無いのが一番いい。鉄華団の子どもたちに使用するところ見られたくないし、できることなら使う日が永遠に来ないことを祈りたいぐらいだった。

(大人が子どもを守る。血は繋がってなくても、それは人間として必要な……捨ててはいけない部分だ)

そしてハンマーヘッドから銃撃戦の知らせが届いた。悲しくも自分が接近するランチを発見した瞬間であった。

——まだ助けられる。

視界に浮かぶ仲間だった者たちをおさめ、昌弘はほんの少しだけ前に出る。

何故かはわからないが何か嫌な予感がしたからだ。

「昌弘、か？」

「そうだよ。昌弘だ。頼む、銃を置いてくれ」

「本当に昌弘？」

「ああ！ 助けに来た！ みんなを助けに来たんだ！」

「本当に？」

「本当だ！」

叫んでいたやつは銃を降ろした。これでもう……——なんて甘いことは叶わなかった。

『昌弘ッ』

「にいちゃ——」

盾を放りだした明弘が昌弘を押し倒した。そして倒れ行く間、明弘に頭を庇われるように抱かれた隙間から見えたのはいくつもの銃弾が少年——リーヴアイの体を突き抜ける光景だった。

「リー——」

「この裏切者」

「ちが——！」

憤怒の形相となった少年たちが銃を構える。狙いは昌弘だった。

装甲服はほぼ全身が守られる特殊繊維と装甲の塊ではあるがその恩恵を受けられるのは着込んだ人間とセオリー通り背後に隠れる者たちだ。

装甲服使用者は絶対に屈んでもいけないし下がってもいけない。

しかし、明弘はそのセオリーを無視し、昌弘に飛び掛かってしまった。つまりシノたちは遮蔽物のない通路の真ん中で棒立ちになってしまったのだ。

「うおおおおおおおッ!!」

そこは火事場の馬鹿力、もとい、浮かんでいた盾をシノが引っ掴み背後にいる仲間を庇うように構えた。

一瞬後、弾丸が通路内を跳弾し、盾に直撃した弾が弾かれる。弾かれた弾丸は幾度か跳弾し少くない数がシノの背後にいる者と少年たちに到達した。

「畜生がああああ!!」

「ば、やめ——!!」

仲間の血を見て、双方で無事だった者が応戦する。それを引き金に少年たちも昌弘ではなく、盾のほうへと攻撃を集中させた。

シノの叫びは銃声と怒号に掻き消え、昌弘は装備の差から死んでいく仲間を隙間から見ているだけであった。

作業服の少年らよりも最低限の防弾装備を持つ鉄華団らに軍配が上がる。が、それでも死者はゼロにはならない。ヘルメットのバイザーは銃弾に耐えられるようなものではない。ハンドガンの弾は防げてもライフルの弾は防げない。

一方からの銃声が止むとやや遅れて残ったほうも止んだ。

「……………こちらシノ。オルガ、聞こえるか?」

『聞こえてる。何かあったのか』

「ブルワーズの連中と交戦。説得にも応じねえ……………こっちは4人殺された」

『……………そうか。なら予定は変更だ』

「オルガ?」

『見ず知らずの連中より、俺は家族である鉄華団を優先する。先に撃つのはダメだが撃つてきたらすぐに応戦していい。いいな?』

「……………了解」

考えるまでもない。昭弘の弟の頼みであつても鉄華団の命を失わせる理由にはならない。

同時に通路に浮かぶ血と死体の群れを眺める。火星以来の惨状だ。

『昌弘。お前は負傷者の搬送と一緒に引つ込め』

「……………はい」

「——すまん」

「——いえ。俺の方こそ出しゃばり過ぎました」

言葉少なく、今はそれが精いっぱいだった。

これ以上喋れば感情が抑えられなくなって殴りかかりそうになる。そんなシノの気持ちを知ってか、昭弘は下がるように強く言う。他のメンバーもそれ以上のことは言わない。もし、自分たちがこの状況に陥つたら……………立場が逆なら——同じことがまた起きるだけだ。

「行くぞ。こっからは妙な動きをしたら反撃して構わねえ」

「……………了解」



その一方でレッドたちは被害を最小限に進んでいた。装甲服が三人もいることもあるが何よりもその容赦のなさだ。

低い重低音が響く度にまるで投げ捨てられた人形のように少年らが赤い華と飛沫を上げていく。言わずもレッドの重火器による掃射だ。跳弾を考慮し、クランクとアインは盾を構えさせ後ろに控えさせている。

『——次だな』

「……レッドさん」

『今は仕事 중이다。社長かうエイストと呼べ』

「ッ………！ 社長、何も皆殺しにする必要は………！」

『睡眠ガスがあれば無力化できるだろうがそんなもんは載せてない。何よりもお前らにとつては仲間だった連中だが、俺にとつては敵ではない。社員………いや、仲間の命を優先するのが普通だ』

『だが、相手は子どもだ』

わざわざ心証を悪くする必要もないが残念なことにクランクは子どもには優しすぎる。大人であれば態度も変わるだろうが子供殺しはその高潔な精神と道徳観から理解できても納得は出来ない。

反面、アインは仲間が危険にさらされるぐらいなら手早く始末したほうがいいと考えるタイプのようだ。会話に参加しないで漂う死体に警戒を向けている。

『どんな経緯があれ、武器を持った時点で殺るか殺られるかだよ。まして薬物とあんだだけ憎んでいるなら、な』

アストンたちに投げつけられた第一声が裏切者だったのだ。二か月近い、長くもなければ短くもない期間の中で大切に扱われていたと言われ、救いに来たと言われれば——こころも嫉妬に狂うだろう。

(薬の影響を考慮して時間をかけるべきか？ その間に奇襲される可能性も……)

隔壁を閉鎖して曳航するべきか？ こつちに残す人員の安全は確保できるのか？

仮にそうしたとして、撤退時に奇襲されないのか？ 本当に電子戦に長けた奴はいないのか？

『考えすぎるのもアレだな。一部屋一部屋やっていこう』

『了解しました』

『……わかった』

『一応、初手は無力化を狙え。撃ち合いになった時点で掃討に移行する。……出来る譲歩はこれぐらいだ』



鉄華団が結成されて以来、初めての人同士の戦いは後味の悪い結果となった。今回の制圧戦でおおよそでブルワーズ側の死傷者は八十名近く昇り、その内の死者は七十人をを超えた。それとは別に捕虜となったのは三十七名とブルワーズの主戦力はヒューマンデブリが大半だったようだ。

そして船外にてランチによる強襲を行おうとした連中は全て死亡している。こいつらについてはユフインの艦長が対艦ナパームによる証拠隠滅を行い、知っているのはごく一部の大人たちだけである。

「すまねえな。嫌なことをさせた」

「仕方ないさ。あの子たちが余計な負い目を背負う必要はないよ」

「……………そうだな」

応接室で女たちを慰めていた名瀬にとって女は太陽だという考えを抱いている。男は花で、女と言う太陽が無いと男って花は枯れしまう。

迎撃に当たった女たちが皆、焦燥しているのを見て名瀬は今抱きしめて凍えてしまった心に少しでも温かさを取り戻してもらおうとする。

その優しさを解っているから女たちは抱きしめ返すし、自分達を選んでこの男を愛おしいと思う。幼い敵から守れたのだと言い訳をする。

「今日はもう休め。あとは俺たちの仕事だ」

一人一人の額に口づけをし、渋るアミダをアジーとラフタに任せて名瀬は荒々しくソファアに座る。

「——気に入らねえな、おい」

今回の簡易的な報告書を怒りを隠さぬ瞳で眺める。やはり、ブルワーズの首魁であるブルック・カバヤンをはじめとした大人連中は逃亡したあとであり、三日月が交戦したガンダム・フレーム——グシオンとやらもなかった。

そのうえで妙に頭が回るらしく、食糧も水も推進剤も殆ど無い。仮に無視していたら中にいる少年兵は餓死する運命だっただろう。

「——喧嘩売った落とし前ってことにしてたがあ………なあ、オ
ルガ」

『——わかってます。兄貴』

「鬼畜外道どもを五体満足に生かしておいちや、テイワズの仁義に反する。何より俺の怒りが収まらねえ——仕留めるぞ」

『もちろんです』

「それはそうと鉄華団で全部受け入れってのでもいいのか？」

捕虜となった奴らの受け入れ先はすべて鉄華団預かりとなっている。目の前のソファアで不機嫌なことを隠さないレッドが手加減の言葉を忘れたかのように殺していったからだ。

捕虜を作らなかつたわけではないがトラウマみたいなものを植え付けられたらしく、鉄華団に行くことを懇願したぐらいだった。

『いくら無力化するからって、^{マチェット}アノ武器で頭から股まで叩き切る必要はないだろ？』

「地球の中国って国があった場所には殺一警百って言葉があつてよ。一人を惨たらしく殺して、百人に警告するって意味だ」

「………つまり？」

「やりすぎました。けど後悔はしていない」

「……はあ。お前、そんなことしてると見捨てられるぞ?」

「そんな時はそんな時でしょ。追いかけてはしませんよ」

実際、薬を使われなかった連中が不意打ちをしてきたことも報告されている。

『確かに。ウチの連中はその辺りを考えてなかった。だから死ななくていい家族が死にしまった』

「オルガ。そいつは結果論だ。失敗を教訓にするのはいいがそいつを引きずるな。憑り殺されるぞ。ダンテにもそう言っておけ。お前のミスじゃないってな」

『………うつす』

(どうもこうも責任感が強すぎるだろう、コイツら)

なんでこう、自分の下にいる奴はこうも責任感の強い連中ばかりなのだろうか？ マクマードが聞けば、大笑いして「お前自身が責任感の強い男だからだ」と言い切るだろう。いい意味で類は友を呼んだのだ。

レッドにしても踏んだ場数の違いで慣れはしていてももつとやりようがあったと悔やんでいることだろう。この予想は正しく、後に催眠ガスの導入を検討しているのが目撃されている。

「昏い話は終わりだ。とりあえず、やることはやっておきたい」

『航路変更ですか?』

「いや、死んでいった奴らを送るのさ」

——イサリビの甲板上にノーマルスーツを着た人影が多く見えた。その中に一つ異様なものがあつた。

「どうだ？」

「準備できました」

「他に別れを済んでいないやつはいるか？ 中に入れるのを忘れたやつは？」

遺体を冷蔵保存できる棺桶だ。中には遺体などなく、紙で織られた花やカプセルに入れられた生花。あるいは本や食べ物。故人らの持ち物であつた。

「……………なんも残つてないな」

「アストン」

「持ち物なんてなかったし、体が残っていれば御の字。ブルワーズの服は……………そういえば止められたな」

「ウェイストさんたちと名瀬さんが縁起が悪いって止めたんだよな」

せめて衣服だけでもとピトーとペドロが切れ端を入れようとしたところ、二人に止められたらしい。

なんでも、そんな怨念の籠った代物は還る魂を縛り付ける曰くにしかならない、と。二人もアストンやデルマも意味が分からないと首をかしげていた。

奇しくも、イサリビにおいてもオルガが葬儀をやる意味が分からないと愚痴っていたのをメリビットに見られていた。彼女自身も育ち方次第でここまで現実に生きるようになるのかと恐れただろう。

オルガの考えは人の魂というか、力のないものが抱く希望や願い、死者に対しての哀悼を無用の長物と切り捨てた極めてドライな精神だった。

(この子たちは本当にまともな環境で生きられなかったのね)

メリビットの哀れみはオルガ達、ひいてはスラムで足掻き続けた連中への侮辱でもある。現実を知って俺たちはそれに飲まれないように生きていると言いつ返すだろう。

逆に言えば余裕を知らない、キレたナイフであるということだ。張り詰めているとも言えるし、恐ろしいほどの世間知らずでしかない。

(雪之丞さんもマルバ氏も元CGSの大人たちは何も教えなかったのね)

雪之丞はまだしも、残りの連中は数合わせか不満のはけ口以外には思っていないのが真実である。

『あー、あー……みんな、聞いてくれ』

不器用ながらもオルガは弔辞を述べる。死者が生前の痛みから解放されること。魂となって還るべき場所へ還れるように祈り送り出すこと。そして――

『俺たちが悲しんでちゃあ、先に逝った仲間――家族が安心して逝け

ない。送り出して前に進まなくちゃいけない。けど、忘れるな。あいつらの事をたまには思い出してほしい。忘れ去られたとき、死んだ奴はもう一度死んじまう。そうさせないためにも……忘れるな。けど、引きずるな。今日は泣いて、明日は前に進もう』

——すつと胸に降りてくるものがあつた。不器用でも何かしら変わろうとする瞬間を見た気がした。

メリビットは自分も嫌いで仕方がなかった上から目線の大人に成り果てようとしていたのに気づいた。ここはスラムの街中ではない。CGSのような消耗品として扱われる場所ではない。名瀬やレッド、アミダ、クランクといった大人たちが導いている場所なのだ。

『以上だ。これより吊いの吊砲をする。その後黙とうを捧げる』

一発、二発と主砲が轟音を伝える。

「——綺麗……」

「すつげえ………！」

星々が輝く中で一際大きな華が咲いた。氷の華……死者の魂を安らかに送る為の、残されたものの心に刻み込むための華が二つ咲いた。

『——黙とう』

誰も目をつぶれとは言っていない。皆黙って、宇宙そらに咲いた氷の華に仲間たちの思い出を思い起こす。涙を流す奴もいれば、自分も死んだらこんなことをしてもらえるのかと思いを抱く。

ただ共通していることは、安らかに眠りにつけるようにと切に願うことだった。

いんたーみっそんんんん！ (解説付き)

「―大掃除をしよう―」

「二掃除をしよう (しましよう) ！」「」

「なんだ突然。クーデリアさんやフミタンさんまで急に？」

「久々の出番なんですから当然です。ヒロイン枠なんですよ」

「傷跡を残さないと何時の間にか狙撃で死んでしまっていた女になるだけです。出番をください」

「アンタら何を言ってるんだ？」

やる気満々と言わんばかりに鼻息を荒くするクーデリアとフミタンであるが、アトラなんて作者も確認するのが面倒なくらいに何時出たか……。

「ア？？」

サーセンでした。てか、地の文に威嚇なんてしないでください。
素人童貞ユージン君。どうかしなさいな。

「……………まあ、兎も角。どうして掃除なんだよ？ (すつげえ貶された気がするが……………)」

「ですから、臭いです」

「不潔です」

「格納庫なんて地獄絵図だよ。加齢臭じゃなくて、カツサパ臭がするの」

……………雪之丞、君は泣いてもいいよ。

「そこまでか？ まあ、おやつさんが臭うのはわかるけどよ」

「痛い刺激臭は人間が出していいものではありません。即刻、艦内の清掃と皆さんも身綺麗にするべきです」

「でもなあ……………これからテイワズの頭と会談が——」

「臭いと女性に見向きもされませんよ」

「総員！ 清掃準備ツ！！ ダラダラしてるやつは明弘マツスルトレーニングの刑に処すぞコルアア!!？」

なお、船内を掃除するだけの洗剤が足りなかったために歳星で洗剤を爆買いする鉄華団団員の姿が目撃されている。

「―オルガくん、テーブルマナーを学ぶ―」

それはメリビット・ステープルトンの最初の仕事でもあった、と後年、火星でシンデレラストーリーを紡いだ男、オルガ・イツカの自叙伝に記されていた。

「テーブルマナー？」

「はい。タービンスの兄弟となり、テイワズに席を置く以上、ある程度の気品やマナーを持ってもらう必要があります」

「気品やマナー、ねえ」

これでも幾分かマシになった程度のイサリビの中。野郎どもの巢窟の為、多少の臭い汚いは許容していたがつい先日の大掃除にて業者も雇っての大掃除となった。

正直、真つ当な生業を目指しているが必要なのだろうか？

「交渉は何も即断即決で行われるものではありません。特に大きな案件には必ず懇意の企業がいます。何度も会食を行い、相手の懐に飛び込むためにもマナーは重要です」

「わかったがどういうのなんだ？ そのテーブルマナーつてのは」「会食の際に作法です。すぐに使われることも視野に入れて、基本的な部分を習得してください」

——こちらへどうぞ、と連れてこられたのは食堂。アトラがコック帽を乗せて、レシピを見つつ料理を作っている。なるほど、実践と言うやつか。

少し役得かもしれないな、と旨そうな香りを味わいつつ、申し訳ないなど考える。こういう美味いもんを食べるのは命を危険にさらしている奴らが受けるべきものではないだろうか？

「始めますよ」

「ああ」

「まずは——」

後日、これは是非とも皆に必要なだとオルガは思った。副団長のユージンと参謀役のビスケットも必要だと強く感じたのだ。

決して、メリビットが教育ママ過ぎて道連れを増やそうとしたのではない。増やそうとしたのではないのだ。

ただ家族として学ぶ幸せと言うものを分かち合いたいだけなのだ。しくじると容赦なく引っ叩かれるのと反抗的な態度をとると身じろぎ一つでシメられるなんてことはない。

ブルワーズとギャラルホルンの襲撃後もこのマナー教室は続行されている。

火星にいる妹たちを学校に通わせたとき、マナーも知らない野蛮人と思われないため、快く受けた騙されたビスケット。

メリビットのような大人の女性と二人つきりで手取り足取り教え

てもらう、家庭○師プレイを妄想したムツツリスケベことユージン。
その日の教室が終わるころには――

「なんでこんなことに……」

「酷いよオルガ」

「……………家族ってのはそういうもんだろ」

騙したオルガを恨めしそうに睨む二人と良心の呵責に苛むオルガ
らが食堂で突っ伏していた。

そんな彼らの噂を名瀬経由で聞いたレッドはアトラに注いでも
らった飲み物を片手に笑った。

「メシウマwww」

直後、食堂で大乱闘スマッシュオールフェンズが勃発したのは言うま
でもない。

さらに言えば、バカが一人、三人に顔面整形をされたのは当然の報
いである。

「―ヒューマンデブリの子どもたち―」

ブルワーズとギャラルホルンらしき連中との戦闘からはや一日が
経過した。予定では明日にでも暗礁宙域を抜ける予定であったがモ
ビルスーツの整備と船の補修を優先したため、若干の遅れが出そうで
あった。

ひと際大きい岩石の陰に隠れ、補修材を片手にモバイルワーカーたちが船の甲板を走り回る。こういう時、阿頼耶識を持つ鉄華団の連中は使えるな、と借金傭兵^ドは考えていた。

で、今回の話は借金傭兵のことではなく、捕虜となったブルワーズの少年兵らについてである。

当初の予定ではもっと保護できるつもりであつたが戦闘薬^{コカイシ}の使用により7割近くが死亡するという決着となつた。

また、身内の戦死者を出さぬように恐怖と暴力で相手を制し続けたアウトサイダーズについて行こうと思う奴はおらず全ては鉄華団で受け入れる結果となつた。

そんな中でミリアムは保護した少年兵たちの手当てと体調管理を申し出ていた。

「行っていい」

タブレット片手にタービンスの社長こと、圏外圏一の伊達男^名と若い果実^ガに私室で連絡を取り合っているレッドに許可をもらったミリアムはすぐさまイサリビへと乗り付けた。

細マツチヨなこのオカマは無駄にしなを作りながらモデルの様に歩いていく。

時折、小さな子供からお疲れさまと声を掛けられ、返事ついでに触診と称したセクハラを行う。いやらしい手つきにならぬよう純真無垢な少年の性感帯を開発しようと邪な考えを抱くが、それよりも患者のことだと鋼の精神（笑）でとある一角へと向かう。

「クーデリアちゃんもありがとうね」

「いえ。私にもできることがあれば仰ってください。可能な限り協力します」

「私もご飯のこととか聞きたかったので」

銃を持ったチャドとエンビ、エルガーを伴いクーデリアとアトラが

同伴している。

最初はクーデリアとアトラだけだったがチャドに見つかり、念のため護衛として手すきに武装させることを条件に会うことを許可したのだ。

「何もここまでしなくとも……大丈夫では？」

「オルガの勧誘は成功したけど、疑心暗鬼になってるやつもいる。ミリアムさ「ミリイよ」——ミリイさんも健診だから注射とか使うだろう？」

「そうね。流石に大勢に囲まれたらもたないわ。ええ、本当に……！」

一瞬、どういう意味でもたないのか疑問に思うがそれを聞くのを止める自分があるのでスルーする。迂闊に手を出せば悲惨な運命が待ち受けているとナニカが叫んだのだ。

こんな脳内ピンク色——もとい、バラ色の危険物がここにいるのはチャドでも察しが付く。少年兵らの体調管理の為だ。

チャド自身、互いに武器を持って対立したのだから殺しあうのは別に当然だと考えている。そして復讐心を持つのも然り、と。雇い主が変われば手を取り合うのも問題ではない。しかしそれで納得できるほど達観はしていない。

実際、彼らの体を見れば碌でもない目に遭い続けていたのは当然なのだろう。マルバやハエダが優しく見えるような有様だった。そんな目に遭っていて連中がちよつとの情で絆ほだされるとも思えない。

言つては何だが、オルガもその辺りは信用していないらしく誠実に向き合おうが押し付けた恩であっても仇で返されれば相応の報いを受けさせるとのことだ。

「健康診断の時間よお。あ、そのままでもいいからね」

クーデリアとアトラに何かあつてはいけなないと。気を引き締めてれば何時の間にやら到着した。

いかにも胡散臭い、というよりもそつち系の雰囲気垂れ流すミリアムに顔を青くしている連中がいた。

（——金が無ければ女も買えない。なら………つてのか）

震え、顔を青くしている連中は線も細ければ、顔だちもヤマギに近い感じのするものだった。ヤマギ自身もかつて、壱番組による未遂事件にあっていたらしい。全くもって胸糞の悪い裏話だ。

「——脅えなくていいわよ。アトラちゃん、クーデリアちゃん。震えてる子たちをお願いね。問診票を渡すから、その項目にチェックして」

「はい！」

「ご飯はどうするんですか？」

「結果次第で考えましょ。ぱつと見た感じ、栄養失調と絶食気味で自由に食べさせたらリフィーディング症候群で危険だわ。基本はオートミールかミルク粥になると思うの」

リフィーディング症候群とは、過度の栄養失調あるいは低栄養状態時に通常の食事をとるとショック症状を起こして最悪の場合には死に至るものだ。

メリビットやファミタンといったメデイカルベッドを使えるぐらい医療知識でこの症状を相手にするには危険すぎる。実際、ハンマーヘッドの船医も別の場所で診断を行っているぐらいだった。

「——また……抱かれるのか？」

「そんなことないわ」

当時の感覚が蘇ってきたのか、震えも収まり、死んだ目をするようになった彼らにミリアムは優しくはつきりとした口調で告げた。

「私はナイスシルバーなお爺様も、キュートな男の娘も守備範囲よ。けど無理強いはいしないし、強姦まがいなんてポリシーに反するわ」

「何よりも私は医者よ」

「本当のお医者さんはね？ 患者さんと真摯に向き合って、救おうとする者よ」

「いろいろと半端者だけど、その信条だけは何時だって抱いているの」「貴方たちを必ず治療して見せるわ。例え嫌われようともね」

「――金持ちとお坊ちゃん――」

「賓客をもてなすのには不向きですがどうかお許し願いたい」

「構わないさ。君たちも大変だろうからね」

「……………」協力恐れ入ります。何かありましたら、そちらの通信端末でお呼びください」

ギャラルホルンのハーブビーク級にして、ボードウィン家の所有艦であるスレイプニルはとてつもないVIPを乗せ、近場のコロニーであるドルトコロニー群へと進路を向けていた。

VIPを貴賓室でもてなす――と言えば聞こえはいいが実のところ軟禁している状況で、艦長と責任者であるガエリオは内心で重いため息をついていた。

『ドルポンド氏の案内完了いたしました』

『ご苦労。部屋の外に待機しててください』

『はっ！』

ギャラルホルン式の敬礼を返し、大役を任された兵士——ジークフリート・ダルトンは通信を切った。

ダルトン家の次期当主という肩書を持つゆえに警戒をしなければならぬがあの経済界の怪物に一般卒の兵士を充てるには余りにも惨い、と苦渋の人選であった。

暗愚とはいかないまでも、現当主のアドルフ・ダルトンは火星で内縁の妻を捨てて子供を体裁のために軍隊に押し込み醜聞を隠そうとしていた。これだけなら暗愚と言えるが少なくとも支援はしていたし、政治手腕はそれなりのものだ。

「……艦長」

「わかつております。ボードウィン家所縁の者が相方として待機してしますので妙なことはできませんでしょう」

「ならいい。しかし、クジヤン家から抗議が来ているのではないか？」
「アリアドネを介して入手にはそれなりの時間が掛かります。ガルス様がご対応なされるでしょう」

「——こんな政治ショーで内部抗争は笑えんぞ」

事の発端は、統制局局长にしてセブンスターズの一人。そして親友のマクギリスの養父であるイズナリオ・ファリドからの命令から始まった。

地球圏で逆らえるものなど存在しないといわれるエンマルク・ドルポンドをテロ幫助と巨額の脱税に贈収賄の容疑で拘束せよとの指令が下ったのだ。もちろん、統制局からの命令ということでイズナリオが関与したという証拠はない。——アレだけの大物の逮捕に局長が関わらないはずがないのだが……。

「こんなことなら鉄華団の追撃なんぞしなければよかった」

「同感です、と言いたいです。遅かれ早かれこちらに回ってきたでしょうな」

「妹とマクギリスのために、か」

「申し上げますと、私はファリド候を好みませんな」

「不敬罪で捕まるぞ。私は何も聞いてない。あー！ 星々の海がきれいだなあ!!」

セブンスターズ同士の政争なんて誰が関わりたいものか、とブリッジのクルーも聞いてないふりに徹している。

ガエリオも艦長も政財界に顔が利くため、かの怪物の恐ろしさや狡猾さ、気狂いを嫌というほど聞いている。そもそも、脱税や贈収賄で捕まるような証拠を残すわけがない。大方、本命はテロ幫助の容疑だろうか。

いや、それよりもクジャン家と交流のあるJPTトラストに強硬臨検を行った時点でもんでもない貧乏くじを引かされている。

艦長が言いたいのは、ボードウィン家はファリド家に利用され、勢力を落とすのではないかと危惧しているのだ。艦長も少くない数の門弟がおり、ボードウィン家の没落は自身の破滅に繋がるのだ。

「——で、連中の情報は確かなんだろうな？」

「マクマード・バリストンの評判を聞くに七割程度と考えたほうがよろしいでしょう。鉄華団によるドルトコロニーの過激派への援助物資輸送。気の毒ですがね」

「我々に銃を向け火星から飛び出た時点で事を構える相手だよ。子どもとはいえない」

連中——JPTトラストの会長、ジャスレイ・ドノミコルスからの情報はギャラルホルンとして見逃せないものである。

同時に、自身が所属しながら統制局の悪辣なマッチポンプに反吐が出そうだとガエリオの眉間に皺が寄る。それを諫める艦長も、上官の青臭^{気高き}さをうらやましく思いつつ、成長のためにそれを摘み取らなければならぬと暗鬱になってしまう。

統制局は火星の武器商人を使い、ドルトの労働者に武装蜂起をさせて鎮圧しようと目論んでいるのだ。恐らくだが鉄華団は何も知らさ

れていないだろう。一緒にいるはずのクーデリアも同様な。

テイワズは彼らが使い物になるのか見定めようとしている。そして自分やマクギリスもクーデリアと鉄華団が本物か見定めようとしている。

——例え、罪もない一般市民の血が多く流れようとも……。

「思えば随分とお変わりになりましたな」

「ん？ 何がだ？」

「以前であれば、鉄華団を宇宙ネズミと呼んで憚らなかったというのに……何かおありで？」

「……………己の見識の狭さを痛感させられたのさ。唾棄すべき対象に自分も成っていたとな」

「なるほど。では、名誉の負傷ですな」

「痛み止めが切れたら痛いんだぞ、これ」

なかなか容姿端麗、懐の広いガルス候に目元が似ていると言われるその顔は若干の腫れと青あざが目立っていた。

誰も彼もが何があったと憶測を飛ばし、幼馴染であるイシュー家の当主代行にやられたのだとも、痴情のもつれから手痛い一撃を喰らったのだと嘯く連中もいた。

そんな噂話を聞いていて、以前ならばメンツにこだわり綱紀粛正と鎮火活動に勤しんだろうがそんな気も起きない。多少、自分が笑い者になって、士気を保てるならば構わないのだ。

「……………命に貴賤など存在しない。その在り方にこそ貴賤がある」

「良き友人を得られましたようでなによりです」

「マクギリスと本気で殴り合いなんぞ初めてだったよ。まあ、俺が勝ったがな！」

「噂では先に倒れたとか？」

「先に起きたのは俺だ。つまり、俺が勝者だ」

ふんすつ！ と鼻息荒く、子供じみたことを言う次期当主に皮むけたと褒めるべきか、まだまだ子供だと呆れるべきか。艦長はため息を我慢して進路をドルトへと向けるよう指示した。

何にせよ、あの禿げかけた爬虫類みたいな陰険男の思惑通りは気に入らない。

「よろしいですか？」

「よろしいさ。やられっぱなしは嫌いだからな……！」

「――魔鳥たちと海賊――」

強襲装甲艦一隻とモビルスーツを十機近く喪失するという大敗をしたブルワーズの大人組たちは確実に追いかけて来るであろう鉄華団らから逃げるべく、暗礁宙域のデブリ帯に深く潜りこんでいた。

少しでも目立ちにくくするため、デブリで偽装したランチを哨戒基地として運用し、彼らは緊張を強いられていた。

そんな中で、首領のブルック・カバヤンはブリッジで連絡が一向に取れない自称傭兵――ギャラルホルンの非正規戦隊に悪態をついていた。相棒のクダルが死にかけているのも、グシオンを残してMS部隊が全滅したのも全部あいつらが焚きつけたせいだと逆恨みしているのだ。

「哨戒班から報告は？」

「何もありません。連中、こっちが外に出て行ったと思ってるんじゃないですかね？」

「仮にそうだとしても外に出れねえんじや、こっちが干上がっちゃう。」

畜生め」

デカイ夢なんざ見ないで、小狡く仕事をしていればよかったと後悔しても後の祭りである。嘆きたいしこの苛立ちをぶつけない。

だが怒鳴って、喚いて、当り散らせば今度は自分の命が不味いというのは理解している。少なからず、反対していた連中がいたのも確かで、腹心の部下から集まって何かをしているとの報告を受けていた。

——クーデター……。死に体のブルワーズで内部抗争など起きれば、たちまち崩壊するだろう。そして、身の安全を確保するために鉄華団の連中への土産にされるかもしれない。

今までならヒューマンデブリにも^ガキ^キド^ドも^モに^ニ矛^ム先^{セン}を^ヲ向^ムけ^ルこ^トで^ヲ収^メま^ッて^いた^ガそ^イつ^ラは^イ今^マ頃^ノ死^シ体^{タイ}にな^って^いる^だら^う。

「……………あと一日待つ。そしたら遠回りだが別の回廊で外に出るぞ」

「了解しやし——」

『お頭ッ!』

「ッ?! なんだ?」

残した船から物資をかつぱらつてきたとはいえ、雀の涙程度。ヒューマンデブリに喰わせるのは残飯か粗悪な栄養バーで十分としていたの裏目に出してしまった。つまりは没収した食料系の物資は現在の船に備蓄していたのと合わせると通常一隻分にしかない。

不平不満の多い状況でガス抜きをするには生贄を作る、女を抱かせる、美味しいものを食わせる以外の即効性のあるものは無い。可能な限りで節約しつつ贅を尽くしたものを食わせても今の殺伐とした状況なのだ。

いよいよとなれば、新入りか使えない連中を生贄にして凌ぐしかないと昏い計算をしていると観測班から悲鳴が上がった。無線封鎖——こんなところじゃ何の意味はないが、発信元を解析されて居場所がバレないように徹底させていた——いわゆるLCSによる光通

信の制限を破ったのかと思っただがここで怒鳴ってしまうのは拙い。

極めて冷静に、何も心配していないからお前らも心配するなど態度と声色で着飾る。

「奴らが来たのか?」

『違います。あの二人が来たんですよ!』

「なんだとお?!」

それは煽るだけ煽っついてケツをまくって逃げやがった、自分達を苦境に陥れた元凶だった。連中が乗っている強襲装甲艦がゆつくりと近づいて来ているらしい。

虫が良すぎるとはこのことでブルツクの中では自分たちは勇敢に最後まで戦ったと思っっているらしい。これをオルガや三日月、名瀬、レッド……いや、イサリビやタービンス、アウトサイダーズが聞けば何を言っているのだこいつは? と首をかしげるだろう。

そもそも、奇妙なグレイズが撤退支援に現れて、ブルツクが退くまではガンダムフレームも戦い続けていたのだ。さらに言えば、ブルツクの取った行動の前に撤退して再起を図るべしとの提案もあったがちんけなプライドとギャラルホルンが後ろについているという虎の威を借る狐の如き根性で継戦を主張。聞き分けの無さに見捨てられた、というのが真実であった。

「——落とし前をつけさせてやる。野郎ども! 武装して拿捕するぞお!!」

「モビルスーツはどうするんで?」

「人が乗らなきゃ案山子にもなりはしねえよ。最後にものをいうのはコレよ」

ゴテゴテの銃を取り出し、嗜虐心に塗れた獰猛な笑顔を見せるブルツク。

海賊のやり方つてもんを教えてやる、と彼らは息巻いていた。



「———こは………?」

真つ暗で暖かい……何かの液体の中に浮かんでいる感覚をクダル・カデルは目を覚ましたことで気付いた。

知らないものではない………そうだ。これはメデイカルベッドの治療駅の感触だ。どうして?

——なんで自分がこんな場所にいるのか。どうして何も見えないのか?

「アタシは……あのガキ、に………」

最後の光景を思い出そうとして、それがフラツシユバックした。イカレた速度と反応で一方的に追い詰められたこと。使えないゴミックズ^{デッ}共と同じ阿頼耶識の動きをした宇宙ネズミ。

自分は奴に負けたのだ。装甲を引きはがされ、叩きつぶされ、杭を撃たれ、死にそうになったのだ。

「———ぶち殺しやる………あのクソガキイイイイ!!?」

怒りに身を任せ、鈍い体で暴れていると、患者の覚醒を知らせたか

あるいは暴れていると警告を発信したのか。聞いたことのあるこれが聞こえた。と言つても一度くらいで、もう会うこともないだろうと思つていた人物だ。

『起きましたようね』

「アンタ………確かオリヴィアつて言つたわよね？」

『ええ。そうですね。聞きたいこともあるでしょうけど、無関係なことでもないのかいつまんでお話をいたします』

クダルは目の前が真つ暗なことも、急に体の自由が利かなくなり始めていたのも気にせず、オリヴィアから伝えられた情報を整理していた。

一つ、ブルワーズは壊滅的な被害を受けたこと。同時にブルック・カバヤンも意識不明の重体である。

一つ、抵抗もやむなく撤退を選択し、掃討戦に移行していたところをブルック・カバヤン以下数十名のブルワーズの団員を回収。多少の怪我はあれど生きているということ。

一つ、敵との戦闘でクダルの体は重傷を負い、ブルワーズの船も損壊が激しく自沈処分。治療のため移送したこと。

『以上ですわ。さて………ここからが本題なのですが………言わずともお分かりですわね？』

「——協力しなきゃ殺すつーんでしょ。アタシたちは海賊だ。アンタからすれば駆除する対象。手を結んだのはそれなりの戦力があつて、えさを与えてれば従順。手を切るのにも手間がかからない。そんなところよね」

『あら？ 物分かりが良くて、私、少し驚きですわ。存外………怪我の功名という奴かしら？』

「ふん。死にかけて吹っ切れたのかもね。目の前は真つ暗だけど、頭はすつきりしてる」

『なるほど』

それよりもクダルは聞きたいことがあった。自分のグシオンはどうなったのか？ 仮に回収されたとして。それは依然として自分のモノとなるのか。

『回収済みです。損傷が酷いので改修も手配済みです』

「随分と気前がいいじゃない」

『仲間があんな目に遭わされて、泣き寝入りなんてしないでしよう？』

クーデリアは何としても捕縛しなければなりません。ガンダム・フレームも遊ばせておくわけにはいきません。地球圏に戻ればグレイズを貸与することもできますが貴方の傷は一か月ほど完治までにかかります。リハビリと再調整も踏まえれば、グレイズへの転換訓練なんて時間はないのです』

というのは建前でガンダム・フレームのようなある種の癖を持つモビルスーツは乗りこなすのに才能がいる。もしくは直感的に動かせる阿頼耶識か生体義手による神経接続ぐらいならば正規の訓練を受けたパイロット並みに動けるだろう。

またそれとは別に、クダルの乗るグシオンは一撃必殺の運用方法のせいか、リアクター周りの癖が深刻で微妙な力加減が効かないと整備班から報告が上がっていた。重い重量物を保持し、備え付けられたブースターと機体の挙動で攻撃する関係上、関節や駆動部への負荷が著しいものとなっていた。何よりも海賊風情が十全にモビルスーツを維持できるはずがなかった。

『順当にいけば決戦は地球で行われるでしょう。勝手が変わりますがグシオンは地上戦用に換装します』

「奴らに落とし前をつけられるならなんでもいい。約束も守ってくれれば猶更な」

『それは貴方の働きと態度で変わるでしょう。候も我々も、良き友人、良き同胞、良き同志には敬意を払いますわ』

「ふん……もうしばらく休ませてもらうわ。しんどいし」
『ええ。治療促進剤も投与するので不要になり次第起こします。では、よい夢を……』

妙に大きく、ブツリと音が聞こえた。

クダルは考える。グシオンの装甲を無視し、的確に執拗に装甲の間を狙い続ける白いモビルスーツ——バルバトスのことを……。眠気が増し、降り立ったこともない地球で奴をスクラップにしてやると誓いながらクダルは眠りについた。

☆☆☆
—————
☆☆☆

「馬鹿な低能ね」

「姉さん。馬鹿と低能は一緒だ」

「ああ、ごめんなさいシャルン。救いようのない馬鹿どもの間違いだったわ」

ハンガーに続々と大人一人はいれそうな黒い袋が運ばれていく中、膨らみ過ぎて完全に閉じ切らない袋が数人がかりで運ばれている。

開いている部分から見えるのは生氣のない顔。豚のような鼻に垢塗れで清潔と言言葉を母親の腹の中に忘れてきたのではないかと言うぐらいに汚らしかった。

「使えそうなのは？」

「二十人弱かな。残りは強化するから、ミサイル替わりにはなるよ」

「失敗したのもそうしなさい。モビルスーツは有限だし、多すぎれば何かとアシが付くかもしれないから」

「了解」

そう言つて、シャルン・S・フロストは黒い袋の中身を検分している色白の集団とともにハンガーから消えていった。

そして運び込まれてくる袋を尻目にオリヴィアは今後の流れを考える。鉄華団はドルトコロニーへ赴き、そこで盛大に暴れるだろう。同時にテイワズにも不信感を抱く——はずだが問題がある。

(レッド・ウエイスト……様々な派閥にパイプを持ち、^{アリアンロッド}地球圏最強の艦隊と木星の^{テイヤス}マフィアに^{経済界}エンマルク・^{怪物}ドルポンドと強いコネクションを持っている。全くもって何をどうすればそんなことが出来るのか……)

彼らと憚らずに付き合うというのは薄氷の上をタップダンスし無事なのと同じぐらいあり得ないことだ。遅かれ早かれ反目し合う連中を一つにまとめている。

(直感と言うやつかしら？ だとすると、GNトレーディングスの件も察知されるか?)

スパイによればマクマードは鉄華団とクアデリアが使い物になるかを確かめたい。そのために直轄の部下であるユフィンの艦長を下につけたのだから、まず介入は出来ないしさせない。

問題はダミー企業のGNトレーディングスについて調べられ、こちらの存在を把握されることだ。状況によっては一段階は計画を押し進めなければならぬ。

(乞食のマクギリスも不穏な動きを見せている。ボードウインの小姑娘と大人しくしていればよいものを……)

オリヴィアは思考の海に潜ったまま、無意識のうちにハンガーを後にした。

すべては大恩ある候のために。正しき正道へと世界を導くために
まるで石造のように動かないで思索に耽る。それは呼び出しても反
応を見せないことに気づいたシャルンが来るまで続いたのだった。

ドルトコロニーで僕と握手！（解説付き）

暗礁宙域の中でブルワーズとギャラルホルンの混成艦隊を退けた鉄華団らは以降の妨害もなく、少し拍子抜けをしたように悶々としていた。

宙域内では面白おかしいことも多々あったがそれは別の機会にしよう。

現在は宙域の出口付近を偵察させ、その結果次第というところだった——のだが、ここで大きな問題に直面する。

『期限が迫ってる？』

「荷物の引き渡しを命じられててな。鉄華団の初仕事で、ジャスレイの叔父貴が担当してたんだ。ああ、筋は通したし、オルガも連れて詫びを入れてあるから問題ないぜ」

『はあく……じゃあアレか？ 失敗するとマクマードさんとジャスレイの顔に泥を塗っちゃまうと』

「最悪、イサリビだけでも先行させるのも視野に入れたい。初仕事でミソが付けば取り戻すのに悲惨な目に遭うだろ？」

『……………だな』

ここからドルトまで急げば二日程度で到着する計算だと名瀬は言う。ただし、何の邪魔も入らなければという前提が必要だ。

いつそのこと、足の速いユフィンに荷物を載せて運んだほうがいいんじゃないかと提案したがダメだと言われ、それ以上のことをレツドは言えなくなつた。鉄華団と言えばイサリビ、と印象付けたほうが便利と言えるかと一人納得する。

（妙なところで頭が回るからなコイツは。……………親父の命令とはいえ、義息子を騙すのは気分が良くねえな）

一方で名瀬——もとい、マクマードらからすれば、今回レッドは邪魔者でしかない。鉄華団とクーデリアの真価を図るためには単体で事を成してもらわなければならない。そのために在りもしない輸送依頼をでっちあげたのだ。彼らの運んだ荷物でどれだけの犠牲が出ようとも関係は無い。重要なのはテイワズにとって旨味があるかどうか？ それしかない。

仮にクーデリアが治めれば、そのカリスマ性を利用して火星へ大規模な拠点と流通網を構築し、それを足掛かりにして地球圏、いや経済圏の内側へと攻め込む。クーデリアにとつてもドルトを支配するアフリカ・ユニオンに打撃を与えれば、これから交渉するアブラウの狸爺時苗へのいい手土産にもなる。不本意ではあるろうが。

対して、鉄華団はその暴力の使い方と頭の使い方を試す。禁制品の輸送や裏社会にも籍を置くテイワズにとつて、用心深さは重要だ。言われたままに命令をこなすのであれば鉄砲玉として運用する。あるいは何か騒乱が起きた場合に戦力として派遣させ、区切りのいいところで切り捨てればいい。

勘違いしてはいけないのが別に好き転んで若い連中を騙そうとしているわけではない。子どもとして生きているのなら、こんな魑魅魍魎が跳梁跋扈する伏魔殿の如き上ノール・コミュニテイの社会に引きずり込むなんてしない。

しかし、彼女、彼らは自ら飛び込んだ。優しい理想と淡い希望。見通しの欠片も発ってない野心と場違いな望みを抱いて飛び込んだ。その時点で競争相手となったのだ。

(悪く思うなよお前ら。これが大人の世界の荒波つてやつだ。泳げない奴は沈んで、溺れる奴は身包み剥がされて沈めちられまう。薄汚れた現実さ)

願わくば、親父たちの眼鏡に叶うといいな、とラフタたちの偵察待ちをしていると報告が来た。

ハーフビーク級二隻、モビルスーツ十機の部隊を確認。すでに出口

付近で展開中。

「言った通りだな。モバイルスーツ発進準備。レッドのほうにも伝えとけ！ 予定通り、抑え込むツてな」

☆☆☆
—————
☆☆☆

「任せていいんだな!？」

「兄貴とウエイストの野郎を信じろ！ 俺たちは最大戦速でドルトに向かう。ユフィンが盾になつてる間に引き離すぞ」

『それ大丈夫なのか？ 一緒に戦つた方が……』

「明弘。この仕事はもう期日が近づいてるんだ。失敗すれば兄貴だけじゃなく、ジャスレイの叔父貴やマクマードの親父にも泥を塗つちまう。下手すれば鉄華団がケジメをつけなくちゃならねえ」

『大丈夫だよ明弘。そう簡単に沈むような奴じゃないし、俺たちが離脱すれば自由に行動できる。レッドもアミダさんもすごい強いからさ』

三日月が穏やかな声で昭弘を諭す。三日月自身も三隻全員で向かいたいのが本音だが、仕事には期限というものがある。ドルトへ資材を送るのはテイワズから依頼で今後のために必要なこと。クーデリ

アを地球に送り届けるのも鉄華団が仕事を放棄しないし、どんな困難があつても達成するという信頼のためにも必要。

思えばこんな難しいことを考える必要も余裕もなかった。オルガにすべて任せ、自分は立ちほだかる敵を潰せばいいと結論付けていた。

『名瀬さんやレッドを信じよう。アミダさんは俺より強いし、レッドは無駄にしぶとい。ギャラルホルンが倒せるほど軟やわじゃない』

『…………お前、変わったな…………』

『そうかな?』

『そうだよ。もっと、こう……………冷めてて、機械みたいな感じだったぜ』

『…………ひと段落したらシミュレーター十時間ね』

絶望した声で謝る昭弘と聞く耳もたぬとつつけんどんに返す三日月の漫才により、ブリッジも幾分か緊張がほぐれていた。

オルガはこれも余裕があるからなのだろうと推測する。もしも自分たちだけだったら? タービンスかアウトサイダーズがいなければ? どうなっていたかわからない。

(取り返しのつかないことになっていたかもしれないねえな。今でなくとも、その先で…………)

そんな確信がオルガにはあつた。

頼れる大人と近所の兄貴って感じだろうか。自分も余裕ができて、いろんなことが考えられるようになった気がする。敵を片っ端から叩き潰すのが正解じゃない。

「ユフインに伝えてくれ。準備完了。期待に応えるってな」

まずは上りだけを見るんじゃない。目の前のことを少しずつ熟せ

ばいい。

言葉や意気込みだけじゃない。行動で示す。そうすりや周りも認めてくれる。

☆☆☆
—————
☆☆☆

戦局はおおよそ名瀬の思ったとおりに進んだ。ユフィンとイサリビはすでに遠くへ行き、レッドはアストンやクランクたちを二隻の直掩として置いていたため、一人取り残された状態だった。

出口で展開するギャラルホルンのMS部隊を強襲し、イサリビとハシマーヘッド、ユフィンの煙幕弾でかく乱。追撃を一隻許したがアレぐらいなら問題ないだろうと踏む。昭弘やシノの訓練相手にちやうどいいだろう。

——だが、問題はここからだった。

「……レッドに出し抜かれたか」

「グレイズの新型らしいやつと交戦していたのは確認しているんだけどね。どうやらしてやられたみたいさね」

「成長したのを喜んでいいのか、騙されたのを怒っていいのか。わかんなねえな」

見たことのない新型が率いる一個小隊がヴァサゴと交戦を始めた

ところ、レッドは押し込まれるようにデブリ帯の中へと消えていったのだ。

その後、輸送機に接続されたヴァサゴが飛び出し、それを追うように敵の小隊も出現。速度に物を言わせ、すべてを振り切って離脱されてしまったというのが顛末だ。

「そういう割には嬉しそうじゃないか」

「まあな」

そもそもこの襲撃自体がマクマードの仕込んだものだった。ラフタやアジーが攻めきれなかったと悔しがっているがそれもそのはず、相手は月外縁軌道統制統合艦隊の最精鋭。

あのラスタル・エリオンの直掩艦隊であった。

マクマードはラスタルにクーデリアの真価を知らせるため、取引を持ち掛けた。ドルトで行われるマッチポンプを黙っている代わりにクーデリアと鉄華団を参加させろと。

ラスタルも腹の内ではどう考えてるか——この行動を見れば、意返しを最初から考えていたのだろう——取引に応じ、彼らを見逃したのだ。

「後手に回るだけじゃない、っていう示威表示だな。おつかない」

「そんな連中に狙われてるレッドはもつとおつかないだろうね。まあ、凶太いし妙に繊細なところもあるから無事に泳ぎきれんだろうけど」

「違うない」

随分と前からギャラルホルン——エリオン派との合流を考えていたのだろう。冷静に考えてみれば、クーデリアを地球に運ぶなんて無理難題をレッドが受けるはずがない。勝ち目のない戦いをするほど傭兵という職業に夢は見えていない。

つまりにレッドには最初から勝ち筋があった。圏外圏を管轄する

アリアンロッドと早期に合流し、事を成し遂げる。それでいて名瀬を仲介させてアリアンロッドとのパイプをテイワズに作ろうとしていた。

「だけどそれも狂った。アーブブラウの元代表である蒔苗・東護ノ助が汚職の疑いで代表を早期辞職し政敵に追われてオセアニア連邦に亡命してしまった」

「アタシ達も蒔苗の辞職については知っていたけど、亡命に関しては知らなかった。戦闘中に……あの新型のグレイズのパイロットに聞かされたんだらうね」

ユフィンの艦長や整備オヤジからの調査報告で、分かる範囲で外部との通信をした形跡は存在しないと咆哮されていた。親父の言うヴアサゴのパンドラボックスが関わっていたのなら話は別だろうが、艦内ネットワークを経由する以上、どこかで跡は残る。

「兎に角、俺達もドルト6に行くぞ。ふんじばって親を騙す不逞え馬鹿に説教を喰らわしてやらんとな」

「きつーいお灸をすえてやらないとね」

「こんな美男美女の親に叱られるんだ。ありがたく思ってもらわんな。それとここでの話は秘密にしておけよ。親父の計画が失敗したのを喜んでいたなんて聞かれたら、恐ろしいからな」

「じゃあ、今日は熱く情熱的にお願いしまーす！」

「ずるい！ あたしも!!」

「私もよ！ ていうか、今日は私の番でしょ!？」

ブリッジで姦しいじやれ合いが始まるのを楽し気に眺める名瀬であった。

ちなみになんでドルト6に向かうのかと言うと、テイワズの地球圏支部がそこにあるからだったりする。

時が進むこと二日ほど経ち、名瀬とアミダが説教する気満々でいることなどつゆ知らず、一方でレッドはドルトコロニー群はドルト3に到着していた。

鉄華団がどのドルトに——おそらくはドルト2だろうが——居るかは知らぬ体で行動していた。時折、外部顧問の役割はどうしたのだと幻聴が聞こえるが無視する。

レッドの滞在しているドルト3は大型の商業施設と地球圏の富裕層が軒を連ねる一流のコロニーである。セキュリティも厳しく身分的に普通なら入れないような立場であるが、そこはコネやら偽装やら賄賂やらでねじ伏せていた。叩けば埃が出てきそうな人間はどこにだっているのだ。

話を戻して、整然と綺麗な街並みと育ちのよさそうな連中が暢気に歩く中で、レッドは手ごろなオープンカフェでコーヒーとタブレットを片手に知り合いとデートをしていた。まあレッド自身、同席の相手など関係ないと言わんばかりに自前のタブレットを操作し、その結果を冷めた眼で眺めていた。

(……………時苗東護ノ助、オセアニア連邦に亡命。対抗馬の親ギヤラルホルン派のアンリ・フリユウが代表選確実、ね)

どうしてこんな髭に整えているのだろうかと言うぐらい、愉快的な白鬚を蓄えた老人と勝ち誇るかのように笑う女性議員の画像。前者が蒔苗東護ノ助で後者がアンリ・フリユウである。

この話題を聞いて、クーデリアの会談の要請を蒔苗が了承した理由がわかった気がした。というか察したのだ。

(この爺さん。食べねえ腹黒狸だな。大方クーデリアと交渉するつーのも盾代わりにするつもりだな。政争に負けて、アンリ派やギヤラルホルンが襲い掛かってきた時にクーデリアの身柄引き渡しと連れて来た民兵を使い潰すつもりだろうな)

反ギヤラルホルンを掲げる蒔苗をギヤラルホルンが黙ってみているわけもない。汚職の疑い、というか贈収賄の容疑も秘書や世話をした元議員がやったことで蒔苗の直接の罪ではなかった。

つまり、嵌められたのだ。

(……さっさと鉄華団に合流したいがドルト2はなあ……)

「……………なんですか急に。これはあげませんよ」

行きたくてもいけない理由は同席している人物——白いジャケットに碧色のキャミソール、ダメージーンズで着飾った今どきの女の子を装った女性。対して、対面に座るのは黒いジャケットに赤地に黒い線の入ったドレスシャツ。ごてごてのシルバーに薄茶色のグラサンで黒いパンツな我らが主人公レッドさんがいた。

さて、目の前にいるこの今どき系の快活そうな少女は誰かと言えば

「ジュリすけは食いしん坊だなあ」

「ぶん殴りますよ不良債権」

「やめてくれない？ それ聞くと心臓がキュッてなるからやめてくれない？」

「ならばジュリすけ、というあだ名を止めなさい。私にはジュリエッタ・ジュリスという名前があります。」

と、彼女は食べていたパフエを食いつくし、控えていたケーキに手を伸ばし始めた。食べていたパフエも相当な大きさであり、この細い体にこれだけの質量が入るのかと戦々恐々としていたところ、ジュリエッタはふと思いついたかのように呟く。

「——面倒なことこの上ないですね」

「……だな。思ったよりも長い」

「私自身、見張りが付くとは思いましたがこうもなるとは思いませんでした」

女性パイロットというのはギャラルホルンでは珍しいという噂がある。大体の女性兵士は内務か整備士、後方勤務に補給部隊所属。あるいは船のブリッジ要員が殆どだ。モビルスーツのパイロットとなるのはかなり少なく、そのうえで一線級の腕を持つと言われれば顔も売れてしまう。

昨今、女性の社会的地位の向上を叫ぶ団体が多数存在し、ギャラルホルンもジェンダー系の問題には弱いらしく、そういった活躍する女性兵士の特集を組むなど、苦勞しているらしい。

それ故に、ジュリエッタの所属なんてのは知られていて、エリオン派と敵対する連中——統制局全体に勢力をもつイズナリオ派に監視されていた。

レッドがチャライというか、珍竹林な格好をしているのは逃げるときに先入観を与えるためのものである。

「それと例の二機については地球で会うことになる可能性が高いとのことです。統制局所属の貨物船が何度か地球に行き来していますから」

「地上戦も想定されてると?」

「十中八九そうなります。蒔苗東護ノ助の件もあります。ラスタル様もその件については微力ながら手を貸す意思があります」

「——政敵の尻尾をつかめるかもしれない、からか」
「ええ」

——あの方もお喜びになられています。ようやく尻尾をつかんだと。

ジュリエッタの言うあの方——つまり、ラスタルとはアリアンロツドの総司令にしてセブンスターズでかなりの権勢を誇るラスタル・エリオンのことである。

噂によれば、統制局の専横を快く思っていないと言われるがレツドからすると利用価値があるうちは最大限利用する男だと考えていた。

ラスタルは統制局のやり口は効率的だと評価はしているし、必要悪であるから黙認する。彼の世界秩序の根底にはギャラルホルンの武力による平和維持を是とする考えを隠そうともしない。

見方を考えれば地球人類統一機構リビド・アーニスのような過激かつ選民思想の塊の男に見えるかもしれないが過去の事例からして、独裁状態の世界統治が続かないのは歴史から見ても分かるとおりである。

ゆえに、ラスタルはギャラルホルンと言う名前に価値を見出してはいない。これが数百年続いているから効率がいいだけであり、必要であるなら容易く解体。もしくは新たな姿に生まれ変わらせるだろう。

あくまで政治と経済に対し無関係の調停役として、ギャラルホルンを生まれ変わらせたいただけである。

そのため、アーブラウの代表候補アンリ・フリユウと深い関係のあるイズナリオ・ファリドにはどうにかして消えてもらいたい。そのうえで野心家であり、幼少期から垣間見える飢えた獣の本性をラスタルに印象付けさせたマクギリス・ファリドへの首輪として鉄華団への干渉を図りたい。

「その深謀は計り知れませんが、貴方も自分の立ち位置を明確にして

もらいたいとのこと。コウモリ紛いは信用を失いますよ」

「だからこっち側に来いっつーのは気に食わない。程よい付き合いを
していただいだけだよ」

「……そうですか」

「そういうこと。それとこれ渡しておく」

やはりダメだったかと、ジュリエッタはもう一つの任務を遂行しようと鞆に手を伸ばす。だが、その前にレッドは動いていた。渡したいものがあると自然な動作で懐に手を入れられてしまった。

帰れそうにありません、と刺し違えてでも務めを果たそうとレッドの一挙手一投足に注意した。

彼女の予感は大外れで、レッドが懐から取り出したのは一冊の本。ドルト観光スポットを網羅したイケてる若者の決定版！　なんて書かれているガイドブックだった。

「これ、は？」

「少しぐらい休んでも問題ないだろう。知り合いにオススメの場所を
教えてもらって、そこに付箋もつけてある。行ってみるといい」

そう言うと、レッドはジュリエッタの制止の声を聞かずに雑踏の中
へと消えていった。

少しポケっとしてっていると、逃げられたことに気づいて、無線で監視
員へコンタクトを取る。内容は言うに及ばず、巻かれてしまったとい
う答えと謝罪の言葉であった。

「……………やられましたね。——まあ、いいでしょう」

かつてはラスタルの正義を信じるのみのジュリエッタだったが、今
に至っては互いの言い分や背景なども考えられるようになっていた。
ラスタルの意志以外は必要ないと外界との関わりを閉ざしていた彼
女も、かつてはレッドに扱われていたヒヨッコ時代があった。

敬愛する人物——おじ様が連れて来た部外者で教官だったレッドはジュリエッタの頑清な廉さに柔濁らかさりを与えたのだ。清濁併せ？むという思考を手に入れたと言つてもいい。

戦っている相手にも心や背後には何か譲れないものがあるということを学んだのだ。

ラストルからすれば余計なものを植え付けられたと不快感を示すがそれは表面的なことであつた。彼とて人間で、進んで未来ある若者を機械のような兵士にしたいわけではない。必要とあらばそうするが、願わくば——といったところであつた。何よりもジュリエッタが変わつたことで任務や部隊への達成率や実力が上がったという言い訳を得ていた。

だからラストルはジュリエッタを矯正しようとはしなかつた。おじ様も矯正しようとしなかつた。

どちらかと言えば良心の呵責が少し薄れたと、互いに苦笑しながら談笑し、少しだけ寢覚めがよくなったと笑つていたので。

その後、渡されたガイドブックに軍用の記録媒体が隠されており、ラストルの望んだ成果を一部だけでも手に入れられたとジュリエッタをはじめ、潜入部隊の面々はホツとしたのであつた。

おまけ

「36000ギャラーです」

「……は？ 間違いではありませんか？ パフェとケーキとコーヒーだけですよ……?!」

「お連れ様のコーヒーが希少品でして32000ギャラーほどします」

「……少し待ってください。知り合いに借りますので」

結果、部隊の面々に頭を下げて借金をし、後日経費で落ちないかと經理に詰め寄っていた姿が目撃されたとか。

なお、下手人である男に復讐の恨み言を偶然聞いたクジヤン家の跡取りが余計なことを言い、訓練で半殺しにされたとかされなかったとか。

事実はその場にいた者だけが知っている、とだけ告げておこう。

ドルト騒乱 その1 (解説付き)

——ドルトコロニー群・ドルト2は工業を主体とした第二次生産系のコロニーである。

コロニー一つがほぼ生産系施設とそこで働く労働者が生活する環境。港からの超大型エレベーターからは整然とした街並みを展望でき、工業コロニーという重厚な威圧感を感じさせないような街。言うなれば工業の盛んないい街にしか見えない。

——というのは表向きの話でしかない。実際は低賃金で旧地球時代の植民地労働者の苦しみを彷彿とさせるような劣悪極まる環境が隠されていた。

大通りを歩けばショッピングモールやウィンドウに並べられた小綺麗な服飾品。めかし込んで歩く母娘に人の良さそうな父親。カフェテラスではカジュアルな服装に身を包んだ若者が談笑する。

そして大通りから路地裏へと向かう道。途中にある曲がり角を除けば惨憺たる光景が目には焼き付く。

すえた臭いを振りまくホームレスに痩せこけた大人たち。擦り切れて穴だらけな衣服を盗まれないよう、ぎらついた眼で守る子ども。それを狙う別の子ども。

酷いところでは餓死か衰弱死した死体が丸裸で放置されているなんてこともある。

「——これが……地球圏のですか……？」

ノアキスの七月会議で一躍有名となった革命の乙女、クーデリア・藍那・バースタインは目の前に映る現実に目を背けそうになった。大勢の少年たちに囲まれ、なんということはないという風に眺める鉄華団の彼らの異常性に気づかず、クーデリアは地球圏という恵まれた環境への幻想が悉く打ち砕かれていった。

スラム街を知らないというほど、クーデリアはお嬢様ではない。かつてはフミタンに強請り、クリュセのスラム街へと赴いたこともあ

る。迷子になって、とてもまずいことになったのも覚えている。浮浪者やガラの悪い連中に囲まれ、身包みを剥がされそうになったこと。

「あのおっさんたちの話は本当だったみたいだな」

今までもスラム街とはそういうものだと納得し、今度は護衛としてCGS——鉄華団の彼らについて来てもらっている。

そもそも、事の発端は鉄華団がテイワズから頼まれた初仕事から来たものだった。工業用資材の名目でドルト3付近に係留されている資源衛星に持っていけと渡されたコンテナには最新式のアサルトライフルや対装甲火器。ミサイルやモビルワーカー。モビルスーツ用の武器弾薬が満載されていた。

不幸中の幸いであったのは、積み荷を早く運びたいと焦った労働者——いや、武装デモ隊の一員が先走って確認に来たことだろう。衛星についてからであれば、あの武器はデモ隊の手に渡り、鉄華団はテロ行為の片棒を担いだと言われても可笑しくなかった。

実際、デモ隊の責任者だというナボナ・ミンゴという男の眼は危険な輝きを孕んでいたし、衛星で対面した直後にギャラルホルンの憲兵が突入してきている。

テイワズに確認すると武器の引き渡しを拒絶し、メリビットにタービンズとドルト6のテイワズ地球支部へのコンタクトを取ってもらおうとしているが理由をつけられて遅々として進まない。

その最中に、ナボナからなぜ自分たちが武器を取るのか？ その理由が街の裏路地にあると言われ、クーデリアはオルガやビスケット、ユージンら幹部クラスを抜いた面々で調査に向かった。

「火星と変わらねえな。地球圏つてのはこんなに酷いのか？」

「いや、コロニーだからじゃないか？」

シノの言葉にダンテがそう返す。ダンテも幼少期にヒューマンデブリにされてしまい、以前の事はよくは知らない。わずかに覚えている。

るのは海賊にさらわれたことと場所もはつきりしない所で生活していたぐらいだろうか。

要領を得ないダンテの言葉に、シノはじゃあ地球に降りれば違うのかと納得しかけるが待ったがかかる。

「違えよ。だいたい、どこのコロニーも同じようなものだ」

「……………マルバ……………社長」

「もう社長じゃねえよ」

マルバ・アーケイがうんざりするような目で裏路地を眺めていた。もともと、ドルトで金の受け取りをすます予定だったマルバは急遽イサリビへと乗船し、口座の確認をする予定だった。

過去形なのは、金を支払ってくれるはずのエンマルク・ドルポンドがギャラルホルンに拘束されたという情報を知り、決して少なくない額を受け取った自分にも疑いがかかると踏んで確認を諦めたのだ。

何よりも、事前にドルポンドからの命令もあつたというのが理由でもある。

「地球圏と圏外圏なんて分けているが実際は地球に住んでいる奴らが宇宙に送った奴から搾取しているのが現実だ」

「クレーリアみたいな奴はいねえのかよ？」

「存在しないな。そういう奴が出てこないために火星という自分らよりも下層の人間を生み出して、さも自分たちはマシだと演出しているのさ。火星出身の野蛮人とか、貧乏人とか田舎者みたいに蔑ませる」

マルバの考えは概ね合っていた。実際、バーンスタイン家をはじめとしたノアキスの七月会議に出席した名家の連中は本を辿れば、地球から火星をコントロールできるように送り込まれた執政官だ。

初期から中期の彼らは意図的に差別と暴動を引き起こさせ、ギャラルホルンを使って鎮圧という名目で危険人物や団体の処理を行っていた。

後期になれば火星への愛着も湧き、地球からの命令を拒絶するようにもなる。現在に至ってはクーデリアのように独立を叫ぶ存在が出てくる始末だ。飼い犬に手をかまれた、と言っても間違いではない。

「人間つてのは下がいるから安心できる奴が大半だ。俺はマシだとか、あんな惨めな奴にはならないとか考えて嘲笑うのさ。すると不思議なことに現状に満足する奴らが増えるって、寸法だ」

「気に入らねえな」

「そうだな。お前みたいなやつが連中とは違う、弱い奴を助けるんだとか言つて、最終的にギャラルホルンに目を付けられちまうんだがな」

火星で起きている鎮圧という名の弾圧は先に話した通りの思惑と、他のコロニーへの示威行為の意味も含んでいる。

自分^{秩序}たちに逆らったらどうなるか？ デモ隊と治安維持部隊の衝突は真実を歪曲され、率先して報道される。

「ドルトカンパニーの連中は生贄なのさ。他に燻ぶっている連中への見せしめだ」

「ならッ！ 止めなければ!!」

マルバはクーデリアを世間知らずのお嬢様と思っていたが、いざ実際に軽くでも話すとカリスマ性を感じさせる聖女、あるいは救世主といったものが感じられた。

——だが、そういった人物が今までマルバの知り合いや情報網に居なかったわけではない。玉石混合とはいえクーデリアのような存在はいたのだ。

「確かにそうだよな。目当ての武器は俺達が持つてるわけだし……」

「……………ふむ（こいつア……………信奉よりも畏怖のほうが来ちまうな）」

長い人生と傭兵経験から、クーデリアは無自覚に人を熱狂へと誘ってしまふ誘蛾灯だと結論付けた。彼女が悪いわけじゃない。少しでも冷静で、知恵を持ち、止まって考えることが出来るのなら引つかかることなんてない。

ただ、現状、地球に住む人間と宇宙で教育を受けられる限られた連中は人類の半分未満しかいない。ほとんどは冷静でもなく、知恵もなく、止まって考えることが出来ないぐらい困窮した人間が多い。

「止められるんじゃないか？」

「シノ……どうやって止めるんだ？」

「そりゃあ……えっと……どうにかしてだよ！」

義憤に駆られるシノだが、ダンテがどうやって止めるのかを問いたです。何も答えられないシノは勢いだ！ と良く言えば臨機応変、実際はどうしようもないぐらいの行き当たりばったりで解決するんだと主張する。

マルバとしては多少の恨み辛みもあるが、今となっては負い目も感じてい。やり方次第でもう少しい関係になつていたかもしれない。

義憤に駆られて、弱者を助けに行く。そんな青臭いガキみたいな考えに憧憬と羨ましさを感じつつ、マルバは忠告することにした。

別にここで潰れてもいいが、ドルポンドからの命令もありここで終わらせてもいいのか悩むからだ。

まあ、本心では鉄華団を気に入っているレッド・ウエイストや名瀬・タービンの報復を恐れていたというのもある。

「止めるのは無理だな」

「なんでだよ」

「ナボナってやつがギャラルホルンに立ち向かうクーデリアと鉄華団が来てくれている！ なんて喧伝するに決まってるだろ。何より、GNトレーディングス、だったか？ アレもクーデリアからの支援って

言ってるだろうしな」

——あのギラついた眼つてのは、もう覚悟が決まっちゃまって証拠だ。

平坦な声で諭されたナボナや取り巻きの連中の雰囲気思い出して、クーデリアは白い肌をさらに白くした。

「——アーケイ氏」

「なんですか？」

「私のせいなのですか？」

「……………」

「私が……私がノアキスで行った演説と行動が、このような事態を生み出してしまったのですか？」

「……………さあ？」

「マクマード・バリストン氏からも言われています。私の進む道は多くの争いと悲しみを生み出すものだ」と

震えながら問いかけるクーデリアを慰めるのなら、そうしなくとも誰か何時かは同じことが起きた、などと慰められるだろう。芯があるとはいえ温室育ちのお嬢様で頭の回る立派なガキなのだ。どこかで大人の許しとか後押しを求めているのは仕方ないことだろう。だが、マルバはそんなに優しくなれるほどの経験はしていない。

「それを理解して飛び出したんでしょう？　うちに依頼したんでしょう。鉄華団に依頼の継続を求めたんでしょう？」

実際、以前のマルバも損得勘定で仕事を請け負っていた。そこそこ大きい民間軍事会社ゆえに大口の仕事や継続した依頼は組織の運営維持に必要だ。しかしPMCが長期で関係するほどの仕事はそうは見つからない。尙軍連中の素行が悪いのを知っていたし、それらの理由で仕事先からの苦情が客足を遠ざけていた。

そんなところに来たのがクーデリアの護衛依頼である。火星の惨状の証拠だということ少年兵を有するCGSに依頼が舞い込んできた。彼らと共に地球に降り立ち、世界に是非を問いかけて、人情に訴えてアーブラウと交渉を行う。

なんて素敵で、美しくて、優しくて——クソの役にも立たないガキの妄言なんだろうか。

「大人の世界ってのは人情も道具なんですよ。自分を飾るための道具です。私はこんなに善い事をしているがあいつはそんなことをしない人間のクズだって、プロパガンダなんですわ」

「それは……………」

「アーブラウの議長——いや、元議長の蒔苗はとんでもない腹黒狸ってドルポンドさんから言われましたぜ。今頃、ドルト2の暴動の事で子飼いの議員を使いアフリカ・ユニオンを脅してほくそ笑んで眺めているでしような」

この情報は歳星からの出発前にドルポンドから教えられたものである。こういった情報はマルバ程度の経営者では事前に知ることなど不可能なものだったりする。レッドが詳しいのは多方面に伝手を持ち、維持するための価値を示しているからだ。本来であれば事の全てが終わった後に全体像を察するというものだ。

さらに火星圏に情報が届くのは通常最短でも三日はかかる。星間通信の最高ランクなら数時間まで下げられるだろう。伴う費用はCGSなら半年で破産するほどの金額だろうか……。

「これらも含めて考えるべきですな。議長選に急ぐために見て見ぬふりをするか。議長選も間に合って、ドルト2の暴動も止めるという根拠のない奇跡を狙うか」

「言い過ぎだろうがッ!!?」

「現実を見ろってんだよガキ共。運び屋の仕事だってある。渡せば暴動で死人が出る。渡さなければテイワズからの信用を失う。現状、二

つに一つの結末だ。どうする?」

どちらに転んでもケチが付き、無視するには重い負債が付きまとう事になる。

ドルポンドの試験はここからだと言葉を続けた。

「よく考えることですな。革命の乙女……その名前がどれだけ膨らんでるか理解する必要がある」



——かつてを振り返るなら私はあの時、あの瞬間まで理想を夢見る少女でしかありませんでした……。

後年、クーデリアはその時のことを語るのに必ず告げる言葉である。

クーデリア達は重い足取りでデモ隊がいる場所まで向かった。

デモを行う場所に近づくにつれ、妙な胸騒ぎが彼らを襲う。いや、胸騒ぎではなく迸る高揚感。あるいは無敵感や情熱だろうか。その

感覚は彼女らを強く蝕んでいた。

「…………マズいなこりゃあ…………」

「暴動の一步手前じゃないか？ 殺気立ちすぎてるだろ」

「……………」

プラカードや横断幕、人に乗せた作業用の重機が混ざって、油や煤などに汚れた老若男女問わずの労働者たちがドルトカンパニーへシユプレヒコールを上げていた。正面玄関にはすでに武装したギヤラルホルンの治安維持部隊が展開しており、銃口こそ向けていないが剣呑な気配からいつでも掃射できる態勢であることが伺えた。

クーデリアはこの現状を見て、なおのこと恐怖にかられた。それと同じぐらいに安堵感もあった。運んできてしまった荷物^{武器}が彼らの手に渡っていればここは惨劇の場になっていただろう。

「すぐに離れたほうがいいな。誰かに気づかれでもしたら、囲まれて身動きが取れなくなる」

「賛成だ。クーデリアさん。ここはイサリビに——」

シノたちの判断は正しかった。この場を離れるのが双方ともに一番であると理解していた。クーデリアがデモ隊に知られれば、嫌が応にも前へと推し出されて彼女の存在がここだけでなくコロニー群全域に露見することになる。

その後は革命の乙女が来たという事実の後押しされたデモ隊が少しのきっかけで暴徒と化するのだろう。

後ろ髪を引かれる感覚を覚えるもクーデリアは見つからぬうちに去ることを決めた。本心であれば声を揮いあげてドルトカンパニーの上層部を糾弾したい。

だがそれは火星の経済自由化だけの問題ではなくなる。クーデリアが行いたいのは火星のハーフメタルの自由化であり、経済的依存を地球圏から脱却することで火星を一国家として認めさせ、経済圏の介

入を牽制し諸問題に対応していく——そんな理想があった。

(私は無力です)

革命の乙女ともてはやされ、事なかれの父親から交渉役の務めを強請り、家の中で無気力に生きている母を現実を見ていないと陰で罵倒した。

——現実には真逆だった。

(父は私をギャラルホルンに売り渡すような男でした。母は温厚で優しくだったが外の現実を見ないようにならしていた無気力な女だと思っていた。でも、二人とも本当はこんな状況を知っていたから？ 動けばいずれはそうなるかと予測していたから？)

実のところはノーマン・バーンスタインは自治領主の席をはく奪されるのを恐れていたこと。朋美・バーンスタインにおいては単純に興味があつた。さらに言えばそんなことをしても無駄といった諦観があつたというのが真実である。

クーデリアの考えすぎでしかないのだが、自身を諫めていた両親の姿がまるでコールトールのようにクーデリアにまわりつく。見捨てて地球に急げと囁く。今ならドルトのせいで地球周りは手薄だと誘う。

クーデリアは芯の強い少女であるが、それでも大人と胸を張って言えるほどの経験は皆無である。ここ数か月の逃避行は夢見がちな少女にちよつとしたメツキをするのに十分なものであつたがここに至ってはメツキも剥がれてしまった。

(ちいっとばかり刺激が強すぎたか)

白磁のように白い肌をさらに白くし、僅かばかり震えている手足を見てマルバは荒療治が過ぎたかと黙考する。ドルポンドはクーデリ

アの真価を測れと言うが本音は面白おかしくしろというものに違いない。火星の金持ちがアンダーグラウンドの殺し合いシヨウで興奮するのと同様に、ドルポンドにとつては世界で起きる事柄は楽しいか楽しくないかのイベントにすぎないのだろう。

血も涙ものない男ではないが、優しいだけでは生きていけない世界で頂点に君臨し続けている怪物。もしかすればギャラルホルンに捕まったというのは暇だからわざと捕まったのではなからうか？ あるいは――

（いけねえな。あの手の依頼人に深入りすれば破滅しか待ってねえ……。とりあえず、クーデリアをこの場から引き離して――）

これ以上追い詰めても、ドルポンドの不興を買うだけかもしれないと最後尾――つまり、路地の奥側に居たマルバはイサリビへ帰ることを促そうとした。

しかしその言葉は出なかった。なぜなら、背後で物音がしたからだ。

「なんだ……？」

「クーデリアを囲め。デモ隊かもしれない」

「「おう！」」

かつての訓練の成果は生きていたようで、すぐさま、シノ達はクーデリアを守るべく囲んだ。物音の主がはぐれたデモ隊であるなら、気絶させてこの場を去るほかない。

ダンテとシノが矢面に立ち、位置関係でマルバが先頭に立つ。でつぷりと肥えた体ではあるがその下には年齢と見た目の割に筋肉が多かつている。

貧乏くじを引いたな、とマルバが路地の奥を警戒しているが何も出てこない。奇襲を狙っているのか、デモ隊の近くを通って逃げる算段を立てているとよたよたとわき道の影から浮浪者らしき人間が現れ

た。

手に板のようなものを持つている。だが、その眼つきや雰囲気はおかしいものだった。言うなれば薬物中毒が重症化して夢から帰ってこれなくなってしまうようなものだ。

「止まれッ。それ以上近づくんじゃねえ！」

「うひ、っ…………うへへ…………」

浮浪者は止まらない。くぼんだ目とこけた頬に垢塗れの異臭を放つ姿に一番近いマルバは顔を顰める。あまりの悪臭に火星であったならもう撃ち殺して犬の餌にしていたことだろう。

ふらふらと歩いてい来る浮浪者の腕は肘の内側辺りが青紫色のまだらになっていた。

「ジャンキー中毒者か」

「守りを固めろ。動けないように仕留めねえと反撃してくるぞ」

ブルワーズとの白兵戦でもそうだったが薬物で恐怖心や痛みを麻痺させた人間は危険なんて顧みずに襲い掛かってくる。

もし、腹に爆弾なんて巻き付けていたら一緒にお陀仏だろう。戸惑いもしないだろうし、むしろ抱き着いてくるかもしれない。妙なふくらみは見えないため、手に持っている板状の何かがソレなのだろうか？

「け、ひう——」

「……………ぶっ倒れやがった」

正確には股座をいきり勃たせて、腰を浮かべて大きく痙攣している。心なしか汚れ塗れズボンに染みが出来ているような気さえする。

そんな男のエクスタシーなど一度も見たことがないクーデリアは耳まで真っ赤にして両手で顔を覆うが、周囲は呆れたように気が抜け

かけている。

しかし、そんな状況も男が持っていた板状の何かからの声で一変した。

『——初めまして。革命の乙女』

「！」

護衛の一人がナイフでひっくり返すとそこには「SOUND ON LY」の文字が映し出されていた。ごくごくありふれたタブレット端末だ。ここにいる誰もがそれを見たこともあるし、利用したこともあった。

人間味など感じない抑揚のない機械仕掛けの音が一回の耳朶を打った。

同時にクーデリアは何か、言いようのない……いや、悪寒。嫌な予感。虫の知らせ。そのようなものを感じ取った。

無視して戻るべきと提案するマルバの声がどうしてか遠くに聞こえた。

——聞かなければならない。そうしないと取り返しのつかないことになる。

「何者ですか？」

『名前は名乗れぬためご無礼をお許しいただきたい。我々は——』

クーデリアは己の直感を信じた。デモ隊の怒声と罵声の騒音を最後に機械音声の言葉がクーデリア達から、騒音を奪った。

——我々は革命軍。貴女方に協力していただきたいことがある。

——もちろん、ただとは言わない。

——報酬は……彼女らの命でどうだろうか？

画面に大きく映し出された拘束されたアトラ・ミクスタとフミタ
ン・アドモス……そしてビスケット・グリフォンと見知らぬ痩せぎす
の男。

そして彼らに銃を突きつけるナボナ・ミンゴたちの姿だった。

ドルト騒乱 その2

——世界は……社会とは極一部の人間の思惑ながれに乗せられた人々が複雑に絡み合つて描かれるキャンパス。あるいは遊戯盤である。

軽度ではあるが近眼には違いないフミタン・アドモスは雇い主から聞かされた嘲りを思い出していた。

(……………罰ですね)

雇い主が派遣した殺し屋ヒットマンといけ好かない小娘、クーデリアの始末の打ち合わせが終わつたときだった。

親に売られ、支援者にすら駒としていいように使われていたあの小娘と長くともに居すぎたのだろう。悲劇の乙女として血の海に沈む姿を想像して、思わず顔に出てしまったらしい。

フミタンの抱く憐憫と後悔を嗅ぎ取つた殺し屋は教育と称して彼女を折檻した。見た目も体の肉付きも素晴らしいフミタンを男たちは犯しはしなかった。プロはそんな非効率的なことはしないし、フミタンとて殺人の経験がなかつたわけではないと知っているからだ。

フミタンはスラムの孤児として生を受け、幼いながら見た目もよかつた。ゆくゆくは場末の娼婦となつて若くして死んでいく未来しかなかつた。

そんな彼女に目を付けたのが真の雇い主であり、鉄華団の動向を知らせるスパイ、クーデリアの謀殺を命じたノブリス・ゴルドン——
火星では名の知られた商人であり富豪の一人であつた。

表向き貿易や商店を営む企業である。しかし裏の顔はノブリスを含め、彼のような承認をこう呼ぶのだ「死の商人」と……………。

(生まれも育ちも……………死ぬ寸前まで最低とは笑えます)

ノブリスはクーデリアの死亡により、火星で大暴動が起きることを予見していた。さらにテイワズに頼んでいたドルトでの火種づくりの一環にクーデリアを関わらせるといふ提案に飛びついたのだ。

——哀れ、革命の乙女は弱者のために立ち上がった聖女として笛吹なる傲慢な悪党どもの凶弾に倒れる。民衆は聖女の意志を引き継ぎ、解放のために武器を取って立ち上がる。

つまりは反乱軍民衆と笛吹の悪党の双方に武器を売り、情報を売り、裏から操作して自分たちの金づるにしようとは画策しているのだ。

双方の血と憎しみは彼らにとって黄金と同価値であり、反戦活動や真実を暴こうとする行動は糞の役にも立たないものである。

（まあ、あの男たちは早々に退場したので少しは気が晴れましたが……………）

自分やビスケット、アトラとサヴァラン・カヌレという男性を撮影している女の向こうで、頭部が完全に欠けている男たち——自分を痛めつけた連中が物言わぬ骸になっているのを見て溜飲が僅かに下がる。

見聞きしたところ、ノブリスの手のものではないよううで革命軍と名乗っていた。

（いい噂は聞かないならず者たちですね。……………なんとかできないでしょうか）

フミタンは偽り続けるのも疲れて来た。あまりに美しく真つすぐで善人で人々の希望を一身に受けるいけ好かないヤツクレーリアは自分にとって辛いを通り越して忌々しいものとなっていた。

いや、薄汚い……………まるでドブネズミのような自分と空を飛ぶ鳥と
いう住む場所の違い。ドブから空を見上げる惨めさに対し空から

悠々と見下ろす美しき。

彼女の人となりを知れば知るほどに自分の惨めさが浮き彫りになっていく。彼女が笑顔を向け、頼ってくるのを感じるたびに発狂しそうなほど苦しい思いをしていた。

——しかし心のどこかで自分を救ってくれるのではないと思うようにもなっていた。彼女の機体に応えることで今までの罪を償っているのではないかと——勘違いしていた。過去は火星から遠く遠く離れても、執拗についてきたのだ。

(私は救われなくていい。今までの報いです。しかし、彼らは違う。ビスケット君やアトラさんはこれからに必要な存在です)

これまでの償いとして二人だけは助けたいと心から思っていた。残りの一人？ あんなパツとしない男はどうでもいい。

——もし、叶うのならば彼女に……。クーデリアに謝りたい。フミタンの眼は死んではいなかった。反撃の機会を逃さぬよう、ひっそりと息をひそめて決死の一撃を狙っていた。

(……………イイ感じです。存分に抵抗して、夢をかなえてくださいな)

それを嘲笑うカメラを持った女。オリヴィア・S・ホルストは喜劇の開幕を想像していた。

☆☆☆
—————
☆☆☆

一方でオルガ達は買い物から戻らないアトラとビスケット。急に居なくなったフミタンの心配をしていた。

三日月も落ち着かない様子でコロニー内へとつながっているエンランスの扉をちらちらと見ていた。チャドも昭弘も昌弘も三日月ほどではないが気にしている。

「なんか連絡はあったか？」

「ユージン。まだ無いな。シノやダンテはこういうことはきっちりやると思ったんだが……」

「ユフィンの連中は？」

「ビトーとペドロと克蘭クさんが街に向かってる。アインとアストン、デルマはウチと向こうの補給申請でてんでこ舞いだよ」

ユフィンはイサリビに遅れること数時間後——つい先ほど、ドルトコロニー群へと到着していた。

積み荷の件についてマクマード直轄の連中なら何か知っているのではないかと問い合わせた寝耳に水と、こちらが恐縮するぐらい謝られた。

克蘭クはギャラルホルンによる治安維持の黒い噂を聞いたことがあると言い、にわかには信じがたいが火星で問答無用で襲い掛かってきたことを思い出すとあながち嘘とは言えなかった。

もうすでにここは連中の縄張りだと気を引き締め直して、テイワズの地球支部に補給の要請をするように頼んだのだ。オルガの頭の中では一戦交えると覚悟はできていた。

「オルガ」

「行ってきていいぞ」

「……………ありがとう」

オルガは言わなくても分かる、と三日月の意志を尊重した。アトラやクーデリアはもちろん、ビスケットは大切な仲間であり家族でもある。特に最近の三日月は感情が豊かになっていて、ここで三日月の心の動きを抑圧するようなことはしたくなかったのもあった。

ともあれ、問題はクーデリア達がどこに居るかだった。

「港の出口から——何も見えないか……」

わざわざ港の出入り口に戦力を配備することもない。下手をすれば見えた瞬間に砲撃でも喰らうだろうし、相手側は外したらコロニーに損傷を——

「待てよ？ どうしてギヤラルホルンが俺たちを追って来てると思うんだ？ 憲兵には支部に対して抗議してる。そこから伝わっても、コロニーを巻き込んでドンパチするほどの事か？」

「どうしたオルガ」

「ユージン、チャド。俺らは何か勘違いしているのかもしれない。いや、勘違いさせられているのかもしれない」

「はあ？」

「三日月を追う。お前らもついてこい！」

☆☆☆
—————
☆☆☆

ほどなくして、オルガ達は三日月と合流した。決して彼の足が遅いというわけでもなく、とんでもない数の人が港へと押し寄せてきてい

るのだ。

何の騒ぎかと強引に話を聞くとギャラルホルンが次々に港の出入りを規制しているらしい。その中でここは規制が始まったところからは一番遠く、その手が伸びていないとのことだった。

「訳が分からねえ。どうしてこんな効率の悪いことをするんだ？」

「だよな。無駄が多すぎるぜ」

「何が？」

「三日月も少しは考えろよ。つたく……要はどうして一齐に封鎖しなかったんだってことだ。そんぐらいの人数は常駐してるだろ」

「なるほど。………気に入らないね」

「全くだ」

ユージンと三日月が勝手に納得し、チャドが確かにと考えるそぶりを見て、昭弘^{脳筋}と昌弘^{予備軍}はさっぱりわからんと首をかしげていた。

それを見たオルガが筋トレ禁止して勉強のほうに回すべきかなんて呆れていると通信が入る。

『オルガ団長』

「克蘭クさんか？ あいつら見つかった——」

『そのことだ。とりあえずニユースを見てくれ』

「ニユース？」

ユージンに目で指示を送り、タブレットでニユースサイトを開かせる。

すると明らかにユージンが狼狽えだし、覗き見ていたチャドも目を見開いていた。

「なんて出てるんだ？ おい？」

「ふぎけんよ、オイ?! 一体どういうことだ!!?」

「おいッ! 一人で納得してるんじゃない——はあッ!!?」

女性アナウンサーがデモ隊の様子を撮影している。作業着を着ている男女と資材運搬用の車両にモバイルワーカー。そんな連中の中に一際目立つ色……金色があった。

——ドルト2で発生したデモ活動ですがデモ隊は資材やモバイルワーカーなどを用い、カンパニー本社前にて激しい抗議活動を行います。

——またデモ隊の中に少年少女の姿が確認され、その先頭に立っている少女は……あ、今情報が入りました。

——少女の名は……クーデリア。クーデリア・藍那・バーンスタインです!!

——火星のノアキスの七月会議にて頭角を現し、アーブラウとの交渉権を勝ち取った革命の乙女がデモ隊の先頭に立っています!!

——デモ隊の指導者、ナボナ・ミンゴ氏によると今回のデモ隊の行動はとも他人事には思えない。力になりたいと言われ参加していただいた。

——我々は暴力による交渉ではなく、言葉による交渉を行いたい。

——経営陣に疚しいことがないというのであれば交渉の席を中継し公開すべき……とのことです。

——また、バーンスタイン氏についてはギャラルホルン火星支部の停船を無視して強行突破したとの情報があり……。

——彼女を地球圏へと護衛しているグループにテロリストの疑いがかけられているとのことです。

——現場よりニナ・ミヤモリがお送りいたしました。スタジオへお返しします——

「はあ?」

「「なんだこりゃあああああ!!」」

顎が外れそうなら口の大口を開け、周囲の目も気にせずにおろが、ユージン、チャドは叫び声をあげた。唯一、明弘はクーデリアがなんであんなところに？　と思う程度でむしろ居る場所がわかったと安堵しているようだ。

だがしかし、前者三人においてこの状況は非常にヤバイとしか言えない。クーデリアはギャラルホルンが血眼になって追いかけている人物だ。レッドや克蘭ク、アインや名瀬に地球圏に存在するギャラルホルン最強の艦隊に覚られないように気を付けろと耳に舐^{たこ}舐^{たこ}ができるほど言われている。

「何してんだあのお嬢さんは!!　注意しろってあれほど……!!」

「それよりもシノ達はどうした？　どうしていない？」

これだけ大規模なデモ活動なら多くのテレビ局が撮影クルーを派遣していると考え、先ほどのチャンネルから順繰り変え、多角的にデモ隊の全体図からシノ達を探そうと試みる。

「いたぞ。クーデリアの近くにいる！」

「あの馬鹿野郎ど——？　様子が変じゃねえか？」

シノの性格からすれば義憤に駆られて盛大に大騒ぎするような形になるはず。であるのに、どこか落ち着いている——そう。対人格闘訓練で三日月や昭弘を相手にしているときのような身構え方だ。

よくよく冷静になって探すとクーデリアを守るようにガット・ゼオ、デイオス・ミンコが壁を作っている。やがてクーデリアの顔をアップした番組に辿り着くとユージンとオルガの違和感が大きくなる。

「顔が強張っている、か？」

「確かにそうだな。うん？　マルバが見当たらねえ。アイツがやった

のか？」

「あ、くそッ！ カメラが映さなくなっちゃった」

チャドとユージンが悪態をつくなかで、オルガはクーデリアがシノ達とはぐれたわけでもないことに安心していた。もちろん、マルバについては問いただす必要がある。

しかし、こんな大事になった時点でこっちだけが逃げるとなれば筋が通らない。

（何より、あんだけ気を付けろと言い含めていたのにどうして参加してる？ シノ達も荒事には慣れてるはず……）

ふと、オルガの思考の中でことのあらすじが繋がった気がした。全貌の见えない、あまりに朧気であやふやな全体像が脳裏に浮かぶ。

——クーデリアと別れた。

——シノ達とマルバに護衛を任せた。

——船に戻ったとき、アトラが買い物に行くとビスケットと一緒に出掛けた。同時にフミタンもいなくなっていた。

——三人とも帰ってこず、クーデリアとシノ達がデモに参加している。

「……………まさか……………！」

「オルガ？」

往来の邪魔になる、もとい、他人には聞かせられない話だと全員を連れて路地裏の中ほどに連れていく。

「ミカ、皆！ 落ち着いて聞いてくれ」

「？」

「——アトラとビスケット、フミタン。この三人だけ行方が分からない」

「うん」

「クーデリアは馬鹿じゃないし、義憤に駆られて参加するほど感情的でもない。じゃあ、どうしてあそこにいる？」

全員がオルガの言わんとしていることを察した。口々にまさか、そんな……と声が漏れる。

その中で三日月は青い瞳に静かな殺意の光を宿らせていく。

「アトラたちが攫われた」

「……外れてほしい予想が正しければな。ミカ、勝手に動くなよ」
「どうして？」

「ピンポイントで三人を攫ったんだ。俺達の動きもみられている可能性がある。手分けしてつても考えたがこんな厳戒態勢の中で人攫いができるような連中だ。二の舞になるかもしれないねえ」

「間に合わないかも」

「だな。けど、向こうの状況がつかめないんじゃないだろうがない。三人と関係があるのか。下手人は誰なのか。そうすれば――」

対応も可能になる、と言いかけたところでユージンが声を小さくして読んできた。タブレットを見れば克蘭クの名前があり、もしかして三人を見つけたのか？ とユージンに目を向けるが首を横に振る。それを見て何か進展があればいいが、と出てみる。

『三つ報告がある。一つはクーデリア達について。もう一つはビスケット君たちについてだ』

「なんだと？」

『アーケイ氏とダンテ君の二人に合流できた。一応、社長のほうにもメッセージだけは送ってある』

「わかった。手短かに頼むー」

『まずは――』

クランクがマルバとダンテから聞いた情報によれば、ビスケット、アトラ、フミタンが革命軍にさらわれナボナ・ミンゴも手を組んでい
る可能性があるとのことだった。三人とボロボロになった男に銃を
突きつけ、隠した武器の引き渡しにクーデリアをデモに参加させるこ
とを要求する旨。

断れば人質の命は保証しないとお決まりの台詞を吐いてのこと
だった。

「あの野郎………!!!」

「………」

「それで最後は？」

『すでに人質の居場所を特定した』

「なんだと?!」

『アーケイ氏とダンテ君が映像を送ってきたタブレットで逆探知をか
けたらしい。場所は——』

『——ドルトカンパニー本社………デモ隊の近くだ………!』

ドルト騒乱 その3

——なんで、こんなことに……なってしまったのか……。

瘦身の顔色のあまりよくない男、サヴァラン・カヌーレは豹変してしまった恩人のナボナと自らの保身と栄達。コロニーに住む人間を奴隷としか思っていない、蛇のような上級役員を光の失せた——諦観と嘆きを滲ませた瞳で見ている。

出来が良かったとは言えないが、とても優しく誰かを守れることが選べる実の弟、ビスケット・グリフォンにクーデリア・藍那・バーンスタインと間違え手荒な真似をしてしまった少女。あとから連れ込まれた、どこか自分に似た眼をしている女性。

(どうして……。どうしてなんですか、ナボナさん……！)

本社の役員会——というのは語弊がある——地球のアフリカ・ユニオンに居を構える文字通りの地球本社出身の役員を丸め込むため、多くの賄賂や接待。腐り果てた悍ましきしかない趣味嗜好を満足させ、劇的ではないが今よりは生活は大分マシになる譲歩を引き出せるはずだった。だったのだ。

(あの役員はコロニー本社で頭角を現してきている奴だ)

地球から左遷された、ではなく、強力な社内カルテルを組んでいた取引相手との政争に負けた男だった。接待した豚男は弱みを握り、情報の流れ。そうすればコロニー労働者の環境を整備してやると契約書迄交わしていた。

サヴァランは口約束では、と書面の契約を行ったが今に思えば守るつもりもなかったのだろう。

「そう睨まないでくれませんかねえ」

「……………」

「睨むなって言ってるでしょう？　これだから宇宙の貧乏人は困る」

地球の貧乏人はもう少し立場を弁えていますよ、と蛇のような男はサヴァランを蔑む。

「ごらごら、パークくん。そう悪し様に言うもんじゃない。多少の知恵は使える使い勝手のいい消耗品だぞ」

「ラッセル取締役。……………いえ、失礼しました。お見苦しいものを……………」

「構わんさ。そろそろ捨てようと思っていたからね。君と私の部下がコロニー本社の椅子を手に入れば、ファーレン総取締役へのけん制も夢ではない」

ラッセルと呼ばれた豚男は単にもつと権力を欲しがり、今回のデモを利用して上層部のすげ替えを画策しているにすぎないのだ。また。パークはラッセルにコロニー勤務の左遷をされたが協力する代わりに取締役に推薦すると諭され手を貸している。

何のことはない。サヴァランとナボナは勝手に踊り狂っていただけだ。裏も取らずに信用して、下層階級ゆえに上の力関係パワーゲームを知らなかった。

（——無論、用済みになれば話は別だ）

そんなラッセルとパークは互いに弱みを握り合う未来の敵である。このマツチポップが終わり次第、自らの地位と権力と支持層を盤石にし、最高の瞬間に告発する隙を狙っている。

魑魅魍魎が跋扈する経済界は恩義を大事にするサヴァランや仲間を救いたいと思うナボナをゴミクズほどの価値もない存在としか思わない。

いや、そもそも存在を感知することすらないだろう。歩いていたら何気なく気付かず踏みつぶしていた虫や雑草程度の認識があればいいだろうか？

「この女はよろしいので？ ノブリスの手の者らしいですが？」

「使い捨ての消耗品だということだ。肌も綺麗だし、見た目もよろしい。カミラ夫人が見目麗しい女のはく製を集める数寄者^{イカレ}だったか……。彼女に土産として渡そう」

「それはそれは。随分とイイ趣味をお持ちですね」

「女性は美しいものに囲まれたいのだよ。どんなものであれ、な」

聞いていて気持ちのいい話ではない。唾棄すべき、恥ずべきものだ。

サヴァランはもう彼らを視界に……いや、思考の片隅にすら入れたくないと思える範囲であたりを見回すと二人の男女がいた。見知ったナボナと怪しい少女だ。

「ナボナさん………！」

かすれた声でナボナに呼びかける。何故こんなことをしたのか？ どうして幼気^{いたいけ}な少女に手を出したのか。ビスケットを攫ったのか。なんでこんな連中とつるんでいるのか！

「サヴァ、ラン兄さん」

「ビスケットっ」

か細い声でビスケットはサヴァランを呼んだ。その弱弱しい声に弟の体を見える範囲で確認するが外傷は見当たらない。

「ビスケット。何があった？ どうしてお前がここに……」

「うっ………兄さん、会えて………」

「ビスケット!」

意識が朦朧としているビスケットのもとへ行こうと、サヴァランは芋虫の様に体をくねらせて近づく。

あと少し、というところでナボナと話していた少女の仲間がサヴァランの背を思い切り踏みつけた。

「がっ!？」

「動くんじゃないよ。人質は三人だけでもいいんだぜ」

ミシリ、と嫌な音が聞こえる。肺が圧迫され、酸素は強制的に吐き出されてサヴァランは息を吸おうと真つ赤になった顔で苦しむ。それが楽しいのか不意に力を緩め、サヴァランが荒く呼吸をしていると再び踏みつける。

めきつ、とあばらが軋む音がした。

「——ツツ!!!」

「面倒かけませんか」

もだえ苦しむサヴァランの顔に蹴りを入れると男は興味を失ったか、少女のもとへと向かう。

少女がナボナとの話を終わらせるとナボナはサヴァランの事を蔑んだ目で睨み付けて部屋から出ていく。その時、知らない男が入れ替わりで入ってきた。

背はそれほど高くはなく、底意地の悪そうな顔をした男である。

「仕掛けは済ませやした」

「ご苦労様。貴方たちの相手だけ……生身じゃなくていいのかしら?」

「モビルスーツで叩き潰したほうが心の支えをぶち壊すのにいいんですよ。——とてもね」

「……まあいいわ。私たちは任務を優先するだけ。互いに都合のいい仲間に過ぎないことを忘れないで」
「もちろんでさあ」

ビスケットの意識がはっきりしていれば、彼はあまりの衝撃に固まっていただろう。

何せ、少女と話している男二人は十分すぎるほど知っている人物だったのだ。その所業や性格。腐り果てた性根の数々を……。

「可愛がってやるぜ、参番組のブタネズミ」

「あの生意気なチビも一緒にな」

——旧CGS 壱番組隊長、ハエダ・グネルと腰巾着のササイ・ヤングス。

二人は指を鳴らしながらビスケットのもとへゆっくりと近づいていったのだ。憎悪と狂気に満ちた瞳を向けて……。



クランクからの知らせを聞いたオルガがまず最初にしたのは三日

月を止めることだった。仲間、とくにCGS時代から付き合いのある仲間を大切にするきらいがあるのだ。

案の定、三日月は据わった目でドルト本社へと殴り込みに向かおうとしていた。

「待て、ミカ！」

「オルガ……。放してくれ。ビスケット達を助けに行けない」

「それを待ってって言ってるんだ。連中、衆人環視の中で人攫いなんてできるんだ。下手に動けばビスケット達の命がないかもしれねえ」

「ツ……………じゃあ、どうするの？」

——それを考えているんだ、とオルガは手に入っている情報だけで状況整理を測る。

ダンテとマルバの話によれば、クーデリアやシノ達に爆弾を括りつけられたとか、何かしらの薬が使われたということではない。タブレット以外は目に見えて残るものはなく、その後において接触もなかった。

彼女が参加してしまったのはわずかに燻ぶっていた正義感と人質の安否のためだろう。

そして幸いなことに、鉄華団にはダンテ・モグロという電子戦のプロが存在していることを知らなかったらしい。少しの間はかかったものの、ダンテは人質と誘拐犯の居場所特定できたのだから。

しかし問題はそのドルトカンパニー本社にどのように侵入するかである。

「正面からは選択肢にねえ。裏手も確実にギヤラルホルンの鎮圧部隊が張っている。下水に通じる道なんてねえだろうし……………」

地理なんて全くわからない場所で潜入作戦なんてものを立てられるわけがない。

次第にじれてくる団員に落ち着けと宥めていると明弘があること

を呟いた。

「こんな時でも配達とかしてんのか。ご苦労なことだな」

「？ そりゃあ、デモなんて関係が—— 待てよ？ 明弘、お前なんて言った？」

「なんてって……、ご苦労なことだなってよ」

「いやその前だ」

「えつと………配達してるのか、だったか？ これがどうした」

「——可能性に賭けるしかねえ。克蘭クさん」

『なんだ？ 社長ならまだ……』

「レットは後回しでいい。それよりもダンテに——」

オルガは指示を出した。それが正しいかなんて今はわからない。しかし待っていてもどうにもならないことだけは知っているのだ。

☆☆☆
——
☆☆☆

職務に忠実なギャラルホルンの兵士は思ったよりも多い。特にコロニー内に常駐する兵士は顕著である。

理由は地球とは違いコロニーのある場所は生身では生きていけない宇宙である。大気循環システムに少しのエラーやテロリストによる制圧が行われれば、コロニーは監獄へと変貌し、最悪の場合、崩壊

させられる恐れがある。

コロニーのような巨大な建造物がそう簡単に壊れるかと思うかも
しれないが実はそう難しくはない。

ダムの特定のポイントに爆薬を仕掛け、ちゃんとした手順を踏んで
行えばほんの数名と数台の車、少しの爆薬で解体できる。現実には地球
でもダムなどの設計図は厳重に管理され、未だに紙媒体で保存されて
いる。

コロニーはどうかといえば、原理は全く同じである。規模の関係
上、時間がかかるだろうが時間さえあれば一人でできないことはないな
い。壊さないのが目的なら循環系や気象系の管理を行っている指令
室を占拠すればいい。たったそれだけでコロニーは回転する巨大な
監獄となる。

穏便にというのなら……コロニーは内外の修復や内部設備の拡
張を想定して作られている。ライフラインやもしもの時の脱出艇な
ど様々な保険が掛けられている。

くだらない都市伝説ではコロニーそのものを巨大な砲として運用
できる、なんてものもある。

「ふああ………やってらんねえ。つたく、さつさと終わらねえかな」

「任務放棄するなよ。……気持ちはわかるけどよ」

「本部からの命令つってもよ？ 俺たちは本部勤めなんだぜ？ どう
してこんなコロニー来なきやならねえんだよ」

「確かに、な。いくら作戦だからと言って、急な異動はなあ」

長い年月を経て存続しているギャラルホルンも地球に近ければ近
いほど腐敗が進んでいる。遠くても退役しているが地球上で活動す
る連中よりはマシである。

国家級の大規模な戦争も紛争も小競り合いすら殆ど起きない地球
圏では深刻な兵士の質の低下が問題となっていた。

「だろ？ あ………なんだっけ？ サテライト？」

「合ってる。セブンスターズ直轄の特務戦隊だ」

「実質、陰険ファリドの私兵だけだな」

「バカッ！　口が過ぎるぞ!!」

ギャラルホルンで特定のセブンスターズへの不遜な態度はタブーとされている。その筆頭がファリド家当主のイズナリオ・ファリドである。

統制局局長にして、諜報や捜査、組織内の秩序維持を主体とする彼の支配域はほぼギャラルホルン全体と言っても過言ではない。かつて妾腹の息子マクギリス・ファリド以外にも子供が居るとの噂やガンダム・フレームを蒐集しているなどの黒い噂もあった。

言うまでもなく、いつの間にか下火なつていったのは当時の兵士の中で一種の語り草となっている。

「この程度で始末してりゃあ組織が成り立たねえよ——つと、お客さんだ」

飄々としている同僚に冷や汗を掻いている彼は、その指をさした方向へ視線を向けた。

今更ながら彼らの警備している場所はドルトカンパニー本社に相応しい大きさの搬入口だ。思い出せる限り、今日の搬入予定を浮かべるがなかったはずだ。

「止まれ」

キイツと少し耳障りな音を立てて予定にないエレカが停まる。

ドルトピザなんて、安直な名前のロゴが描かれている。

「窓を開けて身分証を出せ」

予定外の来客に注意しつつ、男は口さがない同僚に目線で指示を出

す。渋々と運転席側に近づき、運転手の顔とタブレットを利用して真偽を確かめる。ひげを蓄えた色白の男。

二人しかいないので後ろの荷台までは一度に調べられない。

「——アントニオ・スターク……東地区の……偽造じゃないな。何しに来た？」

高圧的に降りろと言い放ち、それに文句も言わない無抵抗な男に「つまらねえ」と内心で舌打ちしつつ身体検査を行う同僚の銃口がヒゲ男を狙う中でわずかな違和感を感じつつも、抵抗のかけらも見せないつまらない仕事を終わらせるべく、急ぎ足に済ませていく。

「ピザの配達を頼まれました……至急のことなんですよ。どうにかなりませんかね？」

「どうにもならねえよ。とりあえず中を見せろ。ほら」

「た、頼みますよ！　うち、今キャンペーン中で30分以内に配達できないと無料になっちゃうんです！　お願いします!!　他にも配達先があるんですよ！」

——40枚も無料になるなんて赤字になっちゃいますよ!!?

ダンディな髭を蓄えている割に情けない声を顔で留飲を下げるとしよう。だが……

「俺たちは腹が減ってるんだ。貪りたくなるぐらいにな」

——わかるだろ？　と飄々としている兵士はいわゆる賄賂を要求した。安いものだろうと囁いていて、そんな姿に銃を向けている兵士は呆れ半分と期待半分でなんとも言えない顔をしている。こういううま味や楽しみがないとやってられない。それぐらいにこの任務に不満を持っているのだ。

大きな赤字となってクビになるか給料を減らされて店長に怒鳴り

つけられるのとどちらがマシか、ヒゲの男は逡巡し後者を選んだ。

その返答に笑みを浮かべて、飄々とした兵士はエレカのカーゴのドアを開け放った。随分と乱暴な開け方にエレカ自体が揺れる。手荒に扱わないでくれと抗議するも――

「カーゴの中に何か隠しているのか？ 一つ一つ調べようか？ うん？」

☆☆☆
――
☆☆☆

結局、ピザは数枚奪われる羽目となった。

守衛には気の毒な目をされつつも新顔だな、と訝しげに見られたがすぐに彼の意識から外れたようだ。切って捨てるぐらいあるピザ屋のバイトなんて記憶に残す価値もないのだ。

「行っていいぞ」

「ありがとうございます」

静かな音を発てながらエレカは駐車場の奥へと進んでいく。

行けばあるのは地下駐車場の守衛室で、いつもならそこに停まって引き渡すが今回は違った。

「ついたぞ。早くしてくれ」

どちらからも見えない位置で停まり、コンコンと運転席側から車内とカーゴを仕切る壁を叩く。

すると少しくぐもった音と共にカーゴの扉が開いた。無表情で小柄な体躯の少年と褐色肌の青年が這い出て来た。

「全身すごい匂いだな」

「そうだねそふはね」

「何だ他所の言い方——って、三日月!? それ……………」

「(んぐ)……………今度アトラに作ってもらおうかな」

「だ、大事な商品がつ!? ちょっと!!」

「すみません! ほら、三日月! お前も謝れって!!」

「ん? ……………うん。ちよつとくどかった」

「味の感想聞いてんじゃないんだよ!」

「さっさとどっか行ってくれ!! 俺の給料がパーになるっ」

「あと一枚」

「食うな!!」

ジュニアハイの学生たちがやるようなコントに付き合ってられないと顔を真つ赤にしてヒゲの男はエレカを発進させていった。

こちらの都合で巻き込んでしまった一般人にチャドは申し訳ないと思いつつ、隣でピザをつかんでいた指をぺろりと舐める三日月に目を吊り上げて小さな声で怒鳴る。

とはいっても大して堪えた様子もなく、仕事前に疲れるのは馬鹿げているとチャドは諦め、仲間たちが動きやすいように細工するため、近くのメンテナンストアを物色する。

「……………? おい、三日月。行かないのか」

「……………ん。今行く」

エレカの去っていた方向をじつと見つめていた三日月だが、何もしないなら別にいいかとチャドの後についていく。まあ、自分は文字な

んて読めないし、機械も詳しいことは知らない。鉄火場のみの人員なのだ。

（——レッドとか名瀬さんみたいな感じだったな。あのヒゲの人）

☆☆☆
—————
☆☆☆

少しの悶着の後、件のヒゲの男は来た道をますつぐ引き返していた。

途中、荷物を降ろしたところも通って行ったが何もなかったようなのでちゃんと引き取られたのだろう。仕事をこなしてひと段落と思ったところで、外にいたギャラルホルンの兵士に今度は売り上げを奪われかけた時はどうしてくれようかと思ったほどだ。

そうしてしばらく走り続けて、殺風景になったピザ屋の裏手にエレカを停める。今日でこいつもお別れだと思おうと寂しさを覚えるが仕事人に拒否権などないと頭を切り替える。

店長室——とは名ばかりの様々な機械やモニター、足の踏み場もないほどに敷き詰められたコードの類がただのピザ屋じゃないことを証明していた。

ヒゲの男は痕跡を残さないように片づけを進める一人に声をかける。

「進捗は？」

「予定通りです。あとは所有者を偽装していた者に死亡届の偽装をして売り払えば終わりです」

「わかった。痕跡は残すな。業者も連中を使え」

「はっ」

「俺は依頼主クライアントに連絡を取る。任せる」

「了解です、二佐」

「店長と呼べ、店長と」

誰が聞いているかもわからないんだぞ、と咎めるような口調で叱るが当の人間は大丈夫ですよ、なんてだらけたことを言いながら作業に戻っていった。

そこそこ優秀だが弛んだ空気に慣れてしまっただけは困る、とヒゲの男は硬度に偽装され嚴重おもむろに閉ざされた机の天板から一つのリストを取り出した。そして徐おもむろに件の男ページにバツ印をつけたのだった。

ドルト騒乱 その4 混迷の宇宙へ（解説付き）

鉄華団がビスケットたちの奪還作戦を開始する少し前のこと。

アフリカ・ユニオンの大統領ウングラバ・チエザーレはドルトコロニー群を囲むように展開するギャラルホルン統制局の艦隊と月外縁軌道統制統合艦隊の陣容に対し、即時抗議すべしと息巻いている若手議員らの相手に辟易していた。

「我々の主権が脅かされています。大統領！ ギャラルホルンといえど、今回の軍事行動にはアフリカ・ユニオンの国際的な信用と——」
「……………（身の程知らずの小僧が。何を言うか）」

「それにドルトカンパニーは我が連合国において上位に入る外貨獲得を行っています。これ以上の醜聞は国にも企業にも！ 惹いては地球圏の経済に悪影響が及ぶでしょう。早期の解決を求めます！」

熱く、何か熱に浮かされてでもいるのだろうか。若手の——といっても30代半ばの議員の声はそれほど心に来るものはない。アフリカ・ユニオン内にいる彼を支持する者たちや現在の首脳部を蛇蝎の如く嫌う連中からすればそれはそれは気持ちよく聞こえることだろう。なにせドルトカンパニーは彼らに多額の献金を行い、コロニービルダーの権利すら手に入れた一種の議員御用達の天下り企業なのだ。ウングラバは自己の利益しか考えない彼らを嗤うことなどしない。自分自身も親族やシンパをねじ込んだ国营企業や企業グループ体に相応の汚職をやっている。それが非難されないのはそこそこの甘い汁を吸い、殆どを国に還元するように言い含めているからだ。

「地球に現存する四つの国家はそれぞれ最低限の自衛軍しか持ちませせん。武力のほとんどはギャラルホルンに肩代わりしてもらっており、国防省からはドルトコロニーに潜伏するのは革命軍とそのシンパでモビルスーツを保有している可能性が示唆されています。自衛軍を

動かした場合、周辺国との間に大きな摩擦が生まれる懸念が——」
(そう。それが問題なのだ)

このシナリオを裏で操っているのはギャラルホルンのバグラザンかファルク、エリオン、ファリドのどこかといったところか。

いや、評判と能力的にエリオンかファリドだろう。

(もちろん。コロニー出身の貧乏人^{投票権のない連中}どもを本気で助けたいと思う人間などこの場にはおるまい)

なによりもこの騒動で一番得をしているのはアブラウだ。ドルトカンパニーの商品がアブラウと重なる部分が多い。騒動が続いて供給困難に陥れば最後に嗤うのはアブラウ——蒔苗東護ノ助なのだ。

アフリカ・ユニオンはこの騒動を収められず、ギャラルホルンに丸投げし血の粛清を行った旧時代の独裁国家の誹り^{そし}を受けるだろう。

(この場にも奴によって踊らされてる連中がいるな)

好機ととらえて私を大統領の座から引きずり降ろそうとする輩^{バカ}どもをこの場で射殺出来たらどれだけの快眠を得られるか……。

(今日は飲もう。キツイ奴を飲む)

顔や口に出せば負けだから耐えるしかないこの身の不幸を癒すため、酒に救いを求めてもいいだろう。掛かりつけの医師からアルコールを控えるように忠告され続けてるがコレがないとやっていられない。

「まあいい。私が大統領を辞するときはお前たちも道連れにしてやる」それについてお答えします。今回の——」

ウングラバによるドルトの暴動事件。アングラでは血の粛清と擲
揄されるそれについて、説明とギャラルホルンによる内政干渉。他経
済圏による間接的な関与を示唆するなど火消しに奔走することとな
る。

その後、怨敵アーブブラウのエドモンソン事件後、彼は政治の舞台か
ら姿を消すがそのすぐ後に少くない数の議員や企業関係者が相次
ぐ不審死をすることとなる。

ウングラバによる暗殺とも噂されたが、当の本人は同時期に原因不
明の奇病によつてこの世を去ることになるのだった。



一方でドルトコロニー群周辺宙域には近年では久方ぶりに見る規
模で大艦隊が編成されつつあった。

ハーフビーク級14隻、大きな帆のついたスキップジャック級1
隻、ハーフビーク級に似た鋭いフォルムの艦影。

通称バラクーダ級と呼ばれることが決定している船が6隻。

合計で21隻もの数がドルト周辺に集結していたのだ。

そのうちの1隻、ステンジャ家の家紋の付いたバラクーダ級の艦橋
で女が仏頂面をモニター向こうの男に不満をあらわにしていた。

イーリス・ステンジャ、その美貌と勇敢さから戦乙女と呼ばれ、次
ブリュンヒルト

代を担う一人として注目されているエースの一人だ。

「それでこの陣容であるか?」

『統制局預かりの作戦にねじ込んだだけでも少くない借りが出来ている。まあ、向こうも何かしらの手柄が欲しいところなんだろう』

モニター向こうの男はガエリオ・ボードウィン。次期セブンスターズのボードウィン家当主となる人物だ。

ガエリオは暗に裏工作や賄賂、根回しといったものがあつたことを仄めかしていた。事実、当世局の局長であるイズナリオ・ファリドが行う事業に父ガルス・ボードウィンが少なくない融資——正しく言えば金だけ払わされて得るものはないこと——をするという結果が生まれてしまった。

バグラザン家やファルク家に店子をかすめ取られぬように注意しなければならぬと、ため息交じりに告げた。

「それは……いえ。こちらの我が儘が過ぎました。家のほうに話をいたしましょう」

『君と強い関係を作れるだけでも十分だ。それより、連中の追撃はこつちの任務だが?』

「強い敵と戦いたいのは武人の本望です。何より仕留め損なつたのは初めての事ですから」

『同感だな。それを言うとな艦長に睨まれるからアレだが、仕留め損なつたのは初めてだ』

両者とも鉄華団やアウトサイダーズを狙つての参戦である。ガエリオは倒すことではなく、もう一つの目標の為に来ているのが本音だが……。

『作戦自体については?』

「ボードウィン特務三佐と同じです。——不愉快極まる」

『はつきりと言うな。俺も同感だが』

今回のギャラルホルンの作戦はコロニー内でクーデターを起こそうとした反政府勢力、いわゆるテロリスト^{下層民}からドルトコロニー群を開放することと、地球人類統一機構^{リビルド・アース}の撃破もしくは捕縛のためであった。

あまりにも都合の良すぎるため欺瞞情報の線も探つたらしいが事実だつたらしい。

『今日中に月外縁軌道^{アリアン}統制統合艦隊^{ロックス}も合流する。そうなればフアリド家もエリオン家とクジヤン家相手に慎重になるだろうさ』

「——間に合いますか？」

『それはごつちも聞きたいところだが。十中八九、間に合わない。いや、間に合わせさせるはずがない』

血の恐怖による統制が目的なのであって、血を流さないで降伏されずには統制局も表面上は良しとするが裏では悪態をつく。これだけの艦隊を動かすのに年間予算のどれぐらい使われたのか。組織内で不満を持つ人間のストレス発散の一面もこの作戦には存在する。

さらにイーリスはバラクーダ級の艦橋から見える陣形を眺め、鶴翼の陣ではなく紡錘陣形を複数維持している状況に実際に武装蜂起するのはドルト3だと見抜いている。

（陣形の切っ先はドルト3に向いている。リビルド・アースを制圧、なしいしは殲滅するのであればコロニー群を囲むように展開するのが常套だろう。願わくば一般市民の流血もなく終わってほしいものだ）

この後イーリスの願いもむなしく、一時間もしないうちに戦端は開かれたのであった。

『ところで例のモノはどうだ。間に合いそうか？』

「組み立てと調整の関係で今回はいつも通りです。お披露目は――
水際でしよう」

☆☆☆
――
☆☆☆

鉄華団の潜入部隊が綱渡り気味にドルトカンパニー本社に潜入を果たしていたころ、デモ隊と本社前を守るギャラルホルンの間には一種の緊張感。

言いかえれば必ず当たる予感、虫の知らせのようなものが走っていた。

興奮の坩堝と化している経営陣への対話、辞職を要求するシユプレヒコールの中に一部妙な動きをする人間がちらほら見え始めた。

腐っても一軍人として訓練は受けているモビルワーカーに乗ったギャラルホルン兵士はその動きを見逃さない。むしろモビルワーカーだからこそ光学レンズの機能により相手が何を持っているのかを確認してインカムを通し上官に報告、その上官も参謀へと伝える。

ヘッドクォーター
『H Qより射撃準備の許可が下りた。デモ隊の中に銃火器所持の可能性がある集団を確認。各員、発砲の予兆があり次第、正当射撃を実行せよ』

『『了解』』

『モビルワーカーは作業用ワーカーを狙え。突撃をされれば雪崩れ込まれる』

「了解」

手短に終えられた命令どおり行動を起こし始める。当然の反応としてデモ隊もギャラルホルンの雰囲気が変わったと誰かが囁き、それが群衆全体へと広まっていきながら静かになる。

互いに緊張が走り、人質の為に参加せざるを得なかったクーデリアと鉄華団。あるいはギャラルホルン側の作業員やGNトレーディングスの本当の貌こと火星の商人ノブリス・ゴールドンの作業員。

誰も彼もが目的を果たすため、そして身の安全のために警戒している最中で爆発が起きた。

『ッ！ 射撃開始ッ!!』

返答は銃声だった。軍用モバイルワーカーの20mm機関砲がデモ隊の作業用ワーカーへと発砲される。資材によって装甲化されたとはいえ単純に工場で製造されていた一般流通の金属板がそう何発も耐えられるものでもない。

長く守って4発、少なくて一度きりしか守れない装甲は簡単に車体を穿ち、中身を悲惨なオブジェに変えた。一部がパニックを起こし、逃げようとしてデモ隊を轢き殺し、急造の追加装甲で最悪なバランスで横転し巻き込んでいく。追撃の砲弾が燃料に引火して火の玉を生み出すと周囲にいた者に引火、あるいは逃げようとした者たちによる将棋倒しが発生する。

阿鼻叫喚の地獄絵図が生み出されると誰が煽ったのか、ギャラルホルンに向かって突撃していく集団も出始める。逃げられないと諦め、友人や恋人、家族が逃げられるようにと決死の覚悟で特攻する。

悲しいことにそんな彼らの特攻は作業員らによって援護され通じてしまった。その演出された喜劇に嘸し立てられたデモ隊が踵を返し、割れたガラス、砕けた路面の欠片、血塗られたプラカード、都合よく放置されていた粗悪な武器を片手に襲い掛かる。

怒号と悲鳴、絶えず鳴り響く銃声にクーデリアは立ちすくんでしま
う。鉄華団の団員たちはそんな彼女を守るべく、頭を地面に押し付け
姿勢を低くさせる。

刹那、風切り音と共にモビルワーカーの機関砲が丁度彼女の腹の辺
りを通り過ぎて行つた。直撃すれば首と手足を残して飛沫になつて
いただろう。

「伏せろツ！ ガット、ディオスも無事だな!?」

「俺は無事だがガットが破片で負傷した!」

「なんだと!!?」

「肩をちよつと深く切っただけだ! もう止血してる!」

「シノ! どさくさでアイツらが何かしてくるかもしれない! 煙の
多いうちに隠れるぞ!」

——その判断は正しい、と生の鉄火場を経験していないクーデリア
を連れてこうとすれば、彼女は一人の女性労働者を抱きしめていた。

「ああ、私……革命の乙女に見送られて——」

「違います! 私……!」

「どうか……私たち、を……導い、て——」

よく見れば血まみれで、作業用ワーカーに貼り付けていた装甲の破
片が直撃したのだろう。綺麗な死に方とは言えない、ひたすら苦しい
だけの仕方だった。

そんな彼女は助けてでもなく、恨み言を言うわけでもなく、苦痛に
歪んでなお笑顔でクーデリアに託す。

「未来、を——」

「! 待って、待ってください。意識をしつかりと……!」

「クーデリア!」

「シノさん! 彼女が……彼女が目を覚ましません。早く手当てを——

」

白磁のような肌をなお白くし、もはや青白くなったというぐらいの顔色でクーデリアはシノに助けを求めた。

シノはその言葉を半ばで断ち斬り、もう光を失った女性労働者の瞼を閉じて、クーデリアの服をつかんでいた手を解いた。まるで夭折したかのように固く結ばれていたがそつと手を合わせるとその力はなくなった。

「ここは危険だ。混乱に乗じて港に戻る」

「ですが！ 彼らは!？」

「フミタンさんやビスケット、アトラはオルガ達が何とかする。今は離れるんだ」

「見捨てるんですか!？ 彼らをツ!!？」

「アンタが死んだらもつと駄目だろうが!!」

言い返そうとシノを睨み付けるクーデリアだったが、彼の顔に浮かんでいるのは悲痛な表情だった。

「アンタは生きて、死んでいったこいつらやこれからこうなっちゃうかもしれない連中を救うんだ。こいつらの犠牲を無駄にしちやいけねえ」

「……………今は耐えるしかないのですね」

「ああ。当然、いつか落とし前はつけさせるけどな」

悔しさが滲む顔で彼らは避難を開始した。

シノは横目でデカイビルでふんぞり返っているだろう連中に報復を決意し、クーデリアは自らが討ち倒すべき敵の影を垣間見た気がしたのだった。

一方でオルガと三日月はすんなりと事が進んでいることに不気味さを感じた。

ダンテほどでなくてもそれなりに電子戦に強い連中もいる。彼らの尽力によってフロアの一部分が監視カメラ、警報装置などが切られていることを突き止めた。

あからさますぎる状況に警戒する理性へ風潰しで踏み込むのは得策ではないと言い聞かせ、件の場所へと近づく。

「これまた何というか……警戒心つてのがないのか？」

作業服を着た男が二人、そわそわとライフルを携えていたのだ。それを端末越しに繋げたカメラで睨み付ける三日月がサイレンサーの付いた拳銃のスライドを引く。

「素人だ。一気に仕留めようか？」

「中の様子が見たいが……」

「手早くすませばいけると思う」

「よし。奥は俺がやる手前は任せた」

「了解」

二人は何の感慨もなく引き金を引いた。プルタブを開けるような音とともに弾丸は発射され、顔面を砕いて頭の中身を蹂躪する。

糸の切れた操り人形のように倒れようとするのを二人は支え、それを寝転がして持っていたライフルを手に取る。見た感じは使い込ま

れてもいない新品同然だった。

「新しいな」

マガジンから弾を抜き、薬室内の弾も取り除く。

勿体ないとも思うが使うのなら分解してからじゃないと使えない。見た目だけの粗悪品の可能性も捨てきれないのである。実際、CGS時代にあてがわれた銃の整備を怠った奴のものが暴発を起こし指を吹き飛ばしたことがあった。

そうして武器の無料化を終えると勘付かれる前に二人はドアの左右に分かれ、ハンドサインでタイミングを計り突入した。

再び、プルタブを開けるような音が何度かし、重い音や軽い音。硬いものが床に当たる音が連なって起きた。言わずもななが中に居た人間はアトラたちと床に転ばされているスーツの男以外、射殺された。

「オルガ……！」

「大丈夫かビスケット!？」

「アトラ、怪我は……誰にやられたの?」

二人とも、というよりは生き残っている側で無事なのはいなかった。

ビスケットは男だからと強く痛めつけられたか、目がはれ上がって塞がれてしまうぐらいには殴られ、血も流している。アトラも頬は赤く腫れ、鼻から血を流していた。その様を見た三日月が思わず、物言わぬ死体となった下手人へ追加の銃弾をぶち込もうとしたのをオルガが止めたことは言うまでもない。もしかすればのうのうとしているドルトの社員へ無差別に襲い掛かったかもしれないからだ。

フミタンもアトラと似たようなものだった。若干の服の乱れがあるが、オルガがビスケットに視線を向けるとビスケットは首を横に振る。かつての仕事終わりに壱番組が娼婦を連れ込んだ後によく嗅いだ臭いがしない時点で無いとは思っていた。しかし、名瀬やアミダ、

メリビットなどから教養を叩き込まれたオルガはそれなりの屈辱を味あわされたのだろうと哀れに思った。

「すまねえが俺達で勘弁してくれ。歩けるか？」

「大丈夫です。——慣れてますから」

「……………そうか」

そう言うとオルガはふらつくビスケットに肩をかそうとするが断られた。

もう一人、近くで顔の半分が青黒く腫れあがっている男を連れて行ってほしいとのことだ。

「兄さん、なんだ。俺の…………」

「兄貴？ そういやそんなこと言ってたな」

何時の事だったか、会うことはないがメールのやり取りはしていて、スラム出身ながら大企業の役員にまで大出世を果たしたのだとビスケットが誇らしそうに話していたのを思い出した。

ビスケットの兄貴なら助けない道理はないとオルガはなるべく優しく担ぐように背負う。

「少し苦しいだろうが我慢してくれ。逃げなきゃならないんでな」

小さなうめき声もそれ以降、聞こえなくなった。

時折、嗚咽や震えが感じられ、ビスケットがか細く、兄さんと痛ましそうに呟くのを聞き流す。

「(最悪、人のいそうなフロアで放置しておけば助かるだろう) 上手くいかねえもんだな」

予想外のことが起きすぎて、何もかもが滅茶苦茶になりかけてい

る。しかしこれ乗り越えなければ望む未来なんて手に入らない。
オルガは自分に喝を入れ、身長割に軽いビスキットの兄貴を背負
いつつ、侵入してきたメンテナンスハッチに潜り込んでいった。